新自然主義

岩野泡鳴著

東京高等師範學校圖書之印

ᠬᠠᠷᠠᠭᠤᠯ

はしがき

この著は明治三十九年から四十一年九月に至る間に於て僕が新聞雑誌等に出した論文を集めたもので、かの「半獣主義」の續篇と見てもいい。ただ前著から神秘的な口述は取り去つてしまひたいのであることだけを斷つて置く。且、早稲田文學、新小説等の記者が僕の論文をここに再錄する許可を與へられたのを感謝す。

明治四十一年十月

著者識

目次

日本古代思想より近代の表象主義を論ず……一
佛蘭西の表象詩派……四一
メレジコウスキの『トルストイ論』を讀む……九〇
藤岡博士の『新体詩論』……一〇九
自然主義的表象詩論……一二四
イプセン論私見……一四四
早稲田文學並に時事新報の記者に答ふ……一五六
駁論……一六四
駁駁々論……一七六
自然主義雜言……一八八
諸家の自然主義論を評す……一九三

文界私議（一）……二〇四
同　（二）……二一八
同　（三）……二二六
國家人生論—加藤博士を論ず……二二四
文界私議（四）……二四九
同　（五）……二五八
同　（六）……二六五
彫金界の過去及現在……二七九
文界私議（七）……二九二
『基督の自然主義』（海老名氏）を評す……三〇〇
文界私議（八）……三〇六
『自然主義の理論的根據』（中島德藏氏）を評す……三一一
刹那主義と生慾……三一七

早稻田文學の詩論……三二三
肉靈合致の事實……三三一
肉靈合致—自我獨存……三四〇
自殺論—遠藤博士を駁す……三四八
文界私議（九）……三五七
新審美學の建設—田中喜一氏に與ふ……三六四
文界私議（一〇）……三六九
新聞記者並に法律家に注意す……三七八
表象と暗示—新自然主義の結論……三八五
附言—島村抱月氏に答ふ……四〇一

新自然主義

日本古代思想より近代の表象主義を論ず

岩野泡鳴

Prends l'Eloquence et tords lui son cou !
（美辭學を捉へて、その頸を絞めよ！）——Paul Verlaine.

（一）

ニルヴーナ（涅槃）といふ考へは、僕等東洋人には、親密でもあるし、また厭氣に思はれるやうになつて居る。儒教と佛教とは、僕等に、殆ど同時代に這入つて來たのだが、前者は重に政治的社會的方面に影響があつたので、僕等の根本思想にはどちらかと云へば、後者の方が深く這入り込んで居る。何かと云ふと、直ぐ解脫となり、斷念となり、死となる。

死と云つても、武士道の切腹は、未來の念に殆ど關係がないから、まだ男らしい所がある。心中となると、全くこの涅槃的思想に迷はされて居るのである。相戀ふる男女が、その配偶があるにしろ、ないにしろ、またその不自由があるにしろ、ないにしろ、萬難を排してどこまでも添ひ遂げてこそ、その戀は生きて居るのである。それに、何ぞや、現世の苦を避けて、別に樂しい世界があると信ずる。その信は既に消極的であつて、よしんば他界があるにしても、耶蘇教の所謂『天使は娶らず、嫁がず』位の事であつて、中性的絶滅の靈域かも知れない。そんな狀態は自然の生々を主とする僕等には無用である。

解脫を教へ、涅槃を說くものは、歸するところ、何の興ふるところもない——若しありとすれば、覺めてこんなものかと驚ろく一時の氣休めであつて、僕等に死んだ後までも意識があれば、その意識を有する靈體は、じだんだを踏んで、世の宗教家なる虛言者を罵倒するだらう。科學的思想を有する人々が、宗教を愚者の器であると云ひ爲すのは、此點からであらう。然し、宗教なるものを宗教家の手にかけるから、味噌の味噌臭きものとなつて、それがやがて棺桶の臭ひに變はつてしまうのであつて——故大西博士が、まだ實際の

苦悶に落ち入らない時、確か六合雜誌で（？）わが國の古代には宗教がないと云つた、その宗教がないと云ふ人から見れば、古代からわが國にあつたのは事實で、之には決して消極的思想は伴つて居ない。古代の日本人は非常に死を忌み嫌つて、穢れの一つとした。これは宗教がなくて居たに過ぎないことにならう。然し、この問題はそんな單純なことで止むべきものではない。

佛蘭西表象派の詩人パウルエルレインが、諸方を漂泊し、罪を犯して囚徒となり、また貧困のうちに死の床に苦吟しながらも、なほ且生をこひねがつたのは、其主義と性情の上から、決して未練ではなかつた。僕等の祖先は、渠の樣に鋭敏な頭腦と感覺とを以つて働かなかつたかも知れないが、生を愛する念は、非常なエネルギイを以つて、活躍して居たのである。古事記を見れば直ぐ分るが、岐美兩尊の國生み、神生みは愚かなこと、咳も屎も、尿も涙も、皆それ〴〵神となつた。伊邪那岐尊が橘の小門で禊祓ひし給ひし時は、その汚物は皆神となつた。宇氣比の時、大神の嚙んだ物、須佐之男の吐き出した物、また神とな

つた。『生む』『生れる』といふことはどこまでも祖先の觀念にはつき纏つて居て、之と反對に、死又は廢滅といふ念はなかつたかの樣に見える。伊邪那岐は『一日に千頭絞り殺さな』と云へば、伊邪那岐は『一日に千五百産屋立てな』とある。迦具土神を斬つた時でも、その血と肢體とはそれぞれ神となつた。斬つた者の眼前に、その心中の悔悟と生慾とが諸神を現じなければ滿足が出來なかつたのである。僕等の祖先は實に熱烈な生慾を持つて居た。この生慾を最も強く代表したものが、大和民族の首長となつたのである。

だから、わが國の『神』といふ觀念は、無雜作に偶像教（一神教も亦一種のそれだ）の神とその性質を混同すると大間違ひが生ずる。且、本居宣長でさへ、神は即ち人間であると云つて平氣であつた。人の外形に依らないで、生慾の出現する力を見て、神といふ觀念が發達して來たのである。最強最高の活力を受け繼いだ天皇が『あきつ神』と稱せられて未だ、希臘聖教に於ける露西亞皇帝、天主教に於ける羅馬法皇、聖公會に於ける英國王たのは、の樣に、人爲假定の唯一神に對する代理者であるとは違つて、神その物なる人間の代表者であるのだ。乃ち、わが國の皇帝が代表する神道は、實に最も痛切な人間神教であつたのである。この考へから云ふと、かの人麿が歌つた雷山の句は無限の威力を以つて居たと云はなければならない。

おほ君は、神にしませば、あま雲の
雷山にいほりせるかも。

無定見の枝巧家輩には、之を山を歌ふために面白く云ひまはしたに過ぎないと云ふものがあるかも知れないが、たゞア韻と濁音とが甘く急所に當つて居るといふだけでは、到底この莊嚴な歌の背景と餘韻とを解し得たとは受け取れないのである。

（二）

生慾の發展が宗教の形式を受けてから、預言者やうの者が出來た。『神がゝり』とは乃ちそれである。パーシヴルローエルと云ふ人が、亞細亞協會事項の中に『秘密神道』を紹介して居るが、それにも、神がゝり（ポゼツション）の歷史を、第一に岩戸開らきに於ける天宇受賣命、第二に崇神天皇諸神尋問の時に於ける倭迹々日百襲命、第三に伊勢齋宮建立

に於ける倭姫命、第四に三韓征伐に於ける神功皇后としてある。わが國の預言者は、ヘブライ民族のそれとは違つて　國家を救はうとするよりは、寧ろその熱烈な生慾を帝國主義的に外部に發展しようとした　ところに、大きい　價値があるのだとは、僕が『大日本建國史』を評した時に云つて置いた。だから、百襲命や、孝謙女帝の時の和氣淸麿などよりも、神后や豐太閤の方がわが民族の大人物であるとつけ加へた譯である。豐公の如きに至つては、大和民族全體の活力が神がゝりしたので、殆ど計り知られない程のエネルギイが發現して居たのである。この神がゝりといふ（宗教としての）秘密は、佛教と合してから、賢實が起した兩部、乃ち、修驗道となるし、また空海の眞言、最澄の天台、降つて日蓮の題宗目となつた。消極的思想が僕等に這入つて來たのは、この時からである。

生を愛するのは必ずしも光明的ではない。光明の裏には暗黑がある、この世に生存するのは苦痛である。たゞ幾多の苦痛を受けてもなほ生きて居たいと努力するところに、人間の威力が出て來るので——之は近代的思想だといふものもあるだらうが、古事記や日本書記を讀むと、黃泉比良阪を始め、至る所に暗憺たる背景が備つて居るのを見ても、僕等の

祖先はたゞぼんやりした太平の民ではなく自然の悲哀と苦痛とを充分に感得して居たのが分る。殊に、須佐之男命が根堅洲國にやらはれて、そこに戀する件の如き（こは僕の友人の書題として深い意味を顯はさうとして居るが）蛇の室屋に寢かされ、また大野の中に燒かれかけ、御頭に吳公が涌くまでも辛抱して、遂におほ神五十猛の御髮を室の椽に結び、五百引石を室の戸に取り塞へて、その娘須世理比賣を背負つて逃げ出すと、持つて居た天詔琴が樹に觸れて轟き鳴つた。その轟き鳴つたといふ聲を想像しても、如何にその神經が銳敏であつて、威力のある人間が如何に活躍して居たかが分るではないか？僕はベックリンの畫を愛して居るが、その筆力と確固たる意識の現はれて居るところを取るので、一方には、人間を除いた自然界に何だか深い意味がありさうに逃げて行く傾向があつて、その『死の島』でも、『聖き森』でも、『海の別莊』でも、人間なる物をあまり小く感じさせるのは、まだ最近の理想でもなからうし、之と同時に、また、わが國古代の思想に及ばざること遠しと云はなければならない。これは、涅槃といふ考への有無から來るのだ。

物には限りがないから、一つの物に解脫をすると、また跡の物に迷ふ筈で——數量的で

なくとも、全く解脫が出來るとすれば、それは涅槃の狀態であつて、死でなければ空想に過ぎない。それを、普通の宗教や哲學になると、わざ〳〵神とか、絶對とか云ふ觀念に祭り上げて、六ケしい解釋を附會する。僕は之を一種のクラシク主義と稱して遠ざけたいのである。耶蘇教國では、殊にこの繁雜であつて生命の道に遠ざかつた慣習に落ち入つた。ゲーテは之れが爲めに『シムプレストコムプレキシチイ』（最も單純なる複雜）を叫んだし、ショーペンハウエルは絶望的にこの煩瑣を脫する意志絶滅の倫理を唱へたし、ハルトマンに至つて、かの大系統と云はれる無意識哲學が成立した。ハルトマンは、さすがに、カントも脫し得なかつた絶對普遍の眞理といふ舊套を破つたし、また宗教的崇拜の對象たるべき絶對は必らずしも人格あり意識ある物に限らないと云つて、抽象的汎神論に當り、人格的有神論に對したのはいゝが、矢張り渠の知つて居た印度思想が邪魔をして、活動なる物を取り扱ふ點に於いて、個人と實體とを別物にしてしまつたから、渠がショーペンハウエルを攻撃して、個人と世界との關係を正當に認め得なかつたと云ふのと、五十歩百歩の違ひに過ぎなくなつてしまつた。絶對的實體といふ死物と人間といふ活物とを調和しようとするのは、その根底から既に間違つて居るのである。

舊思想の表象主義（僕は今日までシムボルを表象として來た。フォルステルリング《表現》と混同して居るといふ注意を二三の論者から受けたが、僕の刹那主義から云へば、後者を別つ必要がなくなるのである）は、矢張り、この架空の絶對をわざ〳〵拵らへ出して、自然の人間に對照さすところから出發して居る。古代の神秘的哲學者等を初めとして、スキデンボルグもさうだし、エマソンもさうだ。すべて人間に映ずる有限の事物は、絶對無限の或物を表象して居ると假想さすのだ。之を云ひ換へれば、カライルの云つた樣に、『無限その物が有限に結合する樣になり、見える樣になる』のだ。然し、この種の思想は、まだ完全に自覺の域に這入つて居ないのであつて、クラシック主義の樣に固定的になつては居ないとしても、たとへば、近松の心中物やシェキスピヤの悲劇を見ると、心的能力の一部を——故意にせよ、無意識にせよ——押へてしまつて、他の一部たる感情的方面ばかりを流露してあると同樣、まだロマンチク主義の域を脫し得ないで、半架空の立ち場にあるのだ。

（二）

綱島梁川氏の『金子筑水君の宗教的眞理を讀む』を讀んで見たが、そのうちに、筑水氏の經驗的事實は宗教的眞理の因だと云ふを難じて、『寧ろ緣也、媒也、觸發の機會也。而して是くの如き神秘的實在（矢張り絶對無限になる譯だ）は、惟り情意の觸接抱合を許すべくして、理知の分析追隨を許さず』と云つてある。知力だけでは到底物の輪廓ばかりを渡るに過ぎないから、直觀する必要があることは僕も云つて置いたが（『半獸主義』）、知力よりも更らに『饒かなる』情意を以つてしたところで、『所詮絶對的のものならずとするも少くとも絶對的のものと信ぜらるゝ』眞理が平等だとか、神秘的だとか云はれたとて、『依然としてこゝに一種の不確實と不安とを感ぜざるを得ざる』は、氏が筑水氏の歸納的論法を評するのと對した違ひはなからうと思はれる。知れ切つて架空的な實在を豫想して居るからである。その架空的であるのを看破する能力（これは、苟も近代生活の渦中に這入つて居るものには、必らず備つて居る力）をどこか心中の片隅へ封じて置かなければ、氏の云ひ方

に味ひがある『悟入的飛躍』は出來ないのである。梁川氏も亦ロマンチクな證明、否、判斷に落ちて居る。氏の樣な行き方では（少し云ふのは失禮かも知れぬが、議論の上だから仕方がない）、到底、氏の所謂『最後の權威』は、昔は知らず、これからは出て來ないだらう。

近代人の神經は段々と銳敏になつて來た。情意を寬容しない哲學はもう早くから倒れてしまつたが、今度はまた、反對に、情意の熱誠ばかりで知熱がないなら、宗教も文學も成り立たなくなつて來た。人間の一部たる熱情（パッション）よりも、人間その物の熱想（パッショネートソート）でなければ、滿足が出來なくなつて來たのだ。かうなると、バイロンや、更らに進んでロセチ等のロマンチク主義は倒れてもいゝが、自然主義から這入つた深い表象文藝が最とも必要になつて來る。哲學や宗教は、その性質から云つて到底この境に入ることは出來ないのである。試ろみに阿彌陀經を讀んで見給へ、阿彌陀經はロマンチク主義の形式を備へた表象詩だ。十萬億土を過ぐれば極樂がある、七重の四寶、七寶の池、曼陀羅華の雨、奇妙雜色の鳥、百千微妙の樂、光明無量壽命無量の阿彌陀佛、如何にも結構な

如何にも有難いところへ手を引いて行つて、不退轉の阿耨多羅三藐三菩提を得さして下さると思つてさてこゝはと氣が付いて見ると、矢張り元の穢土、十萬億土こなたである。架空な物はいつまでも架空である。僕は今一言梁川氏に云つて置きたいが、『世の漫然として宗教即詩也と斷言する』は、如何にも考へ物であるが、また世の漫然として宗教（家でなくとも）でなければ、詩に根據を與へるものがない樣に云ひ爲すのも『淺見者流』である。『詩人必らずしも宗教家たらず、而かも宗教家は同時に詩人の資を併せ有す』と云はれるその詩人は、たゞこの阿彌陀經的詩人に限ることを思つて貰ひたい。乃ち、わが國では、謠曲作家の樣な物で、百番が千番になつても、文學としては、架空の一つ形式を操り返して居るに過ぎない。

（四）

島村抱月氏が曾て智識と形式とに『囚はれたる文藝』を弔らはれたが、それは形式的智識に據つてクラシックな作物を非難したので、根據の薄弱なロマンチク主義を喚起しようとするのではあるまい。また、わが國古代の人間の樣に、全心全體が赤く燃えて居る自然主義的思想（知力も這入つて居るのは無論）を忘れて居るのではあるまい。かう云ふ思想は、西洋では、近代になつて、表象的傾向と相待つて、古來燦然として輝いて居た宗教の金箔を振ひ落してしまつた。たゞにそればかりではない、文藝中の獅子身中の虫とも云ふべき美學——冷語を以つてすれば、文藝上の信仰個條——も、どんなにシルレルやヘーゲルの見解が面白くあらうが、どんなにハルトマンの假象論が新說であらうが、そんな理屈で滿足が出來なくなつて來た。それには、ニイチエの思想やワグネルの樂劇が、非常な影響を及ぼしたのであつて、丁度これと前後して、佛蘭西にゾラ、露西亞にトルストイ、那威にイブセンなどが出て來て、自然主義的表象の傾向の文藝を皷吹したとへば、イブセンの『人形の家』を見ても、ノラと云ふ女は、何の假定もなく、何の形式にも依らないで、その全心全體が活動して居るではないか？ゾラは、佛蘭西の科學的ロマンチク時代に出たのであるから、フラウベルが形式藝術を現實の苦から免れる道だとばかり考へたと同樣、

今度は靈魂を以つて、神經液でゞもあるかの樣に取り扱つた缺點があるので、權威を夢見

て居る宗教家輩に、まだ嘴を入れさす餘地を殘して居るが、トルストイやイブセンの作物になると、人間の自然としての神經がずツとセンシチヴ（敏感）に働いて居るので、兎角信條を以つて來たがるもの等の追跡を許さないところまで這入り込んで居るのだ。

然し、主義といふものは、竹を立ち割つた樣に、さうはツきりと區劃の附くものでないから、自然主義が佛蘭西近代の表象主義を結了するまでには、ロマンチク主義や病的現象も入りまじつて居るデカダン時代を經過したのだ。この種の思想が如何に病的と云はれても必要である事に就ては、僕、早稻田文學（三十九年九月號）に於て、トルストイを論ずる際に云つて置いたが、近頃、岡倉氏の英文著『茶道の卷』（The Book of Tea）を見ると『デカダンの詩人等は——いつにてもデカダンの世がないことはない——物質主義に反して、或範圍で、また茶道に道を開いた』と云つてある。氏としては面白いではないか？兎に角宗教の金箔が剝げてしまうと、もう、神とか絕對とか云ふ虛僞の物に由つて安心が出來ないから、自然に不安と煩悶とが攻めかけて來て、利休が茶道に這入つた樣に、人間の神經が過敏にならざるを得ない。だから、クラウフォルドは、その『歐洲文學の研究』に於て、『デ

カダン時代には、人の藝術心が不權衡になるのは、その道念の通りだ』と稱し、シモンズが、その『文學に於ける表象主義派の運動』に於て、デカダン運動なるものは『たゞ文學の大道を逸脫して居たのだらう』と道つたが、これは局部だけを見た解釋であつて、これから生じた、シモンズの所謂『もツと嚴肅』の表象主義にも、不權衡と逸脫との個處はある、また、あつてもかまはないのである。

Je suis l'empire à la fin de la décadence.（われはデカダン終末の領なり）

と叫んで、世の慣習を脫し得ない有識者輩を野蠻人と罵つたエルレインを初め、マラルメも、メタリンクも、皆この潮流の渦中から生れて來たのである。

それには、米國の不運兒、酒亂酒狂の詩人、アランポーの影響がなきにあらずだ。（米國の詩人又は思索家で、歐洲大陸に勢力を及ぼしたものは、超絕哲學に於けるエマソンと海軍評論に於ける大佐マハンとを除けば、恐らくポー程の者はなからう。）渠はロマンチク肌の詩人で、隨分短話と論文とを書いたが、詩は餘り多くない上に、『レーヴン』（大鴉）といふ作の外には、對して感服する程のものはない。然しこのレーヴンが大西洋を渡つて英國に來

た時、かのピーアールビーの運動者等は非常に刺撃を受けたさうで、書家詩人ロセチの傑作『ザブレセドダモセル』（さきはふ乙女）は、これから出たといふことが、その兄弟の近著『サムレミニセンシス』（追想錄）の中に書いてある。詩人身づからもホールケインに向つて、『僕か見たには、ポーは地上の戀人の憂ひを處理するのに、充分出來るだけの事をしてあつた、だから僕は決心して、その事情をひツくり返し、天上の愛人のあこがれを述べたのだ』と云つた。然し、ラファエル前派の運動は、古いロマンチク主義が新しい方面を持つて來たといふだけであつて——『さきはふ乙女』を讀んでも、架空の中世的形式を取り除けば餘すところの生命は何程もないでないか？たゞ芭蕉翁が『路傍の木槿』に注意した如く、最も小い、最も關係のない物をも靈化したり、言葉の色と香とを以つて、最も說明し難い物の親和力を說明または捕促したりした手ぎはは、アリンゴレンと云ふ人がスクリブナ雜誌で云つた樣に、佛蘭西の哲理的基礎のある新詩派乃ち表象主義派に技巧上の類似點を與へた。然し思考上では、この英國の純美派者流とは殆ど關係がないので——『若し表象主義が來るべき文學として失敗したなら、それは哲理的背景の缺乏に由るだらう』といふゾ

ラの觀察も間違つて居て、寧ろ哲理的ではあつたが、わが國古代人とは違つて、自然的表象主義で行かなかつたのが失敗になつてしまつたのだ。

それは跡から分かることとして、ポーが、或ラム酒店で泥醉の結果、人事不省となつて病院へつれて行かれ、『自分の最親友が最上のことをして呉れるなら、ピストルを以つて自分の腦髓を打ち抜いて呉れろ』と云つて死んでしまつた、その時までも渠はその名聲の既に佛蘭西に廣ろまつて居たのを知らなかつたのである。惡魔主義派のボードレイルは、その短話を譯したし、表象主義派のマラルメは、自分が巴里の一學校の英語教師であつたからでもあらうが、レーヴンやその他の詩を佛譯したのが、マラルメ自身の名をも一緒に擧げたわけになつて居る。兎に角、ポーの死後二十年以上經つてから、その詩の敏感的な方面がデカダン隆盛の勢に隨分內容的影響があつたらしい。ゴレンは渠を稱して、『佛蘭西表象派中で、渠が本國では持たなかつた王座と家族的肘掛倚子とを與へられた者』と云つた。

(五)

マックスノルダウの著『デジエネレーション』(病衰)には、新思潮を代表する文人詩才に、何やかやの理由を附けて、狂人呼ばはりをしてある。ロセチやエルレインに對する同音狂、トルストイに對する疑問狂、ワグネルに對する反覆狂、スキンバン、イブセン、ニイチエに對する自我狂などを證明して、著者身づから常識狂、病名狂に落入つて居るのを知らないのは、餘程面白いところだ。自分では充分分つて居ながら、反動的に攻撃して居るのだから、攻撃されて居る種類に屬する人々でも隨分益するところがあるのである。その中に叙してあるのを見ても知れることだが、拾八世紀の人心を支配して居た佛蘭西百科學者派の勢力に對して起つたロマンチク主義が、先づ獨逸の文界を動かし、同國當時の國民的、精神的屈辱の狀態を、ヲルテイル並にナポレオンから脫して、中世時代の盛んな狀態に歸さうとしたのが初めで——それから一時代後れて、この主義がユゴー、デューマ、ゴーチエ、ミユッセ等に依つて、佛蘭西に這入つたが、前者の愛國的中世主義とは違つて、誇張、

怪異、時代の遠隔などの技巧的撰擇から、文藝復興の時代に向つた。

ところが、英國の新ロマンチク派——ラファエル前派——は、ノルダウに從へば、獨逸の同主義派の孫、佛蘭西同主義派の子であるが、その性質は更らに變化し、同じ中世主義を採りながらも、英國固有の宗教熱を加味して、實際生活の煩雜苦惱の狀態に對し、別に安閑として餘裕のあるを示めすかの樣な態度を以つて、慾情と信神とを一つにした樣な姿が現はれたのである。これは、この派の導師とも云へるダンテガブリエルロセチの作を見れば、最も明かに分ることである。表象的また神秘的な點は既にこの派に於て見えて居たのだ。これと同じ樣な現象が、また佛蘭西に現はれた。これが乃ちエルレイン一派の表象主義であつて、技巧上並に中世復歸の點に於ては、大變類似して居るのであるが、その內容に於ては大いに相違して居るところがある。科學的勢力を脫しようとして、直ちに消極的または架空的な宗教に飛び込むのは、詩人としてはまだ用意の充分でないところがあるのを豫め云つて置く。佛蘭西には、當時、寫實主義——云ひ換へれば、自然主義——が盛んであつて、前世紀の百科學者等が理論ばかりで萬事を解釋しようとした樣に、今度は科學

を以つて人生を解剖しようとした。ゾラの如き、またホイスマンズの前半生の如き、孰れもこの方面に向つて居たのだ。表象派はこれの反動であつた。ところが、かの根據のない唯理派に對するには、根據のないロマンチク主義でもよかつたが、この手答へある科學派に對しては、また手答へのある主義を持たせなければならない。エルレインやマラルメは、乃ち心的科學を含んで居る、或はそれに同化して居る、表象詩を以つてしようとしたのである。詩を以つて哲理的サイコロジイの體現と見爲した。

自然の外形を讃美する詩はタムソンで亡んだ、自然を宗教心の奴隷にした歌はヲルヅヲルスで充分だ。夢を夢として見たのはロセチである、戀を戀として歌つたのはポーである。然かし　わが國古代の神々の樣に、宇宙と人生とを一刹那の心的妙用に觀取した樣な詩歌は、どの國にもあるまいか？戀と夢と宗教と自然とが、ネビユラの樣に、眼前に融和して活現する詩歌は、どこにもなからうか？分業は人間縮少の基である、分化は人生墮落の初めである。わが國の祖先の樣に、一刹那に活現する生命を呼吸するには、どうしても自然主義的表象主義に行かなければならない。自然主義を心理的に深くすれば、その儘表

象主義になるのが當然であらう（ただ避くべきは表象專門の行き方である。）この道筋を進んだのは、乃ち、エルレインで——マラルメは渠に次いで、之を研究的に妙用したのである。學問をたゞ學問として研究するものは、物識りにはなれよう、然したゞ普通の興味を覺えるのが絶頂であらうが、若し一人——たとへば、植物學者——があつて、自分がその研究する植物になつてしまつてこそ、初めて本統の興味が出來るのだ。心的科學を通過して表象主義に住して居るものは、ノルダウが何と云はうが、自分が既に心的科學となつて居るのだから、從つてその問題たる神經が人よりも鋭敏になつて、神とか、絶對とか、無限とか云ふ、すべて普通人が見て以つて無上の本尊とするものを、その根底から腐蝕さしてしまうので——別にそんな架空虚僞沒神經の觀念を立てゝわざとらしい安心を求めないでも、不安のまゝに人生自然の活動に堪へられるのである。

茲で直ぐエルレインやマラルメの表象詩を論じて置くべき筈だが、紙數に限りがあるから、別に題を改めてやることにする。實に渠等と平行するには、古への宗教的狂熱家と同じ勇猛直進を要するのであつて、世の宗教的または哲學的習慣に拘泥したり、引ッ張ら

れたりして居るものには、到底、落後者を生ずるのである。ホイスマンズやメタリンクは乃ちその仲間だ。僕は之からホイスマンズの辿つた路を語つて、佛蘭西表象派の末路は如何になつて居るかを示めさう。然し、こゝに注意して置きたいのは、自然派と云ふのと自然主義派と云ふのとに、非常な相違があることだ。わが國の評家中、これが區別の分つて居るものは少い樣だ。前者はその心的狀態に於てまだ自覺して居ない、然し後者になると、その根底から心理的自覺を有して居るので、それが燃えて來ると、自然に表象的活動の呼吸が感じられる樣になる筈である。薄田泣菫氏の詩は、古語復活と句調の整頓とに於て特色が認められるが、或評家の樣に之を自然主義派の範圍內に數へ入れるには、まだ〳〵遠いところがあるのだ。

（六）

ヱルレイン並にマラルメが死んでから、殆ど十年、表象派の餘勢は、今やホイスマンズとメタリンクとに依つて支へられて居るが、後者の神秘思想は段々佛蘭西に勢力を失つて

來た樣子だし、また、渠はその實白耳義の詩人であるし、中澤臨川氏が『七人』に於て、上田氏が『明星』に於て既に詳しい紹介をしたし、僕も『半獸主義』に於て可なりの評論をして置いたから、こゝに特別な論評は加へまい。前者は小說家である、後者は劇詩家兼評論家である。ジョリスカルルホイスマンズは、かの怜悧なゾラがマウパッサンよりも天才だと見て居た小說家で、渠の自然主義は、田山花袋氏が云はれた通り（早稻田文學）極端な寫實主義に入り、それからまた深刻な表象主義（？）に轉じたのだ。渠は、クラウフォルドの云つた通り、『峻刻な描寫力』を以つて居た。ノルダウは渠を以つてゾラの狂信家から轉じて、ボードレイル一派のヂアボリズム（惡魔主義）を摸擬する樣になつた者と見爲したが、ゾラには平明皮相で、たゞその要點を目錄的に枚擧するに過ぎなかつたものが、ホイスマンズには、魔的淫逸の分子を含んで居るにしても、物靈兩方面が一時に把握されて居る。渠は身を自分の主題に合體せしめ、自分がその霧圍氣を呼吸して、自然の特性の一點一劃をも見免さなかつた。渠には、驚くべき技倆があつて、その精神を紙面に浪費し、おのれの氣質の特色を評價し、その最も捉へ難い情緒を捉へて、之を後になつて、また文學の用に

供する餘地を與へなかつた。『渠がその作中人物と同一だといふ觀念が強烈であつたので、その人稱代名詞は、たゞ出版の曉になつて、入れ代へられて小說的姓名になつたのだと、僕等は殆ど信じられる。』

ホイスマンズの生涯の悲慘は、超自然の事物又は觀念を實際に渴望したのと、物質的存在の慘狀を破碎しようとしたのとに原因して居た。渠は神秘家でなかつたが、靈眼のある、また深い同情のある、神秘主義の研究家であつた。渠の精神は純粹に消極的な信條とは和解の出來なかつて——スヰデンボルグ、その他の神秘的宗教家は、殆ど皆消極的と云つていゝ——渠には、進取的冥想が最も高い最も完全な目的實現であつて、その爲めに人間が作られた譯だ。渠の自作中に云つた通り、『眞實な作物、正確な條目、實質的神經的言語の寫實主義も緊要だが、等しく又緊要なのは、靈魂の好採堀者となることで、神秘なるものを心的病弊を以つて說明しようとしないことだ。』乃ち、『靈的自然主義』が必要であると云つたのだ。『アンルート』(途中)はこの主義を靈魂(渠には、良心)に適用したので、『ラカテドラル』(大敎堂)では、それが一層深く刻まれて居て、その時渠は純粹の表象主

義者(?)となつたと云はれるのだ。シモンズも云つた通り、小說は娛樂的でなくつて心理學的なものとなつたのは、バンジヤマンコンスタン(千八百三十年死去)の發見だが、心理學を心靈の暗所までも突き込んで、世界の燃ゆるが如き胸壁を微光の樣に見せしめることを發見したのは、ホイスマンズの『アンルート』で——『ラカテドラル』この內容は、田山上田兩氏の紹介を見よ)になると、更らに進んで、石柱の技術、植物の成長、獸類の無意識的生活が心靈と同じ法則に從ひ、表象を經て、靈的存在を攝取して居る。

クラウフォルドも云つたが、『ラカテドラル』の興味は純粹な主觀的で、メタリンクの劇にも時々ある樣に、動作と云ふ程のものもない、事件と云ふ程のものもない、性格建造もあるかなしである。こんな外形的貧弱な狀態を以つて、而も一種の發想と技巧とが發展するのは、劇に於てはメタリンク、小說に於てはホイスマンズだ。人生に於ける眞の悲劇は、表面的冒險や成功の止んでから初めて始まるのであつて、夢想家や神秘家の沈默秘包の生涯は普通の活動家には拒絕されるだらうが、こゝにその魔力と價値とを有し來たるのである。眞正藝術の與へる幻影、實は最とも根據ある自然、を五官の力が鈍い、兎角表面的現實に

拘泥し易い普通人の頭腦に入れ込むことが出來るなら、それがやがて一種の創造的事業である。マラルメの作を讀んでも分ることだが、之を理解するには、之を創作すると殆ど同じ苦痛を要する。その代り、時に依ると、作者なる人の感じて居た物よりも以上の物を發見することがある。新らしい思想を以つて、古い物を活すのもそれであらう。たとへば、諸君が『古事記』を讀むとして、之をたゞ毎日の新聞を讀む樣に見渡してしまつたら、到底その秘密な點は發見することが出來なからう。然し、わが國古代の熱烈敏活な生活が表象として現はれて居るのに思ひ當ると、その作者も或は氣が付かずに居たのではないかと思はれる節がある。然し、それは、文藝の創造者に取つて、何も憂ふべきことでない。文藝の趣味は個人的のものであるから、その個人〳〵が這入り込める道を付けてやりさへすればいゝ。この立ち場からして、ホイスマンズは最も深い、最も切實な眞理に到達し、また之を啓示する道は、たゞ表象にあると云ふことを實現したのだ。

かうなると、小說は詩と同一である。然し、殘念なことには、ホイスマンズの表象は僕の云ふ表象と意味が違ふ。シモンズの樣に、最も立派な想像的作物はたゞ根元的情緒から

築かれると云つて、ホイスマンズがその根元的情緒の一なる靈魂——乃ち、信仰の情緒——を了得して居たと賞讃するのは　論者その人も耶蘇敎社會に慣れて居るから、正當のことだと思ふだらうが、この詩人的小說家は、神秘家としては、心靈的生命ばかりが現實で、實在で、實際であつて、物質的生活、乃ち、僕等の五官で事實とする存在は、朦朧で、一時的で、無價値であると云ふ立ち場にあるのだ。成る程、渠は淺薄な宗敎家や無定見の文學者とは違つて、そこまで達しても、まだその靈性は暗鬱痛烈なものであつて——耶蘇敎的信仰の全光明もただかの『神聖歡樂』の一小部分を發揮する位にしか見えなかつたが、その歡樂を發展して、明確な代表者を拵へて見ると、それはアシヽの聖者と云はれるフランシスであらう。中世紀の托鉢僧、その抱くところの生命は沈痛熱烈な物であつたらうが、據つて立つ哲理は、平凡な二元論を脫し得たまでゞ、その輪廓ばかりの唯心論はエマソン、ベーメ、ずツと古くばプラトーン、又は印度の宗敎的哲學者輩へ歸つてしまう譯ではないか？思想としては枯死乾滅、自然の根本義を忘れて、無神經に、一足飛びに天に昇らうとするのであるから、到底、わが古代の思想の樣に、生命と身體とが一緒になつて燃えてる、積

極的で而も熱烈痛快な點がない。

僕はこの點を淺見卑識な文人敎家に注意して置きたいのだ。兎角、世人はそこまでゞ滿足してしまう。今日の見神、見佛、悔悟、解脫を說くものは、成功と實業とを云爲して購讀者を釣る刊行物と同樣、かの薄志弱行、たゞ小成に滿足しようとする、半可通の靑年輩に餌を與へるに過ぎない。さすが、トルストイは皮相ながらも、自分がデカダン的創作をやつたことがあるだけに、この退步的形勢を看破して、マラルメ以來朽ち行く表象主義を罵倒したのであらう。クラウフォルドの如きは、今や佛蘭西の文界は、所謂デカダン派が際實の衰頹をして、別派の潮流が向いて來たと云つて居る。僕もさう思ふが、僕にはそれが所謂衰頹の一層衰頹なるものであるが、渠は之を『カソリク信仰の復活』として、之に謳歌して居る。成程、表象派の二殿將とも云ふべきホイスマンズとメタリンクとは、いづれも十二三世紀の信仰に歸つたり、またそれから出て來たりして居る。前者は表象的唯心論に入つて、架空的な『神』を持ち出したし、後者は神秘的必然論からして、生動すべき沈默のうちに、乾枯な『死』と『運命』とを見せびらかして居る。寫實主義が科學の淺薄な獨斷に自滅した如く、表象主義は身づから宗敎の形式を襲ふ樣になつて、倒れて行つたと見てよからう。エルレインやマラルメに依つて、折角發展しようとした肉靈不二の藝術的妙境は、今や佛蘭西の文學界を去つて却つて露西亞に飛んで行き、メレジコウスキ一派の思想に居候となつてしまつた。

(七)

こゝに斷つて置くが、神や運命を拒絕すると、直ぐ却つて淺薄な見解を有して居るものと貶稱して、高尙ぶる人がある。然し、これは豐富な藝術的生命の何たるかを知つて居ないもの等の偏見であるから、そんなことで僕に當るのは御免だ。シモンズも云つたが、『エルレインには、物それ自身の嗜好か悔恨かばかりがすべての物であつて、運命を默想したり、問題的慰藉を求めたりする餘地は存じて居なかつた。』これは強ち內容の欠乏した『藝術の爲めの藝術』主義ではない。存在の一刹那に於て萬事を攝取する、僕の所謂『刹那主義』の好模範であつたのだ。幽玄も、深遠も、雄大も、熱烈も、すべてこゝを根據として出て來なけ

れば、確實な幻像的生命は捕促出來ないのである。だから、ゼルレインは、その信じた神がよしんば無いと分つても、決して失望しない立ち場に立つて居たが、ホイスマンズには、それがどうしても一種の形式の中へ這入つて居なければ滿足が出來なかつた。生々活動の表象主義を、無殘や、立ち所に打ち殺してしまつたのだ。田山氏が『ラカテドラル』を評して、『飽まで象徴的叙述を恣にせるを以つて、不可解の處頗る多く、その印象を明に受くる能はず』と云はれたのは、氏の樣に峻刻な歸納的研究を積まうとする人には尤もな云ひ方で——然し、表象的なのが惡いのではない、自然主義を以つて貫くべきその表象を、中途にして、ロマンチクな描法に轉じたのが惡いのである。無神經又は鈍神經にならうとする理想主義は、僕、之を採用しないのである。耶蘇敎傳來の慣習が、文藝の最深最大の發展を害するのは、メタリンクに於ても同じことである。

耶蘇敎から脫却して來た人でなければ分らないことだが、苟も人生の苦悶に觸れて、而もなほ宗敎信者としてその苦悶を脫却するには、エマソンの樣に先づユニテリヤン思想に出るか、それでなければ、ホイスマンズの樣に古いカソリク信仰に戻るかの二道である。前者

には威嚴のある歷史もなければ、人を壓迫する形式もない。後者には、宏大な敎堂もあるし、また嚴しい順序と儀式とがある。多少、空想的趣味を以つて居るものは、後者の道を取るのが多い。現にケーベル敎授が新敎から天主敎に轉じたのも、それであらう。ホイスマンズには、神聖な石堂は石を刻んだ詩であつた。渠の見たゴチク建築は、最も純粹な、最も高尙な發想法を以つて、人間の神性渴望を石に刻み込んだものであつた。この意味から云ふ表象主義は、人の書いた聖書を天啓だと信ずる樣なもので、矢ッ張り、自然主義を知らないカライルの表象詩に過ぎない。そんなのならば、各時代にそれ〴〵表象がある。釋迦の敎は印度古代の表象である、ソークラテースの敎說は希臘詭辯學者の大表象である、イムマヌエルカントの哲學は拾八世紀獨斷派の最大表象である。すべて自己覺醒以前の影響と成り行きとを代表する意味なら、幽暗なゴチク殿堂は中世紀魂の表象で、ホイスマンズの『大敎堂』は作者自身の舊行の表象である。すべてその中には、渠等の奧義と稱し、また生命と稱する物は、（別に態々設けてある譯だから）却つて這入つて居ないのだから、そんな表象が建設され、完成された曉には、僕等はたゞその形を見るばかりであつて、自然その物の生命に

は接することが出來ない。自己覺醒その物を描かないで、死んだ自己、乃ち、神又は運命なる物を表象して居るからである。

神といふ觀念があると、どうしても自然に對する熱度が薄くなる。實際生活で云へば、毎日の仕事は他日或神報を得る手段に過ぎない。だから、一つの過ちがあると、それを懺悔する形式までが起つて來た。神も知らない、道德も知らない實業家ほど、現代に於て自己の仕事に一生懸命なものはあるまい。丁度西行や芭蕉が自己の詩にあこがれて、草鞋掛けで諸方を行脚した勢だ。耶蘇敎徒が實業界に飛び込んで、失敗することが多いのは、敎訓的詩人が詩を牛馬視する樣に、事業その物を手段視するづう〳〵しさからである。詩で云へば、同じ虹を見ても、ヘンリヴンダイク（これは佛蘭西表象派を眞似たゞけだが）の『遙かに聽くは音樂にして、色みな歌ふなり』その原文は次回の論文に出づ）と云ふ樣な云ひ方もあるのに、ヲルヅヲルスの樣な詩人はこと更らに不朽不死を感ずるなど歌つた。それは、たゞ屁理屈ではないまでも、鈍感で材料が得られないところから、そんな方へ頭を持つて行つたに過ぎない。また、耶蘇が『野の百合は如何にして長つかを思へ、勞めず、紡が

ざる也』と云つたまでは詩的だが、『神は……斯くよそはせ給へり』と付け加へたのは蛇足である。佛蘭西中世紀の遺物にして、散文韻文交互體の戀愛物語『アウカサンとニコレト』は、之を英譯したアンドリユウラングも云つてる通り、『純情と諧謔との魔力ある混成詩』だが、非常に固定したコンゼンションがあるので、丁度ホメーロスの敍事詩に、Ως εφατ'（斯く語りければ）といふ語が何度も出て來て、何となく敍事の道筋に威嚴を持つかの樣に、アウカサンが馬を驅りて羊牧ふものらのそばに行き、『よき兒等よ、神、汝等と共にあらん』Fair boys,God be with you.）など云ふと、一種の詩味があるかの樣に歌つて居る。これは宗敎が詩を殘害する適例である。然し、僕は神を否定しても、必ずしも唯物論を唱へる譯ではない。若し神と神の力とがあるものなら、それは自分以外ではないと云ふのだ。ニーチエから出て來た思想は、宗敎的慣習を破り、偏見を破り、僭越を破つて、非常に人間なる物を偉大にした。然し、その偉大はエルレインの行き方と同樣、刹那〳〵に獲得されるのである。わが國古代の神々が、神から生れて神となり、また自分が神を生んだと同前、眞正な自然主義の表象は、いつも生き〳〵して、永久に形式を拵へない

表象でなければならい。

假定のない表象は、乃ちその物身づから生々苦悶する 表象である。自分が自分を喰ひ殺す刹那の感想である。肉も、靈も、情緒も、思想も、渾然として目前に活現し、自然の外に天を許さない危機である。この自然の機をゆるめれば、メタリンクの所謂沈默を經て、死と運命とが出て來ようし、また、中澤臨川氏が新古文林で『ソルゲーネフの哲學觀の根本概念』と云つた、冷かなる威力と永久と自足がある自然も出來よう。然し、そんな消極的思想をすべて吸收した後では、人生は 癩病人が腫物を掻いて、その痛がゆいところに非常な痛恨と快樂とがある様なものだ。深刻な現世主義は、眞正な表象主義の立脚地である。いつも生き〳〵して居たわが國の古代人もこの立ち場に立つて居たし、マラルメやエルレインの詩も此狀態を現はさうとした。僕の『半獸主義』は、乃ち、それである。或は之が宗教にならないとは斷言しないが、世人は、桑木博士が『哲學雜誌』で云つた哲學と哲學思想とに違ひがある如く、宗教と宗教心との違ひがあるのに、之を混同して居る。天地不可解を叫んで煩悶するのも宗教心であるし、その煩悶を熱刻して更に深い煩悶を現ずるのも宗教心である、またデカダン藝術にもあつた。たゞ宗教家の所謂宗教とならなかつたのは、寧ろ幸ひであつたのだ。かういふ藝術をトルストイなどは背德不健全と云つて攻擊したが、それでは、その精神や身體が不健全な宗教家が、神を證し、基督を說くのは、このデカダン派の藝術とどれ程の高下があらう? 數步を讓つて云つても、宗教家は宗教を以て宗教心を說き、藝術家は藝術を以つて宗教心を現はす。然し、藝術は宗教よりも自由で、而も偏見の附いて來ないのは事實である。今一つ附言して置きたいのは、藝術家はたゞその作物を以つて之を現はすだけだが、宗教家は行爲を以つて實行するといふ論者もあるか知れない。然し、前者の創作は後者の行爲に劣らない實行である。而も、痩ツこけた山僧や、瀕死の居士が、一小庵室でふざけた眞似をしたとてそれが何で詩人の一詩に及ばうぞ?(特に梁川氏の注意を促す。)

僕の自然主義的表象論は、詩に於て初めて實現することが出來よう。まだ人生の極致に觸れない青年時代には、センチメンタルやロマンチクな感情を喜び、人生に倦んだ老年はまた固定したクラシク趣味を以つて滿足し易い。どちらにしろ、人は多く感情と思想とを

區別して、前者を燃やすことがあつても、後者を熱せしめることを知らない。大伴家持の歌に、左の如きがある。

うら〳〵に照れる春日に雲雀あがり、
こゝろ悲しも獨りし思へば。

この歌が本邦古典にあつて、一頭地を抜いて居るのは、センチメンタル（純情的）な點である。然し、それだけでは、歐洲十九世紀の文學で、ゲーテの『エルテルの憂』にしか接近して居ない。而も歐州では、純情派がロマンチク派となり、寫實主義が自然主義に進んだ。今や思想の情化が表象詩に最も必要な條件となつて來た。僕の悲劇『烟の舌』（新小説掲載）並に『斧の福松』文藝倶樂部）は、隨分之を適用して見たのだ。それには、マラルメの歌つた樣に、『痛ましき裸形もて』……『飽くまでも溺れ行き』『海妖の胎内の兒』となる勇氣と熱心とが必要である。（マラルメの詩は次の論文で説明する。）

（八）

表象派の傾向を有するものは、佛蘭西以外、諾にイブセンあり、獨にハウプトマンあり、露にゴルキイあり、以にダンヌンチオあり、白にメタリンクの外にヱルハーレンあり。いづれも好く研究して見ると、意外に自然主義の道筋を脱して居るものがあるかも知れないが、かう云ふ派中でも、イブセンとマラルメとが精神に於て、また身體に於て、最も健全であつたらしい。渠等が病的と攻撃されることがあれば、それは考へがあつての上だから、中世的宗教家など呼ばれるよりは、寧ろ結構である。近代的文藝が段々神經過敏になるのは、決して恐るゝに足りない。宗教よりも一歩進んで行くのだ。もツと神經が鋭敏になつて、思想の根底まで燒けて行かないと、中途で段々落後者が出來て、自然主義的表象が横道へそれてしまう。誰のであつたか、今その作者の名を忘れたのは甚だ殘念だが、獨逸の大家の、矢張りベクリンの奇怪な畫風を一層烈しくした畫で、二人の紳士が酒に醉ひ、片手におの〳〵酒の瓶を以つて相抱き、森林中を醉歌して歩くのがあつた。周圍の樹はみ

なうね〳〵動いて來て、その枝や節々が人か惡魔の顏に見えて居た。それが諷刺畫であつたにしろ、なかつたにしろ、そこまで突ツ込むだけの勇氣はよみすべしだ。

人生は醉生夢死でいい、どうせ悟つたと澄まして居る者も、裏面から見ると、不自然な醉生夢死である。醉ツばらひの方が却つて神經は過敏である。過敏な神經が何よりも生命だ——人生は悲慘だ、人間は痛苦だ。樂天だとか、厭世だとかいふ餘地もないのだ。たゞ生命の活現する刹那的自覺が、痛切で、深刻で、また熱烈でありさへすれば、その瞬間の詩人は、その瞬間を離れた時、大僧正であらうが、大帝王であらうが、また見すぼらしい乞食であらうが、少しも違ひはないのである。詩人が創作の一瞬間は、天上天下一歩もまた何物にも讓るべき時でない。不斷は獸的、肉的、また靈的な自然主義に立つて居て、表象的感想の動く時が、乃ち、最上の詩人である。マラルメの詩篇は、此點に於て、永久に捨て難いのだ。印度並に西洋の舊式表象主義は、無意識中の意識があつた。近代、それが自覺の域に進んで、表象主義その物が熱烈な意識となつて現はれて來た。わが國は之と反對で、古代にそれが盛んに發揮されて居たのが、その後、他の消極的、架空的、形式的思想に壓迫されて、殆ど忘れられて居たのである。僕は奇を好んでこんな事を云ふのではない、假定のない、僭越のない、而も敏感な人間その物が幻像でもあり、また糧食でもある自然主義的表象の生活は、既に僕等の祖先がやつて居たのだから、今度は、この現代に於て、之を詩に實現しようと云ふのである。よしんば、之から新宗教が出ると假定しても、まだ〳〵時機が早いのだ。僕等が充分の材料と生命とを與へた後でなければならない。

幽玄で偉大純朴で熱烈、わが古代の思想は、その表象の死骸として各所に白木の社を殘した。僕等はこれから、現代に於て、表象詩を傳へるのである。青葉村といふ人が『本邦古代の美術』(讀賣)を論じて、日本畫の描線寫想は獨特のもので、不熟なのはまだ半異邦的だからだが、時代と共に外來の要素はすべて融化してしまつたと云はれたのは、誠に實際に相違ない。僕等の自然表象主義も、他日は外來の耶蘇教的分子を去つて、本邦古代の思想に醇化し、わが國の表象主義として、世界に新生面を開く時が來るであらう。この種の詩は大いに技巧を貴ぶが、言葉があつて觀念が出來たのではないと同樣、技巧があつて思想が出來るのでないから、先づ思想のリズムと構成とを論じて來たのだ。かの『明星』記者が純技巧的見

地から——これはボードレイルなどの主義を聽きかじつてのことだらうが——僕を初め、自然主義的傾向のあるものを技巧反對者として頻りに攻擊するが、これは自家の無思想を豫防するにあらざれば、的のないのに矢を放つ樣なもので、僕等は決して反相的自然主義または藝術利用主義から、技巧を排するのではない。思想の熟したのは、技巧の熟したのである域に達してこそ、初めて完全無缺のものが出來よう——然し、これは理想であつて、表象派の本尊とも云はれる、マラルメの失敗もそこに起因したのだ。この理想を急進的に實行して失敗するか、または之に成るべく接近するを努める外、神ならぬ僕等の行き方はないのである。わが國では、泣菫氏のは隨分之に遠いところがある樣だし、有明氏のはまだ足りないところがある、僕のも『泡鳴詩集』に收めたものでは、ロマンチクな分子が多いので滿足出來ない。

沈溺せよ、痛恨せよ、寧ろ裸體となつて、その裸體を裸體にせよ。（明治四十年二月十日作。早稻田文學掲載）

佛蘭西の表象詩派

Le suggérer, voilà rêve.（暗示するは乃ち夢なり）—Stéphane Mallarmé.

（一）

佛蘭西表象派中、先驅の一人とも云へるジエラールドネルヴルであるが、これはアーサーシモンズが『全世界を失つて、おのれの靈魂を得た者』と稱した人で、ジエラール自身も、『われは力を得て、わが身邊に自分の宇宙を創造し、わが夢を統御して、之を堪へて居るのに代へたい』と云つた。渠は詩を以つて一種の奇跡と見爲して居たから、美の讃歌でもない、美の說明でもない、また美を映す鏡でもない。美その物で、想像された花の色香と美觀とが、紙背に再び現出するのであるとした。心靈再權化の夢想又は敎理は、久遠問題の解釋者等には、隨分興味と慰藉とを與へたものだが、ジエラールには敎理と云ふよりも寧ろ夢であつて、而もこれが自分の呼吸よりも一層人間なる物に接近して居たのであ

る。渠にはまだ抵抗し難い未見國の設けがあつて、それを身邊に引きつけようとしてその益のない努力が渠をして一生の悲劇を成立させたのだ。その心持を云つて見ると、過去と未來とは絶えず渠と共にあつたが、肝心な現在は絶えずその足元から逃げて行つて、把握することが出來なかつた。渠の狂氣が出たり靜まつたり、また再發したりしたのは、その理由を如何に生理的に解釋するものがあるにしても、つまりは、世間でよく云ひたがる樣に空想に走り過ぎた譯ではなく、寧ろまだ夢幻力の根底が薄弱であつたので――シモンズの云ふ樣な靈的修練が缺けて居たのではない、自然主義の素養が不足して居たからである。

ジエラールが最後に自殺をした、その時懷中して居た作は、狂人渠自身が書いた一狂人の幻像物語であつた。僕に度々經驗があるが、一詩を物して褥に就くと、暗中に自分の書齋がはツきりと見える、夢ではないから、起きて手を以つて行くと、どの書物でも、ちやんと心に思つたところが開く、さういふことがある翌日に限ぎつて、朝の光も暗い樣な氣がして、而も過去と未來とがすツと透明になつた樣な氣がする。之と同じ樣なことをこの

物語にも云つてある、『時々自分は自分の力と活動とが倍になつたと想像した。自分には、すべての事を知り、すべての事が分つた樣になつた』と。或は風癲院の庭に集まる人々の勢力が天の星を動かすと考へて見たり、番人や入院者の談話が神秘的意義を有して居ると聽えたりして、つひには『すべての物は生き、すべての物は運動し、すべての物は符合する』と云つたのは、狂不狂を問はず、一種の哲理には相違ないが、ベーメの所謂『印符』、スデンボルグの所謂『符合』の敎理に過ぎないのであつて、普通傳來の神または絶對の樣な超自然物を豫想して居たところに缺點があつたのである。

ギリエドリイルアダンの劇『謀叛』（ラレボルト）は、イブセンの『人形の家』に似て居るところがあるが、現實に觸れるに一種の輕侮を以つてしてあつて、美な點はあるが、練熟な點が少かつたらしい。シモンズはこの作者を貴族的イブセンと呼んだ。ギリエは唯物論者や寫實主義家の間に育つて、それらの思想の愚鈍なるに激したからでもあらう『生活に關しては、自分らの奴婢が自分らの爲めに之をやつて呉れる』と云つて、『アキセル』といふ靈的で又繪畫的な劇を作つた。この中には、宗敎的理想、神秘的理想、現世的理想、情熱的理想など、種

々の典型が人間の衣物を着て出て來るのだが、人生を拒絶し、人生の幻想全部を拒絶するのだから、無限ばかりが虚僞のないものとなる。その無限には矢つ張り行きつまるのである。まア、讃めて云へば『一種の靈的ロマンチク主義』である。然し。渠の抽象觀念を最終まで完成する爲めに創造した世界は、僕等が住するそれよりも、更らに幸運な空氣中で思索され、夢想されるものには相違ない。たゞ渠は人生に對する虚僞の度が過ぎて居たから、その世界を現世の根底に結びつけることが出來なかつた。つまり人間普通の動機と自然とを侮蔑して居た詩風に、渠の長所もあつたし、また弱點もあつたのだ。エルレインの言葉に、『ボリエの哲學はいつかわが世紀の樣式にならないことは、確實を遠ざかつて居る』とあるが、その哲理は東洋や西洋神秘家に普通であつた鈍感的 内容の貧弱な信仰で、根底に於ては消極的であつたに相違ない。然し、現世の愚鈍に激昂して、おのづから新式の藝術、表象主義の藝術を建設して居たのは、事實である。

ジヤンニコラスアルチユールラムバウ、これは年は拾歳も下ながら、エルレインをしてその漂泊生涯を送らしめるに至つた程、渠に勢力を及ぼした人である。自作詩集を携へて

パリに出で、エルレインの客となつた時は、まだ十七歳の『尨毛頭』の小僧だが、既に立派な特色のある詩人であつた。主人の稱讃と驚嘆とは段々變化して、男と男との戀愛を結ぶに至らしめたので、二詩人は相携へて英國や白耳義を漂遊したが、後者のブラツセルでエルレインは拾八ヶ月間の四人となつたことがある。是はラムバウがエルレインの美少年で滿足しなくなつたので、離別を申し出した。然し、後者は渠の爲めに妻を捨て、家を捨てた位だから、憤激の餘りピストル騒ぎを起したのだ。ラムバウはそこで書くだけの詩と散文とを書いて、之を出版したが、直ぐその版全體を絶滅さしてしまつた。それから、また歐洲、亞細亞、亞非利加を漂泊して、佛蘭西に歸つたが、その間に、渠は佛語の教師、埠頭の仲脊、志願兵、陸軍工兵、貿易商、珈琲、象牙、金銀の行商、探險者などになつた。拾二ヶ年の漂泊の後、膝の病疾——これは日本酒と 違つて、外國の強い酒から來る 結果——が元になつて死んでしまつたが、渠は藝術家のよりも寧ろ活動家の精神を有して居た。

『渠は夢想家であつたが、その夢想はすべて發見であつた。』渠は云つて居る、『自分はすべての妖樂を信ずる。自分は母音の色を發明した』と云つて、『ヴイエル』(母音) といふ短曲

を作つた。その詩の初句に、左の如きことを云つてある。

A noir, E blanc, I rouge, U vert, O bleu, voyelles,
Je dirai quelque jour vos naissances latentes.

（エイ黒、イー白、アイ赤、ユウ緑、オー藍の母音よ、
われはいつか汝等の隠れたる始めを語らん）

ノルダウは狂人の惡戯と見爲したこの技巧的理論をルネイギルと云ふ人などは眞面目に思考して、たゞに各母音の音色ばかりでなく、樂器に適用し、立琴は白、ヸオロンは藍、喇叭は赤、笛は黄、オルガンは黒の色音があると論じた。フランシスポアクトヴンは、藍は戀より死に、またトルコ藍から印度藍になるのは、最も内氣な力から最後の荒癈に進む心持ちだといふ様な色感を教へた。バルベドールヸリなどは、手紙を書くに一語中の文字をそれ〴〵適當だと思ふ色を選んで色取つたものだ。表象派もから獨斷的になつて來ると、ギルに黄色であつた笛はホフマンには緋、ラムバウに黒に見えたAは他の人々には藍であつたといふ様な反對が出るのも尤もだが、米國現代の詩人ヘンリヴンダイクが、この發明

を利用して、左の如く歌つたなどは面白いではないか？

So when I see the rainbow's arc
Spanning the showery sky, far-off I hear
Music, and every colour sings.

（斯くて、われ、虹のゆみ形の
急雨の御空に渡るを見る時、遙かに聽くは
音樂にして、色みな歌ふなり。）

ラムバウがこの様な新式の物云ひを工風したのは、博學の藝術家だからではない、心が燃えて云はねば濟まないからであつた。故西郷從道侯が、その甥の洋行を本船まで送つて行つた歸りに、向ふの船から合圖をするのを見て、こちらの小蒸滊船の窓を明けようとしても開かないので、がらす戸をたゝき毀して、ハンケチを振つたといふ話がある。ラムバウはこの勢を藝術に用ゐたので——感興の湧いて來るところ、如何なる形式をも關門をもうち毀して、直接にその精神と行爲とに野蠻主義を實行したのだ。一度、文明に對して反

逆を企て、亞非利加の砂漠へ（ゴレンは東洋と云つた）身を隱したのは、決して敎理的でもない、また克己を旨とした犬儒的でもない、また確信でも、感情からでもない。實に本能的で、人間といふ有機體の必要であつたのだ。渠も亦夢想家で、その夢は無常迅速、輪廓を認め難かつたが、それが俄かに來たり、俄かに去る間に、一種の現實體が通り過ぎたのであるから、之を刹那〳〵にもつと確かに攫み得たなら、自然主義の妙諦に當つたのだ。然し、この活動の人、ラムバウの取り殘した點は、感覺の人、ゴルレインの生命と技巧とに發達した。

（二）

拾七歳のランバウが一詩才として客分になつた時、ゴルレインは貳拾六歳で既に有名になつて居た。歐州の詩界には、クラシク主義よりロマンチク主義、寫實主義より自然主義、表象主義と、段々と進歩發展の道筋が附いて居るから、特色さへあれば、如何に若くつても、直ぐ之を認めることが出來るが、わが國の所謂新體詩はこれまで發展または維持されも、わが國の先輩がまだ荒蕪の地を開拓しつゝある位で——大て來た短歌界と聯絡がないから、今日の

底、もう、三拾歳は越えたものが多いが、ゴルレイン當時の努力よりは二倍も三倍も骨が折れるのである。

ゴルレインは人生を愛慕することが非常に熱烈な詩人であつた。渠は惡魔派の驍將ボードレイルの名聲を受け繼いで、豊富で敏感な詩才を發揮した。後者は如何に奇峭であつても、不德や慾情に對して、まだ出家的偏見があつて、放縱のうちにも、こと更らに一種の宗敎的神境を架して居た。然し、前者の熱誠はそんな儀式に滿足しないで、たとへば戀愛で云へば、屢々肉慾に化してしまつても、なほそのうちに感得する或物があつて、肉慾は戀愛の痼疾に過ぎなかつた。然しその或物、これは矢張り神で、而もその姿にはどこかに痼疾のある神であつたらう。人間の個性的孤獨が破れて、自然界に流れ出ると、そこに必らず自分の幻影が浮ぶ。それがわが國古代人の樣に生々的人間神に見えるか、耶蘇敎徒の樣に一神的に見えるかは、その人の敎育と社會の狀態に由るので——天主敎國に生れたゴルレインに見えたのは、聖母の取り爲しを要する神であつた。而も御丁寧に、その宗敎は中世時代の臭味を帶びて居た。乃ち、ロセチなどと同じ樣に、中世的意趣を愛して、ゴレン

の所謂『官能』に牢可通のカソリク主義』であつた。こんな所があるので、トルストイ老爺をして、デカダン詩の難解誇張を非議する上に、更らに又別樣の惡感を懷かしめて、渠れを呼ぶにも、『最も不精巧な羅馬カトリカの偶像崇拜』者と云はしめたのだらう。

エルレインの改宗は前に云つた美少年事件で這入つた獄中の出來事で——シャルルモリスに『不朽兒の靈』と云はれた渠は、敏感な上に純朴であつたから、肉と罪とに對する悔悟の念も、全心全力を注いで、なか〳〵熱烈なものであつた。然し人性を脫して神性を抱合したと云ふ樣なとは渠に對する宗教的偏見者流の解釋であつて、渠は世の所謂經驗から何物をも得なかつたと云はれる、それ以上に又宗教の固定的影響を受けなかつたことは、シモンズも云つて居る。渠自身も亦持前の眞摯な態度を以つて辨明したが、『自分は信ずる、して思想に於て罪を犯すは、行爲に於けると同樣だ。……自分は信ずる、してその瞬間はい〳〵信徒である。自分は信ずる、して一たび醉うてその孤獨を感じて來ると、堪らなくなつて、或賤婦の懷に身を投じてすゝり泣きをした。これだけを讀むと、そこらあたりの耶蘇會堂の祈禱會で、涙を振るつて懺悔をしながら、

その夜直ぐ同じ惡魔の淫賣婦にくツつく、青年の態度の樣に思ふものもあるだらうが、『罪の記憶、希望、革新は自分を滿悅さして、悔恨のある時とない時とある、また時に依ると、罪その物の形を帶びて、すべてその自然の結果に圍まれて居る。更らに屢々——それ程强力で、それ程自然で、また動物的なもので、肉と血とはあるが——丁度、どの肉慾的自由想家とも同じ工合だ。……自分等は之を、短言せば、文學の形にさし向け、すべて宗思教的觀念を忘れ、或は又その觀念の一つをも自分等に逸せしめない。何者か良い信仰を以つて自分等を詩人として罪し得ようか？　百度も否だ』と云ふに至つて、最も近代的煩悶の要領を盡して居る。クラシク又はロマンチク神秘家なるスヰデンボルグなどが神を見たとか、天國や地獄へ行つて天使や惡魔と話しをして來たとか云ふのと違つて、こゝが、詩に於てまでもすゝり泣きを歌つたエルレインの新らしい天才であるところだ。ボードレイルは『詩は……科學または道德と同化することが出來ない』と云つて、盛んに醜物、病毒、罪人、賤業婦などを歌つたのはいゝが、カントの藝術無關心說に迷つたか、あまり高踏無感覺を遂行して、ノルダウの所謂『玻璃と錫との風景』を現じた缺點があるのだ。

それから見ると、ヱルレインの技巧は比較的に融通無碍である。

トルストイは、その『藝術とは何ぞや』の書に於て、デカダン藝術を『惡化』と見爲し、第一に宗教的題材の空乏、第二に形美の虚飾朦朧、第三に人工的不自然となつたと非難した（序ながら、この書の最初の日本譯『藝術論』には、題材云々のところにインスピレーションといふ語がある。これは別にそんな語の這入つて居る原本があるのか知れないが、この語はもう舊式の詩論家に限つて云爲する口實である。僕等はそんな迷信的、否、惰眠的詩境を退けたいのである。）而して、その第一結果のたゞ新らしい快樂ばかりを追ふらしく見えるのは、却つて絶大の苦痛を表白して居るのだし、第二結果の虚飾朦朧らしいのは、現今の語法を以つてはこの新思想と痛感とを發表し難いところがあるからで、第三結果の人工的に見えるのは、在來の形式を破つて、自家天眞の發揮を必要とするからである。ゴレンはその論文『佛蘭西表象派』のうちで、之を『われなる物がショースアンモルテル（不朽の物）の胎内に歸るのだ』と説明した。成る程、表象派中でも心理學的なるよりは、寧ろ形而上學的の小説を書いたと云はれるモーリスバレスなどには、すべて見ゆべき物は表象

で、それが代表的職務をその一刹那に終はつてしまうと、アンコンシイン（無意識）になる。之を不朽だとも云へようが、僕から見れば、それは表象を死物視するので、表象はいつも表象を呼び起して居るやうにならなければ、新文藝の價値は疑はれるのである。だからヱルレインの様に理論を持たないで、『初めも、終りも、また全體が、その人』であつた者は、不朽の物に歸ると云ふよりは、寧ろ之を藝術に據つて自分の身に體現して居たのだ。渠は僕の所謂『刹那主義』の人で、一刹那にその全價値を與へ、その各刹那からその刹那の與ふるものを領收したのである。『渠には、物的視覺と靈的幻像とは、その頭腦の或不思議な錬金術的作用に由つて、同一であつた。』また、その聽覺と視覺とは、殆ど相交換することが出來た程で、前に引用したヴンダイクの詩句の様に、渠は音響を以て、色彩を施し、その描線と大氣とは直ちに音樂に變化することが出來た。渠には、見ゆべき世界は幻像として存在して居たので、渠は自分の官能を通じて之を吸收したのは、丁度古代の神秘家が神美を吸收したと同じ工合であつた。渠の反省は全く徒勞で、その詩は理性の言葉ではない、心靈その物の言葉であつて、之と同時にまた目の言葉であつた。

叙情詩の本體は乃ちこれであらう。事物に對する深遠な自覺が、かの僕等のまはりにあつて、而も僕等の出て來た、また僕等のそこに歸り行くと云はれる、神秘なる物の聲となつて居るのである。シモンズも之を、舊式の思想に從つて、『無意識』の狀態と評したが、なほ滿足でなかつたから、『賢明で機敏』と云ふ形容詞を附して居る。エルハーレンの言に據れば、エルレインは『その特性を深く美に融和したので、渠は新らしい、且それ故に不朽の態勢をその上に印した』のだ。

（三）

佛蘭西の詩は、エルレインまでは、修辭學の拘束を受けて居た。『言語を牛馬視した』とは、野口米二郎氏の言だ。又上田敏氏の云はれた通り、『由來佛蘭西の抒情詩は典麗優雅の餘り熱烈放逸の氣慨に乏しかりしが（泡鳴曰く之はわが國の短歌も、昌子の出るまでは、同じ狀態であつたと思ふ）ユゴゴオ出でゝ之に激越の調を加へ、續いてボドレエルの詩に奇拔幽麗の措辭を見るに至』つた。修辭學なくして、佛詩の書けるのを敎へたのはエルレイ

ンである。わが國在來の短歌的なところはユゴー、ボードレイル、また、ルコントドリイルを主導者としたパルナシヤン派（これからエルレインも出て來た）にもまだ殘つて居たが、その達辯な修辭中に隱れて居た自然その物が、エルレインの一功績である詩の『解放』に由つて、更らに〳〵痛切になると共に、新生面を開いたのである。眞や美に對して修辭の拘束がある間は、その聽者や讀者の判斷を待つて居るので、まだその思想と情感とは全くの獨立をして居ないのだ。然し渠になると、ロムブロゾーやノルダウはその頭腦の大不調和を以つて病衰者の適例としたが、その顏面に一線の美なるところもない代り、顏全體がその性格を表し、睡氣と火山的火焰が充滿して居た樣に、その詩は一言一句に至るまで銳敏な電氣が通つて居た。渠に取りては、その詩は一刻も失ふべからざる生命であつて、その言葉はまた刹那に起滅する呼吸であつた。思想は乃ち技巧で、技巧は乃ち活思想素を吹き入れたボードレイルは、人工美を以つて最上の物としたのだから、之はまた別問

ト新らしい行き方を見て、直ちに之を人工的と評し去つたのであらう。表象派に官能的要

だ。

わが國現今の新音樂家等は、矢張りその方の修辭に拘泥して、而もその初歩なるタイムやリズムのことばかりを心配し、多少素養のある人々もまだ漸く〳〵クラシカル頭腦を持つて來たに過ぎない。渠等に附隨して、或識者等は既に調子の上に定見と熟練とを持つて居るものがある新體詩界の狀態を知らないで、或は我田引水的に合點をして、『音樂的』でないと云ふ語を楯に取つて、新體詩を非議する其意味の音樂的とは違ふが——ゞルレインの詩はその性質から云つて音樂的にならずには居られなかつた。言葉は乃ち 刹那に飛び 行く思想であつて、その瀏亮たる靈響は官能を溶化して、人間自然の生命を赤裸々に流出せしめた。渠の技巧は『詩を小鳥の歌に囀ずる』と云つたのは、實に全くのことだ。ゞルレインの詩に用語があるのは、鳥がその肉聲を用ゐる樣なもので、又、その用語の意味が相互に溶化流合して、殆ど歌辭として聽えないのは 器樂的である。フインクといふ人の音樂史論に、ベンヂヤミンキツドの言を引いて、鶯が夜森の中で鳴いて居る聲を形容してあるが、之が、やがてゞルレインの詩である。『滿ち足りてゆたかに、流る〳〵樣な聲が、樂しげに長く曳いて、次第に低くなる、その末は空氣を震動し、銀線の打たれた樣に、この孤獨な唱歌者は、最後の發聲の强烈な感情に堪へ兼て、氣息も殆ど絶えるばかりだ』と。その詩にあらはれて居る肉靈の苦闘は、そのまゝ熱烈なエネルギイとなつて、宇宙の法則を表象して居る樣に聞えるのである。

かうなると、バイロンの淺薄なロマンチク詩や、ヲルヅヲルスの貧弱な自然詩は、もう厭になつてしまうではないか？修辭と教理とは、詩に生命を與ふるものではない。

捨て果てゝ身は無きものと思へども、
雪の降る日は寒くこそあれ、
花の降る日は浮かれこそすれ。

と、芭蕉が讃した西行上人は、わが國の歌人中、最も特色のある者で、法師にして法師にあらず、洒脫にして而もその心に執着の念が强烈であつた。渠が、世の所謂インスピレーションの樣に外部から待ち受けるのではなく、もツと敏感な、またずツと切實な自分の意識を以つて、靈肉一躰を根底から震動さす神經電氣を傳へたなら、恐らく佛蘭西表象派の一大

人詩になれたらうに。『いつの世に長き眠りの夢さめて、驚くことのあらんとすらん』と云ひ、『心のみをぞ世にあらせける』と歌つて、渠はまだ靈肉合躰の自然的幻像界を攫み得なかつたのだ。エルレインになると、渾身これ詩で、自分は幻像である、幻像はまた自分だと云ふ自覺の域に達して居たから、その言語と氣質との純樸はホイスラーの畫にも似て、『一刹那の眞摯と印象とは文字にまでも附き從つて居た。』トルストイは之を餘りに主觀的（換言せば肉的）だと云つたが、エルレインは、その詩、ゴレンが羽根ある忠告と云つた『アールポエチク』（詩術）に於て、『われらの欲望するところは影なり』（Nous voulons la nuance）と叫んで左の如く歌つて居る。

De la musique encor et toujours!

（音樂なり、更らに、また絶えず！）

Que ton vers soit la chose envolée,

（汝の詩も飛び行く物たれ、）

Qu'on sent qui fuit d'une âme en allée,

（そは、われらは感ず、失せたる靈を逃れ行く物と、）

Vers d'autres cieux à d'autres amours!

（他の空に、他の愛に！）

Que ton vers soit la bonne aventure

（汝の詩もよきめぐり合せなれ、）

Eparse au vent crispé du matin,

（朝のゆらめく風に散りばひ、）

Qui va fleurant la menthe et le thym.....

（薫りて出づるぞ薄荷と芳草——）

Et tout le reste est littérature.

（餘はすべて文學のみ。）

最後の一句は上田氏も『何等の冷罵ぞ』と云つて讃成せられた。この冷罵は寧ろ形式聾

術に對する痛罵熱罵であつた。今、自然主義的表象派の代表詩ともすれば出來る渠の『シヤンソンドートン』(秋の歌)を譯して見よう。

秋の ヸオロン
長く 呻き、
寂し疲勞 は
胸を 痛む。
(Les sanglots longs
Des violons
De l' automne
Blessent mon coeur
D'une langueur
Monotone.)

切に 息づき、
色 青ざめ、
われは 過ぎし日
思ひ歎く。
(Tout suffocant
Et b'ême quand
Sonne L' heure
Je me souriens
Des jours anciens
Et je pleure.)

病める伊吹き に
散りし行きて、

こゝに　かしこに
われは　朽ち葉。
(Et je m'en vais
Au vent mauvais
Qui m' emporte
Deçà delà
Pareil à la
Feuille morte.)

この簡結にして力ある詩は、ガートリユードホールの英譯の方が、原文よりも却つてその意味のよく現はれて居るところがある。それは長谷川天渓氏が『表象主義の文學』太陽）に引用してあるから、讀者は僕の譯と對照して味つて見給へ。ホールは第一節の秋の呻きを『木の葉散らす息吹きが并オロンの如く低き悲鳴を擧ぐる』と譯し、ジョングレイ（であつたかと思ふ）の譯には、第二節の『全く息つまり』（原文）のところに、わざ〳〵

鐘の音を持つて來てある。その他、蒲原有明氏の『春鳥集』、上田敏氏の『海潮音』に、各三篇づゝ、短篇の譯がある。『また一つ、トルストイが難解不當の空文字と攻撃した小アリヤを譯して見よう。

廣野の上を
倦んじぞ果てなく、
消やすき雪は
砂ともに照らす なり。
(Dans l' interminable
Ennui de la plaine,
La neige incertaine
Luit comme du sable.)

赤がねの空

つゆしも 光なし。
思へば、月 の
生き死ぬ ながめ かや。
(Le ciel est de cuivre,
Sans lueur aucune.
On croirait voir vivre
Et mourir la lune.)

そばなる 森 の
樫の木、雲の如、
灰色 に 浮ぶ
その影 濃霧 の うち。
(Comme des nuées,

Flottent gris les chênes
Des forêts prochaines
Parmi les buées.)

赤がね の 空
つゆしも 光なし。
思へば、月 の
生き死ぬ ながめ かや。
(Le ciel est de cuivre,
Sans lueur aucune.
On croirait voir vivre
Et mourir la lune.)

息詰む からす、
痩たる 狼 よ、
この 北風に
なが身は 破れぬべし。
(Corneille poussive
Et vous, les loups maigres,
Par ces bises aigres
Quoi donc vousarrive?)

廣野 の 上を
倦んじ ぞ 果しなく、
消やすき 雪 は
砂 とも 照らす なり。

(Dans l' interminable
Ennui de la plaine,
La neige incertaine
Luit comme du sable.)

トルストイは、雪が『砂とも照らす』ことはない、また、光の鈍い『赤がねの空』に、月が『生き死ぬ』やうに見えようぞと罵倒したが、前者は慣れ來つた煩悶苦惱を以つて廣野の雪に向ふと、雪は光があつても、無限にくづれて自分の心の平らかならぬことを表し、後者は之と相應じて、寒さうに悲しい曇天を『キヴル』(銅)に譬へ、そのおもてに見える月に、人生は生死以上の悲痛が感じられることを現はして居るのだ。第三節の『シエーヌ』(樫の木)の影は、この悲痛中にも、ほのかに自分の心に浮んで來る幻影であるかの樣に見え、第五節には、この幻影を追ふて、烏や狼はその身が破れてしまうまでも、自分は烈しいこの北風を忍んで、而もなほあこがれて居るものがあるのを示めして居る。こんな空漠寒寂な大風景からでも、すべて以上の感想が一つになると、何となく僕等に非常に暖い

物が感じ得られるのは、たゞ乾からびて居る禪僧などの詩歌と違つて、頗る現代的な　また敏感的な作者の特長である。ノルダウは、作者が同じ語又は句を無意義に反覆する癖があるから、これは心的勞衰のしるしだと攻撃したが、さう一概に無意義だと云つてしまへるものではない。

ゞルレインは、困苦と不運と災難とに堪へ、初めは飲酒に、後には病氣に溺れ、而も人生に戀々として、生慾を斷ち得なかつたのは、却つて大詩人の資性を備へて居たところである。その漂泊的生涯は所謂ボヘミヤ人（放浪する人の意）の隊長であつた。表象詩も渠の作ぐらゐになると、わが國今日の詩人が眞似ようとして失敗する難句難解には落ちて居ないではないか？僕は思つて居る、自然派（自然主義派ではない）の河井醉茗氏がもツと近代的思潮に浴し、その温雅平明な詩風に拾倍の神經電氣を通じたら、ゞルレインの全體ではないが、その隱約な點だけは得られるだらう。

（四）

『詩には常に謎語があるを要す』（これはエマソンの文章非平易說と同主義だ）と云つて、微妙な歡樂を傳へる神秘が完全に含有されるのは、表象にあると說いたステファンマラルメは、トルストイもデカダン派中『最も著大な者』と許し、ゴレンが『詩人の表象的人物』と評した詩人で、餘程學者肌の人物だ。近代の表象詩は、ゞルレインの樣な純樸な人のにしろ、すべて哲理的根底があるのだが、奇跡はいつも起るものであるから、詩に一奇跡（舊思想のインスピレーション）の來たるを待つて居る必要はないと云つた位で——渠は『理論をマラルメに遺して置いた。』マラルメは文學を餘り愛し過ぎたので、之を完全にしよう、完全にしようと思つて、却つてたゞその斷片ばかりを書いたものだ。その精神が既に省略的であつたから、愛詩家の智力を信ずることが多きに過ぎ、普通人の考へでは分らぬ程、感想の連鎖を無視してしまつた。渠は、神秘家と云ふよりも、寧ろ一種の思索家であつて、その非常に怜悧な精神を以つて　常に明確な而も通俗ではない問題を解釋したのだ。表象はすべての文學に初めからあつて、たゞその不明確なのは、僕等の言葉その物と同じであつたのが、今や全く自覺の域に進んで、僕等の思想が多方面に束縛されて居るのを解放し

て呉れる様になつたのだ。渠の詩を讀むと、言葉は普通の外形的論理では發見されない位置に据わつて居るが、その間に見認められるのは覆面の調樂であつて、それが震動して、事物の中心に進んで入るのだ。

渠の證明に據れば、言葉は乃ち精靈の自由呼吸を符徴に取つたもので、渠の撰んだ言葉は自由を與へる原理だから、之が爲めに精神は物質より抽き出され、新たに受け取つた形は乃ち世の所謂『不死』である。近代的文學はかうならなければ、たゞ生命のない死骸に過ぎなからう。『名狀するは破滅さすことである、暗示するは創造することである。』之が渠の主義で——ゼルレインの敏感よりも進歩して、マラルメは『心的感覺』とも云ふべき力が盛んであつたのだ。前者が夢寐縹渺たるうちに、熱烈な感想を寄せてあるのは、大いにラムバウの影響であるが、後者の音律が確實にして、句々悉く寶玉の様な意味のあるのは之をジエラールより受けたのである。然し、ジエラールに純幻像であつたものが、マラルメには、沈思默考の論理的歸結であつた。また、ゼルレインの詩が小鳥の瀏亮婉轉たる響きであつたに對して、マラルメのは宇宙を振動する大オーケストラの聲にならうとした。

歐洲の音樂界は、渠と同時代者のワグネル以前は、甘ッたるい協和音ばかりに支配されて居たと云つてもいい——丁度、わが國の新體詩界が甘ッたるい七五調のみを口調がいいと持て囃した時代と同樣だ。然しワグネルが出て來て、不協和音を使ふことが多くなつてから、音樂なるものは、不用意な耳には隨分聽き苦しくなつた代り、全體として之を聽き味ふと、意外に深遠微妙な功果を奏する樣になつた。然し、この大樂劇家は、まだロマンチク要素を脫却することが出來なかつたから、たとへ音樂なる物の性質上、名狀することはなかつたにしろ、その暗示は空想的に高かつたらうが、實質的に深い點が少かつたらしい。マラルメの失敗はワグネルと同じ立場に滿足して居られなかつたからで——實にワグネルを大成し、ワグネル以上の物を與へようと努めて居たのだ。言葉を靈化して音樂的に爲し、その音樂を以つて理性と意志と情緒とを自然化しようとしたのだ。物靈兩界の『永久符合』を云爲するのは、この詩人並に諸論者が勝手に其習慣を適用したのに過ぎない。然し、詩は詩として取り扱ふ充分の價値があるので、言語を以つて音樂を奏せしめようとは、かのヲルターペーターの『諸藝術は絕えず音樂の方則に向ふ』といふのと同じく、藝術全體の共

通點からひねり出した考へであつて、若し詩を以つて音樂の代用とし、音樂を以つて詩の代理とするものがあつたら、滑稽と云はねばならない。マラルメの『ラミユジクエレレッル』（音樂と文字）といふ大學講演も、或程度以上に至れば、たゞ愉快な空想であらう。

マラルメ自身も云つた通り、『事物の冥想、事物に由つて惹起する夢想から飛び出る想像』が歌となるので――パルナシャン派は事物そのものを示してしまうから、神秘的要素を缺き、心裏に鳴動する微妙な歡樂の響きを存じて呉れなかつた。これ詩の興味を四分の三減殺するものであると。かう云ふ考へであるから、渠は詩を餘り奔放に作らなかつた、その數は比較的に少なかつた。然し渠は僕の云ふ自然主義の方に一歩を進めた神であつた。渠の主義と詩とを讀むと、僕にはわが古代の神々の痛苦と生活とが聯想される。渠はエルレインの樣に天才肌ではない、然し自己の天才を壓服した大能才であつたらしい。『詩は危急存亡機の言語である』と云つたマラルメ自身の詩も、悉く過ぎ行く大歡喜を喚起して、之をその迅速な飛行中に捕へて居る。その歡喜の聲はたゞ情的本能の作用ではない、ルコントドリイルなどのパルナシャン一派の叫んだ單純な喜悦や悲哀ではない。その聲には、實

に、重疊壓迫の力に滿ち滿ちた霧圍氣中で、心的情緒と心的感覺を運搬して居たのである。微妙な情緒、魔的風景、模糊たる表象、これらの物が自然に相交叉して、純美の詩篇が成り立つて居る。

渠の事は、野口氏が『太陽』に於て可なり詳しく紹介してあるから、讀者はそれをも參考し給へ。若しエルレインを西行に引き下せば、マラルメは乃ちそれに對する芭蕉庵桃靑である。後者の比較は野口氏も雜誌『卯杖』で論じたことがある。

憂き我を寂しがらせよ、閑古鳥。
故郷や臍の緒に泣く歲の暮。
蛸壺やはかなき夢を夏の月。

の作者は、心中確乎たる自覺的格調を有して居た詩人である。『三井寺の』『夏草や』また『荒海や』の樣なのは名吟ではあらう、然しクラシク風なものであるが、談林一派の中堅を突いて、新派の正風體を創設し得たのは、餘程マラルメの位置と似て居るところがある。幽玄である、雄寂である、而してその詩風は寂しい歡樂を追ふて居る。たゞその思想と感

情との上に於て、近代的面目を施して居なかつたのは、時勢上西行と同じく止むを得ないことだ。マラルメは、あまり凝り性であつたので、ゼルレインの様に自生自發のところがない。然し、次ぎに引用するのを見ても分る通り、その作は殆と完全融化の心理學である。有明氏の難解と云はれる作數篇は、隨分この佛詩人の風格を追ふて居て、氏には渠と似通ふ資性も備つて居るのだから、その方面をもツと發展して、渠だけの集中情化力を持たして貰ひたいと思はれる——氏は首肯するか、どうだか？

（五）

マラルメの作にして、かの有名な『スーピル』（嗟嘆）、並に『如何なる絹か時の薫り以て』を以つて初まる短曲は、上田氏が一は『海潮音』に、一は雜誌『藝苑』に譯出されたから、僕は今、トルストイが最も難解で飜譯も出來ないと攻撃した短曲を譯して見ようっ（この詩と次ぎの詩とは一度二月の新小説に出たが、譯し方を改めたから、さう思つて呉れ給へ。）

痛ましき　裸形（らぎやう）　もて、汝（なれ）

黒大理、溶岩（やうがん）を　出で、
角笛　に　奴僕（ぬぼく）の　樹魂、
徳　なくて　ただ　響く　のみ。

（A la nue accablante tu
Baisse de basalte et de laves,
A même les échos esclaves
Par une trompe sans vertu）

空洞（くうどう）の　破船　かや（汝（なれ）、
泡よ、そを　知れど、泡立つ）
最果（いやはて）の　一破滅物、
扱かれたる　帆柱　を　去る。

（Quel sépulcral naufrage—tu

Le sais, écumé, mais y baves——
Suprême une entre eles epives,
Abolit le mât dévêtu)

或は、これ、憤怒の落ち度、
いや高き ほろびの影の
空しくや 淵と なりけん。
(On ce'a que furibond faute
De quelque perdition haute
Tout l' abime vain éployé)

曳く髪の白きが 中に、
飽くまでも 溺れ行きけん

海妖の胎内の兒は。
(Dans le si blanc eveeu qui traîne
Avarement aura noyé
Le flanc enfant d'une sirène.)

『海妖』とは、以太利附近の一孤島に住んで居て、妖魔の樂音を以つて船人を引きつけたと想像されるサイレンである。昔、オヂセウスはその船子の耳に蠟を詰め、その迷はしの危險を避けしめ、自分はその魔音を聽いたが、身を帆柱に結びつけて居たから、無難に通り過ぎることが出來た。マラルメは之をその詩中に聯想して居るのだらうが、希臘的武勇を材料にしないで、却つてデカダン詩の本色を歌つたのである。『エイキユム』(泡)が題であるらしい。黑大理、溶岩、角笛を以つてこの音樂島を呼び起し、『痛ましき裸形』または『奴僕の樹魂』とは、自我を制限せず、妖音に應じてぶくついて居る泡の姿で、『德なくて』云々は、その泡が歡樂の涌くがまゝに、極度まで本能性の發展して居るのを云ふのだ。『セプルクラルノウフラジ』(空洞の破船)、これは溶岩などの洞穴中の響きと肉的破滅の機とを一緒

に捉へて來た感想で、泡は之を知つて居ながら、尚盛んにぶくぶく云つて居るが（泡を擬人法で見たから、原文に『バーヴ』（垂涎する）とあるが、その實、矢張り泡立つことだ）、破滅物中の最後に殘つた物、乃ち『マーデエイツュ』（抜かれたる帆柱）までを取り去つてしまつた。この取り去られた帆柱の句は、泡の有する『痛ましき裸形』と相對して、最も力ある句ではないか？第三節で、或はこれは、何かオウト（高尚）なペルヂション（ほろび）の怒り狂つた落ち度が、空しい影を殘して、この『ラビイム』（深淵または地獄）となつたのだらう。第四節、『曳く髪の白き』は、泡立つ海と海妖の女性的魔力とを想像して居るので、本能性がわれを忘れた靈の如く消えて、『飽くまでも溺れ行きけん』も、その實消えたのではない、泡と同じく、われなる物は海妖の『フランカンファン』（胎兒）であつて、その寂しい心境内にぶく付いて居るのであると云ふのだ。僕が『女護海島』で歌つた南風に孕むといふ感想も、自然に之から浮んで來る樣な氣がして、非常に愉快に讀めたのだ。

僕が佛語の智識では、この詩を譯するのは非常な骨折であつた。普通の語法に據つて居ないのは、僕等の新詩よりも尚ひどひか知れない。この樣な詩は、讀む人によりて解釋が違ふかも知れない（また違へても取れるだらう）から、豫め斷つて置く。今一つ『ルシーニュ』（鵠）といふ短曲を譯して見よう。これもなか〳〵六ケしいので、譯するのに、困難なことは困難であつた。

きよらの美なる　日は、醉へる　羽振きに、
うち碎かん　とすや　堅き　溯水を——
その　忘られの　面を　霜に　馴染むは、
飛びても　これ　飛ばぬ　無色の　氷河。

(Le vierge, le vivace et le bel aujourd'hui
Va-t-il nous déchirer avec un coup d'aile ivre
Ce lac dur oublié que hante sous le givre
Le transparent glacier des vols qui n'ont pas fui?)

偉大や、昨の鵠、それとし知れど、——

歌はぬ　爲めに——身を　その　住まひ　より
免るゝ、望み　なし、嗟、寒き冬　の
實らぬ　倦じ　あり、そが　照らす　時ぞ。

(Un cygne d'autrefois se souvient que c'est lui,
Magnifique; mais qui sans espoir se délivre
Pour n'avoir pas chanté la région où vit
Quand du stérile hiver a resplendi l'ennui.)

鳥　とし　忌む　域に　負はせられたる
眞白の　もだえ　こそ、頸、ふり拂へ、
然らじ、翼　捕る　國　の　威嚇　は。

(Tout son col secouera cette blanche agonie
Par l' espace infligée à l'oiseau qui le nie,

Mais non l'horreur du sol où le plumage est pris.)

無垢なる　美　を　こゝに　與ふる、御靈、
輕侮　の　夢　を　着て　鵠は　冷やか、
身づから　現ずなり——無益　の　配所。

(Fantôme qu'a ce lieu son pur éclat assigne,
Il s'immobilise au songe froide de mépris
Que vêt parmi l'exil inutile le cygne.)

嚴寒の空、晴れて麗はしい今日だ。この日は『醉へる羽振き』を以つて、この『堅き湖水』をうち碎いて呉れるだらうか？長くウーブリエイ、忘れられて居た表面には『霜に』(スールギヴル)『馴染む』(アント、屢々往來する)無色透明の『グラシエ』(氷河)があつて、まだ『飛んだことのない飛躍』(原文)を持つて居る。第二節、白鳥は身づからその氷河だと知つては居るが、身をその境遇から免れさす望みのない物だ。『不毛の冬の倦んじ』(原文)

とは、形ある鳥の境遇を客觀的に見たので、それが『アラスプランヂ』(照らしたる)とは氷河といふ思ひ付きと相對して、愉快な感じを呼び起すではないか？第三節、鳥その物は好まないが境遇上止むを得ず受くる『アゴニイ』(もだえ)が『ブランシュ』(白い)といふは、よく表象派の用ゐる形容詞であつて、之を頸だけではふり拂ふが、根本の飛躍力は土地の『ロア』(威嚇)に捕らへられて居るから、第一節の『飛びてもこれ飛ばぬ』の意味を明にして居る。第四節、實に『ファントーム』(靈または幻像)としては、『無垢なるエクラ(美または輝き)をアシーヌ(指定)する』が、今のところ、白鳥が『輕侮の冷やかなる夢』(原文)に現じて居るのは、丁度罪なくして配所の月を見る樣で、主觀的には、『レクシイルイニュチイル』(無益の謫居)である。以上は詩人の境遇を歌つたもので、鵠の鳥は一種透明な光輝を放つて、その悲痛な狀態から、靈か肉かの幻像界を實現して居るではないか？第二節の『歌はぬ爲めに』は、或は、マラルメ自身を辯解して居るのではあるまいかと思はれる。渠は一時まるでその詩を發表しなかつたので、口で云ふだけのことを實際に作り得ないのだと攻撃されたこともあるのだ。

この詩にしろ、前詩にしろ、かうなると、一種の深い心理學の樣で、本當の詩と云へるか、どうだか分らない位である。

(六)

ジエラールは一八五五年に、ポリエは一八八九年に、ヱルレイン、ランバウ、マラルメは一八九六、七、八年に死んでしまつた。所謂『ファンドシエクル』(世紀末)の時代に於て佛蘭西表象派の中堅となつて居たのは、最後の三名だが、今一人忘れてならないのは、一八八七年に二十七歲で早世したジユールラフォルグである。渠も近代不安の生活をよく體現して居た詩人で、その藝術は、シモンズに從へば、『神經の藝術』で。その詩の一脚一音に至るまでも作者自身の大膽が現はれて居るから、『その詩調と統一とは、』ゴレンに據れば、『音節的であるよりは、寧ろ心靈的であつた。』ベルトランの後、ボードレイルに依つて創設された散文詩は、近代文藝の一樣式となつて、マラルメも書いたし、ランバウも書いたが、このラフオルグも亦巧みなものであつたのだ。拾九世紀の末葉には、佛蘭西は諸主義

の爲めに惱まされて居た。ゾラ一流の自然主義は勿論、ボードレイルの惡魔主義やルコントドリイルの高踏主義もあつた。然しボードレイルにつき纏つて居た形式的宗教思想は、ヱルレインが之を打ち破り、ルコントドリイルの感想を云ひ切つてしまう傾向は、マラルメが之を一掃してしまつたのである。兎に角、自然主義的表象主義に近いものが影響を及ぼしたことが最も多いのだ。表象專門派はたゞヱルレインやマラルメの餘弊踏襲者流だ。

そこで、表象派の勢力が佛蘭西に認められる樣になつたのは、一八八五年頃からであつて、その頃には、種々の小雜誌が亂出して居て、盛んに新語法、新熟語、古語復活、並に言葉の彫鑿、洗練、調和などを叫んで居たが、いづれも讀者の少いのと、資本金の不足とで倒れてしまつたのだ。そこへヱルレインの第四詩集『ローマンスサンパロール』(言葉なき歌)——これは、ランバウを携へて英國や白耳義を浮れて居た時の作——並にマラルメの第三著書『ラプレミヂデユンフォーヌ』(牧神の午後)が出たので、こゝに初めて表象派の運動が一定の形を帶びて來たのである。ところで、序だから加へて見たい——小雜誌の亂出は、その當時、頭腦の堅いアングロサキソン人にも及んで、之を眞似して現はれたのに、

英國では、『エローブック』黃表紙)、『ザサヴイ』(甘藍)、『ザドーム』(圓閣)などがあり。米國では、『ザチャプブック』(草紙)、『ザラーク』(雲雀)、『ザフイリスチン』(フイリスチヤ人)などがあつた。英の『ザサヴイ』はアーサーシモンズが關係して居たし、米の『ザラーク』は野口米二郎氏が編輯者の一人であつた。後者の雜誌などは、稀有の爲めに、今あれば一部八弗ぐらゐもするさうだ。かう云ふ雜誌は、もう、一二の外、なくなつてしまつたが、一時は米國だけで五百種も出たのだ。それも尤もなことであつて、詩人がその獨特を發揮し得る樣になれば、そんな狹い範圍内で、費用の分擔までして引つ込んで居るにも及ばなからうし、また、わが國でもある樣に、内輪のそねみ合などして、いぢめられて居るにも及ばないからであらう。

兎に角、マラルメとヱルレインとは、表象主義派の建物に於て、ゴレンの所謂『一對の礎石』であつた。ヱルレインは英國に行つて、困つたあげくに、シモンズの厄介になつて居たこともあつて、今度わが國の米國大使館へ書記官として來たホイラーといふアメリカ詩人も、その頃龍動で渠に面會したさうだが、實に漂泊と悲慘と病氣とが渠の境遇を包んで

居たに反して、マラルメの生涯は平穏無事であつたのだ。英國へ行つても、オツクスフオルド大學の人々に頼まれて、前に擧げた『音樂と文字』といふ講演などをやつた。渠が超然として隱遁的態度を取り、その著を公にすることも少く、巴里の新聞紙上で時々盛んになる爭論にも、關與しなくなつても、新詩人一派の主領、發端者の位置を占めて居た。難解なのは、英國にもブラウニングの例があることで——或英國人が腦病で病院に這入つて居て、もう、直つたと云はれた頃、ブラウニングの初期の作を讀み、一向分らないので、醫者の言を疑ひ、友人にそれを讀ませて見ると、矢ツ張り分らない。それでは、自分の頭の惡いせいではなからうと云つて退院することに決めた。この話が世評にのぼつてから、ブラウニングの詩が有名になつたと同じ樣な點が、マラルメにもある。然し、『マラルメを精密に解して呉れいとは云はないが、然し渠を聽かないなら、それは諸君の落ち度、損失であるだらう。』渠は一大學の英語教師をして、文學的勞働以外に生活の道を立て、巴里市中の閑靜な町に住んで居たから、少しもあせることはしなかつた。且、生來、オルガンとバレイ(踊)とを嗜好し、また、野口氏が太陽で云はれた通り、愉快な談話家であつたのはシモン

ズも云つてあつて、毎週、渠の所へ集つて、いろんな人がいろんな詩談をしたものだ。談話は表象派末流の殊に好んでやつて居たもので——巴里の或珈琲店で毎日會談した事が此派の始まりである。初めはそこに集ふ者が、身づからヒドロパス(無意義の造語)と稱して居たが、ジャンモレアスやシャルルモリスなどが這入つてから、デカダンといふ非難の語をわざと標榜することになつた。間もなく、モレアスがサンボリスト(表象派)といふ語を發明し、またエルレインが之を一八八五年に主張し、『パルナシヤン派並に大抵のロマンチク派は、或意味に於て、表象を缺いて居た』と云つてから、同派の人々はこの名を以て知られることになつた。然し、同類中には、無能、無職——これはまだいゝが——無學文盲な青年が多かつたので、談ずるところは、多く關係のない先進者を頭から罵倒して自分等の未熟な意氣込みを示めしたり、またおのが崇拜するものなら、つまらない擧動をも見ても、さすがは詩人だとか、なんとか云つて感服したり、とてもお話しにはならなかつたらしい。だから仲間のうちで比較的に博學であつたモリスは、『この青年輩のうちで、宗教または哲學の教説を少しでも正確に知つて居るものは、甚だ少い。……數名はスペン

サー、ミル、ショーペンハウエル、コムト、ダルキンから、僅かの術語を覺えて居た』と云つて居る。大抵はモレアスやマラルメから聽いた話で、天下の知識を學得したかの樣に速斷して居たらしい。たまに自分等のことが巴里の新聞にでも載ると、その冷罵は讃められた程嬉しかつたのだ。それがやがて威喝と手段とを以つて、諸新聞にかれ是れ云はす樣になつたので、渠等の名聲は外國までも響き渡ることになつたが、木ツ葉武者は矢張り木ツ葉武者で、天才氣取りの懶け者等はどうなつてしまつたか、今はすべてその名も知れて居ない。

表象派の系統は、却つて早く死んだジエラールやポリエから傳つて來て、エルレインとマラルメとが最後の勝利者であつた。この二大詩人の作だけは、多少の取捨をすれば、僕の云ふ自然主義的表象詩の思想の境域に持つて來ることが出來るのである。第一、不必要なカトリカ趣味のあるのは、ロマンチク分子の混入して居るのであつて、餘程注意をして嚙み分けなければならないところだし、また、この派の詩人を通じて、visibilité（ヴィジビリテ）(可見物)との二元的傾向がある。これが思索力不足の人々には、舊式の表象

主義に墮落する誘惑になるから、餘程危險である。僕等が便利の爲め物と心、肉と靈とを分けて云ふ時がある、その時の樣ならかまはないが、それが一轉すると、淺薄な唯物主義にならないまでも、乾滅枯死の唯心主義にはなり易いのだ。ホイスマンズやメタリンクが乃ちそれに落ちてしまつたことは、早稻田文學四月號に出した『日本古代思想より近代の表象主義を論ず』に於て云つてある通りである。

（エルレインとマラルメとに關して、更らに材料を取り寄せて置いたから、他日また詳論するつもりである。）

明治四十年二月十日作、新小說掲載）

メレジコウスキのトルストイ論を讀む

僕は全體トルストイは讀まず嫌ひであつた。渠をわが國に紹介した『國民之友』に、例の非戰論の書翰が載つた時は、僕も一時その說に動かされた結果、長篇の敘事詩で、非戰主義『市街戰』といふのを作つたこともあるが、それは發表せずに捨てゝしまつた。それは、僕が信じて居た耶蘇敎なるものは、却つて人の精神を殺してしまうものだと悟つたからで——耶蘇敎は、わが國の舊劇の樣に、一定の型が出來て居て、その型に塡るには、人の思想と感情とを不自然に矯めて行かなければならない、して、トルストイの博愛主義や非戰論は、この型を最も極端に引き緊めたに過ぎない。渠は僞善の骨頂に達して居るのだ。と、かう云ふ考が僕にはあつたが、これ迄渠を云爲するものは、孰れもこの方面を讃めそやして居るのだ。ところが、今度、丸で違つた方面を紹介して居る者に出會つた。それはメレジコウスキの『トルストイ、アズ、マン、アンド、アーチスト』である。

僕が近著『半獸主義』を校正して居る時、友人が之を見て、メレジコウスキのトルスト

イ論にも、僕の思想と似たものがあるから讀んで見よと忠告して呉れた。それで拙著が出來上ると、間もなく避暑旅行に出たので、借りて來たトルストイ論を氣が向くまゝに讀んで見たを幸ひ、たゞ感じたことを述べて見たいのである。

この書の最初の數章は、トルストイの人物を四方八方から觀察した人々の引用だらけであつて——この氣儘老爺の鼻屎から爪の垢までをほじくり出して、何とか、かんとか勿體をつける有樣は、丸で第二のボスウエリズムで、冗長緩漫、到底、天才の筆とは合點が出來なかつた。且、トルストイが上には百姓の常服を着して居ても下には立派なシャツを着て、巴里第一等の香水をにほはせて居る、之が一つのシムボルだと云ふが如き——尤も嗅覺美の問題から來て居るにしても、さう表象なるものを亂用されては困るではないか？そんなことを云へば、わが國最初のハイカラ黨の一人、故光妙寺三郎が、身ににほひのいゝ香水を絶やさないで、藝者の出て居る席で、わが國固有の今樣節を淸吟したのは、なほ更ら表象的なところがあつた。然し、第一篇の七章位から第二篇に這入つては、論者もなか〳〵馬鹿にならんことが分かつて來た。それで、トルストイを論ずるに、殆んど至る所、

之れと正反對のドストイエフスキを參照に持つて來てあるが、前者に靈までを肉化しようとしたし、後者は肉までを靈化しようとしたと云つてある。トルストイは現在と肉とに偏したが、ドストイエフスキは未來と靈とに傾いて居た。トルストイの作には、主人公も性格もないから、悲劇に必要な苦悶が出て居ないが、ドストイエフスキのには、希臘に起つた悲劇が成り立つて居た。現今の宗教家、僞善者が見て居るトルストイとしては、この比較は却つて異樣に聽えやうが、論者は渠を『センス（官能）の人、半ば異教、半ば耶蘇教で、どちらも充分になつて居ない』と云つてある。但し、目の覺めない耶蘇教國では、異教と云へば、直ちに野蠻の意だ。然し、今日の歐洲文明の如く、何事も文弱になつて來た世には、野蠻は結構である。僕の『半獸主義』はこの方面を大いに主張したのだ。トルストイは人間を非難して、『神の姿』を、獸の姿に引き下だし、その肉感、疾病、出産、死亡などを、時によると、刻薄な程に精寫した。渠の肉感上の經驗は、何百年も生き長らへて、幾度も人間や獸類になつて見たかと思はれる程だ。例へば、初めて舞踏會に臨まうとする娘を、その筆は眞ッ裸にしてまで見せる。だから、ドストイエフスキの樣に、肉體や動物性

から離れた靈性をよく描寫する事は出來ないが、自分の達し得られる範圍內、乃ち、純粹の自然人を描く點に於ては、論者に從ふと、世界の藝術家だ。別派の藝術では、以太利復興期の畫家や、希臘古代の彫刻家は、トルストイよりも更らに完全に肉體人を描いたが、渠の樣に、自然人を寫して、驚くべき程眞理で、また赤裸々な者は、古今東西一人もないさうである。

之を見ても、トルストイは、宗教家輩の考へて居る樣な人物とは違つて、別に餘程面白い所がある。然し、メレジコウスキのは重にその創作（小說）の上から見て來たのであるが、今では、トルストイ自身はその作物を嫌忌して、自分で成して來た名を自分でうち消さうとして居る。之は面白い矛盾だ。第一、貧者に數コペクを與へようとした時、慈善とはそんな物でないと悟つて、全財產を棄捨しようとしたが、細君に故障を云はれてから、之れを全く細君に委してしまひ、自分の出版物は公衆の所有だから、版權を取らないといふ主義も、後には細君にうち破られて、それからずんずん財源を得て居る。どん百姓の友だと云ひながら、うはべばかりその樣子をして、自分は立派な書齋に立て籠つて著作に餘

念がないと、細君はそばからその清書や校正をして居る。そこまでは面白いが、その極端暗愚な博愛論や非戰論を稱道するに至つては、かの内村氏が自分にも出來ない事を人に强いて、その言論で飯を食つて居ると或論者から云はれたと同じで、たゞ老いぼれ翁の放言であつて、——耶蘇敎の型、乃ち、僞善を今一層極端に持つて行つたに過ぎないと、僕は思ふのである。若し渠がわが國に生れて、わが國純粹の敎育を受けたなら、そんな馬鹿者にはならなかつたであらう。メレジコウスキは、現代の露國は、貴族から下民に至るまですべて宗敎的思考を以つて苦悶して居ると云つたが、わが國でも亦各人各個、固有の想念と生命とを逃つて、悶絶苦動して居るのである。特に日露戰爭以來、その内的活動は烈しくなつた。たゞ耶蘇敎國の樣に、淺薄な形式を衣服にして居ないだけだ。それに、德富蘆花氏の樣に、すでに文界の一部に名を得た人が、如何に宗敎上の疑惑があるにしろ、わざ〳〵ヤスナヤポリヤナ下りまで、トルストイ巡禮をするのは我國民に對する愚劣な反逆だ。

然し、トルストイがえらからうが、なからうが、それは僕の論文の目的ではない。之から、論者メレジコウスキ其人の說を論じて見やう。トルストイの小說には、神よりも人、

人體よりも獸體を描いてあるので、官能の働きが敏活に現れて居るから、嗅覺などの問題が云つてある。トルストイは藝術を攻擊して居る。——之は例の博愛論的放言であつて、獸的も、若し僕の『半獸主義』の樣に、日本的敎養の結果から出て居るなら、藝術の眞意は知れただらうに。——だから、進んでやるものだ。トルストイの小說は、ドストイエフスキのとは反對で、人物の性格が精神から見えて來る對話に重きを置かないで、寧ろその獸寫は、渠と同樣、デカダン派の好んでやるものだ。トルストイの小說は、ドストイエフスキのとは反對で、人物の性格が精神から見えて來る對話に重きを置かないで、寧ろその獸性からして靈性をも吸收してしまう官能的說明に、最も深い根據があると云はれる程ではないか？だから、その對話の所は殆んど看過する樣にしても、その間に挿つて居る身體上の說明、刹那の歎聲や破笑、また沈默などに、無限の意味が現はれて居るのだ。それも人間前、乃ち、自然人、獸の狀態に分解してからの地だから、五官の力が非常に神秘な物になつて居るのだ。

古代の希臘人や羅馬人は勿論、全く十八世紀の人々でも、トルストイ程には感覺が鋭敏でなかつただらう。プーシキンなら、たゞ接吻をしたと書く所を、トルストイでは、ソニ

アとロストフの場合の如き、接吻の感じに黒焦（くろこげ）のコルクの臭ひを持つて來てある。これで假裝會で輕裝騎兵の附け鬚をして居る女の狀態が明確に受け取れる。また、馬蹄の響を透明に聽いたり、出た御馳走が人の顏つきを反映したり、人のけはひに圓感を與へたりするのは、神經の鈍い古典派から見れば、藝術の墮落、病的だと云ふに定つてるが、渠等はまだ深い官能的描寫がどれだけ人間の感想を強烈にするか知らないのだ。現今の心理學でさへ、既に、知情意の區別を不確實だと見爲す樣になつて來た。五官の働きも、それが別々に働いた所で、肉と靈とにどれ程の價値があらう。古典派最古の詩聖ホメーロスは、原始の世界に組織を與へた大人物で、且、その作中の神にも人性があるし、人にもまた神性が備つて居る——換言すれば、詩聖は單純素朴の夢想中に、神人の合一を實現して居たのである。『イリヤッド』や『オデシー』中の勇者は僕等よりも確かに感覺は痴鈍である。然し、詩聖身づからも——古代の日本人が藍色の空を青空と云つた樣に——海の色を形容するに青と黑藍とを混同した個處がある。然し、僕等が十八九世紀の人に對する樣に、僕等の子孫になれば、僕等が十八九世紀の人に對する樣に、僕等を神經痴鈍と罵つて、僕等の感覺にのぼらなかつたものを見たり、聽い

たり、嗅ぎつけたりする樣になるでらう。官能の進化は確かに事實だが、然しそれが、人間の全體としては、論者の思ふ樣に、完全な覺醒——乃ち、救濟——に達する道ではない。たゞ古代詩人の夢想を一層深刻にして、抜くべからざる獸性にまでも接觸して、別樣の夢を見るに過ぎないのである。僕の『半獸主義』で云つた通り、宇宙は到底不可解である、人生は極度まで神秘である。科學や哲學は、出山釋迦と同じくミイラのお化けで、けちりんも靈活肉熱の趣きがない、世の覺醒者はすべて無意味の行者である。この感想をまとめて行くのが僕の論文の趣意だ。

トルストイは非常な孤獨癖があつて、而も例の現世的思想に閉ぢ籠つて居るので、死といふ物を恐れる事が强烈で、また深刻だ。その作物では、死の光が外部から生を照らして生の色と形とを分離させ、痴鈍にさせて、遂には物質上の原素に達してしまう傾きがある。渠には人生は生と死との永久對抗だが、ドストイエフスキにはこれが永久の一體であつた。前者は、人生といふ家の內から、死を見るに現世の眼を以つてし、後者は靈界の眼を以つて、人生にのぞむに、その立ち場は現世の人には死と思はれた。人はどちらを取るだらう

か？使徒ポウロ――之は耶蘇の教を狹小偏固にしたもの丶隊長だが――人間の存在をアレキサンドリヤ學派の哲學を借りて來て、三級に分けた。物質的、心靈的、自然的ので、最後の等級は、前二者のつなぎであつて、肉が完うされて靈が始まる、さかひ目の瓢箪といふ狀態で――之を精神物理學の語で云へば、物理精神的存在である。トルストイはこの物理精神的といふ靈肉煩悶の神秘界を自然人に描寫した大家だ。そこでトルストイの樣な思想が更らに墮落して行くと、論者に據ると、神より人、『人より獸、獸より植物、植物から雲となつて、空に融けて、段々段々の靜寂が最後の靜寂に歸する。』之は、僕の所謂『自然即心靈』の行き方と同じで、表象としては、物が如何に變はつても、『然し、それでも無にはならない、而も生命の始めである。新天地の發出である』

論者の云ふには、聖書にも『わが肉を食ひ、わが血を飲むものは永遠の生命を得』とあつて、肉體をそのまゝ靈化するのが、矢張りトルストイの主旨だ。耶蘇は水を葡萄酒に、葡萄酒をまた血に變はらす力があつたと傳へられて居るが、耶蘇敎の虛僞なる精進退隱主義は、之と反對に、『血を葡萄酒に、葡萄酒を冷水に、神聖なる身體を身體なき神聖に、

る肉を肉なき靈に、肉體の復活を肉體の死滅に更へて』しまつた。『トルストイが人間に獸體を求めるのは、その獸體を神化する爲めだ。』然し、渠の神化力はその根底に於てまだ不足の點がある、之を補ふには、ドストイエフスキを持つて來ねばならない。ドストイエフスキの作物を見ると、人の性格は――トルストイの樣に、原素に分解されるに反して――有機的個性の極端まで描かれ、暗憺たる動物根元から發展して、靈性の最終最高の發光點に達して居る。トルストイもドストイエフスキも共に刻薄な所があるらしいが、前者のは深刻で、後者のは熱刻である。『最も抽象的思想は最も實際的だ』とエマソンが云つたと同じ流儀で、論者は『最も抽象的思想は同時に亦最も熱烈だ』と云つてある。ドストイエフスキは――過去のロマンチク詩人等が、たとへは沙翁の『ハムレツト』に於けるが如く、情熱は描寫する事が出來ても、心熱（知熱、意熱、情熱）を缺いて居たのとは違つて――燃ゆる思索力を以て其筆を走らしたらしい。僕の所謂『知力と意力との集中情化』をやつて居たのだ。ドストイエフスキの筆には、情熱の論理があるが、亦その論理に情熱があつたゝつまり深く考へたから深く感じたので、この氷を火にした樣な熱想（パッショネート）をト

ルストイの深刻なる苦痛に加へたなら、將來の世界的新宗教が出來るといふのである。」

現代程宗教心の喚發して居る時はない。たとへ老朽の、神學的又は形而上學的獨斷の覆面は、すべて智識の批判で引き破られてしまつたが、その獨斷の顚覆は、論者によると、更らに眞正なる宗教の可能を證明して居る。『宗教的、形而上學的夢想はその實在を失なつたが、おのづから、醒めて、夢想の樣な實在になる』のだ。此間の波浪にたゞよつて苦しんだものが、或はニイチエの樣に狂氣となり、トルストイの樣に獸的となり、ワグネル、ベクリン、イブセン、その他すべてデカダン派の樣に病的となつた。中世的又は古典的傳說に更らに何物かを加へて、之を神秘な所へ持つて行つたに過ぎないドストイエフスキさへ、現代の活動に附隨して、空想的は乃ち宗教的だとまで云ひ切つたのである」だから、深刻な自然主義や病的と云はれるデカダン思想は、現代人の生命に殆ど缺くべからざる物となつて居るのだ。自然主義も深くなると、たとへば空氣を壓迫して流動物としたと同樣、その物は實際にないが、而も僞るべからざる實在である。之を病的とか、不健全とか云ふのは、云ふ人が却つてどこか不健全な個處を持つて居るからである。渠等が若し傳來の

形式を棄てゝ、赤裸々の勇氣を持つて來たら、病的や不健全はなくなつてしまうのだ。

そこで、論者によると、現代の歐洲人は三つの道に迷つて居る。第一は、此病根を脫して、元の神念を回復するのだが、それでは現今の苦悶が無意味に終る。第二の道は、もう仕方がないから、たゞ神を撲滅すると同時に、ニイチエの樣に自分も狂ひ死んでしまうのだ。第三は、最終の大一致、大表象たる新宗教を建設するのだ。ドストイエフスキは、この第三道を充分自覺はして居なかつたが、謎語としては之を殘して置いた。そこで先づ、藝術と宗教との問題だが——美といふ物は、奉事されるのを好きだ。我國の萬葉時代や、希臘のホメーロス時代には、神人の差別觀が確然でなかつただけに、美の奉事、被奉事の問題は殆ど見えなかつたが、然し、日吉神社に巫女をあげきりにしたり、アガメムノーンが娘イフイゲニヤを死せざる者に獻じたりする考が起つてからは、藝術家は時々美を力あるものゝ犧牲としたが、わが國演劇の起原もさうだが、希臘の悲劇も初めは宗教上のお勤めであつた。羅馬人が神々をパンテオンや諸博物館に押し籠めてから、藝術と宗教との連鎖が絕えて、初めて美を說き出し、『藝術の

爲めの藝術』、乃ち、身づから獨立した藝術が起つた。中世のゴチク伽藍が一時また兩者をつないだが、以太利の文藝復興で、またこの連鎖は亡ぼされた。然し、實際は變形したので、當時のレオナードやミケランジエロは、藝術中に現在の宗教ではない、當來のを發表して居たのだ。渠等は人物があまり大き過ぎて、『藝術の爲めの藝術』範圍には這入り切れなかつた。然し、ラフアエルになると、再び自分の小範圍に立て籠つて宗教の爲めではない、宗教としての藝術乃ち、『藝術の爲めの藝術』主義の勇將となつて居る。

今、トルストイとドストイエフスキとを見るに、二個の特性があつて、復興期の大導師等と接近して居る。第一、兩者の藝術は宗教と關聯して居るが、その宗教は現在のでなく當來のである。第二に、兩者はおのづから宗教として甘んずる純藝術の範圍以外に喰み出して居る。トルストイの缺點は、藝術家以上にならうとして、却つてそれ以下になつたことで。ドストイエフスキの弱所は、純美派を滿足させないと同時に、また、その反對なる美利用主義者に刻薄な天才と見えることである。然し、トルストイには、まだ實現されないが純藝術的よりも更らに深遠な、更らに宗教的な藝術主義の可能力が現はれて居るし、

ドストイエフスキにはまた、一新宗教が可なり實現されて居て、自分はその豫言者たる要地に立つて居る。

そこで、論者はかう思つて居るらしい。トルストイ側の肉想とドストイエフスキ側の靈想とは、極の兩端だから、前にも云つた僕の『自然即心靈』の行き方の樣に、いつかめぐり會つて國民的大火を引き起すに相違ない。現代は、どの國民も、苟も眠つて居ない限りは、神の觀念が破れて、五里霧中に彷徨して居るのだ。露國でも、もう神の代人たるピーター大帝では滿足が出來なくなつて、別に其典型を求めなければならなくなつた。この時に當つて、同じプーシキンから出た兩文豪が、各々別方面の新福音を宣傳したのだから、國人の意氣込みから云つても、論者が之を合一して、歐洲ばかりか、全世界に新局面を開かうとするのは當前なことだ。それで、ニイチエは『神があるとすれば、自分がその神でないと思つて居られようか』と云つたが、ドストイエフスキはその作中の虛無黨キリロフに云はせて、『神がないと認め、之れと同時に汝身づから神になつたと認めないのは、愚である、然らざれば、汝は必らず自殺するのだ』とある。この世界の進歩は、ゴリラから人

間に、人間から神の撲滅に、それから人間神である。僕の半獸主義では宗教に對する考が違ふから、その代りに『悲痛の靈』となつて居る。兎に角、論者に據ると、露國最近の二大文豪に依つて導き出される人間神教が、未來の世界教になる。トルストイとドストイエフスキとの一致燃燒を體現した露西亞人に於て、『人間神』は西洋諸國に、『神人』は初めて東洋に示され、二は即ち一となるといふのである。

メレジコウスキの藝術宗教論は、大體さういふのであつて、トルストイ巡禮をする人や耶蘇教より脫し掛けの人までは、之を讀んで有難なみだに暮れるだらうが、僕等は甚だ不徹底だと感ずるのだ。第一、不愉快なのは、東洋には先づ神人の方を示めすとある。『神人』とは耶蘇の事であるから、僕等には直ちに『人間神』——耶蘇教の筆法で、再來の耶蘇——は分らないといふ意だ。こゝになると、歐洲人には、異教徒は野蠻人だといふ頭腦があるのだから、宗教問題は人類問題になり、進んで亦國家存立の問題となる。腰の弱い政府は、日露戰爭の間に、外國の同情を得ようとして、わが國が耶蘇國であるかの樣な態度や說明をした。これは、淺學暗愚な政治家等の一政略と見て看過してもいゝが、國民は

歐洲人の偏見に恐れないで、益々固有の熱烈な感想を詩歌や評論で發表して、外教徒の上に出るべき時期に達して居るのである。外國文に飜譯されないのをいゝ、鹽に、由斷して居るべき時ではない。人間神教の如き、その精神は、わが國の歷史と現狀とに照らして、却つて僕等から稱道する便利と自由とがあるのだ。だから、肉靈合一の人間神といふ思想は、僕にも——この書を讀めと忠告して呉れた友人の言の如く——面白く受取れたが、メレジコウスキはまだ舊來のコンゼンション、形式を脫して居ない。わが國では、既に破棄した『彌陀の再來』といふ型に落ちて居る。わが國に宗教がないと云ふのは間違ひで、僕等が宗教の型を打破して、その束縛を脫したのが、歐洲人よりも更らに更らに早かつたのである。論者は肉靈の合一を云つて居ながら、まだ死と生とを分けて居る、苦痛と安樂とを離して居る。藝術と宗教とを別物に見て居る。だから、苦痛を苦痛として描き通すトルストイには、悲劇の要素がないが、個性の解脫を敎ゆるドストイエフスキには、却つて眞正の悲劇を成立して居ると云つた。解脫が出來たと思はせるのが既に滑稽だとは、僕が『半獸主義』中の新悲劇論で云つて置いたが、實に人間は愚か、草木國土、一切救濟の道はない

のである。

メレジコウスキの様な思想を以つて居る者は、誰れでも、藝術を小い型に入れてしまうと同時に、宗教をも亦別な型に入れなければ滿足出來ないのだ。新宗教の建設は差支へなからうが、それが何の役に立つのか？釋迦の哲學、耶蘇の宗教、マホメトの政略、どれもこれもその組織の出來た時は死んで居たのではないか？幅の狹い錦につゝまれて生命のないよりは、襤褸にくるまつてもがき苦しんで居る方がいゝ。どうせ人間神が出現しても不完全は不完全である。キリロフの様に、それでは『自殺するのだ』といふものは自殺するがいゝ。『大苦痛のみが心靈最後の解放者だ』とニイチエが云つたのは、それで安樂淨土に行けるといふ譯ではない。死んだと思ふのは、別な表象になつて、同じ苦みをするのだとは、『半獸主義』の思想である。どうせ、人生の最終最始は、渾沌でないか？その終始をつないで居る狀態も渾沌ではないか？この間に活動するものは、メレジコウスキの所謂『人間神』から、耶蘇教傳來の形式を取り去つて、解脫を求めず、救濟を呼ばず、轉々苦悶に堪ゆる人間、乃ち、『悲痛の靈』でなければならない。解脫は自分以外に何物かを見認め

て居るのだ、自分が神なら、救濟を求める譯はない。久遠の生命は苦痛で、最も個人的のものである。宗教又は哲學に組織する餘地を許さない。

この境地は、宗教でも哲學でも達し得られないから、僕は最も自由な藝術を取るのだ。然し、僕は『藝術の爲めの藝術』主義は採用しない。半獸主義から出る自然主義は、一言で云へば、悲痛の靈を體現すればいゝのだ。トルストイも、ドストイエフスキも、この點に於ては、刻薄だと云はれる程、自然主義であるらしい。メレジコウスキがこの兩者を捕へて、世界教を云爲することが出來るだけ、露國も大きい所がある。わが國の過去と現在とを探して、國民性の喚發から考へて、それだけの材料が又ないことはあるまい。恐らく現代に於て評論の筆を揮ふものが覺醒して居ないのは、第一、外國ばかりを標準にして、自國の事情を輕視するのと、メレジコウスキの如く頭腦が該博、明晰でないのと、自分でまだ充分國民性に觸れて居ないのとであらう。

然し、さう云つた所で、メレジコウスキのこの書に現はした宗教論を新だとも、結構だとも讃める譯ではない。且、最初に感じた冗漫な點が、終りに至るまで拔けなかつた

のは、まだ立派な天才の筆とは云へないのである。もつとも、これから直ぐ同じ人の『レオナード』を讀むつもりだから、それに移つて見れば、どう考が變はるか、それは今から受け合はれないのである。（明治三十九年七月三十日作、早稻田文學掲載）

藤岡博士の『新體詩論』

二三年前、殆ど同時に、坪内、田中、芳賀三博士の新體詩に關する談片が出たので、僕は直ぐ之を批評して見たが、その評論は僕の『半獸主義』の附録に編入してある。それには世の識者等の『尚詳しき詩論に接する時の來たるのを樂んで居る』と書いて置いた。その後、また新體詩の議論を見たのは、何かの雜誌に出た夏目漱石氏の談片の外には、今月の帝國文學に載つて居る、藤岡博士の『新體詩論』である。この間に、中央公論は新體詩の價値に就て諸方に質問を發し、僕も之に答へた一人であつたが、詩人側の眞面目な答への外は一も見るに足るものはなかつた。わが國の詩は乳臭い青年ばかりが作つて居るかの樣に思つて居る者もあつたし、自分等のやつて居る仕事ばかりが——然も根ッから下らんのに——えらいことの樣に澄まして居るものもあつた。兎に角、現今多少の見識を以つて、廣い意味の文學に關係のあるもの等が、詩といふ物を、どんな種類のに限らず、深く味はふだけの素養と趣味とを以つて居ないのは明かである。また、實際、今の詩を讀んで居な

いのだ。そんな人に向つて、專門家が議論をするのは、大人げない樣だが、餘り默つて居るのも、意氣地なしばかりが揃つて居る樣に思はれるだらうから、詩界の進歩の爲めに、云つて置きたいこともある。

夏目氏のは、今よく覺えて居ないが、新體詩は見ないが、つまらないと云ふのであつた。『見ない』と斷言出來るなら、初めから何も云はないで、お得意のだらくした寫生文の小說を書いて、世間を茶化して居る方がお爲めになつたのだ。然もその道を取らないで、俳句でもひねくる樣に、出たら目の評言を下だし、その上、詩人か何だか知れて居なかつた人の作例を擧げて、まア、こんな物だとは失禮極まるではないか？僕等新體詩人は、氏の學堂で敎へて居る樣な人々ばかりだと思つたら間違つて居る。僕が氏の所に行く人からあの議論は何だとなじつて貰つたら、なアに出たら目をしやべつたのだとは、餘り不用意な傳言ではないか？僕はその時何か書かうと思つたが、それを控へて居たのは、けふの樣な折を待つて居たのである。

藤岡博士のは、その文章にもなか〳〵苦心してある跡が見えて、多少用意のあつたことが察しられる。十頁餘りの論文、隨分花やかに延びては居るが、要するに、『現代は過渡の時代なり、社會の理想は定まらず、趣味に統一なく、文體に規律なき時』であるので、『感情を專らとし、格調に生くる詩歌は、いかにしてかその物質的事業に伴うて、駸々として進歩すべき』と云ふにあるらしい。わが國現今の情態は、世界文化の渦中に投じ、時勢の變化が急激であるので、趣味に一定の標準がないのは新聞の記事を見ても知れるし、國民理想の歸するところがないので、懷疑は爲たり顏にその暴威を逞くし、その上『現代は餘りに快樂多く、希望に滿ち』て居るので、『空想の花は現實の嵐に荒されて開くに由なく、神秘の夢は繁劇の晝の務に忘れられて、思考の外に置かる』（平家物語の口調だ。）社會は現代を體現する靑年の感情に同情しない。こんなことを頻りに云つて居られるが、これは詩人に邪魔になるどころか、却つて乘すべき機會を與へることが多いのである。

感懷を詠じようとして出て來たものが、こんな形勢だから、その術を試みても、期待の結果を得ないので、頻々として他の方面に轉ずるのを見て、博士は何か重大事件の樣に思つて居られるのが、これは當り前のことで、意志の弱い、手腕のない文人詩客が、それに

相當な職業を見付けるのに過ぎない。そんなものが最も純粋純潔な詩界に住し得られよう筈はないのだ。そんなものには宗教と哲學とを教へて、俗務に安んぜしめる必要があらう。苟も詩人として立つて來たものには、古來の傳習的思想は壞れても差支へはない、またその方が却つて便利なのだ。一定の標準がなければ困るのは、俗吏と宗教信者と獨立心のない學者との事であつて、詩人は標準その物を與へてかゝるのである。十九世紀の文化が世界を通じて詩歌の運命を下り阪に向けたとは、たゞ外部の狀態であつて、詩界その物は、範圍を縮少したには相違なからうが、いよ〳〵深遠に、ます〳〵熱烈になつて來たのだ。物質的煩悶も、極端な個人主義も、『詩歌の進路を妨げ』ないで、却つて自家藥籠中の物になつて居る。ロセチ一派の詩人はまだまごついて居た點もあつたにしろ、ゼルレインやマラルメの佛蘭西表象派になると、現代の悲運(或は幸運)を利用して、心理的詩歌の凱歌を奏して居るではないか？わが國の現代詩人中にも、決して之に劣らない用意をして居るものがあるのだ。決して『精緻の分析を許すところの小說か、客觀の描寫を用ふる劇詩』が現代の繁劇な存在に堪へるばかりではない。博士は自家の狹隘な標準に照らして、敘情詩

人の天職を規定しようとするのである。

第一、『敘情詩は概するに普遍性の美を直寫するに適すれども、衆に外れ世と伴はざる特性を描くが如きは、その能くするところにあらず』とは、事實に相違して居るではないか？博士は敘情の情といふことに拘泥して居るらしい。『詩歌は……唯感情をその對象とするのみ、智識の一分も水晶の上の塵一とは、概括的分類を好む美學者や、陳腐な和歌をひねくツて居る人々には、成る程尤もな解釋であらう。然し近代的詩歌（博士もその一部を論じたのだ）は、イブセンやメタリンクの劇、ホイスマンズ ダンヌンチオ、ゴルキイの小說と共に、博士の所謂現代世相の『傾向を思索し、その心裡を分析して、精緻の筆を揮はゞ、特別なる病的情態も、紙上に活躍すべき』樣になつて居るので、たゞに情意ばかりではない、智力までも燃燒流和させようと努めて居るのである。ゼルレインの感覺は熱鐵の樣に燃えて流れて居たし、マラルメの理性は熱石の如く燒けて赤くなつて居た。自然主義的表象派の傾向は、すべて衆に外れもしようし、世の進歩するまでまどろツこしくも待つて居られない。かういふ詩人の作は『說明を加ふれば散文となり、加へざれば謎語となる』時

があるのは、珍らしくない。この見地と趣味とに達し得ないものらが、如何に不可解を叫んでも、どうせ之を解する頭腦と神經とを持つて居ない時勢後れの人々だから、僕等は決して齒牙に懸ける必要はないのである。博士は現代詩人の立つて居る境遇を而も外部から論じたのであつて、こんな時代にも奮勵勇起その生命を豐富に吸收して居る、詩人の作物の內容を云爲したものではないことが知れよう。博士の言を借りて云へば、『趣味の缺けた人に詩歌は解すべからず』、否、趣味はあつても、その程度の低い人には、進歩した詩歌は到底解し得らるべきものでない。

次に、『既に哲學なく、宗教なしとするところにまたいかなる詩歌があるべき』と云はれて居る。哲學や、宗教は、例の概括的哲學者に從つた博士の分類に據ると、重に知力や意志に基づいて居るのだから、純感情を主張する前項の引用とは、多少衝突して居る樣だが、文學歴史の專門家に向つて、そんな鹿つめらしいあげ足取りの議論は省略することゝして、博士は宗教や哲學があつて、初めて詩歌を導くものと思つて居られるらしい。この點は一言打破して置かなければならない。外國宣教師が、傳道會社からその借家賃を拂つて貰ふ西洋建住家のガラス窓から、日本の狀態を見て、之に自家傳習の教理を當て嵌めようとすると同樣、時代の眞相に觸れたこともなくつて、高見の見物的に歌ひ出した、これまでの、穩かな、平凡な和歌俳句などを連想して居るなら、純感情的といふのは、最も奇麗で、最も上品な作風に思はれるだらう。然し、僕には、之と同時に、かういふ考への歌讀みや書工の『あなたは學者、あなたは御出家、私共は何も存じませんので（その癖平凡な歌や書を無上と知る）かういふ方々のお話を聽くのは、大變爲めになります』底の口吻が連想される。一言で云へば、クラシク主義の文學が博士の腦髓に固着して居るのである。短歌がたツた三十一文字で、誰れにでも出來易かつたので、この種の主義を以つて文名を知られたものは、古今人數の上から、外國よりもわが國の歌人の方が多からう。雨後の竹の子の樣に、たゞ多數といふデモクラト的勢力に依つて、僕等同胞の趣味がその發達を壓へられて居るとは少々どころではないのである。

西行や景樹を讀んで、ヲルヅヲルスやテニスンに行け——クラシク趣味もそこまで發展すれば、もう、充分ではないか？ヲルヅヲルスはその傳習の神や不死の觀念を木の葉や雲

覓に寄せたが、テニスンになると、當時の社會問題までを所謂常識的に解釋してしまつた。詩人の特色として殘るのは、たゞ多少の清新な感情が露はれて居るといふに止まる。新詩人は、耶蘇坊主でなく、また世間見すの僧徒でない以上は、そんなことで滿足出來ないのである。まして博士の言の通り、國民理想の歸趨が分らない時代ではないか？前にも云つた通り、新詩人は身づから標準その物を與へてかゝるのであるから、在來の傳習に拘泥する傾きある識者（因に云ふ、識者でない人々の方に、之を破つて、現代の苦悶を解して居るものがある）が、『わからぬもの、面白くないものと、高閣に束ね去らんとする風』があるのは、寧ろ識者その人の愚鈍なので、新體詩人の恥辱ではない、却つてその作物がデモクラト黨の主領株よりも遙かに進歩して居る證據である。餘り進歩してに困るといふ冷評も聽かないではないが、さういふ常識的傾向を有する人々は、新詩派に目も塞ぎ、耳も塞いで、ロングフェロウや景樹の歌をいつまでも讀んで居る方がよからう。作る者に苦心があるのに、之を讀む者が苦心しないのは、『あいた口に牡丹餅』を望むのであつて、苦心以上の快味を共にする現代的努力のないのを證して居る。こゝがジエネレーション、乃ち

時代の相違して來る交叉點である。世間は新詩の技巧上に難解の點があると思つて居るが（それは多少なきにあらずだが）、實は思想上――知想、意想、感想上――の難解、否、新解すべきところのあるのに思ひ至らないのだ。何かと云ふと、自分が識者の一人と信じて居るところから、自分の古い考へから割り出して解釋して見ようとする。學究的に博士もなどだ。考へて見給へ、最も近く國民に接觸する劇の作者でさへ、かの近松もシエキスピヤも、その眞價は當時に知られなかつたのではないか？

博士は哲學や宗教の保證が附かなければ、その詩歌は不健全なものと思つて居られるらしい。早稻田文學の『對墓庵漫筆』の記者や、一方の評論家中島孤島氏も、矢張りこの傾向がある。いづれも、理性といふ神樣のやうな置き物が、僕等の頭腦の神棚に据はつて居て、僕等の趣味を導き上げて呉れるといふ迷信から來て居るらしい。昔の哲學者、今の怠惰詩人等が、インスピレーションといふ物を、詩人の腦裡外から這入つて來るかの樣に思つて居るのと變りはない。詩歌は思想上一定の型に嵌めて作るべし、といふのに等しくはなか

らうか？理性的保證が附いて健全に見える趣味は、之を古典に求めるがいゝ。その古典といふのも時代の苔が附くに從つて、研究家が一定の型に塡めて解釋する樣になつたのであつて――さうなつた時は、もう、『古き衣』である。之を着て立たうとするクラシク主義は、文學歷史研究家の片手間に成つた詩歌によく出て來る奴で、わが國で例ふれば眞淵や宣長の文學的方面、惡く云へば因循姑息、よく云つても、小成に安んじた商家の御隱居のお目出たさ加減である。クラシクなる語には、多少の新らしい解釋を試みたもの（たとへばニューマンやマシウアーノルド）がないではないが、どうせ自然主義とは相容れない退歩的傾向であるから、苟も淸新と敏感と生命とを尊ぶ詩人に取りては、折衷を許さない鐵槌を以つて、之をうち碎かなければならない。英國古典中の一大遺物『失樂園』――これが出來た當時、政治上宗敎上にまだ勢力が殘つて居た淸敎徒的理想と趣味とにすら（だから反對黨の社會には尙更ら）本統には分らなかつた程非クラシク、博士の所謂不健全であつたが、それさへ餘り退歩的傾向があつたので、今は殆ど廢れてしまつた。プラトーン、シエキスピヤ、ゲーテなどをよく振り廻してあるエマソンの全集にすら、ミルトンの名

はたツた一二ケ處しか出て居ない。不健全であるからではない、その本質が餘りクラシクだからだ。

博士は云はれた、『詩歌は唯健全なる趣味の標準の定まれる時にのみ榮ゆべし』と。成る程デモクラト黨の云ひさうな言葉だ。『花や紅葉に對する從來の形容は、陳腐の一言に斥けられ、菫や百合など代りて用ひらるれども、これらはいかなる明確の印象具體の聯想を世人に與ふるか、作者も讀者と共に言外の感興の淺きに慊焉たらざるを得ざらん』と。博士は僕等の主義どころか、まだ、素養の薄弱なものが乘り氣になつて居る、ロマンチクな趣味さへ解することが出來なからう。よしんば之を尤もない爲めに迷つて居る星や菫の時代は、僕等には既に一時期を劃してしまつたのである。之を見ても、世人一般の趣味や理想の發達を待つ甲斐のないのが分らうではないか？僕等は時々刻々の進歩的活動を詩歌に體現して行くのである。趣味も理想も、此活動の渦中に一緒に鍛鍊されて居るのだ。この兩者の指導――と云はれゝば――は別に他から受て來る必要はない。敍情詩の眞價は、乃ち、こゝにあるのだ。厭な星菫派の名を以つて、漸く現代

一般の識者無識者に、新體詩なる物が知られたと同じ樣に、現今の僕等の實際の趣味と理想と內容とが、一般に解せられる標準を一定する時が來るだらう。して、その標準に據つて歌ふものが歌ひ、味はふものが味ふのは、僕等の苦心が開いた道を行くので、極平易であるから、詩歌の產出と觀賞とは盛んになるだらう。之を文學史上から見れば、その表面は面白い形勢だが、然し、この『榮ゆる』のは僕等の詩歌の形骸であつて、常識的には流行しようが、退歩的傾向のクラシク趣味になつてしまうから、僕等の詩歌——眞正の敘情詩——その物の死である。博士はこの意味に於ても尙『健全』といふ語を澄まして使ふつもりだらうか？『趣味の固定はやがて沈滯を促がし、典型の暴君われは顏に壓制を逞しくして、後進者の摸擬を迫る』維新以前の文藝の宿弊を知つて居ながら、博士の頭腦はこゝにも文學歷史家の頭腦に過ぎない。その平安文學史も、さぞ、テインの英文學史の樣に、數百貫目の大轉石に壓殺されて、その平垣になつた表面では、特色ある天才が泣いて居るだらう。

博士は新詩の振興しない理由を二つ擧げられた。現代趣味の龍雜、辭句用語の紛亂。第一のは、クラシク風が盛んにならない理由であつて、既に僕の言で分る通り、寧ろ退

歩を望んで居られるのだ。第二の理由に『辭句に規律なく、用語の雅俗を過まること』は規律があつても古風な行き方を避け、雅俗を過まるのではない、新らしい語をも使用しなければならない樣になつて來たのである。之れがいかないなら、博士の今度の文章も——無規律、雅俗混合であるから——いけない譯になる。雜駁な文章できへ其必要を感じて來たなら、之を感ずる心狀に最も近く觸れなければならない詩歌には、猶更らのことではないか？詩歌は上品にしろといふ意が這入つて居るのだらうが、最近心理體の詩歌には、その題材に姦通や、殺人や、賤業婦をまでも取ることがあるから、その用語などもわざ〳〵それ相應なのを撰擇する位だ。雅なのがあるのは、また雅な點の這入るべき個所だからである『七七、五五、八七等の句、六行、八行等の章など、作家が勝手に試みざるなしと雖も、いまだ一般に世に許されたるものあるを見ず』とあるが、作家が自分で實例を示す外誰れが許す權利があらう？

それに付いて思ひ出すのは、度々、御歌會詠進撰歌を非難する舊歌人、海上胤平氏が昨日また讀賣に出された議論である。『松かさと言ふも俗語なるべし、雅言にあらざれば我國の

正しき歌とは云べからず』とか、『とし〳〵とあるは俗調なり、茲に年毎にと云ふべし』とか、『歌の詞は……古へより定まれる詞あり』とか、博士もおしまひにはこんなみじめなことになつてしまひはしないかと、僕は蔭ながら心配して居るのだ。『天才は時勢を改造す。かれは……直ちに自家の趣味を立て、文體を定むれば、社會はその膝下に伏して、一家の風はやがて社會の風となる』と云つたり、『新體詩の必要と價値とは改めて說くまでもなし、これを斥くるは、明治の時代を斥くるなり、これを呪ふは文學を呪ふなり』と云つたり、なか〳〵分つて居る樣な言を立てられたが、夏目氏の胡麻化し口實と同樣、矢張り、『今大家と稱せらるゝ人、特色ありと傳へらるゝ人の作品を一々通讀せず』（實は多少通讀してか知れない）と逃げて居る。通讀したとて、あの論の行き方では、分らないのも尤である。博士などは、まア、僕等の事業が終つて、例の壓殺的筆法で、明治文學史を編み得るまでは、官學的に豐富な材料が得られる西行論でもして、弱い者いぢめをして居る方がよからうと思はれる。僕の議論の不言の部分は、今度早稻田文學に出る『日本古代思想より表象主義を論ず』を見て貰ひたい。

僕は文學博士大塚保治氏の『日本文明の將來』（哲學雜誌揭載）の演說を見て、哲學（者と

云はず）研究家等の思索力はまだ〳〵こなれて居ないのが、益々感じられた。こゝ暫くはまだ日本の人物らしいものは、學問の上から、法學界、醫學界の專有であらう。實業主義の道德化といふなど、尤もらしいところはあるが、その全體が淺薄で、不斷の用意の足りないものである。それから見ると、藤岡博士の如きは、その專門上材料と實例とは、居ながらにして集まる根據を以つて居るのだから、その頭腦を淸新にして、外國人などの筆法を超脫し、更らに古風な傳習を破碎し、早く日本獨特の史見を開いたらよからうではないか？詩人等の意氣込みは既に外國の潮流以上を行かうとして居るのである。そこへ行くと大塚氏にしろ、夏目氏にしろ、藤岡氏にしろ、日本の文明に後れて居る所以だ。

終りに望んで一言して置く。『新らしい酒は新らしい袋』だ。僕等は必らずしも薄弱な『藝術の爲めの藝術』主義を取るのではない、然し、哲學や宗教の爲めの詩歌は歌はないのだ。架空の理想や愚昧な信仰を打破して、更らに深くわが國語を自然と神經との根底に結びつけるのである。（明治四十年二月、讀賣新聞）

自然主義的表象詩論

僕は帝國大學には關係がない。然し若し强いて關係を付けると、大學出の人々に依つて建設されて居る哲學會の一員である。そこから毎月發行される哲學雜誌は、それが哲學會雜誌と云はれて、四六形の薄ッぺらなものであつた、ずッと古い號からして讀んで居た。また、諸君の文學會から發刊される帝國文學も、初號からして見て居たものである。その帝國文學の出る帝國文學會の大會席上に於て、兎も角も演說をすることになつたのは、僕の光榮とするところである。

一二日前、小山內薰君からお手紙が來て、藤岡博士も御出席だから、新體詩の話を用意して來て呉れろとのことであつたが、それが演說をしろといふのか、または博士に會つた折、自然に、先日僕が讀賣新聞で博士の新體詩論を駁擊した、その餘談があるだらうから、その覺悟をして來いと云ふのか、そこらの意味が分らなかつたので、至急ハガキで問ひ合せると、今日丁度宅を出ようとする時に、演說を賴むといふ電報が來た。多少用意はし

て置いたし、近頃は文章や演說で以つて新體詩論をする機會が多いので、新體詩論の一手販賣の樣に思はれて居るついでだから、暫く諸君の淸聽を煩はして、これでもう其の方の商賣はやめに致すつもりである。たゞ藤岡博士が御出席になつて居られないのを殘念に思ふ。

僕は新體詩の『新體』だけは取つてしまひたい。『詩』で充分なのである。以前は井上巽軒博士などは國詩と云ふがいいと云はれたが、これは外國の詩に對して云ふ時には最も適當な名稱であらう。たゞ困るのは、詩に對して舊思想を懷いて居る人々があるので——藤岡博士などはその代表者であるが——さう云ふ人に向つては、たゞ詩と云ふよりも、まだ新の字を加へて、『新詩』と云つて區別する必要があるだらう。　そこで、この新詩に反對——とまでは行かないまでも　冷遇——するものが多い。これは、僕等は刊行物で逢遇するのは勿論、これまで世の所謂識者等の坐談に於てよく聽かされて、もう僕等の耳は蛸の樣になつて居るのだ。さういふ反對または冷遇の意見——寧ろ無意見——を研究して、その理由のあるところを總合して見ると、二つばかりの根據がある。第一に　實利主義からの反對である。わが國ほど詩人の多い國はないゝ故ハーン氏もひやかしたが、これは本當に事實

である。飛び跳ねるお嬢さんであれ、苦もない良家の細君であれ、漸くにきびの附き出した男子であれ、學者、番頭、床屋の主人に至るまでが、昔から短歌や俳句をひねくツて居る。更らに、外國で云へば羅甸詩に當る漢詩は、暇のあるお役人どもまでが稽古して居るのだ。つまらないことは分り切つて居るではないか？この習慣は現代の青年にも及んで居て、何の苦悶も修養も經たことのないものでも、字足を揃へて珍らしい言葉を並べると、直ぐ立派な詩が出來たつもりになる。さういふ青年には、學校でも落第すると、それが乃ち社會の迫害である。小便臭い娘ッ子と鳥渡喧嘩でもすると、それが直ぐ失戀である。詩才と詩的閲歴のないものが詩を作るのは、外國では之を最も恥づべきことにして居る程社會が進歩して居るが、わが國ではまだドゲレル（拙詩）を作つて、而も得意がるものは諸方面に滿ち滿ちて居る。自分の娘や子息が詩才のない詩人となつて、滿足して居るのを見れば、『詩を作るより田を作れ』のお箱を出すのは、實利主義の老爺としてさもあるべき忠告であらう。然し之を以つて僕等が規せんとするのは、詩人の苦心と意氣と影響との如何なるものであるかを知らない囈語である。

第二に、文學玩弄主義の反對だ。舊來の短歌や俳句の樣な出鱈目——とは語弊があるが、つまり餘り詩的良心と自覺とがない作風に馴れて居て、さういふのが詩歌だと思つてゐるものが多い。生命ある詩人としての奮發はしないで、たゞこれまで傳つて來た用語と思想とを以つて、人に面白く讀める樣に云ひまはすことを骨折る。さういふ詩人の必らず訴へるのは感情である。それも煮え切つて居るのならいゝが、いつも煮え切れない感情だ。歌に讀み入れる感情であつて、詩人その物を體現する感情ではない。兎角すべての物を人工的に區別する哲學者の編み出した審美學なるものにも、かういふ種類の感情をいい氣になつて材料にして居るのだから、眞正の詩人から見ると、下らん學說だと云はなければならない。充分腕を振へば振ふことが出來る長大な詩形のある外國でさへ、そんな學說に迷はされる傾きがあるのだから、わが國の歌人俳人の樣に、たわいのない三十一文字や十七字の小詩形をいぢくり慣れて居ると、知らず識らず傳習的感情——學者の所謂美の根據——に滿足して、徒らに文學門外漢の玩弄物になつてしまうのを悟らない馬鹿者が多いのは、尤もなことであるのだらう。之をよしとする作者や論者に限つて、民謠や端唄の樣な詩が欲し

いと要求する。成る程民謠や端唄は感情が流露して居て、クラシクな短歌などよりも更らに面白いが、渠等はさういふものばかりを詩と心得て居るのだ。山路愛山氏が曾て『坂は照る〳〵鈴鹿は曇る』の例を擧げて、これでなければならない樣なことを云はれたし、大槻氏は中央公論の都々一論で、老人に相當な醉ひがめぐつて居たのか、呂律のまはらない都々一讃をやられた。かういふ説の根底には、藝術を玩弄視する心持ちが籠つて居るので、詩を敎育の用に供するダイダクチクポエト（敎訓詩人）に比べて、此の種の論者はいい取り組みである。僕等は重々承知の上、渠等のお讃めを避けて居るのだ。

第三に、時代の相違から來る反對である。新體詩は味はつて見ようと努めても、一向に分らないと云ふ人々がある。これは文學玩弄主義者のうちで、多少新詩に同情を持つてゐるものに多い。自分は世の識者でもあり、また文學趣味を解して居るから、若し理解出來る詩なら、世人よりもよく分る筈だのにと思つて、讀んで見ても、語法が違つて居る、云ひまはしがひねくれてゐる、期待する意味が出て來ない。外國詩でさへそんなことはないのにと思ひ出す。それでは渠等の標準とするその外國詩はどんなものと尋ねて見ると、ロ

ングフエロウやヲルヅヲルスやユゴー、甘く行つてゲーテ、シエキスピヤなど、すべて一種舊式の型に依つて解釋出來る詩人ので、そんな詩にはクラシクな西行や芭蕉を豫期して讀むことが出來よう。然しエルレインやマラルメ、ロセチやスキンバンなどになると、矢張り僕等のが分らない樣に分らないのだ。その分らないのは、何も學識が足りないのでもなく、文學趣味がない譯でもない。僕等の發表する新思想と新趣味とが分らないのだ。僕は藤岡博士を攻擊したが、これは博士ばかりに當つたのではない、惰眠の覺めないすべてのクラシク論者に當つたのだ。渠等自身の愚鈍な感覺は棚に上げて置いて、僕等に朦朧呼ばはりをするのは、餘程蟲のいい話である。かうなると、もう、時代の相違であつて一舊思想と新思想との入れ變り、舊人と新人との更替である。詩は最も靈活銳敏なものであるから。萬事に先立つて、舊時代の死と新時代の出產とを感じ得てゐるので、詩人が世に對する地位は預言者の地位であるのだ。

今、時代變遷の例を英國の詩に照らして考へて見給へ。拾八世紀の初期には、ジエームスタムソンの『四季の歌』の樣なものが歡迎された。あの花の匂ひがいい、この果物は味が

ある、あの山の紅葉は赤い絹の様だ、この川には甘さうな魚が住んで居るといふ工合に——これはわが國でも、現在こんな風な短歌を讀んで喜んで居るものがあるが——その自然に對する興味はたゞ表面的官能の働きに過ぎなかつた。それが拾九世紀の初めになつて、ヲルヅヲルスの様な自然觀でなければ滿足出來なくなつた。虹を見て靈魂の不死を歌つたり、木の葉のそよぐに神の聲を聽いたり、自然の觀かたが餘程變つて來た。然し渠の宗教的傾向は、豐富な自然を貧弱な抽象觀念の犧牲にしてしまつたので、キイツやロセチが出て、再び官能的方面を開拓したが、タムソンの見た花鳥風月とは違つて、自然は詩人の神經に溶け入つて、そこに思想と融和する様な風になつた。殊にロセチの如きには、佛蘭西サンボリスト（表象派）に似通ふところが出來て、淫逸と敬虔の念とが合體した様な特色があつた。バイロンは人物として面白いが、その詩は殆ど自覺がないし、テニスンの作は流暢で、奇麗で、上品であつたから、桂冠詩人——わが國では、御歌所などの詩人——には最も適當だが、多く嫁入り前の娘ッ子が愛讀して、是れが一たび結婚して多少世の辛酸を嘗めて來ると、厭になつた。といふ當時の事實を見ても分る通り、到底深い自然と人間とを描くことが出來なかつたのだ。今日の様に進歩した時代には、もう、ヲルヅヲルスもバイロンもテニスンも大したものでなくなつた。英國現代の詩界では、ロセチやボードレイルの流を汲んで居るスキンバン、それから大いにサンボリストを以つて標榜するエーツやシモンズの傾向が、最も新しいのであらう。

佛蘭西では、拾九世紀の後半から殆ど時を同じうして種々の主義が出て來た。ゾラの自然主義は云ふまでもないが、詩界ではルコントドリイルの虛無主義、ボードレイルの惡魔主義、エルレインやマラルメの表象主義、メタリンクの神秘主義、或はバルナシャン高踏派と云ひ、或はデカダン派と云ひ、或はマジ派と云ひ、それがまた英國に及んでオスカーワイルドのエスチート（耽美派）ともなつた。耽美主義はルコントドリイルやボードレイルやの自然を侮蔑する詩風を英國に發展させたが、佛蘭西の表象派は、ボードレイルが官能と思想とをその深い根底に於て同一視した方面——これは僕の『半獸主義』の行き方だ——を取つて進み、ルコントドリイルの高踏派並にその他のロマンチク派には（表象（サンボル）と云ふ程の物がない、また考へを淺薄に云ひ切つてしまう弊があると稱して、サジエ

スチオン乃ち暗示の必要なことを唱へた。この暗示主義、表象主義の詩などは、もがいてもがいて、もがいたあげくに出來たものであるから、それだけの閲歴を持つて居る、また持つだけの資格があるものでなければ、解することの出來ないのは當前であらう。少しでも煩悶があると、直ぐその逃げ道を宗教や哲學に求める詩人、學校でをそはつた審美學説に滿足して居る批評家、舊趣味を以つて大平樂を唱へて居る國文學者などの標準は、全くお話にならないのであつて、丁度物指しを以つて物の重量を計らうとする樣なものだ。ヱルレインやマラルメの詩には、ホイスマンズやメタリンクの死んだ表象主義と違つて、僕が是から説明する自然主義的表象主義が生きて居る樣に思はれる。ゾラは表象派に哲學がないと評したが、それは誤見であつて、少くともこの二大詩人には深い哲理的基礎があつて、渠等はその上に確乎として立つて居たのである。たゞその哲理が普通の形式として現はれないで、獨特の空氣となつて、詩人の呼吸をつないで居た。かういふ新詩を適評するのは、おなじ新思想を有する人々に限るから、同派から出て來たシヤルルモリスやジヤンモレアスの書いたものが、最も當を得て居るらしい。

この詩風は多少わが國にも這入つて居るし、これからまだ〳〵發展するだらう。こゝに云つて置く必要があるのは、自然派と自然主義派との區別である。前者は萬事をクラシカルに見て居るので、自然に對して、古典の與へた趣味と素養以上には、自己の努力を用ゐない傾きがある。後者は何等の舊慣にも依らないで、自己の努力ばかりが自然をありのまゝに捉へようとするのだから、おのづから神經が銳敏になつて、詩の生命なるイリユージヨン(幻像)はそれから起るやうになるのだ。河井醉茗君の作は作者自身も自然派を以つて許して居る風がある。薄田泣菫君も自然派と見なければならない。同君の技巧は如何にも當今第一と云はれてゐるが、それは自然主義派に入る條件とはならない。自然主義の詩なら、おのづから表象を呼び起すやうになるべきものだが、同君の詩中に表象らしく見えて居るのは、一種の傳習的見地に安んじて、比喩をやつて居るに過ぎないやうだ。今日この席へ招かれて僕と一緒につれ立つて來られた蒲原有明君——同君の作には表象的なのが見えるが、これはまた寄せ集めた樣で、突飛なところがあるから、もッとかッきりその幻像が當て塡るやうになればよからうと思ふ。つまり、もッと自然主義に近づいたらいいのだ。僕

のは、『泡鳴詩集』までのは、ロマンチク要素が餘り多くなつて來て、自然主義の根底に觸れなくなりはしないかといふ氣がするので、近來大分變つて來た。

これからの傾向は自然主義的表象主義で行かなければなるまい。少くとも僕はさうなるつもりだ。これは何も外國の眞似をする譯ではない、佛蘭西を例に取つたのは分り易い爲めである。わが國古代の神々には、この主義が生活となつて現はれて居た。この點は四月一日發刊の早稻田文學に、『日本古代思想より近代の表象主義を論ず』といふ題で述べて置いた。この思想的生活は、儒教が這入り、佛教が這入るに從つて、消極的思想の爲めに壓服され、忘却されてしまつて、今ではたゞ白木の社として諸方に殘つて居るばかりだ。耶蘇教が這入つて來てから、忘却に更らに又忘却の輪を懸けてしまつた。然し幸ひにして、現代は宗教的、社會的、また國家的傳習の破れてしまつた時代で——たゞ皇室の尊嚴以外に、何等のコンヱンションも僕等を拘束するものはない。藤岡博士は、こんな時代にいい詩人は出ないと云はれたが、そのよしあしは別問題として、この現代の大詩人となるべきものは、大懷疑、大煩悶、大生慾を生命として、この自然主義的表象詩を發展すべきである。前に

云つた新詩反對者の理由三ヶ條の如きは、かうなると尙更ら輕んじられる樣になるので、そんな愚鈍曚昧な識者無識者に頓着せず、僕等は勇猛直進、各々それ相當の天職に努めるから、新思想はます〳〵新思想となり、新らしい詩は段々に新らしい時代を創設して行くのである。

一概に新體詩と云つても、藤村晩翠の時代はもう過ぎ去つてしまつた。今日御臨席の島崎藤村君の作は、うはすべりはしたが、大抵七五調であつたから、兎に角調子がよかつた。この點はテニスン——と云へば、只今さん〴〵惡口を云つたが——それに似て居た。またその詩風を云へばセンチメンタリズムであつて、ゲーテで例へれば、『エルテルの煩ひ』にしか達して居なかつた。同君が、去年、小說『破戒』を公にせられた、あの新らしい主義で只つて再び詩を作れば別問題だが、先づ同君の効績は過去のものとなつた。土井晩翠君の作は、新體詩に修辭學を教へて呉れたのであつて、その與へた智識はいつまでも殘らうが、詩風は藤村君のよりも古かつた。米野口君が曾て同君を拾八世紀の詩人と評したが、これはわが國でそんなに後れて居るといふのではない、英國詩界に持つて行けば、丁度キ

ヤンベルの樣な風だらうと推定したのだと、僕も推定するのだ。醉茗、泣菫、兩君の樣な自然派は、詩のある國にはいつもある詩風で、殊について行き易い詩風であるから、技巧さへよければ、愛讀者、むしろ模倣者の多いものだ。僕は藤村以前から——殆ど湖處子時代から——つづいて來て、もう老いぼれであらう、然し幸ひにいろんな時代と苦悶とを經て來たので、今では新らしい自然主義に向いて居る。有明君も方向は僕とおんなじらしい。それに、小山内薫君は近頃あまり詩をお作りにはならないが、その感想錄的のものを見ると、矢張り新らしい方向である。それから、まだ他の人々の作に就てもお話すれば面白いが、それまでの用意はして來なかつたので、殘念に思ふ。

そこで、これから益々發展すべき詩風を個條書きにして見ると、

（一）宗教的形式の脫却。これには哲學的教訓的形式の脫却も含めてあるので、云つて見れば、すべて傳習的思想の打破である。かういふ思想があると、いつも生靈の自由活動を妨げるのだ。自然主義は一點の彌縫をも許さない。赤裸々の生命を捉へるのである。エルレインやマラルメでも、まだ傳習不脫の點があつた。ホイスマンズやメタリンクになると、その表象は宗教上の抽象的觀念になつてしまつた。或論者はイブセンを以つて破壞ばかりをやつたと非難したが、よしんばそれにしても、その破壞が渠の自然な活現であつたのだ。

（二）懷疑と煩悶。之を恐れる樣では、自然主義は貫徹されない。傳習的思想家にや哲學に訴へる。すると、教學はしたり顏にその得意の架空不自然な混ぜ物を持つて來て、それを藥に飲まして、一時の氣休めにさす。そんなことで安心出來る病人なら幸福なもので、人生は大した苦もなく通れるだらうが、僕等は不幸にして渠等より重病である。一回の氣休めは却つて百回の苦みを增すわけになるので、寧ろこの煩悶を——止めるのではなくまでも個人の自覺を呼吸するのである。劇が若い——堪へて行くのを眞相だとして、飽くまで個人の自覺を呼吸するのである。劇が若し解脫で終るなら、僕等には、悟つたつもりで澄まして居る坊さんを見た樣な滑稽である。から、それは悲劇でなく、一種の喜劇であるとは、僕の新說だ。自然主義の悲劇は個人即苦悶即呼吸の自覺である。

（三）　神經と自然との燃燒流化。　眞摯な自然主義を追行すると、おのづから神經が敏活になる。敏活な神經が自然と燃え合ひ、流れ合つて、自然に感じがあるのが神經、神經に形が現はれるのが自然。僕等は自然の裏に活物を認めるのでなく、自然その物が神經的活物となつて見えるのだ。それが乃ち自然のイリユージョンであつて、つまりは自己その物の影であるから、その作物が作者と共に生命を保つことが出來るのである。

（四）　刹那的生慾の發現。　前項の如くなると、そこに人間の生慾が一刹那の餘裕もなく、存在の危機を守つて居る狀態であるから、博愛や慈善を說いたり、『神は愛なり』など歌つたり、そんなのんきなことはして居る餘地がない。そんな餘地が一分出來れば、一分だけ自己の眞摯をゆるめたことになる。自己生存の大危機に臨んで、他を救ふと云ふ樣な考が出ると思ふのは、僞善でなければ、心の箍の拔けたものであらう。洒精に水を入れると稀薄になる、眞摯な作物に非個人主義の要素が這入るに從つて、熱烈の度が不足になつて行くのだ。

（五）　心熱。　自己が最も眞摯になつて居る時は、自己の一部〳〵でない、全體が一つに燃えて居るのだから、その時の作物に感情の熱ばかり現はれる筈はない。智情意一體の心熱が現はれるのだ。云ひ換へれば、熱想的自覺である。かうなると、宗教は意力、哲學は知力、藝術は情で行くといふ樣な區別は、誰れにでも幼稚なことが知れよう。

（六）　新語法と新用語。　ネオロジズム（新語法）を叫ぶのは、新思想の出來た時代には必らず止むを得ないことだ。在來の用語、云ひまはし、語法などでは、なか〳〵云ひ現はされない思想があると同時に、また技巧上の工風が進んで來るので、古い頭腦には之が間違つて居るとか、然らざれば、分らないといふ非難となるのは、どこの國でも一時代後れた老人または若年寄の居る證據である。

（七）　思想と技巧との純化。　思想ばかりで作は出來ず、さりとて技巧のみでは無意義に終はつてしまはう。現代の詩や小說は後者の勝ち過ぎたのが多い。ボードレイルの技巧說を楯にして、全く思想を輕んずる者もあるが、その原詩を讀んで見れば、決して技巧ばかりでないのが知れるのだ。一方には、またホイトマンの樣な詩風もあつて、技巧は始ど駄目だと云はれたが、その實普通一般の標準を飛び抜けて、『英詩の科學的研究序論』の著

者マークリデルの云つた通り、『この放縦な詩才に適するやうに、』その思想動機が甘くリズムを成立さして居た人によりて兩者いづれかに偏することはあるにしろ、その詩才の特色に從つて、思想は乃ち技巧、技巧は乃ち思想である域に達してこそ、初めて理想通りになるのだらう。

（八）新リズム。前項までの個條は詩に限つたものでない、ダンヌンチオやメタリンクやイブセンなどもこの方向を取つて居るのだ。それが詩に纏まるには、リズムに刻まれなければならない。リズム問題に就ては、僕、日本新聞紙上で、一昨日から四五回に渡り、佐々醒雪君に當つて居るが、こゝでさういふ方面に及ぶのは、長くなるから致さないとして、兎に角新時代の新思想に對し、それ相應な新リズムが出て來るもので、神經の敏活なるにつれて、リズムも亦敏活になつて行かなければならない。エルレインがその一詩集を『言葉なき歌』と名づけたのは、このリズムの力を自覺して居たからである。去年の十月頃、露國のマツキー孃が明治音樂會でピヤノを彈じた。孃は新派のピヤニストで、外國でも有數な人であつた。藝風は非常に艶麗であつて、而もその彈奏の輕妙なことと云つたら、コードのことなどを考へさす暇もなく、その色彩と光澤とに由つて聽衆を醉はしめたのだ。東京音樂學校のピヤニスト、古典的趣味を持つて居るケーベル博士が之を聽きに行つて居たが、餘り甘ッたるいのに堪へ兼て逃げ出したといふ記事は、新聞社が事實を載せたのか、または兩者の相違を諷じたのか、どちらか、僕は知らないが、ケーベル氏のを一中節とすれば、マツキー孃のは清元的のピヤニストには、リズムは奏法と融化して、色彩となり、光澤となつて居たのだ。先日、或婦人が萬國漫遊から歸つて來ての話に、外國の音樂を聽くと、跡までいゝ心持ちが殘るが、わが國のはさう行かないと云つた。すると、或人が之を解釋して、それはリズムが耳に殘つて居るので、邦樂はリズムが複雜だから、甘く殘らないのだ。外國樂でも、ワグネル物はさうは行かない、聽いた跡で何だかうッとしい天氣が自分の頭を壓迫する樣な氣になると答へた。リズムの輕妙、複雜、重烈なのは、それ〴〵巧みに使用されなければなるまい。

要するに、僕の所謂自然主義的表象詩は、以上の如く發展して行くべきものだ。大抵は拙著『半獸主義』で云つたことだ。舊思想、舊形式の人々が分らないとて、何も憂へる

には足りない。云ひ換へれば、サイコロジカルポエトリー（心理的詩歌）である。これは必らずしも佛蘭西のサンボリストに習へと云ふのではない、たゞわが國古代の神々の生活を僕等は、今日、詩で實行するのである。審美學では愉快を與へ、解決を與へるものを美とするが、それと反對に、不快や無解決が美でないから、之を詩の材料にすることを許さないと云ふ學說なら、僕等は再び顧るに及ばないのだ。もつとも不快、無解決、醜、罪惡なども、美となる樣に使ひさへすればいゝのだと云ふのが一般だが、それなら初めから美だけを擧げて來ないで、美醜、快不快、善惡など、すべて自然のまゝに心理的詩歌の材料になる。何度も云ふ通り、生存の危機一髮といふ時に當つてのん氣にも美醜の考へはあるまい。眞摯、熱烈、刹那的表象のイリユージョン——これがリリク、乃ち、敘情詩の本領である。

カントの藝術無關心論にしろ、シルレルの遊戲動機說にしろ、ハルトマンの美的假象論にしろ——審美學專攻の學士深田康算君の居る前ではあるが——僕等にはたわいがなくッて無意義も同前である。耶蘇敎の三位一體は遠に棄てられた。心理學の三位一體、知情意も

近代の學者はその區別に餘り重きを置かなくなつた。哲學上の三位一體、眞善美もプラトーン的思想の舊形を追ふに過ぎなくなつた。そこで、人間の上の三位一體、詩人哲人宗敎家も、僕等詩人からはその類別を許さないのである。僕等は宗敎の爲め、哲學の爲めに詩は作らない、然し自然主義的表象主義を以つて、宗敎としての、また哲學として詩を歌ふつもりである。自由な藝術でなければ、この主義は實行出來ないからである。

終りに臨みて、僕の如き者の演說を、諸君に辛抱して聽いてもらつたのを感謝して置きたいのである。（明治四十年三月帝國文學會春期大會演說、帝國文學揭載）

イブセン論私見

今月のイブセン會例會は、會員に種々の差支へがあつたので、集つたのはたつた三名、柳田國男君と長谷川天渓君と僕とであつた。張り合がないので、食事を濟ましてから、玉突をやつて別れてしまつた。その節、僕が云はうとしたのは、古い『コンテムポラリレヸウ』に載つたメーナードバトラーといふ人のイブセン論である。苟もイブセンの様な新藝術を論ずる位の意氣込みがあるなら、もつと嶄新な、自由不羈な見地に立つて居さうなものだのに、この論者は平凡で、而もクラシク傾向を脫し得ない行き方をして居る。僕等は、之をかれこれ云ふには及ばないのだが、わが國人にも先人の偏見があると同時に、外國の評論家が傳習的に喋々することを直ぐいゝ事の様に呑み込んでしまうものが多い世の中——君、一概にさうした譯のものではないぞ、といふところを示して置くのも、新文藝、新作家の前途に對して、無益なことではなからうと思ふのである。

第一に、論者バトラーは『マスロシグカイト（Maslosigkeit）誇張は藝術ではない』、そ

の意を別言せば、『形式は藝術でない』といふことを述べた。これは『藝術の爲めの藝術』を否定したので、別に取り立てゝ反對するまでもないが、しかし、それが生眞面目な、眞正面論であつて、佛蘭西惡魔主義派のボードレイルなどが實行した、反動的詩論の様なところがイブセンにもあるのを知らなかつたのは滑稽である。渠、諸威の劇作者が、劇の約束からして、技巧に過ぎたところは隨分ないではないが、全體としての行き方から云へば、確かに自然主義派の一人である。たゞその主義を極端に追行したのが——論者も云つた通り、『北方は諸極端の陸』だ——平穩なクラシク主義の眼に誇張と見え、不自然と見えたのであらう。

『ブランド』はいまだ觀客をして忘我の域に至らしめまいとある。この『忘我』といふのが既に一種の傳習である。考へても見給へ、趣味と閲歷とを異にするものが、その異なる事件や境遇に向つて、何で同情同感を起すことが出來よう？人情には一致するところがあるから、その一致點に當ればいゝのだと答へるだらうが、そこにはシエキスピヤや近松が出て來て、必らず淺薄な表情を以つて滿足しなければならなくなるのだ。『人形の家』は、

『自由の誤用に對して起つた反語』だとある。然し、ノラが夫や子供を棄てゝ去るのは、イブセンに於ては、ノラの自覺が目的であつて、之が無情殘酷に見えるまで最も眞面目に描寫してあるのだ。また、『亡靈』に於けるアルヰング夫人の自己排棄を、『莊嚴な自己排棄』としてあつて、よしんば之が論者の云つた通り製造物に過ぎないにしても、この排棄思想その物が既に一傳習――亡靈の一つ――になつて居るのだから、作者イブセンに於ては、アルヰング夫人の最も免れ難い傳習が、『ロズメルスホルム』の思想の樣に、全く破れて行くところに却つて莊嚴な點があるのである。作者の最も卑しんだ傳習思想の自己排棄を、論者は自己の傳習に據つて却つて重大視して居たから、『亂暴者に類する主張で健全な人は之から心を背ける』と云つたのだらう。

次に、イブセンは技巧家で、決して創造者ではないといふ見解を固執して、レシングがその兄弟カールに與へた忠告――『おのれの性格を發展せよ。然らざれば、余はよき劇作者を心に畫くことは出來ない』――を引用し、作物には作者の人格全部が深い印跡を殘すべき筈だのに、『イブセンは自己の一部を押へて居た』から、その押へた部分がまた大作

者と成る能力をも押へてしまつたと云つてある。『渠はその同類者と一つになるを避け、好んで外部に立つて同類を嘲弄したから高いところにその地位を占めることが出來ない』――これは古今を通じて然りで、『エウリピデースはソフオクレースより、佛のヴルテイルは以のダンテより、モリエルはセキスピヤより、スキフトはロバートブラウニングよりも位が低い』と。何たる駄言だ！近頃、エルレインの詩を譯して出版させたアシユモアキングゲートといふ人――これも常識とクラシク趣味を脫し得られないアングロサキソンだ――がエルレインに對して、矢つ張り同じ樣なことを云つて居る。『エルレインが大詩人中の最も小いものよりも以上になるのを妨げる缺點は第一に大詩題を缺いて居ることだ。――第二に、不幸な缺點は人生問題の解釋を缺いて居ることだ』と。第一は、ホメーロス、ダンテ、ミルトン、テニスンの如く、有名な（而も玩弄物の樣な）史詩がないといふこと。第二はブラウニング、ヲルヅヲルス、マシウアーノルドの如く、嚴格な（而も虛僞平凡な）お宗旨がないといふことだ。こんな物の分らない、頑迷な詩論家が佛蘭西や、諾威や、その他諸國の新藝術を論ずる仲間にもあるのかと思へば、何事も外人の言を信用し易いわが國人の

現狀を返り見て、一種の悲觀を催さないでもない。キンゲートが鋭敏なエルレインを神經の鈍いアナクレオンに譬へた樣に、バトラーは悲痛淋漓なイブセンを滑稽諷刺の作者に擬した。よしんば之が事實であるにしたところが、その性質に由つては、大詩人の大なる地位を與へれば與へられる、ましてイブセンの諷刺は、サカレイや夏目漱石氏の無邪氣なは表面的なのとは違つて、寧ろ深刻な破壞であるをやだ。

然るに、論者バトラーは、クラシクな觀察から、イブセンの劇、『ブランド』以後十六種を以つて諷刺的喜劇とした。一体、悲喜兩劇の根底には、互ひに共通な點があつて、見工合によつては、喜劇も悲劇に、悲劇も喜劇に見られないでもない。然し、論者がイブセンの作を以つて喜劇と見爲した裏面には、之と反對の悲劇に對する美學者從來の偏見がつきまつて居たのを看破しなければならない。僕がもう何度も云つた通り、從來の宗教家または哲學者の所謂死や解脫を以つて、苦悶と葛藤とを解決し得たと思ふのは、人生を離れた心靈の永久（而も架空な）存在を假定してあるのであつて、決してそれが新悲劇を構成する條件にはならない。そりやア、小供がおもちやの人形で滿足して居る樣なシエキスピヤの

時代や、また近代でも、小煩悶を免れて小安心で滿足して居る宗教家輩の仲間では、そんな假定の追行を以て大悲壯な事件と思ふかも知れないが、僕等の樣に苟も深い自然主義が個性にまでも染み込んで來たものから見ると、渠等の所謂悲劇は一種の淺薄な喜劇としか思はれないのである。イブセンの作は傳習的解決が與へてないから、悲劇と見爲されないといふ樣なたわ言は、僕等の一笑にも償しないのだ。僕等は舊審美學その物の根底からして轉覆するのを望み、旦、努めて居るのである。

現代人の本性は、從來の解決と慰安とに滿足出來ない程、熱して來たのだ。この熱心で餘裕がない程の眞面目が、無限絶大の煩悶苦闘となつて現はれて居る。新派の悲劇は、之を、從來の宗教的、哲學的偏見を脫して、ありのまゝに描寫するのである。これはイブセンの後輩、同じスキャンヂナビヤ半島の人、ストリンドベルヒの劇にもやつてあるところだ。すべてかういふ風の劇には、解決を與へないで苦悶を活現さすから、それが深刻になればなる程、表面は激烈な破壞に見えるものだ。然し、人間のからだでさへ時々刻々破壞して居るのであつて、若しこの力がなければ、國家も宇宙も沈滯して、清新な生命を失ふ

ので、僕等の生存する價値がなくなるだらう。イブセンはかういふ破壞力を體現したのである。破壞はイブセンの生命であつた。論者の所謂『創造者』は、星霧説も進化論も出て來ない以前の神を摸倣する者を云ふので、またその『技巧家』は却つて美學の舊套を脫して自己獨特の面目を發揮した者を指すのだと思つて居ればよからう。イブセンは『自己の一部を押へて居た』どころか、その同類に對する嘲弄をも、諷刺をも、石榴がその實を吐き出す樣に吐き出して、其作は至る所『その人全體の印跡を帶て居る。』渠の偉大は乃ちそこにあるのである。早い話が、論者も聞て居た通り、此大作家は廿五年乃至卅年間、その創作を諾威語で書くと同時に、獨逸語にも直して行つた。して、また、後者の語脈は作家の母方から傳つたので、その獨譯には作家自身の特色がそのまゝ印せられて居て、他人のやつた英譯よりも、作中の事物に關して、『研究者は最もいゝ反映を得る』と云つてあるではないか？普通の技巧家の作なら、その作家自身が之を他國語に譯したとて、決してさう甘く特色が殘つて居る譯には行かないのだ。

以上はバトラーの重な論旨に對する僕の抗議であるが、論者はまた諾威文學は亞米利加合衆國のよりも年が若くて、未熟だと云ふことを述べた。それはさうかも知れない。一八一四年、キイル條約調印の年に初まつて、今日でもまだ百年位にしかならない。名のある人物と云つても、イブセンを除けば、ずツとエルゲランド（愛國的詩人）、ヨナスライ（小説家）、ヤコビナコレット（傳奇作者）位を出したに過ぎない。二千年來、立派な文學を持つて居るわが國とは丸で比べ物にならないが、兎に角、諾威文學がイブセンに於て新時代、新文藝の自覺を得たのは事實である。『わが時代一等の評論家セイントボヴが、その評價を絶する文章をイブセンに加へても僅かであつた』のは、バトラーの推察した樣に、加へるに足りないと思つた譯か、どうか、また他に理由があつたか、どうか、僕は今之を論ずることが出來ない。然し、『他人が刈る爲めに種を播くのは、先驅者ヨハネ以來人間の運命であつた』といふ、その運命はイブセンから舊來の傳習悲劇作者を出すのではない、必らず渠以上の新悲劇家が出るといふ意味に解して貰はなければならないのである。

今一つわが國の批評家、紹介者等に注意して置きたいのは、如何に僕等が馬鹿にして居

ても、アングロサキソンにはアングロサキソンの見識がある。バトラーは『ロズメルスホルム』中の女主人公レベカエストを以つて、サカレイの小説『バニチイフエイア』中のレベカシャープの『微力な摸倣』と見爲した。それが當つて居ないにしたところが、自己の屬する國民または種族の文學に、外國の作物を對比して來る覺悟は、僕がメレジコウスキのトルストイ論を批評した時に云つた通り、大いに服膺すべきところだ。三好博士の植物學に於ける、北里緒方兩博士の醫學に於ける、田中博士の音樂論に於ける、すべて外國人が來つて之に聽く時代だ。航海業にさへ、歐洲航路に好成蹟を收めた船長村井氏、大野氏などが出來て來た。どこから見ても、日本は文化の中心になつて來る形勢だ。近松を以つてシエキスピヤを論じ西行を以つてヲルヅヲルスを說き、一休を以つてスキフトを評するのに何の遠慮も氣後れもあつたものではない。たゞ國粹的評論をやる間に、僕等は舊文藝の功過と新文藝の發展とを混同してはならない。前者の功過に於て、國民の素養に、諾威の樣なたつた百年ばかりのものではない、二千年以上の根底があるのを知り。後者の發展に於て、それが世界的新時代の要求に對して、如何に面目を一新して行くかを覺るべしだ。

今、論者が『バニチイフエイア』のベツキイシャープを持ち出したのを調べて見るに、成る程『ロズメルスホルム』のエスト嬢に似た點もある。前者は美術家を父に、オペラの女優を母にした孤兒であつて、六歲から大人の苦勞をしたと身づから云つて居る位で、永らく世話になつて居た女塾を去る時、老婦の塾主に紀念として貰つた字引を馬車の上からほうり投げる樣な思ひ切つたことをする女だ。それが一週間程セドレイ家のお客になつて居る間に、同家の娘で自分の學友であつた者の、兄を引き込まうとして失敗し、今度は或準男爵家に入り込み、先づ小供からなつけて置いて、甘く主人を籠絡し、そこの夫人が亡くなると同時に、主人が自分に結婚を申し込んだのを、末にまだ大野心があるので、拒絶して見せるなど、頗る怜悧で而も無情な女に描かれて居る。イプセンのレベカも半身不隨の苛酷な養父に育てられた女で、世の辛慘を嘗て居るから、利口で、また自分の意志を以つて情を制することが出來た。自分の自由思想を傳へようとして、諾威の貴族とも云ふべきロズメル家に入り込み、主人と相親しむに從つて、その高潔な——然し、傳習的思想には纏はれて居た——精神に眷戀の情を生じ、その家の夫人を遠ざけて、遂には之を自殺さす

に至つた。然し、主人からいよ〳〵結婚を申し込まれて、始めに之を拒絶したのは、なほ怜悧な智力と自由な意志とが殘つて居たからである。

論者は、シャープ嬢の方がエスト嬢よりも利口であり、また望みが高い上に、前者は愛嬌の性に富み、後者は滑稽の趣味に乏しいと云つた。こんな比較は、イブセンを以つて、サカレイと同じく喜劇を書いた者と見爲すから出て來るのだらうが、僕は之を反對に辯解することが出來る。エスト嬢は、北方にあり勝ちの子宮病を自から壓服して居る三十歳の年增で、シャープ嬢はアングロサキソン特有の輕快な氣性を有する十八九歳の花娘である。だから、後者は、チリイ（唐辛の實）を發音上冷い（矢張りチリイな）物と豫想して口に入れ、熱い程辛かつたので閉口する場合の樣に、無邪氣で滑稽な性格が顯はれて居るが。前者になると、結婚承諾が終に精神上また身體上の心中となる工合に、眞摯で而も有意識の最後を遂げて居る。この最後は必らずしも事件と煩悶とに對する解決ではない。僕が『半獸主義』で云つた人生の無目的と刹那的自覺とを描寫してあるのだ。これが最近自然主義の藝術の眞相である。サカレイは到底普通の喜劇作者に過ぎない、イブセンは深刻で

而も嶄新な悲劇家である。

わが國に於ても、サカレイに當るものを見付けたり、またイブセンに越えるものが出來たりするのには、現代評論家の態度如何が半ば與つて力あることであらう。（明治四十年五月六日作、讀賣新聞）

早稲田文學並に時事新報の記者に答ふ

今月の早稲田文學の社論に、『所謂自然主義的表象派の努力に於いて、吾等は詩それ自からの根本に横たはれる一個の疑問に觸れ來たるを覺える』とある。自然主義的表象派の詩とは、僕がわが國古代の思想を參照し、それに佛蘭西のエル レインやマラルメ一派の長所を引例して、僕の二三の論文——『藤岡博士の新体詩論を評す』(讀賣)、『自然主義的表象詩論』(帝國文學)、『日本古代思想より近代の表象主義を論ず』(早稲田文學)等——に於て、之を論じ、また之れに命名したのであつて、外國ではまだ自然主義的表象派といふ樣な名の與へられたものはないのであるから、早稲田文學の社論は直接に僕の意見に當り、また僕の近來の詩風に關係があるものとして見られるのだ。それで、同誌の『詩歌の根本疑』(天紘氏)並に『今の文壇と自然主義』(抱月氏)に就いて、少し云つて見たいことがある。

先づ天紘氏の方から云ふと、『自然主義的表象派は、一切の心的活動が渾融して、一時に

其の高熱に達したるの刹那、その瞬間の感味心境をさながらにして、之を一篇の詩歌に表現せんとするもの』と云はれたのは、『神秘的半獸主義』以來僕が既に幾回も證明した通りだ。また、『近代人の複雜鋭敏なる内心の活動は、到底今日の言語を以て、遺憾なく表現し得ざる物がある』ので、その『到底表現し能はざる主觀本體の反應的感味が……貧しき言語を以て歌はれんとした場合に、……結局不可解のものとなるか、但しはまた僅かに……一小部分を現はし得たるに止まるか、何れにしても表現の努力が不完全の結果に終るべきは、』僕等も承知の上であつて、氏の言の通り『已むを得ぬ次第である』のだ。

然し、氏はこれから推察して、『詩歌の存在を否定するの意を含むものではない』が、『唯詩歌の性質に關する考察の一端』として、氏の所謂『詩歌の根本に關する疑ひ』を提出せられた。乃ち、『複雜にして變化無限なる所謂主觀の反應感が、如何にして一定の形式の中に收められ、而してその感味の表現に遺憾なきを得るか』と。これは疑問の方法が違つて居ると思ふ。既に人間の用ゐる言語の不完全を承知する上は、時の古今を問はず、形式の韻文なると散文なるとを論せず、『章句の相即き相離るゝ、微妙の關係より釀し來たる一嘗の

味識に傳へんとしたる反應感を彷彿せしむるが極致であらう』ではないか？散文にも亦別種な制約があるのであつて、それを以つて韻文と同じ感想を表現するなら、氏の所謂疑問は同じところに達するのである。たゞ散文は、これまでの習慣として、韻文だけ緻密な、隱約な、幽玄な、熱烈な感想を表現しようとしなかつたのが違ふばかりである。

五月二十二日の時事新報文藝週報に、僕の帝國文學會でやつた演說文『自然主義的表象詩論』を評してあつて、その中にも、この問題に及んで居る。僕が『自己生存の大危機に臨んで、他を救ふといふやうな考へが出ると思ふのは僞善でなければ、心の箍の抜けたものであらう』と云つたに對して、『自己生存の大危機に臨んで、詩の五のと呑氣な考が出るのであらう』と云ひ返し、『泡鳴は、措辭や格調に要する技巧は、少しも眞摯熱烈の度に累を及ぼさないと考へて居るのであらうか』と尋ねた。早稻田文學記者並に時事新報文藝記者は、いづれも散文と云へば、直ちに先づ記實や三面記事を聯想するのではあるまいか？さういふ物には、暗示的なのも表象的なのも入らないから、前者の所謂『漠然たる反應感の表現といふこと』もなく、後者の所謂『朦朧晦澁』なところもないにきまつて居る。

然し、自己本位の白熱的刹那の存在と痛苦とは、之を表現するに、どうしても現今の（また將來の）不完全な言語を使用しなければならないのだから、詩人が之を散文で表するにしろ、また韻文で現はすにしろ、その表現が不完全――諸君の所謂『漠然』または『朦朧』――であるのは當然である。而もその僅かに漠然、朦朧でなければ、表現しられない程、深遠で、痛切で、また熱烈であるのが、平凡な論理を辿る哲學者の議論や、常識と折衷とを能事とする記實家の筆などゝ違ふところである。且、散文家に一定または窮屈と見える詩形は、詩人に千萬自由な天地であつて、これはその修養ある精神と生命とが自づから流れ出る形だ。散文を書く批評家や、興ざめた詩人には、この形は、『つまづく石』であらうが、苟も精神の振つてる詩人は之を何の苦もなく踏み越えて行くのである。

時事記者は『泡鳴がテニスン流だの、其詩風はセンチメンタリズムであるのと罵倒（泡鳴曰く、罵倒ではなかつた、批評）した島崎藤村の眼識は、遙かに泡鳴以上だ』と云つて、同氏が『詩そのものが措辭とか格調とか云つたやうな外形の技巧に拘束され易き愚を悟つて

未練なく散文にかへつた』のを賞し、『一體、泡鳴は「破戒」に現はれたやうな新主義を、今の長詩で歌ふ事が出來るものと思つて居るのであらうか』と尋ねた。然しこれはたゞ散文であるといふのを見て思ひ付いた議論に過ぎなからう。藤村氏の散文に現はれた外形的技巧は、その實、僕等の詩に見えて居るそれよりも寧ろ甚しいのであつて、それが爲めに渠の自然主義は僅かに平坦なのを以て滿足しなければならなくなつて居るのだ。僕等の詩形は寧ろ内容の自由流出に過ぎないのである。早稻田文學記者はさすがにこの消息を知つて居たかして、『詩歌がその音數、音質、音位の何れかに就いて、一定の律に遵はんことを要求するは事實である』が、『斯の如き形式上の制約がその表現せる感味の節奏に伴ふ限り、形式の制約は感味を拘束する手段でない』と云つた。然し、これもたゞ側面的觀察であるので、直ぐ次ぎに、さきに擧げた疑問を提出したのである。

序だから時事文藝記者に云つて置くが、僕が舊來の短歌や俳句の作者を、記者の所謂『漫罵』したのは、詩的良心と自覺とのないものに對してだけだから、これらのあるものまでも『一括』したのではなかつたのだ。然し短歌や俳句をやつて居るものに、詩的自覺のほ

んとにあるものが少いのは事實である。

次ぎに抱月氏の新自然主義の解釋だ。第一、寫實的自然主義、第二、哲學的自然主義から進んで、第三、純粹なる自然主義が出て來て、『一切の我意を拆いて沖虚なる心に生ずる事象の中から、おのづからなる別種清新の情味を吸ひ出さんとするが如き態度が此の派の極致であらう』とある。わが國現時の文界では、藤村氏の『破戒』などを指して居るらしい。この派の態度は『消極的』で、『無思念』のうちに、『弱い、優しい、謙遜な感じ』を述べようとすると説明したなど、確かに『破戒』をまとにしたのであらう。かういふ風は、田山花袋氏の『露骨なる描寫』以來段々と作家の間に發達して來た態度だが、『破戒』の樣ではまだ君の所謂『物我の合體』、『覺めたる刹那の事象』、『動き來たつた瞬間の自然』を見ることは出來まい。何も第二、第一の自然主義に立ち返れといふのではない——然し、消極的に『我れを沒し、而して斯くの如き自然の前に無條件の降服をなす』樣なことをしなければならないなら、その新自然主義は、坪内博士の昔の沒理想論も同じことになつて、神や運命や自然を何となく外延的存在物でゞもあるかの樣に見て居たクラシク思想が半ば勢力

を振ふことになるだらう。

早稲田文學の社論は是非を下だしたのではない。然し果してそれが現時の傾向とすれば、僕等は更らに進んで新らしい自然主義を呼號しなければならない。曾て讀賣新聞附錄で、にぎりめし氏が、クラシクでも、いゝ物さへ作ればいゝのだといふ呑氣なことを云つた。今度、また、演藝畫報で、森鷗外氏は『主義は作家に取りては無用なり、固より作家が自から主義を立つべきものに非ず……自己の本領を發揮し得れば十分なり』と云はれた。いゝ物を作つたり、自己の本領を發揮するのに、無方針で行けるわけではない。果してそれで行けると云ふなら、その人は定りきつたクラシク思想で固つた頭を持つて居るからである。僕等の樣に下らぬ安心の出來ない、種々な疑問の多い、刹那の存在を爭ふものには、主義が乃ち生命である。ベクリンの風景畫を見ると、その神話的な方のとは違つて、外延的自然が殊に威力を以て迫つて來て、人間を小さく見せてしまう。メタリンクの描く運命もその風がある。これは渠等の主義から來るのであらうから、その人にはそれが生命である。たゞ僕等はさういふ主義は嫌ひであつて、自然を一刹那の覺醒に壓服さす自然主義的

表象主義を取るのである。

僕は去年『神秘的半獸主義』を公けにして、一種の哲理と文藝觀とを發表した。長文ではあるが、夏目漱石氏の『文藝の哲理的基礎』の樣な、冗長な物ではなかつた。その後も絶えずその續論をやつて居る。然し、あたまが形式論理で固つて居る大學の學者輩には、僕の自由な論法が到底こなし切れなかつたし、素養の少い文學者連には、僕の趣味ある哲理もたゞ乾燥無味な食物であつたらしい。こんな貧弱な現代に、どんな主義を体現するものが出ようとも、之を解するものは十指を以て數ふる位で、跡はたゞ附和雷同の徒に過ぎなからう。それを思ふと、答辯の筆を執るのも厭になるが、兎に角、兩誌とも僕の議論に對して疑問を懸けたのであるから、讀賣紙上を以て取り敢へずこの文を發表することにしたのだ。（明治四十年六月三日作、讀賣新聞）

駁論

『辻談議』のにぎりめしは、また『文壇の煩悶的分子』を今日の讀賣に書いて、僕に當つた。君とは二三度議論を交換したので　君も僕の立脚地が分つて居ようし、僕も君の立ち塲が分つてしまつた。それ以上互ひに別々なことを云つて居るのはいゝが、一々それに答辯をするまでもないのだ。君は表面の常識を標準として單に批評家として立ち、僕は常識の裏面に立ち入つて、殊に暗憺たる感想を探る創作家たると同時に、その經驗からして得て來た評論の筆を振ふ者である。然し今一度君に簡單に注意して置くことは、君の立ち塲ではない、君の思ひ違へ並に不通な點である。

君は、地方に住する他の騷客と同樣、東都文壇の消息に通じて居ない。さきに『文學は將に死せんとす』といふ外人の所說を、何だか物新らしさうに紹介したのもをかしな物だが、本欄に於ける影武者の『小評論』と僕の詩論とを見て、今更らの樣に『ふと今の文壇に頗る煩悶的分子のあることを感じた』と云つて居る。然し藤村氏が韻文より散文に轉じたのもその煩悶の結果であつたし、花袋氏等の小說も古くからこのおもかげがほのめいて居た。少くとも、泡鳴一個に取りては、數年來煩悶苦惱の詩を作つて居たのである。君は、これまで、おもにたゞ明星一流の純クラシクな自然派の傾向ばかりを見て居たのだらう。

君は更に進んで、僕が『熱烈な思想感情を表現するには、これを用うべき言語文字が不完全だと定めて居る』と云つたが、これは君並に他の常識派が兎角云ひたがる難解、朦朧、不自然、語法不熟などの評に對して、これらの要求を滿たす時は、やがて、泣菫、柳村等の詩風の樣な、一面に（長所は長所として）死んだ美容を現はすに過ぎなくなる弊が生ずるのを注意したのだ。君の所謂『泡鳴ほどの詩人を以て任ずるものが、昨今縱橫にその思想感情を議論の上に表白しながら、動もすれば、言語文字の不完全を鳴らすといふのは、案ずるに竟に製作難の煩悶であらう、詩形をなす如何にせんか、章句を如何にせんかの煩悶である』とは、穿ちが違つて居る。僕が詩形問題に苦しんだのは、恐らく藤村と同時代に初まつたのだらうと思ふ。而して、渠は遂に消極的に散文に免れ、僕はまた積極的に『僕等の詩形は寧ろ內容の自由流出に過ぎない』と確言することが出來るやうになつたのである。

君の所謂『不立文字の淵源』も、『それが微妙の理觀情觀であることを傳へて居る』のは、たゞ或程度までに限られて居るのであつて、その滿足出來る限界が、君等の樣な常識的古典派の作家や評家と、僕等の樣な非常識デカダン派と、相一致しないのである。『大詩人の使用に應ずるだけの完全に近き言語文字は今日でも存じて居る』とは、古典派、技巧派の意氣込みとして聽かれやうが、それは渠等にだけ應用すべき言であつて、まだ〳〵僕等の意氣込みを滿足することは出來ない。『文字の賜』と云つて有難がるのもいゝが、文字は純技巧派の云ふ樣に左程大事な物ではない。僕等は僕等の生命となつて居る（而も君等の手段視するのとは違ふ）主義を以て、詩を行るべきを主張するのだ。たとへば、佛蘭西語の『デカダン』といふ語も君等は表面的に衰頽とか、衰微とか、不健全な意味に解してしまう傾きがあつても、僕等は却つて之を以て呼ばれるのを喜び、この語の裏面に、他語を以て發表することの出來ない悲痛と生命とを感ずる。それなら、別にそれだけの新意義の附せられた語を探して持つて來たらどうかといふだらうが、そんな古典語を持つて來て當て塡めたが最後、形は整つてもその本義を失つてしまうのである。泣菫氏等の詩の缺點は、乃ち

そこにある。また渠等の新しい意義のつもりで使ふ『靈』が、僕等には『肉』を以て現はせるし、僕等の今使ふ『靈』が却つて僕等のかつて卑しんだ『肉』であることもある。かうなると、かの希伯來民族の傳說にあるバベルの塔の故事が思ひ出される。神がその各種族の天まで達しようとする野心を押へて、その高塔絶頂の工事に從事するもの等の言語を相通じない樣にしたとは、各種族がその特色と實力とを實際生活の上に現はして來たことを意味したのであらう。純技巧派や古典的自然派は、いづれも自然主義的表象派と根底から詩界の工事を相共にすることは出來ない。

『論が解らなければ解るやうに說いてやれば宜しい、それでも解らぬことはない』とは、流石『予の如き呑氣もの』と自稱する君には云へようが、僕等の樣に心中が糞えくり返つて居て、腹わたまでが叫びの聲を擧げようとするものゝ言は、いくら解るやうにしてやつても、頭腦の凝結した學者や作家に『解らぬことはない』ことはない。然し、なほ評論の筆を執るのは、僕もまた一家の見を有して居て、君等の樣な平俗無爲の詩論を以て、世人をして凝結の上に凝結を固めさせたくないからで、創作家たる時は創作家だが、批評家たる時

は批評家であるから、この時に當つて、『詩人に主義あらば、宜しくその氣魂思想感情をその詩作に表はして、他を感動さすべきものである』などとは、たゞ君の遁辭であらう。僕が君の所謂『自家心中の煩悶をほのめかす』のは、『煩悶する勿れ』といふ君から云へば、全く反對であるが、僕は批評家としても殆ど惡魔的に大煩悶、大懷疑を皷吹して、青年とは云はず、大人君子等の箱庭的美學思想と小康偸安的藝術觀とを打破するのである。これは、さきに云つた通り、詩形や用語の問題ではない、其修養も不足であるのに、小成に安んじて一家の風を帶び易い詩人等を警醒する爲めである。

それだのに、君は却つて『二個の煩悶分子は、わが文壇に存在するやうに思ふ』と云つて、『若し然りとすれば孰れにしても文壇に徒勞となり、青年文人には非修養の風を釀す種となる』と心配した。何たる迂濶な言だらう！現時詩界文界の下層には、否、上層にも、早熟と非修養の分子が滿ち滿ちて居るのであつて、わけも分らないのに、たゞ言葉の綾と撫案とを巧みにして滿足して居るものが多いのだ。直截切實な句が取り柄であつた花外氏の様な詩人でさへ、この頃の作はその方にかぶれて居る位だ。技巧主義でも、ボードレイル

のそれの如きは、その當時の佛國文界に對する反動の極であつて、人工美でなければ美がない様に主張したが、その根底には、實世間の苦悶を經て來た深い、深い流れを湛へて居たのである。僕も技巧を無視するのではない、生命の流出におのづから技巧を自覺するのを採るのである。君は近頃技巧派の辯護士になつてしまつたが、今の様なことを云ふのを見ると、かういふボードレイル以來の消息にはまだ通じて居ない様だ。『二個の煩悶分子』といふ、その一方を代表さした影武者の『小評論』には、思つたことを無暗に描けば好い、それが當るかも知れない、當らないかも知れないとやうに澄まして、諦めて居るやうに』君にも『見える』のだから、まだ主義的自覺の苦悶に達して居ない物としてこゝに僕の關係するまでもない。然し僕の刹那主義、乃ち、煩悶自然主義は、詩即苦悶の生命を人生の無目的實相論から主張し、涅槃とか安住とか云ふ、古典派や宗教臭い者等の後援とする消極架空の虚説を採らないのであるから、永遠に『煩悶に安定の歸局無きは』この主義當然の行き方である。カントは勿論、ショーペンハウエルの様な強情者でも、こんな積極的狀態には堪へ得なかつたのであるから、餘程心力と意力と自我心との強固でまた熱烈

なものでなければ、到底之をその生活と創作とに實現することは出來ない。之を主張し出した僕ぐらゐの者が君に『狂』と云はれ、『狂人』と呼ばれるのは、將來のこの主義者から見れば、何でもないことであらう。

かういふ行き方の生活なり、創作なりは、宗教の假面を被る僞善者や、哲學の形式を脫し得ない輪廓屋や、藝術の舊型を大事がる古典派――君もその一人――の反對を受け易いばかりでなく、渠等の樣なデモクラト的意見が、世上の物識り、有識者等の大部分を占領して居るのであるから、かういふ行き方の創作家は、その主義を――他派の所謂手段視してもいゝ主義とは違つて――ことに更に自覺して居る必要がある。かの『宗教界評論』を出して居る芙蓉道人が、わが國の古代の神々の生々苦悶の自然主義的表象主義の生活（だから、まだその自覺はなかつた）から出て來た神道を論ずるに、この根元的思想に觸れないで、たゞ耶蘇教徒的慣用論法を以つてし、『抽象神、理想神』でなければその宗教思想は非靈物質的だと云つたのも、確かに君の藝術界に於ける十八世紀的傾向と同じだ。で、詩も生命も悔悟も靈感も現在的であつてこそ尊くもあり、深刻でもある所以を自覺して居ないの

である。たとへば、君が同じ日の紙上で紹介した佐藤紅綠氏の『鳴』でさへ、クラシク派の人々が『いゝ物さへ作ればいゝ』と思つて、君の云ふ樣な迷信的インスピレーション（インスパイレーションにあらず）を待つて居ては、百年立つても出來る代物ではあるまい。これは矢張り主義の苦悶から出來た產物であるに相違ないのだ。僕等の主義は手段ではない、直ちにそれが生命になつて居るのである。かういふ生命を主張するのに、かの六號活字的輕卒な態度を以て、君は『煩くて堪らない』と云つたが、僕はまだ君の樣な『堪らない』人が多いのを見て、なほ更ら堪る樣にまで自覺さしてやりたいのである。主義の爲めに苦鬪するは批評家の存在條件である。無主義、無方針の批評家は世に存在の必要がないのだ。然し一つ云つて置くが、若し僕の議論を根底から批評するつもりなら、先づ之を說き初めた著書『半獸主義』から云つて呉れ給へ。さうすれば、幾度も輪廓ばかりを渡る樣な攻擊し合ひを繰り返さないで、適切に要領を得るだらうから。

終りに臨んで、今一つ云ふことがある。君は『泡鳴の如き自說擁護を空論と認む、自說の擁護は、その論にあらずして、作品にあり』と云つた。之は僕を創作家と見てだらうが、苟

も一たび評論の筆を振ふ時は僕も一個の批評家で、自己の作品に對しても第三者の人稱を帶びて居るのだ。『文壇の愛嬌ものとなる莫れ』とは、作家が評家を兼ねるのが珍らしいから出た言葉であらうが、僕の批評は批評で、之を他の創作家が却つて僕の創作よりも巧みに其作品に採用したとてかまはないのである。君の様なことを云ふなら、君はまだ眞正の批評家ではない、たゞ他人の作をかれこれいぢくる弄文者だ。批評は斷然創作の奴隷ではない。且、僕が創作的經驗から得た批評家としての議論が空論なら、創作に經驗のない君等の議論はなほ更ら空論ではなからうか？君の論には、また、實際、どツちへも附かない、殆ど無方針で、君自身の所謂『思想界の逡巡派』に類するところが、これまでに多かつたのだ。近頃、技巧派の方に傾いてから、君の詩論に於ても段々明白な道筋がついて來たが、然しそれが僕とは殆んど正反對の常識的古典派の意見に過ぎないとは、枯淡で舊式で、あんまり情けないではないか？君の云ふ様な議論に導かれる青年詩人が若しありとすれば、現代的情趣も心熱も到底歌ひ出すことは出來なからう。

もつと詳く書きたいのだが、僕は今新体詩の歴史を著述して居るので多忙だから、これ

位にして置く。若し君と同じ様な議論が他に出ても、もう別に答辯はしないで、これですまして置くつもりだ。

追　加

今日京濱電車のうちで知人に會ふと、時事新報の文藝記者がまた僕に對する議論を出して居ると注意されたので、直ぐ讀んで見ると、成る程出て居た。然し枝葉の議論ばかりで僕の根底に當つて居るところはない。一言にして云ふと、『泡鳴の所謂新思想、新趣味それ自身が直ちに朦朧晦澁なら格別、さもなければあれだけぢや解嘲にならない』と云ふのが一つ。これに對しては、普通人を代表する時事新報記者に僕等は思想、趣味が朦朧晦澁と思はれても、それは當然で、敢て之を訂正する必要はない、技巧を巧みにすればする程渠の樣な人々には分らなくなるだらうと答へて置く。『朦朧でなければ表現し得られない程深遠で、痛切で、また熱烈』な狀態とは、渠が記實の筆で滿足する境地とは丸るで違つてるから、『曲解』に見えるのだらう。

次ぎに、『予と雖も、詩歌の形式の制約は感味を拘束する手段ではない事を認て居る』とあ

る。それでは、何にも僕等詩人の格調問題に口をさし挿む必要はなからうと答へて置く。

次ぎに、僕の著書『神秘的半獸主義』を『曠世の大著述でもあるかのやうに振りまはして』居るといふことだ。僕は無論さうである。現代に於て、この著の樣に、現在わが國民と有識者流との沈溺して居る形式的哲學、傳習的宗教、架空の抽象觀念を嬉しがる理想派的美學、古典的藝術ばかりを有難がる思想、等を眞面目に攻撃打破して、新らしい自然主義的傾向を鼓吹した物は他になからう。この點に於て、この著は新文藝の向ふべき方針を定めてやつた物で、殆ど預言者的資格を有して居る。だから、僕の近頃の議論を根底から批評しようとするなら、先づこの著から研究してかゝり給へと云ふのだ。『半獸主義を繰讀すべく、予はそれ程までに罪を作らない積り』なら初めつから僕の議論を評する資格がないではないか？たゞつまらない、要領を得ない、枝葉の『揚げ足を取るやうな』議論をしたとて、何の役にも立たないから、先づ僕の主義の根底からくつ返すなら、くつ返して見給へとて、充分他人の反駁論を——もしあらば聽きたい爲めに、之を引用するのが、何にもから威張りをするのではない、僕の書を僕が引用する程正確なことは他にはない。僕は以上

の考へであるから、僕は『輕薄的態度』や、『不眞面目な調子や上すべつた冷笑』を徒らにして居るのでない。記者にさう見えるのは、記者があまり平俗な常識から割り出して考へるからであることを斷わつて置く。（明治四十年六月二十五日作、讀賣新聞）

駁駁々論

『辻談議』のにぎりめしは、前週と今週との日曜附録に渡つて、また僕の『駁論』に當つたが、たゞ僕の言葉を拾つて行くばかりで、その餘は僕の言葉に啓發されて思ひ付くことを附け加へた様な物だ。君はたゞ片々たる斷篇を毎週の本欄に載せて居ればそれで責めがふさげて行くのだらうが、僕は、小冊子ながら、自分のまとまつた説を一篇の書に著はしてある。君が之を讀めば、またまとまつた物ではないと云ふかも知れないが、君の折に觸れて書いた評論を一冊にしたのとはわけが違つて居るのである。これには、僕の十數年來考へて來た哲理、宗教、文藝觀が述べてある。それが幸か不幸か、君等の立ち場とは全たく飛び離れて居て、君等の傳習的に宗教と云ひ、哲學と思ふものとは非常に違つて居るらしい。僕は君の様な人萬人を敵とするのは愚かなこと、さういふ人々の後ろ楯となつて居る古今東西の傳習思想に向つて鬪つて居るのだ。本紙で云へば、たゞ觀念に過ぎない抽象神を提げて神道を駁したり、卑賤なる道德教を以てまた之を辯じたりする思想は、みな僕の

敵である。宇宙を有目的または手段と見爲すものも、また僕の敵である。それを何ぞや、その日〳〵の斷片的議論に於て、「もつと修養すれば」的の口吻を以つて迎へるに過ぎない？それ以上の批判を下す素養のないものなら知らず、その口吻に面じても、もつと僕の根底から覆すなら覆して見給へと云つてるではないか？

それを、君は梁川一派の舊思想に安んじて、信仰力とか人格とかいふ内容のない（あるにしても、僕等から見れば貧弱な）迷信を楯として、今回もたゞ表面ばかりを渡つて行く御挨拶では、僕が再び之に答へるだけの勇氣も出ないわけであるが。議論の仕方は君の様な風にしては行けないといふ消極的方面を示めす爲め、君の表面的辯解なる所以を擧げて見るのもよからう。君は第一に僕の著を讀まないで、恰も讀んだかの如く『半獸主義とは名づけ得たるものであらう』などと云つて居る。その口調が如何にも輕薄である。（但し、屁、唾、涎など云ひ出したのを指すにはあらず。）また、藤村氏が詩作的煩悶を逃れて終に散文界に落ちたのを消極的と云ひ、泡鳴が之を堪へて内容の自由流出説を確信するに至つたのを積極的と云ふのは、詩人の態度から見て、何も『聽えない』とでないではな

いか？君は、僕の詩にけちを附て、此言を打消さうとしたらしいが、態度上の問題と創作上の巧拙とは混同出來ないのである。君は又文藝の型は信仰と人格とから出て來ると云つたが、君等の信仰や人格も一種の型であるから、型が型を拂へるのは、四角な桝があつて四角な壽司が出來るやうな物だ。僕の主義はそんな桝形をぶち破る爲めに出て來たのだから、專ら自由自在な生命の力と香氣と色とを出さうと云ふのだ。その他に何も形式的抽象的傳習物の寄宿、君等に取りては全く主宰するのを許さないのだ。之れに反對するなら、もツと內部的論法を以つて來給へ。

君は、『主義を行ふには、手段方法が必要』と見たが、それは今いふ壽司を拂へようとするからで、僕は手段の必要な主義を唱へて居るのではない。世に、たとへば今月の雜誌『詩人』の六號活字の樣に、主義を以つて創作するものは窮屈だと思ふものが多いが、渠等はすべて君と同樣『い丶創作』、『公平な批評』を夢見て居て、いまだ自己の立ち塲と生命とを自覺しない古典的、乃ち自己に直接ではない、間接の思想と技巧とに滿足して居るか、またしようとする傾向があるのだ。僕の主義は僕自身で、僕自身が直接に手段でもあり、技

巧でもあるのだ。壽司で云へば、壽司身づからが壽司を食ふ表象的生活を主張するのだ。これは、僕が近頃早稻田文學で說いた通り、また新小說に出て未完である通り、佛蘭西表象派中エルレイン、マラルメ等が多少之に近いし、わが神道の本源（芙蓉道人や水月生の）たる諸神、乃ち原人の生活が最もよく之を發揮目當とするよりも古くまた切實なるものとして居たのだ。之が儒敎並に佛敎、近くば耶蘇敎の消極的萎微思想によつて、いよ〳〵ます〳〵隱されてしまつて、世人は愚か、神道者流も身づから之を知らなくなつてしまつた。不幸にして、僕といふ表象が自覺の度が足りないなら、その思想も技巧も足りないのであるが、僕よりも大なる自覺者が出て來るまで、さういふ主義に辟易する無修養、無感覺のものが多い間は、烏なき里の蝙蝠の樣に、僕の表象が最も大なる物であるに相違ない。

君はまた『煩悶的分子』と云つたのは、文藝觀の上計りだと辯じたが、文藝觀が人生觀から分て考へられると思ふのも迂濶であるし、若し又其意が創作の形式上にあるとしたなら、僕の詩形上の煩悶はもう通り越して居るのに、之を以つて僕に擬したのは、既に云つ

た通り迂濶である。また、早熟と非修養の分子は『今の文壇ばかりではない、何時でもある』と云ひ換へるなら、尚更ら深い煩悶の經驗を與へて、僞天才を淘汰さすべきものだのに、之を抑壓して姑息な彌縫をやらうとするのを『親切』だとは、更らに迂濶のそしりを免れないのである。また君は僕の今までの議論に技巧を無視しないといふことが明示されて居ないと云つた。第一、僕の著を見ないからで、また今年の帝國文學に出た演說並に早稻田文學に出した長論文にも、『思想は乃ち技巧、技巧は乃ち思想の域』に達すべきことを云つてあるが、近頃明星記者が之を見て、渠の派年來の主張だと云つたが、渠等の創作も君と同樣手段的技巧を知つて、自由流出的技巧に達しないのである。渠等が花外氏其他の直情派を修辭の上に於てひやかすのもいゝが、渠等自身がたゞ技巧その物に死んで居るのを知らないのだ。渠等は自分の都合のいゝ樣に人の言を引用するが、死んだ技巧を罵倒する思想即技巧說が、直ちに渠等の缺點に當つて居るのを覺らないのは憐むべしだ。非技巧、無飾藝術などいふ論者が出るのも、かういふえせ技巧派があるからである。君はまた僕が『おのづから技巧』と云つたのを捕へて技巧を意識しない證據としたが、さういふ論

法はたゞ表面的なので、僕の最も退けるところである。僕は君等の云ふ樣な方便的技巧を云ふのではないのだ。僕の所謂『自覺した技巧』とは表象的生命の呼吸が『おのづから』發揮するところにあるのだ。わが國古神の生活が、現代に於て創作の上にあらはれるのを云ふのだ。

君が僕の創作を標準にして僕の議論を空論と云ひ、創作と批評とを混同する傾向が見えたから、僕は批評家として前回に於て之を駁し、それなら創作をしない君の論は尚更ら空論だと云つた。それに君は今回平然として『空論と否とは創作に經驗のあると否とには關せず』と云つてかれこれ論ずるのは、寧ろ僕の意見を採用したのであつて、この場に於て何の用もないではないか？たゞ別に『合理的分子さへ加へれば』云々と附加して、修養がないから、『感情あつて理足らざるもの』と換言した。さう議論があつちへ走り、こつちへぐらつく樣では、曾て君があやめ會詩集を評した時の侮辱的態度を、僕に非難されてから、直ぐ寬大にも改めた場合とは違つて、君の所謂常識に據つて常識を超越する批評家の立派な態度とは云へないではないか？その上、論文なるものが必らずしも合理的法則で固

まつて居なければならないといふわけではないらず、僕等の議論に形式的論理を重んじて居ないのは、修養無修養と何の關係もないことだ、否、寧ろわざ〳〵論理を破らなければならないタリンクを見給へ、近くば透谷を見給へ。

且、僕が時々自己の創作を引用するからと云つて、それが僕全体とは限らない、また僕の主義が全體出て居るとは限らない。君の嫌ふ煩悶生活は最も自然の淘汰が行はれて居るのだから、僕よりも強い者が、今日ないにしても、明日出て來て僕の主義を僕よりも多く實行するかも知れない。かういふ狀態を恐れて他に向ふ詩人があるなら、其時既に劣敗者となつて居るのだ。之は、君の常識から見ても、僕ばかりの『弱味』でなく、萬人を通じての弱點ではないか？僕の公明正大な告白に對して、たゞあげ足さへ取れば議論が出來ると思ふのはよし給へ。然し君の名は隱して置く事情があるにしても、何人でも方針の定らない、若い時にはやつて見る創作、小說にしろ、漢詩にしろ、短歌にしろ、俳句にしろ、君がその經驗があると云ひ出して、之を以て、僕の二三の詩集や、二三の劇詩に比較しよう

とするのは少し迷惑である。君の古い創作が如何に『一生涯一作にても價値の有るもの』にしても、まだその名も出て居ない。僕のは、それが遊戲や　出來心でなく、生命となつて出て來たものであるから、識あるものは兎に角之を知つて居てくれるのである。且、君は僕がこの一二ヶ月詩を作らないのを捕へて意味ありげに議論の種にしたが、僕はこの頃新体詩の歷史を書いて居るので、何も衰へたわけではないことを豫め斷つて置く。といふのは、世間の薄志者は詩人が少し詩を作らないと直ぐけちをつけたがるからである。

『にぎりめしは派に屬するを好まず』と、君は云つたが、これも主義があれば窮屈だといふ徒と同じく、主義的生命の自由境に這入つたことがないのを證明する。古來かういふことを云ふ人々に限つて、身づから古典派に屬してゐるのを知らない。自分が古典から得た間接の感想を歌つて、それで滿足してゐるのであるから、それ以上の直接刺擊を受ける奮發をしないのだ。主義は人を拘束するのではない、派の分れるのは人を開放するのである。然し、如何なる派、どんな主義に向つて居るのか分らないと、自己の開放は段々活氣を失つ

て行つて、またもとの拘束的古典に歸つてしまう。君は如何に辨解しても、有識者は皆君を古典的技巧派の一人と見て居る。自分でそれが分らないやうな狀態を、僕等は自覺がないと云ふのだ。それで、『批評の公正』を保たうと云ふのは、夢のまた夢である。公正その物は、博愛や慈善と同樣、既にあり得べからざるのであるから　僕等は主義の流出にまかせて自在に創作し、評論するより外はない。君も、主義とまで行かないでも、自分の趣味と傾向とを自覺したら、もつとしツかりした議論が出來よう。何も公正、中庸の樣な姑息な心配は入らないのである。世には、君もさうだが、天才といふ迷信があるが、天才なる物は最とも偉大な主義的自覺者に過ぎないのだ。ところが古典派には、自覺がありとしても直接的でないから、古來この派に天才があつたためしはない。僕のこの派に當る所以はこの點から見ても理由があるのが分らう。

君は僕を以つて『解つたことを解らないやうに理屈で押さうとする』と云つたが、君には何にも僕のいふことが分つて居ないではないか？君は青年詩人等に向つて、『その方途を得よ』と云つたその方途は、たゞ常識を超越して、信仰と人格とを養成せよといふに過ぎない。僕は抽象的觀念の人格や信仰では行けないから、そんな宗教的傳習的思想を打擊して、個人の發展を最も自然な現代的情趣と心熱とを以つて實行しろと論じたのだ。議論の根底はこゝにあるのだが、以上云つて來た通り、君は少しも僕の內容に觸れて居ない。それで、進歩して來た現今の讀者を評論家として滿足さすと思つて居るのだらうか？僕の言葉を以つて僕にしツぺい返しするだけでは、僕は何の痛痒をも感じないばかりではなく、苟も僕を駁すと出て、何の駁するところもない樣では、批評家の責任が盡せて居まい。僕のこの議論が矢張表面に傾いてゐるのは、僕の考へが表面的なからではない。初めに斷つて置いた通り、たゞ君の議論の表面的に過ぎないのを指摘するのが目的であつたからだ。

且、また、僕の煩悶即自然、詩即苦悶、人生無目的論に對して、得意然として盲主義、盲滅法、無主義の偶然等の語を用ゐたが、これは寧ろ表面的に僕の意を得たもので、僕は積極的に宇宙と人生との盲目無主義を唱道し、自我の盲目的發展を無主義のうちに實行するのを主義にして、君の樣な半可通の常識論者に當つて居るのである。君は之を以つて僕の說を駁したと思つて居るのだらうが、かういふ語を受けてからの堂奥に、まだ〳〵潛ん

で居る内容、乃ち、ショーペンハウエルの意志無目的説よりもさらに進んだ、否、深入りした哲理、宗教、文藝觀があるのだ。先人も説かうとしたかも知れないが、つひに説かなかつた説であるのだ。僕の根據は君の考への樣に淺薄ではないのだ。かう云へば、君はまた徒らにから威張りをするといふだらうが、僕の考へは僕の著を以つて公表してあるのだから、批評家たる君が之に就いて分らないなら分らない、分つたなら分つた樣に堂々たる批評をすればいいのだ。枝葉議論のあげ足ばかりを取つて居るのは能でもあるまい。今の君の樣な態度と思想とでは到底之が味はへなからうから、若し之に對する根本的駁撃をするつもりなら、もつと用意が出來るまで、他日に讓り給へ。僕はいつでも之を待ち設けて居るのである。

君は常識超脫論者だ。大悟徹底論者だ。大乘佛教的論者だ。耶蘇教的心靈論者だ。然し之を以つて讃められたのだと思つては間違ひである。之を云ひ換へれば、君は貧弱な觀念と靈魂と安心とに依頼して、自己に間接な古典的空想を空虛な技巧に盛つて喜んで居る仲間だ。僕等は無常迅速、小乘的刹那の生命を敏感と肉想と苦悶とに抱擁し、鋭敏な神經電氣を以つて、直接内容の最も豐富な肉想を貫き、深刻な苦悶の表象その物がおのづから自覺詩を現ずる、心理的詩風を唱道するのである。かういふ風の詩の根本技巧は、君の云ふ樣な舊式技巧説で説明されるものではない。僕に對して『技巧の義を知らない』など云ふのは、明星一派の云ひ草と同樣、却つて君等の無智を證明して居るのだ。僕、近頃、英國近代の新詩人オスカーワイルドの『ドプロフアンヂス』を讀み、たま〳〵『淺薄は最大の罪だ』といふ言に接した。君は之によつて少し自省したらよからう。(明治四十年七月作、讀賣新聞)

自然主義雜言

◉八月廿一日、廿二日の本紙附録に、忘憂子の『所謂自然派の功過』といふのが載つた。自然派と自然主義派とは嶄然區別すべきものであることは、僕の屢々云つたところだが、渠の所謂自然派には自然主義派を抱括して居て、而もその二三の『功過利弊』と稱するものを論ずる工合を察すると、その功利の存ずるところにまだ主義的自覺に乏しいたゞの自然派の最極長所を見、その過弊の及ぶところに自然主義派の初步の發足點を見たらしい。既にその見當が曖昧な派分を以つて、その所謂『自然派勃興の原因をなしたのは矢張り一部は西洋の風潮であつて、一部は硯友社風に對する反抗であらう』が、『今日は已に其熱度も冷めて、人は漸く自然派に向つて倦厭の念を生じ、批難の聲を高め、自然派といふものは全く小說界に有害なるものであつたかの如くいふものさへあるに至つた』と云つてある。

◉以上の議論を見てから思ひ付いたのか、或はそれともまた暗合したのか、知らないが、九月二日の萬朝報社說に素堂氏の『文壇の步調』が出た。歐州自然主義の歷史は、泡鳴が數月前早稻田文學で論じたのや、忘憂子の云つたのと同樣であるばかりではなく、舊技巧主義に對する『この活動の幕尙ほ眼に新たなるに、早くもまた自然主義の沒落を見んとす』といふ如きは、殆んど忘憂子の抽象的議論をさらに抽象的に敷衍したに過ぎない。事實上、自然主義は沒落どころか、まだその初步の地盤が確まらない位なのであるのだ。わが國の自然主義派（たゞの自然派にあらず）は、田山花袋氏の『露骨なる描寫』にその最初の刺擊を受け、國木田獨步氏の舊作出版と島崎藤村氏の『破戒』とに初步の發現をなし、風葉氏の新作や、花袋風の小說をもつと目に立つ樣にした佐藤紅綠、正宗白鳥諸氏の作に、之の搖曳が見えて來たのだ。そのうち、最も長い大作をした藤村氏は、その新體詩時代に示した性質が拔けないで、兎角事物の表面に停止し、之が根底まで貫く力が足りない樣であるから、文章乃ちその書きぶりに主義的效果が出ることはあつても、その思想、內容技巧等の全體を貫いて、自然主義的發現が出來る樣になるか、どうか、今では疑問である。その他、新體詩界で、岩野泡鳴氏が近來、特に苦悶的方面を代表して、この主義を追行して居るのがある。自然主義は、事實の上でこ現の通りまだ形さへよく出來て居ないのに、沒落することがあらう筈はない。若し沒

落に類似することがあつたとすれば、この主義を追行する資格のない、ロマンチク派の若い衆どもが鳥渡之を眞似て見て、その見え透いた淺薄を攻撃されたに忽ち閉口して、尻込んでしまつた位のことだらう。この紙上で、ＸＹＺ氏が忘憂子に對して、『自然派の功過の分るのは五年か十年先きのことだ』と云つたのは當を得て居る。此事實に迂であつた素堂氏のは、現今の政治または社會の問題を最も重しとする新聞紙の社說であるから、餘り咎めるには及ばないことであらうが、鳥渡氣になるのは、『自然主義の小說はわざとらしき感嘆を推しつけざる代はりに、從來の小說に比して、高かさと深かさと大きさとを減じた』といふ言だ。渠の云ふ通り、『從來の小說の題材が、小說らしき題材（云ひ換へればロマンチクな題材）のみに限られ、若くは、その描寫を殊更に大仰にして、小說らしくした』（乃ちロマンチク風にした）のが、どれだけ高く、深く、大きいのだらう？素堂氏は、自然主義から見れば、一時代後れて居る空想とか、架空觀念とかいふものに高、深、大を求める傳習にから まれて居るのだ。且、『讀むも汚はしき、生慾的の描寫』といふ言があるのを見れば、渠は人生の眞相を見ぬ振りをして、ありもしない神聖や、至善や、解脫を有難がる徒である。

渠は宇宙人生がたゞ混沌、不純、迷妄、苦悶、一刹那を生命とする生慾の發現に過ぎないのを知らないのだ。僕は自然主義の極端に立つて宣言する、高、深、大は觀念、空想、折衷、鹽梅等の中にあらずして、この種の生慾（性慾にあらず）的發現にあるのである。

●意識的または無意識的に傳習思想になづんで居るのは、如何に新しい潮流に浮んで居ても、たとへば言文一致體の文に文章脈が這入つて、「新らしい」が「新らしき」になり、「古い」が「古き」となると同じ樣に、ロマンチク風の分子を喜ぶ傾向が拔けないものだ。戀を例にとつて見れば、自分の戀人が山腹の大きな岩頭に立つて居て、風はその袖をひらめかして居るが、自分はどうしても之に近づくことが出來ない。傳習家はかういふのを高大な描寫と云つて感嘆するだらうが、自然主義家にはたゞ昔の小說、作つた物、空想、虛僞に過ぎない。根底のないものは如何にするも高大深遠にならう筈がないのだ。世の苦みを知らないものには、たゞ上品には見えやう。そんなことよりも、寧ろその戀人を地上に下だし、耶蘇會堂で馴れ合つた女學生とか、淫賣屋の酌婦であつたものとすれば、表面は面白くはないかも知れないが、架空の事件ではなくなるから、作者の技倆次第ではどんなに高く

も、深くも、大きくも描寫することが出來るのである。かう云へば、寫實主義とどう違ふかとの問題が出ようが、寫實主義はたゞ表面の事實を列擧するに反して、自然主義は之を冷刻または熱刻するのである。この戀人はたゞ一例に過ぎないが、傳習家の偏見を破る例證にはならうと思ふ。

◉かういふ自然主義並にその作物に對しては、もう、多少の攻撃は出て來たが、わが國獨得の自然主義が根據を据えるには、まだ〳〵年月を要するのである。忘憂子並に素堂氏の樣な滅亡または沒落觀は、自然主義に取つて見當違ひであることを云つて置きたい。自然主義は漸く發足したところであるのだ。(明治四十年九月五日作、讀賣新聞)

諸評家の自然主義を評す

詩界に於ては、小說界と違つて、評論は常に創作に後れて居た。有明氏が純理想主義より表象主義に轉じた時、泡鳴氏が情熱主義より新自然主義に進んだ時、いづれも自己の作以外に之を導いて呉れた評論は見えなかつた。然し、僕が名を署して評論を發表するに至つてから、詩界も小說界と等しく、先づ評論に由つて動きそめて來たところがある樣に思はれる。こゝに至つて、新体詩小說の兩界とも同じ新傾向を分有して來たと云つてもいゝ。それは新自然主義である。して、この主義の發現して居る有樣を見ると、まだ創作に於てよりも議論に於て進んで居るのである。

創作を見なければ評論が出來ないかの如く思ひ、また出來ても空論であるかの如く思ふ論者等——獨立性なき批評家連——は僕等の主張に對して賢げに之に相當する創作を示めせと叫ぶ。然し、この種の創作を引き出さうとして主張する議論に、まだ相當な作例がないのは何も恥づべきことではない。僕等はさういふ叫びに對してたゞ云つて置きたいのは、

詩界また小説界に於て花袋、獨歩、藤村、白鳥、有明、泡鳴等の諸氏の作が新自然主義の發展を預表して居ることにとどまる。現代は――少くともこの二三年は――議論と主張との時代である。新主義を體現する作家が直ちに出て來ようとも思はれない。最も古くからこの主義を抱いて居て、その主張その物に熟練と深さとが出來て來た花袋氏の作にすら、最近の佳作と云はるゝ『蒲團』には、まだ〳〵純感情的な――從つて、自然主義の深刻に遠ざかる――分子が少くはないのである。だから、この論文に於ては、この新傾向を近頃の評論に就て考へて見たいのである。

僕の之に對する主張は本欄並に他の雜誌等で屢々發表したから、今、僕の見解を以つて諸評家の說に照らして見よう。

上田敏氏が趣味（十月號）に於ける意見に據ると、自然主義はゾラ一派の寫實主義に限られ、ホイスマンズ、イブセンの作を初め、ツルゲネフ以來の露國小說を之が發展したものとは見爲してない。この點が既に僕等と違つて居る上、かの誇學者流の口吻を以つて、この主義は三四十年前歐洲に榮えたものだから、今更ら之を摸倣するのはをかしいと樣に思つて

るらしいが、わが國人が新たにわが國固有の自然主義を建設することを思へば、そんな口吻を以つて一概に冷笑すべき場合ではないのだ。

次ぎに、戸川秋骨氏の『平凡論』（明星十月號）だが、自然主義は平凡な事實を平凡に取り扱ふから平凡主義だといふにある。氏も亦舊寫實主義を以つて之に擬して居るらしい。且、『社會の大理想、宇宙の大眞理を說くものと比するに、その平凡なる何ぞしかく甚しきや』といふのを見れば、架空虛僞な『理想』や『眞理』を有難がる古典派若しくは情熱派の一人であるらしい。若し人生必然の事實――それ以上に偉大も平凡もない――を平凡と見、別に非凡な理想といふものを假設しなければならないといふ意見なら、そんな二元論者に『平凡の甚だ重んずべくまた頗る味ふべきもの多き』を言つて貰つても、僕等の自然主義には何等の關係もない。

次ぎは、登張竹風氏の『思ふまゝ』（新小說九月號）である。氏が、素養も見識もない自然主義の雷同者を『頗る淺薄膚淺』と罵るのは勝手だが、この主義に於ける有數の有識者等は、その罵言を見て、別に痛痒を感じないのを知つて貰ひたいのだ。且、氏はハウプトマン

を自然主義の驍將と仰いで居た評家連が、その『沈鐘』が出たので、唖然として云ふところを知らなかつたと云つて、それを痛快事と見爲して居るが、果して唖然としたのが事實であつたとすれば、その唖然者等はまだ自然主義の眞髓を知らなかつた仲間に過ぎなからう。渠の『ブレッケツケックス』を叫ばす劇は、形に於て情熱主義の誇張空影はあるにしても、その根底には自然主義の素養がなければ、とても出來ない點があるのを忘れてはならないのだ。ホイスマンズの最後に走つた表象主義とても、若し乾枯な理想や觀念——これは僞表象主義の缺點——に拘束されて居る以外、もとの自然主義を反映して居る所がなかつたら、其作『大伽籃』も全く僕等の返り見るに足りない者であつたのだらう。それに又竹風氏は抱月氏の所謂新自然派（早稻田文學六月號參照）の說を『一代の趨勢に先んじて……奇抜な論を立てたものだ』と冷かしたが、抱月氏のいふ如く、私心私念を去りて無念無想の境に遊び、宇宙の萬象を鏡中の影の如く映せといふ樣なことは、僕がそれが出た當時本欄に於て當つて置いた通り、奇抜どころか、この派の所謂沒理想的本尊、沙翁以外に最上の詩人を見とめない見解をくり返す、極舊式の古典派的見解である。竹風氏が若しさういふのを新

自然主義と思つて冷かして居るのなら、これも亦氏に似合はない思ひ違ひである。

次ぎに、長谷川天溪氏の『論理的遊戲を排す』（太陽十月號）である。氏にして若しこの種の議論をいつも書いて呉れるなら、たとへ僕等と意見が違つたにしろ、立派な評論家だ。今回のは、さきの『反基督的精神』と同じく、大体に於て僕のこれまで發表して來た考へと違ふところはないが、神とか、理想とか、道德とか、慣習とか——すべて沽券を去れば、あとは實質の殘らない抽象物——を排斥すると同時に、自然主義の立脚地を明かにする爲めに、現實と肉的方面とを主張するのは贊成だ。然し、氏の言中時々僕等の主義を危うくする樣な口吻がある。たとへば、『文藝の目的は單に興樂のみでなく、別に敎示と言ふ眼目がある』といふが如き、また『無念無想の態度を取るに非んば決して活氣あり生氣あり血の氣ある文藝は起らぬ』といふが如き。若し無念無想といふことを禪家の用語例に從つて解釋するものがあつたら、抱月氏の自認した『消極的』態度と同じで、そんなところから僕等の期待する熱烈な自然主義は起りやうがないではないか？また、この主義の極致は無終無解決の生々盲動的人生をそのまゝに具現するのだから、娛　は勿論、敎示の如きも、理

想や道徳と同様、之が網目を設ける餘地はないのである。

次ぎは、花袋氏の『文壇近事』（文章世界十月増刊）である。これは氏がこの主義の作家であるといふ考へをあたまに置いて書いたものらしいから、最も適切なところがある。従來の空想文藝に出る幽靈的な人間でなく、血も肉も靈もある人間を書くのが自然主義の態度であつて、自然の傾向には偶存特發があるから、個性を活躍させる爲には、自然中の不自然をも臆面なく披瀝する。それが極端に走つて神秘とか、表象とかいふものに行き當つたわけだが、これは上田氏や竹風氏の見た様に全く別な物になつたのではなく、同じ物の轉化であるとは僕の自然主義的表象論にも合して居る上、この主義的苦悶に堪へないで沈默、寂寞などいふ抽象的觀念に逃げ込んだメタリンクを勇氣に乏しいと云つたのは、充分に僕の味方を得た様な氣がするのだ。然し、『人間は自然の一部でありながら、自然の姿を其儘實現することが出來ぬとは情けない』と云つたのは、まだ外延的自然を空想して居る弊がある。

以上、諸評家の説を紹介する間に、讀者諸君は多少僕の云はうとするところを推察したらうが、新自然主義は理想でもない、目的でもない、はたまた手段でもない。世人はかういふ理想、目的、手段等、人間を外形的に束縛してしまうものに依らなければ、何事も出來ないかの様に思ひ込んで居る習慣――實に習慣ほど自然の眞相を隱蔽してしまうものはない――をうち破つた上、尙ほ積極的に生動する生命があるのを體現するのがこの主義である。物質の外に精神、個人の外に神、肉の外に靈、刹那の外に永遠、自然の外に理想などを別に持つて來なければならない様に出來て居る、古典派または情熱派の二元的頭腦では、この主義を模倣する位なことはあらうが、具體することは到底出來ないのだ。儒教、佛教、耶蘇教等の獨創のない傳習に囚へられた人々は、その頭腦からして改造して掛らなければならない。天溪氏の所謂『無念無想の態度』とは――最もよく解釋しても――その改造が出來るまでの狀態を云つたものに過ぎないので、自然主義の本領、乃ち、氏の所謂『現實を直觀して新なる意義を再建すること』（氏は之を説明してない）は、それから發足する態度にあるのである。

僕等は、抱月氏に從つて、自己を沒却して再び之を大きくして捉へるといふ様な、都合

のい、行き方が出來るものだとは思はない。それこそ論理的遊戯だ。新自然主義は實に徹頭徹尾自己發展の態度である。すべての傳習思想を打破して、大我小我論の遊戯物ではない自己その物の刹那に發揮する態度である。自己の生命以外に自然の外延はないのだ。根底が古典派の抱月氏が、曾て智識に囚はれた文藝を吊して、やがて情に放たれた文藝を說かうとしたのは、よく云つても、古典派の形式の誇張したに過ぎない情熱主義を皷吹しようとしたらしかつた。然し、僕等の主義は自己の知情意合一の奮勵、苦闘、懊惱、煩悶等の狀態乃ち心熟的生活生命を自然と觀ずる以外に、何等の假想臆說をも許さないのである。わが國の新自然主義は最も極端な個人主義で貫徹して行かなければならない。これは一定の形式や流派によつて動くものではない。竹風氏の引用したハウプトマンの言『一人格の自然なる表白』は、恐らくこの境を想像して居たのであらう。

僕等は、純正哲學の殿將ハートマンの無意識說などは、あたまからして之を取らないのだ。自己の意識と自覺とを外にして、圓滿とか、偉大とかいふ者を探つて何になるのだ？、自然主義を平凡主義などいふものも、その初期に於ける無自覺の寫實主義を見て居るのだらう。たゞ『自然に歸れ』とか、『ありのまゝに物を見よ』とか敎へたところで、その人にして視力が既に舊思想で曇つて居、頭腦が既に舊傳習で固まつて居、胸底が既に舊信仰で濁つて居たなら、平凡な事物をさへ本然の意識にのぼすことが出來ないばかりか、どうして偉大な獨創的自覺を發揮することが出來よう？ 舊式な自覺と僕等の唱道する自覺とは、生れ變つたと稱して耶蘇敎に這入つたものが、また生れ變つてそれを脫した程に違つて居るのだ。新自然主義から見れば、それでない主義は愚鈍無意味であるから、第三者があつてこの兩者を同等視しようとしても、決して許されないのである。後藤宙外氏は新小說に於て頻りにこの傾向に當つて居るが、その要旨は初期の自然主義並にその摸倣者流に對する攻擊であつて、若し僕等の主義するところが分つたなら、『文壇に於ける一派として右の如き主義の作家があつても決して惡くはない』底のまどろッこしい云ひ條はなくなるだらうと思ふ。僕等のいふ自覺があるので生きて居られるのであつて、それのない人物または創作は、之を別な流派のものと見爲すだけのことはない、實に死物同前であるのだ。

ニイチエの殘した哲學は、天溪氏の云つた通り形骸であらう。オスカーワイルドの創作

は、ノルダウの冷かした通り、その人物よりも不出來であつたらう。併し、渠等が狂死または餓死してまでもその自覺を追行したところに、自然主義の根底を有して居たのである。ホイスマンズが最後に抽象的な表象派になつてしまつたのは、僕等の侮蔑する所であるが、止むを得ずそこに走つた經路は、花袋氏の說と同じく、僕等は之を自然主義に於て認めなければならない。もとは寧ろ極端な自然主義であつたトルストイの末路を見て、僕等が少しく嫌焉たる所以は、自己と其博愛主義とが分離して居るからで、之と同じそしりはメタリンクの神秘主義にも隨分分たなければならない。自己以外に別な存在または觀念を設けて安心出來る樣なものは、自己本然の自覺——これは悲痛なもの——乃ち、眞生命を發揮出來よう筈がない、自己全体が動いて居ないからである。して自己全体が動いて居ない言論または作物に對しては、如何にそれが美であらうが、崇高らしく見えようが、その力にゆるみがあるから、僕等は之を推薦することは出來ない。僕等は死後のことまでも遺言する、下だらない餘裕のある未練 老爺の 如き思想を取らないのだ。

自然主義の本領は自己全体の一刹那に於ける自覺的態度、乃ち、情調（mood）にある。情

調の人にして初めてこの主義を實現することが出來る。僕は之を自然主義的表象を以つて呼ぶのだ。かういふ人に限つて、世の常識家、形式家、傳習僞善家から不健全、神經質、狂氣、デカダン等の名稱を附せられるものだ。これは勢の止むを得ないところだ。態度は乃ち主義乃ち生命——これ以外または以上に自然とか、圓滿とか、偉大とかを望むのは、迷信である、不自然である、無意義である。

僕等が新自然主義を主張する所以は、人物に於ても斯くあるべく、創作に於ても斯くあるべきを信ずるからである。（明治四十年十月九日作、讀賣新聞）

文界私議（一）

◉東京市で募集した唱歌は、近頃の滑稽である。あんな愚劣な作より外ないものなら、寧ろ發表しない方がよかつたのだ。さきの大阪市歌も馬鹿らしいものであつたが、今回の東京唱歌に比べると、短いだけでもまだ氣が利いて居た。あんな意味も貧しい、趣味もない、而も長たらしい作を誰れに歌はさうとするのだらう？恥ぢも何も知らない小學生徒の外は、之を喜ぶものはあるまい。全体が無價値の上に持つて來て、第二節に『太平洋を渡り來て、種おろしたる文明』とは日清戰爭以前の思想だし、第十八節に『わが東京も歐米の大都の規模に比ぶれば、遜色なしと云ひ難し』とは、わざ〳〵市の不備を擧げて居るのだし、そんなことで日本人としての意氣込みは愚か、東京市歌としての價値はどこにある？それに又、第九節の『市區うるはしく改まり、港もやがて築かれむ』とあるが如き、第十八節と相待つて、市の設計報告書の樣であつて、ただ東京市の不備、不完全、不行き屆きを示めすばかりだ。僕等、東京子に取て、何の有難いことがあらう？且つ、第七節の『ほまれはタカなわ泉岳寺』と引ツ懸けたのなどは、素人臭くて最も幼稚だ。市歌とも云はれるものは、市の歷史、市の威嚴、市の根本實力を仰がしむべきものだのに、却つて消極的に市の外來勢力や市の不完全を擧げるが如きは、撰定者等が之に訂正を加へた時に刪除すべき部分である。渠等の不見識、不心得は最も責むべく、笑ふべきものだ。

◉モデル論が小說界にやかましくなつて來た。モデルがあつて、そのモデルの側から故障が起り創作を禍ひしたのは、この二三年にあつては、泡鳴氏が三十八年の末に單行本として出した冥想詩劇『海堡技師』が初めであつたらう。あれは賣捌店へ分配までした後、わざ〳〵之をすべて取りもどして、故障者の方が千五百部の實費を以つて買ひ取つてしまつた。その主人公は、陸軍では、有名な堅忍不拔の老技師で、富津の海上砲臺（海堡）三個を自己の一身を賭して造り上げた人であつた。その人、今は老衰して病床にある。作者方では前以つて作の筋を話し、モデルの親族から承諾を得た上の出版であつたが、いよ〳〵單行本として出たのを見ると、承知の上とは云ひながら、毒殺、人柱等の件り——これは實際のことではなく作者の頭腦から出たの——が目に立つので、世間に對する一家の面目に

關するといふわけであつた。作者からいふと、あの主人公は同技師と叡山の一墮落僧の改悛者とをつきまぜたものである。

◉本年になつては、藤村氏の『並木』並に花袋氏の『蒲團』だが、創作にモデルがあるからと云つても、その本人と全く同一なものになると思ふのは、無經驗者の見解でなければ、一部の人々の思ひ違ひである。藝術は結晶物であるから、その全體として無用な點は削り、必要な性格を角立るのは必ずしも許されないことではない。だから、作者が某氏を書いたといふのもそのまゝに信ずるに及ばない代り、書かれた人も之に迷惑するまでもないことだ。モデルを道德問題とする樣なことは不必要である。おれを書きながらおれには似て居ないと云ふべきは、たゞ作者が或人に對してお前をそのまゝにモデルにしたぞと斷言する時にこそだ。そんな時は、孤蝶氏の藤村氏に對してやつた樣に、さん〴〵に作者の膏をしぼつてやつてよからう。然し、丸山晩霞氏の藤村氏に關するモデル談（中央公論十月號）の如きは、泡鳴氏のモデルになつた人の親族の場合と同樣、迷惑にはなつただらうが、それはモデルと作者との境遇から來た事であつて、之を以て直ちに作者を惡人呼ばはりにするのは、ちと穩かではない。實は作者自身に關することが多いと、作者が明言したのを、丸山氏も直接に聽いたと云つてるではないか？その上、聽くところに據れば、あの談話を出してから、談話者は藤村氏を訪ひ、あれは自分の廣告に過ぎないから、惡く思つて呉れるなと云つたさうだ。果して然りとせば、そんな薄弱、不眞面目な行動は最も擯斥すべきことであらう。內輪の情實を繩綿して藝術界または評論界に立たうとするのは、これまでの時代的惡弊で、それは無奮發の舊人のやることであつて、苟も新時代の人士の爲すべきことではない。

◉獨歩氏は、日本新聞に於て、同氏獨得の理屈をこねた。自分が自然主義であるとも、何とも宣言したことはない、それでも、世間で、作が自然主義で行つてると見るならそれでいゝと。氏の說が、自然主義のかけ出し模倣者と混同されるのを避ける意なら分つて居る。但し、氏の行き方が自然主義に向いて居るのは事實だ。たゞ同主義の全體を具現して居ないのは、花袋、藤村の諸氏と同樣である。然し、氏の近頃評判になつたのは、多く六七年も以前の作によつてゞあることを自白したのは、寧ろ痛快な皮肉であつて、世人の不明を指摘す

るに足るのだ。序に、萬朝報の素堂氏は、自然主義は自然主義にあらずといふことを論じ、モデルを使つて書いたものがモデルに似て居ないといふ、モデルその人の反對（たとへば孤蝶氏の論）を證據にしたが、あれは自然主義を以て物の表面に拘泥すべき主義と思ふ間違ひから來て居るのだ。素堂氏の『藝術即僞論』に於ても、自然を外延的なものと見て、それを大きな客觀（實は存在しないもの）としてかゝつて居るから、僕等の虛僞と思ふものを實在と觀じ、それを打破する極端な個人主義を退歩したものと誤解して居る。さういふ薄弱な根據に依つて『藝術は僞なり』といふ樣なことを說くのは、藝術模倣說と同じく單純な時代の遺物で、近代的藝術には殆ど無關係だ。

◉人の所說が不得要領だといふのに、二個の意味がある。その人にして初めて說き得る思想の如きは、その人が據つて以つて生命として居るものであるから、その人と同じ素養または直觀を得なければ充分に分るものではない。そこまで達して居ない他人が之を分らないのは、つまり、その他人に對しては自然必須の不得要領であつて、獨り要領を得て居る直觀者は、世間から分らない〳〵と云はれ乍ら、世人を知す識ずの間に指導して居るのだ。預言者などは皆それである。また、第二の不得要領には、思想の淺薄な爲めに、分り切つた事をかれこれ六ケしさうにひねくつて、辻褄の合はない樣になつてるのを指す意味がある。普通論理——これは超脫することも出來る——をあやまつて居るところから來るのだ。無素養者には、往々これがある。この二個の區別を知らないで、分らない〳〵といふものも亦無素養者流に過ぎないのである。

◉兎に角、進歩、發展、直觀の議論または創作には、世人の見て不得要領のものが多い、少くとも、一時代の進退があるからだ。詩界で云つて見ても、『花紅葉』時代の羽衣一派——今から見れば平凡だ——をさへ朦朧派と呼んだのが、今度は有明、泡鳴等の一流をまた朦朧だとか名づけた時代がある。それが止んだかと思ふと、またその代りに狂とか、神經過敏だとか云ひ出した。世人は、おのれ等よりも進んで居ると、もう、分らないのである。獨歩氏の舊作が今日漸く分つて來たなどは、世人はよろしく自己を返り見て、その不明を恥づべきである。朦朧とか、狂とかいふことは、第一の意味に於ける不得要領であることがあるのを忘れてはならないのだ。

◉僕の自然主義的表象説に對しては、諸方から質問を受ける。一々之に返答する暇はないから、失敬することが多いが、先般或會の席上に於て演説した時、さう自己ばかりを見る主義なら、創作をしても、單調になり、人物性格の變化がなくならうといふものがあつた。もつとも、僕の主義は一種の人生觀であつて、創作を目的としないから、創作が出來なければ出來ないでもいゝのだ。だが、この主義の如く、人生自然を攝取する素養と情調とが出來てこそ、初めて立派な創作の根底があるといふのだ。一たびこの根底に接觸すれば、主義の自由境が開けるのであるから、そこに人生は少しも無變化でないのだ。『ありのまゝ』とはこの境に於て云ふべき符徴である。沙翁の客觀は冷やかであつた、近代人の客觀は熱烈を要するのである。熱した自然、これは『われ』でない自然に見ることは出來ないのだ。

最近訪問者の一人は、これに據つて小説を書かうとしたのみならず、人生悲觀の根底を强め、悲觀の消極的方面を脫却することが出來ると云つて歸つて行つた。

◉德田秋江氏は、本紙十月二十日の日躍附錄に於ける雜話に於て、僕が十月十三日の附錄に出した評論を批評したつもりであつたらしい。然しあれは正當な見解を以て僕に當つて

居るものではない。僕の議論を不得要領といふ人が、その上に不得要領では困るではないか？若しあの話に要領がありとすれば、僕が『新自然主義の發展を預表して居る』として擧げた作家等を、氏もよく知つて居るといふこと、今一つは、論語の一節を讀んだといふことゝを云つたに過ぎない。それは、氏の云ひたいことは自由だから勝手にし給へだが、そんなことの爲めに僕の言を曲解して、之を出しに使ふのは、僕に取りて非常な迷惑である。意味のある、また手ごたへのある批評なら、然し、僕は如何に面と向つて來られてもおそれはしないのだ。

◉氏の論の發足點がそも〳〵間違つて居る。僕は思ひ付いて居る六名の名を擧げ、その他にも、まだ數へれば、渠等の程度のものがいくたりか數へられるだらうが、それは面倒臭いから畧して置いた。して、さういふ人々（僕をも含めて）が、作者としてまた僕の主張するところまで充分に達して居ないことを斷つたものだ。若し達して居るものとすれば、僕よりも年長者たる花袋、獨歩、藤村諸氏の創作を置いて、僕が評論に蛇足を加へるには及ばないのだ。氏は『預表』の意味を取り違へて、直ちに渠等がいづれも僕の主義的生命を

具現して居ると思つたから、その生命には止むを得ず附隨して來ることもある不健全、狂氣、デカダン傾向を、渠等も持つて居るかしらんと不思議がつたのであつて、僕に於てはその點に何等の矛盾もないのである。

◉氏は僕を解する頭腦がない。と、さう云へば僕の方で禮を失するが、それではよく讀まなかつた。と云へば、君が粗忽の罪は免れない。いづれにしても氏は正面の對手ではないから、僕は氏に向つて答辯する必要はないが、あの話を見て思ひ付いたことを雜談として云つて見よう。

◉僕の言中に、『之を自然主義的表象を以て呼ぶのだ』といふ一句が突然に出て居るので、氏は何の事だか分らないと附記してあるが、僕が主張を發表するには順序があつた。今年に這入つてからでも、既に早稻田文學、帝國文學、新小說等に於て、諸方面から之れを論じてある。僕が評論家たる態度としては、時々その用語に說明がなくとも、前以つて分ることになつて居るのだから、手落ちではない。段々と踏んで來た順序を見ないで、或は白ばツくれて、僕のに限ぎらず、他人の說をかれこれいふものは、第二の『にぎりめし』（この

語を知るにも順序がある）とも云ふべく、輕浮な人でなければ無精者であつて、苟も評論の筆を執るもの、數には數へ入れられないのだ。創作界にも段々眞面目な作が出て來るのであるから、之を導き出す評論界に於ては、なほ更らさういふ無責任、無根據、輕浮、淺薄な談話の出ないのを望むのである。

◉僕に限らず、自然主義を知る人々は、不健全とか神經過敏とか呼ばれ、更らに進めば狂氣と云はれるのを預期して居る。それ位の覺悟がなければ、この深い主義の貫徹は出來ないのである。そこに思ひ及ばないもので、ノルダウやトルストイの書を表面的に見て、之を唯一の虎の卷にして居る常識論者等は、たゞ自分等の淺見を以つて、直ちにこの傾向を不健全、神經質、何々狂と呼ぶのを喜ぶ。秋江氏の所謂『狂氣を賣り物にする』ものは、僕等でなく、却つて渠等であるのだ。この事情を知つて居るから、わが評論界に出た、またこれからも出る無能、去勢された常識論、健全論に對して、僕等は狂氣と呼ばれるまでも、また實際狂氣となるかも知れない程に、自奮自覺をして居るべきことを主張するのだ。

ノルダウの著書が評判になつた時、英國のポンチ雜誌は之を漫畫にして、ノルダウがその

蔭で大口を開いて笑つて居るところを見せたさうだ。渠は平凡な常識論者でなく、その實際は自然主義、並にそれから轉化發展した表象主義、神秘主義、などをもよくわきまへて居た人物だ。

◉狂と意志と、これはその強弱盛衰に於て、反對なものであらうか？自殺者を見給へ、渠が自殺を決心追行するまでには、普通人のよりも強い意志を發現したに相違ない。之に對して普通人が薄志者を以て呼ぶ權利はない。たゞその強い意志以上の人にして、初めて自殺者並に普通人を薄志弱行の者と呼ぶことが出來る。狂人にも階段があらう、之を專ら意志の薄弱から來ると思へば、間違ひだ。却つて意志の強烈な爲めに狂ふのもある。殊に大人物にしてその主義、所信を貫徹し、その才能を發展する爲めに氣が違ふものがあるのは、ニイチェの如きはそれだ。自分の意志を追行して狂氣に至るのは、自分の本望を達したのであつて、社會的に云ふ『倒れて後止む』を最も深く心理的に實行したわけだ。理想家はそれよりも強い意志を假定するだらうが、自然主義者はそれ以上の空想に耽らないのである。それを『不健全だと憐れんだり、狂氣だと嗤つたりする』ものこそ、憐み嗤ふべき無能者流である。

◉自己を三人稱的に取り扱ふのは、外國の評論家には珍らしいことではない。多くの文人詩家のやつて居る例がある。自己の關係ある世界を論ずるのに、自己を取り除くのは馬鹿謙遜と云はなければならない。情實纏綿の社會には、殊にそんなことをも遠慮し勝ちになるのだ。オスカーワイルドの如きは、身づから、バイロンは十九世紀の預言者であつたが、自分は二十世紀の精靈であると云つた。わが國では谷本富氏がその教育學中に自己を三人稱視して書いた例もあるさうだが、僕も此頃發表の論文——大抵は、近々出版すべき著書の中——には三人稱的筆法を用ゐた。野暮な國人には之を一種の狂と見爲すものもある。情實にからまつて居る樣では、いつまでも大評論家の出よう筈はないのだ。

◉十月の帝國文學には、卑劣な匿名を以つて『某新體詩家に與ふる書』といふ卑劣な題——何故に名を擧げざる——のもとに、僕を冷かしてある。眞面目な評でないのは勿論、諷刺文としても拙劣である。要するに、その記者も詩——殊に佛蘭西詩——を解する力があるといふのをほのめかしたに過ぎない。それならそれとはツきりいつてくれゝば、僕は佛詩

の譯讀を習ひに行つたのに。僕は文學をやつて居る傍ら、十年來英語の教師であるが、佛蘭西語は近頃やり出したのだから、必要上やつた二三佛詩の飜譯も、數名の知己に尋ねてからしたのだ。『秋の歌』中の『時の鳴る時』は、調の上から略したのであるが、ジョングレイの英譯にベル（鐘）が鳴るといふのとは意味が違つてるから、わざ〳〵鐘といふ語を持つて來てあると云つたのだ。（但し、それがいゝとは云つてない。よく新小説を見給へ。）いツそ僕の飜譯振りを批評するなら、最も難解と云はれるマラルメの方を見て呉れゝばよかつたのに。記者はその方は――分らないのでもなからうが――面倒だから避けたのであらう。人の勞力を無にすることは批評家の避くべきことであるのを知り給へ。且、發音をかれこれ云つてあつて、inutileの初めはアでなくイであるのはもつともだが、uは英國人も英語のアイ（i）の短音、乃ち、イと發音し、希臘語のウプシロン（u）の羅甸讀みと同じに見爲して居るのだ。僕はそれによつて見たのであるが、わがイと全く一致して居ないのは勿論、原語の綴りを暗示して置くには、ユとした方がいゝから、渠の注意までもなくその後はこの考へである。然しこんなことを知らない人では、邦人がマルセイユと讀み爲してしまつた佛港の名をマルセイイと云つたら、さうも譯せるのに、尚更らびツくりして間違ひだと云ふだらう。そんなことはさて置き、記者が僕に佛國留學を命じて呉れたのは、大學一派の外國崇拜（而もその足もとの文物實力を忘れた）の理想？が反映して、大學に無關係の僕に取つては有難迷惑である。（明治四十年十月、讀賣新聞）

文界私議

(二)

●十一月十一日の萬朝報社論に於て、素堂氏は僕を『日本に於ける新自然主義唱道の唯一人』と稱し、この唯一人の說に當つて居る。第一、近代藝術の特色は科學的であるといふ、その科學的なる語をたゞバルザクやゾラ時代の意味に思つて居る。渠の所謂『觀察分析』または『客觀的の觀察描寫』とは、普通の自然主義がこれまでやつて來たことで、僕等に對する初步の階段であつたのだ。僕は之を、渠の推察する樣に、『自然主義より排除せんとするもの』ではないが、それだけの用意では、まだ充分でないから、もう一步進んだところを說くのである。

●ゾラ等に取つては、その程度で滿足出來たばかりか、それが他の藝術の行き方よりも進步して居て、その當時には、最も近代的であつたが、今となつては、反對者の多くが云ふ通り、二三十年前までの運命で終つてしまつた。蓋し、客觀の事相ばかりに拘泥して、中心思想たるべき自己その物の熱と力とを忘れてしまつたからである。それに代つて、表象主

義、神秘主義、內觀主義等が現はれて來たが、すべて自然主義の轉化でありながら、それも中心思想を充分に体現し得ないところが見える。ところが、わが國現代の實際に接觸する僕等は、歐洲の思想的傾向を比較研究する便利があると同時に、歐洲人の智識にはまだ上らない日本特有の思想をも呼び起すことが出來るので、僕は歐洲最近傾向の上に、わが國古代の神々生々の生活を發揮する爲め、自然主義的表象論を唱へるものである。

●この論の本旨は、僕がこれまでに發表した論著並にその斷片に於いて述べてあるから、々こゝに之を持ち出すには及ばないと思ふが、自己の外に別に自然なしといふことだけは讀者の記憶に止めて置いて貰ひたい。自己の心熱を描寫するのが、一言で云へば、文藝の要旨である。之を生々旨動的人生を具現するといふのだ。これ位現實的なものはない。素堂抱月等の諸氏（天溪氏も然るか）の如く、自己に關係のない客觀を假定して、それを現實と思ふのは、それに對して別に理想なる物を設ける、物心二元說の傾向である。自己は唯物にもあらず、唯心にもあらず、而してその自己一元の表象的人生　即ち生々旨動的こが眞の人生である。決して空想ではない。

◉よしんば、素堂氏等の客觀、乃ち、自然が自己を忘れて居ないにしろ、渠の所謂『第二義の習俗道德』に繫がれて居るのは、旨動の一端であるのに、この一端を以つて現實の全部と思つて居るのである。だから、僕はさきに渠を以つて物の表面に拘泥して居ると云つたのだ。僕は現實の人生を虛僞と觀たのではない、素堂氏等の說を最も良く見てやつて、現實の一端を以つて全部と見爲す人生說だから、之を虛僞と斷定するのだ。素堂氏は、谷本博士の區別（新小說）に從ひ、自然は雜多の意味があるを述べ、次いで、『唯一人は自然を生れながらと觀て、生れながら即ち肉的と解し、現實の儘なる客觀の描寫を自然主義より排除せんとするものにはあらざるか』と尋ねたが、渠の『肉的』とはただ物質的の意だし、その『現實』とは今擧げた樣な表面的な物だから、直ちに之に然りとも、然らずとも答へることが出來ない。然し、僕に於いては、客觀の描寫と自己發揮とは同一になつてこそ、最近代の藝術要旨に叶ふものだと云つて置く。

◉そこで、素堂氏の『藝術即僞論』に關する氏自身の辯明だが、客觀の事相、乃ち、自然（僕の所謂自己の旨動）の『全眞』描寫は到底藝術の不可能とするところ（これだけは多少花袋氏の考へに似て居る）だから、たゞ自然を論理的に展開すればいゝ。さうすれば、自然から見れば僞り（乃ち、不自然）が出來て來るが、そこが乃ち藝術の價値だと述べた。然し僕の考へから云へば、藝術が僞りだといふ樣な餘地を許さない。自己以外に自然はないのだから、自己發展の大小により大きなのは大きな藝術を出だし、小さいのは小さい藝術となるが、その大小は宇宙萬物の包合者なる自己に對して眞僞の問題ではない。天才如何の問題である。大人物には宇宙は大である。小人には宇宙は小以外に存じない。人物才能の小また大なるものが、その大小自己以上のことを望むのこそ却て問違ひで、之を藝術の價値と思ふのは空想でなければ、無內容の形式を拵へようとするに過ぎない。そんな說を僕が藝術摸倣說と同視して、幼稚なものとするのは當前のことではないか？決して『誤解』ではない。

◉素堂氏が僕の說を寧ろ近代藝術に關係がないと見たのは、ゾラなどの作物に一致しないと云ふのと同じで、その科學的といふのは詳しく云へば物質科學的の意で、最近代の藝術には心理科學的な傾向があるのを知らないのだ。して、僕は心理科學的傾向の絕頂に立つ

て、この自己發展主義の藝術を鼓吹するのである。素堂氏は『唯一人が解する如き自然主義者は日本に一人もなし』と云つたが、それはさうだらう。外國の摸倣者の多いわが國は愚かなこと、歐米諸國へ行つても、恐らく僕並に僕の創作を除いては、一人も、この日本特有の新自然主義を標榜するものはないらしい。氏は『ニイチエと唯一人とは同一味の者なるべし』と云つたが、僕の說はニイチエよりも心理的に進歩して居るのだ。ニイチエは超人と共にまだ外界の存在を見て居たが、僕は外界の存在を許さない唯一自己を主張するのである。一般社會の老若男女、賢愚、狂不狂はすべて自己中の事件であることを說くのだ。なほ某雜誌に發表する僕の『國家人生論』を見てくれ給へ。この主義は必らずしも創作を目的としないから、或質問者に對して創作が出來なければ出來なくてもいゝと云つたので、一はこと更らに分りもしないことを分つた樣に見せて作るのを戒めたのだ。決して、素堂氏の考へた樣な、曖昧不備を自白したことにはならない。

◉また、角田浩々氏は、十一月十日の大阪毎日新聞に於て、さきに本欄で僕が駁したのと同じ樣な說を繰り返して居る。渠には一定の手段はあらうが、定見がないのだから、もう、

之を再び追窮するには及ぶまい。且、その見て居るところの自然主義は、素堂氏のと等しく、舊式なので、抱月氏のを以つて最も醇正だとして居る。いくら云つても、僕の說などは分りさうでもない。で、僕の批評（寧ろ間違つた紹介）に於て、佛蘭西邊の自然主義を摸倣しないで云々せよと云つてあるが、渠は佛蘭西の同主義がどうなつて居るか知らないのであらう。佛國に於て、僕の樣な主張が何人にあるのだ？また僕の說には、『自己の處世觀が加はりて作品と處世の行爲とを統一せんと試みたるなり』とあるが、作品と行爲との統一問題はさて置き、處世觀に『敢て人生觀とは言はず』と括弧してあるのは、その表面だけで見れば、人生觀とするに足りないと云ふのだらうが、僕の說が分つたなら、僕に厭天的愛世の處世觀（これはまだ發表しない近著のうちに詳說してある）があると同時に、充分の人生觀になつて居るのだ。

◉更らにまた渠、浩々氏は、いつもの通り『作家は竟に無主義の神の如くなるを眞筌とす』と澄まして居るが、主義、乃ち、生命の動機がない作家に、いくらいい物を望んだとて、創作しようがないではないか？殊に現代の如き變遷期に臨んでは、先づ、舊套を脫して生

命に動く主義を宣傳する必要がある。この點に於て評論を以つてするのと、等しく同價値の態度である。それを認めないで、わざ〳〵創作ばかりに押しつけようとするのは、今日の森鷗外氏や上田敏氏の樣な、たゞ文藝の翫賞者にはまだしもだが、浩々氏の如く苟も批評家として立つて來たものには、評論を創作に屈服さすのでなければ、たゞ新主義の鼻柱を折つてしまはうとする惡戲に過ぎない。もつとも、その主義が勝利を得た曉に至つて、なほ之を宣傳するのは不必要なことには相違なくなるだらう。

◉上田敏氏も、今月の新小說に於て、同じ樣なことを云つて居る。且、僕に自然主義と云はないで、世の誤解を避ける爲めに、半獸主義、刹那主義と云へといふ樣なことも說いて居るが、それが僕の新自然主義であるから、たゞ單に自然主義と云はないばかりだ。然し『藝術には作品が大事である』とあるのは、一方に於て、浩々氏の態度と等しく、舊思想、舊技巧の——到底、新派になれない——人々を安んじさすと同時に、舊新思想に迷つて居る新進作家にしッかりした方針を授けささない口實になる恐れがある。『大事である』新作品を引き出すまでは、進步した議論は、僕のに限らず、甚だ必要である。氏の如きは、自己の唱

へざる新論だからと思つて、之を冷視して居る風があるが、その新論が種々の反對を受けながらも、結局、世人の思想を導いてそこに至らしむる事實を知らない仲間の一人である。現代には、まだ標準になる程の新創作はない。之を導き出す爲めに、僕等は新議論をして居るのである。（明治四十年十一月、讀賣新聞）

文界私議（三）

◉文藝協會今回の試演を見に、僕は二十二日に行つた。他の演劇者流と違つて、一座の眞面目と奮發とは有難いが、春曙氏を除いては、別にこれと云ふ程の手並みを現はしたものがなかつたのは失望した。たゞ春曙氏のハムレットが飛び抜けて結搆な働きをしたのは、何人も認めた事である。之に對する梅子のオフエリヤは、舞臺馴れぬせいか、活氣がない。矢張り貞奴のやつた方がずツとよかつた。詳しい劇評などは、いづれその道專門の人々が云ふだらうから、僕はたゞそれ以外に思ひついたまゝを記して見よう。

◉一番目の『大極殿』は、今回出しただけで見れば、その組織に於て一大欠點がある。それは出役者が入れ代り、立ち代り出て來て、たゞ〳〵思ひ〳〵の獨白を聽かせる樣な感じを與へることだ。その獨白がたゞ劇の筋を行る唯一の手段になつて居るかの傾向が見える。最も拙な行き方である。僕の所謂表象悲劇が一種の獨白を連續した樣なものだと說明したことがあるのは、內容の根底から見てのことで、決して形式にあらはれた獨白をいふのではない。

いから、矢張り表面はそのまゝ諸人物の對話になつて居るべきものだが、表面的獨白によつて劇の內容を聽かさうとするのは、近世式の劇には不自然極まるものである。殊に、殆ど無內容のたゞ筋の進行を示すだけのがあるに至つては、作劇者の態度の眞摯如何を疑ふ氣になつて來る位だ。鐵笛氏の入鹿が頻りに意張つて獨り言をいふところなど、大きく見せようとすればする程、却つて滑稽な感じを引き起さしめた。シエキスピヤにもこの惡弊がある。然し、ハムレットの獨白の如きは、さすが筋の進行を目的とする樣な淺薄なのではなく、兎に角、それに依つて意味の深遠を聽かさうとするのだ。

◉然し、それでさへ、僕等には一種の淺薄としか取れないのである。概して舊式の作劇法には、外國でも、かういふのが多いばかりでなく、之がその劇の一部の生命になつて居るのだ。故左團次の得意であつた『こいつア宗旨を變へにやアならねえ』の如きは、最も滑稽な適例であつたのだ。獨白（または傍白）はロマンチク劇の遺物であつて、必らずそこに誇張または手段的な意味を持たして、劇の內容を虛飾しようとするに過ぎないものだ。たとへば、ハムレットが母に對して云ふ『天もこれが爲に面を赤うし、地もこれが爲めに色を

失ひ』の如き、(獨白でも、傍白でもないが)、之によつてその感情の内容に何の加ふることもないと同樣、かの有名な獨白 To be or not to be のくだりに至つても、死を恐れ、世を憤り、『まツこの如く良心は人の心を臆せしめ、決心の色も憂慮に褪せ、如何なる大事の企も之が爲めにいつしか』云々と云ふが如き、たゞ外部よりハムレツトの心狀を説明しようとした叙事詩人の筆に過ぎなくて、少しも内部的動機をつかまへて居ない。沙翁を最も完全な具體的作劇者と思ふのは間違ひで、たゞ抽象物に虚飾の衣物を着せるに巧みであつたものだ。『御身らの所謂哲學の思ひも及ばぬ大事がある』と云ふ樣なことも、近世の抽象家メタリンクでさへもつと立派に具體してある。こんなことで如何にも『御もつとも』と思つて居られる人は、沙翁を高く買ひ過ぎて居るからである。イブセンの樣な近世作劇家でも、獨白または傍白を使はないでもないが、之を誇張して居ない。これが舊式劇の行き方と近世劇の傾向の分れるところで、この點を嚙み分けてからでなければ、最近自然主義の問題は論じられないのである。

◉然し、逍遙博士の樣にシエキスピヤに耽溺した人には、もう、僕等の云ふことをはツき

り了解して貰へないかも知れないし、また文藝協會演藝部の短い歴史から見ても、舊式劇(必らずしも日本ばかりのを云はず)を以つて立つつもりらしいから、僕等は必らずしも他を望まない代り、『桐一葉』『牧の方』等の舊式創作もいいが、外國物の飜譯劇を成るべく忠實に紹介試演して貰ひたい。さうすれば、諸氏の趣味と異論とは別にして、シエキスピヤはシエキスピヤ、イブセンはイブセンで試演されるからである。これは、諸氏に取りても、他專門俳優連の及ばない便利と立ち場とを占有する道ではなからうか? 技藝の上手下手は他の俳優連と同樣、今日餘りかれこれいふ程のことはならうと思ふ。技藝の方面では、眞面目にやつて居るものが他日の勝利を得るのである。この點から云つて、松居松葉氏の『演劇革新策』は平凡の間に眞理を藏して居る。

◉『浦島』に至つては、ああいふ節つけが新らしく出來たといふ外、何等の新奇、優秀なところも見えない。たゞ舊來の振り事劇の摸倣に過ぎない事實がいよ〳〵確められたのである。『新樂劇』のやかましい議論もどこへ行つてしまつたのだらう。三味線の手に於ても、踊りの振りに於ても、その臺帳の思想、文句同樣、舊來の作物のあちらこちらから取つて來

て、それをつゞり合はせたものに外はない。獨創のところなどは、手に於ても、振りに於ても、思想に於ても殆ど皆無と云つていい。よしんば、臺帳は完全無垢な物としたところが、現今の邦樂（洋樂はなほつまらないか知れない）の狀態に於ては、目くらを出すには必らずツッテンと彈かなければならない、龍宮と云へばきツと魚の眞似を踊らなければならないと定つて居る樣な、實に貧弱空乏な頭腦を持つて居る手合ばかりが揃つて居るのだから、立派な物が出來ると思ふのが間違ひである。渠等はさういふ型以外に何ごとをも知らないのである。

◉古い物をやらせば、演奏技術熟練の結果、如何にも結搆なところがあるのは馬鹿に出來ないが、渠等は女義太夫も同樣、自己獨得の頭腦がない上に、作曲の經驗に乏しい。逍遙博士が渠等を利用して、一世を驚かさうとするのは、僕等から見れば、最も低い（而も他に止むを得ない事情だが、最も低い）手段を撰んだと云はなければならない。その上、振り事劇は、如何に素言葉（すことば）が這入つても、その歌並に振りが叙事的に流れ、劇（樂劇をも含めて）の生命なるせりふまたは聲樂的對話を忘れてしまう傾きが甚しい。對話または獨白的なところを樂座で歌はすからと云つても、それは正劇または外國でいふ樂劇に於て、出役者自身で口にする程直接な感じを與へないのだ。從つて、長ければ長い程、觀聽客に『もう澤山』といふ思ひを持たすことになる。今回のは僅かに一部だけでもさうであつたから、その三倍も四倍もある叙事的振り事全篇に節がついた曉は、如何に冗長なるものであるか今から思ひやられるのである。

◉博士の所謂『新樂劇』の組織は、この點から云つても、非常な失態である。舊來の一幕物『戻り橋』などが、最長の限界であらう。且、後者以外に新らしいと云ふのは、幕の多いことゝ、全篇中の一二ヶ所に新思想を現はす文句が入つて居る位のことである。局部の問題になれば、オペラにオヴチユア（前曲）があると云ふので、前曲なるものを設けて、之を緞帳のあがる前に歌ふことにしてあるが、（もつとも、今回は直ちに幕が明いたが）、前曲なるものを文句つきにしてあんなに長く歌はすのも愚である上に、若しオペラの前曲のつもりなら、幕のあがる前に、文句なしの器樂ばかりで、全篇のモチーフ（動律）をよく聽かして置くべきものだ。もつとも、僕は叙事的な振事劇に對してオペラの眞似をせよと云ふの

ではない。

◉序に、女優問題だが、僕が近頃餘り芝居を見たくないのは、一つは松葉氏の云ふ通り、多くの俳優等がその場を胡麻化して行く風があるからだが、また一つは男子が女裝して出る缺點が特に面白くない感じを與へるからである。有美氏の非女優論もあるが、あれは女をして女以上のことをやらせようとするから起る過誤で、女が女に扮するのは自然ではないか？それに、丈が低くつて引き立たないといふ攻撃は、育て方と身振りとで多少直すことが出來るし、それで出來ないところは、よしんば缺點としても、止むを得ないことだ。且、他日發展すべき日本の社會劇には、それが却つて誇張でない實相に適するではないか？また、聲が通らないと云ふ缺點は、訓練と實習とによつて段々直つて行くに定つて居る。今回、初めて出演した梅子のオフエリヤなどがいつまでも標準音聲ではない。現に、今回の出演者中、鐵笛氏を除いては、聲に充分の餘裕がなく、ベース、乃ち、低音部の使ひ方などに至つては、殊にその甘味を出すことが出來なかつた。さすが鐵笛氏だけは、音樂的經驗もあるからだらう、低くつても隨分通る聲が出た。これは訓練の結果である。女優問題も訓練を經ない飛び出しものによつて斷定を下だすことはよくないのだ。

◉十一月廿五日の萬朝報社論に、僕の前回の議論に對する素堂氏の辯解が出た。撿擧、承服、失言、妄濫等の誇張的用語を以つて、頻りに僕を威嚇しようとして居るが、僕は氏の疑ふ樣に、氏の說によつて態度を改めたことはなく、また、僕の創作にも、議論にも現はしてある。また、僕は普通の表象主義、神秘主義に讃同して居ないことも、議論にも現はしてある。また、創作ばかりを目的としない主義（云ひかへて云へば、人生觀）が何で『憐むべきもの』だ？かういふ疑念または反對は、すべて近代的思想の傾向（はずん〳〵進歩する）根底に接觸して居ないから出て來るのだ。外界と自己とを區別して、それに共通の生命を說くが如きを一元論と云へるなら、既に舊式の一元論で、僕等から見れば、頑迷以つて折衷論を爲す二元論と何等異なるところはない。氏と僕との間に『近代的』の解釋が違ふとしても、斯かる傾向を以つて進んで來たし、また斯く體現せらるべき人生的藝術を主張する僕等の立ち場に於て、『藝術は僞り』といふ樣な古風な考へを容れる餘地も必要もないのである。（四十年十一月廿七日作、讀賣新聞）

國家人生論

（加藤博士を論ず）

着實にして、少しも山氣のない學者として、僕は現代に於て博士三宅雄二郎氏と博士加藤弘之氏とを擧げずには居られない。いづれも世評の外に立つて、自說に研究を重ね、之を發表證明するに當つては、毫も憚るところのないのは實に尊敬すべき態度である。前者の『日本及日本人』に連出する『原生界と副生界』に就ても云ひたいことがあるが、それは本論の主意ではないから別として、加藤博士がその所論を最も通俗に應用した今回の著『吾國體と基督敎』に就て僕は少し思ふところを述べて見たい。それには海老名牧師の駁論（太陽十月號所載）を時々對照して見るが便利だらう。

世の理想論者は、自己の架空虛僞の論旨が淺薄なのを自覺しないで、却つて之に反對する唯物論者を淺薄だと思つて居る。その癖、內容と實質の乏しいのは、兩者とも殆ど等しいのはをかしいではないか？この牧師と博士との議論も、それに過ぎないのである、博士は進化論をその出て來たままの意味で信じて居る人であるから、如何に忠君愛國を說いても、

わが國の祖先が猿から進化して來たとを否むことは出來ない。之に對して、牧師は『人は萬物の靈長だ』といふ樣な偏見を誇張して、そんな物が大廟に祭られて居るなら、人が尊崇する程の威靈があらう筈はないではないかと云ふ。士臺、尊崇の意味が違つて居る。宗敎家は實質のない神といふ觀念に、想像的理由を附して、何だか高尙さうに、また奧床しさうに之を有難がるのであるが、僕等がわが國の宗廟を威拜するのは、別にそこに神靈の存在を信ずるからではなく、單に祖先の歷史的勳功を追懷するのである。空想を喜ぶものはそこに何か實在する物を想像しなければ滿足出來なからうが、實質を尊ぶものなら、自己を中心として、そこに自己の振動搖曳を見て滿足するのだ。僕等は空想家的無內容の崇高よりも、實質家の奮勵的偉大の方を讃成するのである。今、加藤博士か後者の代表者たるだけの素養があるかどうかを調べて見よう。

渠は、わが國の思想界に於て、自然主義派の先驅であつた。世は泰西の文明に眩惑して、自由を叫び、民權を呼び、わが國の歷史的發展を忘れて、革命とか、共和政治とかを夢想した時、その自由と云ひ、天賦の人權と云ふ思想は、既に當時の少壯者流に於ける一

種の――古典とまでは乾からびて居ないまでも――形式に過ぎなかつた。現今で云へば、耶蘇教的思想にかぶれたものが理想とか、向上とか云ふ題目を設けて之に迷ひ、現實の熱烈なところ、墮落の深刻な點を感得することが出來ないのと、同じ狀態であつた。加藤博士も、その初め、そんな形式に捉はれて、天賦人權論などを說いたが、一たび進化論に觸れてから、自說をひる返して、そんな妄想を打破する『人權新說』を著はした。これは明治十五年のことだ。世人は渠の論據を知らないで、曲學阿世の徒と擯斥した。渠は、それにも拘らず、着々研究に研究を積むに從ひ、『強者の權利の競爭』（二十六年）となり、『道德法律の進步』（二十七年）となり、『道德法律進化の理』（三十四年）となり、『自然界の矛盾と進化』（三十九年）となつた。また、今回の小著と雖も、その說くところは明治十五年以來少しも動搖して居ないのは、隨分徹が生えたかの樣子はあるが、決して浮氣や私欲の沙汰ではない。それを、海老名牧師は今更らしく博士最初の變節を擧げ來つて、『明治の初年には人類平等說を主張せられたやうに記憶せらる』云々と、いや味ッたらしいことを云つたのは、牧師にも似合はない云ひ條ではなからうか？

牧師は、また、知力以外に想像推理、乃ち、信仰を重んじ、常に空想的論據に據つて、事物を判斷する徒の一人である。換言すれば、僕等の侮蔑する理想派の一人である。この派は知力の熱度が低い、といふ譯は知力で分らないものは苦もなく想像によつて信じ得られるからだ。自然主義の所謂知力の集中情化などはとても出來ない。つまり、それだけの熱烈な煩悶を以つて現實に堪へられない無氣力者の仲間だ。そこへ來ると、加藤博士は立派な知力主義であつて、想像を排し、迷信（宗教的推理はすべてこれ）を斥け、禪定を以つて催眠術の一種と嘲り、祈禱の效驗を否定し、自然法の外に超自然法を假定する二元論を許さない。知識と人生とに間一髮の分離をも許さない行き方は頗る僕等の自然主義的思想に似たところがある。

然し、渠の有する知力にも熱がないのは、理想派の無奮勵と對した違ひはない。人間精神の一方面なる知力ばかりを――學者の通弊だが――分離して、また殺して使ふからである。研究すればやがて分るといふに安心して、無責任な乞食が魚の骨や大根のかけらを拾つて歩く樣に、實際の苦と悲みとを忘れて、乃ち、自己の全體を忘れて、今一つ換言せば、

正當な自覺を得ないで、たゞ宇宙の斷片ばかりを集めて行く。それをいいとして居るのだから、苦悶もなければ、悲痛も感じない。さういふ態度は冷性水の如く、僕等に邪魔にこそなれ、利益にはならない。僕等の精神は知情意の分離を許さないで、いつもその合一的活動をして居てこそ、苦悶もある代り、生命もあるのだ。然し、惜しいことには、渠は僕等にこの自然主義を初歩の程度に於て教へたばかりで、その當座からして死んだ知力に自然法といふ死物を結びつけ、よう〳〵ミイラになつてしまつた。これは究理學者たる渠の運命である。

渠の自然が法といふ型に這入つて居るのは、宗教家の人生が神といふ型に這入つて居るのと同樣、虚空な觀念以外に何等の與へるものもない。神があると云つても、ないと云つても、現實の活動に狂ひがない如く、渠の云ふ樣な自然法では人生をあつたかく包むことは出來ない。勿論、渠は究理學者ではない、然し、究理の爲めの究理は、藝術の爲めの藝術と同樣、人生にあつてもなくてもいい專門である。僕等は數十年來一定の見識を備へて來た博士を、成るべく、人生と相交涉する人として見たいのだ。渠は進化

論に據つて從來の演繹的思想を打破し、傳習的感情を放棄した上に、利己主義の旗幟を鮮明にしたのは面白い。わが國民の愛國心でさへこの主義の變性たる利他心を以つて解釋するのだ。高尚ぶつて架空僞善の說明を喜ぶ徒の到底云へないところである。然し、利己主義の焦點たる自己は、渠に據れば、自然法のうちに消えてしまうのである。これでは利己主義の極致——個人主義——に達し得られないのみならず、藝術で譬へれば、ゾラ一派の自然主義であつて、その後發展した同主義に於ける自己の知力までも集中情化する底の熱烈性などは、とても人生問題として現はれて來ようがなからう。宇宙は自己のみの存在と自覺してこそ初めて熱烈な精神が出來て來るので——そこに至ると、博士の所謂變性的利他心をさへ許す餘地はなくなるのだ。これは博士の立ち場と僕等の自然主義との大いに違つて居るところであらう。

博士今回の著は耶蘇教（その他の世界教）がわが國體に有害なことを說いたものだ。海老名牧師は白ばツくれて、『近頃日本の人心が宗教に傾いて來た』のに、加藤博士の如き人

のあるのを怪むと様に云つて居る。如何にも精神上の訓練が足りないもののうちには、學者にしろ、學生にしろ、老年者は宗教を口にして高尚振り、若輩どもは信仰を振りまはして老成振る傾きはあるが、そんな素養不足のやからを愚夫愚婦よりどれだけ進歩して居ると思つてるのだらう？頼母しくもない事情を標準にして、頼母しくもない議論をするのは、尚更ら頼母しくない。宗教――如何に教會と信仰とを區別しても――を度外視するものは、最近思想を呼吸する仲間にます〳〵多くなつて行くのは事實である。自然主義は宗教の金箔を振ひ落してしまつたのだ。加藤博士が之をわが國體に關聯さして論じたのは、これまでにもそんなことが多くの人によつて度々あつたから、古臭く見えるだけだ。して世界主義的傾向のある耶蘇教がわが國の民族發展主義と相容れないのも、兩者の根底を究めれば、避くべからざる事實である。『カイザルの物はカイザルに、神の物は神に』とは、耶蘇が當座をつくろつた折衷論で、さうはツきりと區別のつくものなら、そのどちらかゞ不用に屬すべきものだ。

耶蘇教家は靈界と肉界とを分つて、後者の事件を以つて前者の境界を云爲するを淺薄ま

たは下等だとあざ笑ふが、特に前者の區分を立てゝ之を辯護するのも、僕等から見ると、下等でなければ、淺薄である。唯物論が形式に過ぎなければ、唯靈論も傳習の外はない。さりとて、物靈二元論の如きは、煮え切らない折衷手段である。僕等は肉靈の合一不離を説くよりも一層進んで、たゞ自己一體を認めるばかりだ。この境にあつて、加藤海老名兩氏の議論を比較すれば、加藤氏のから發足する方が、まだしも人生の實質、生命に直接に接觸し易いのだ。博士の方は個人主義の初歩、利己主義を標榜するだけ、博愛犧牲等の實は僞善的な觀念を容れる餘地が少ないからである。然し、博士が利己主義の變性として利他主義を認めるなどは、既にその説を曲げて世の傳習思想に降參して行く證據である。これは、ミイラ的學者が人生をミイラ的狀態に觀察して居るからで、そんな行き方は長谷川天溪氏の所謂『論理的遊戲』に過ぎなくなつて、その實は利己主義と云はうが何等人生の實際と相渉るところがない。博士自身もこの點を多少感づいて居るから、今回の様な國體論――渠はそれ以外に實質ある議論、たとへば人生論、文藝論等をする資格はない――を持ち出して、自己の冷たい所説を活かさうとしたのだらう。渠がこれまでの著

書や、哲學雜誌等に出した所論よりも、その熱度の高まつて居るのは珍とすべきである。

海老名牧師が唯物論者は『皇祖皇宗の威靈を信ずる人であるまい』から、『どうして大廟を尊崇せられよう』と反問するに對して、加藤博士には、『國家的崇拜物』は『全く現實物であつたのであるから、化物（天父、唯一眞神の如き）と同日に論ずることは決して出來ぬ』と云つてあるが、この問題は僕が最初に云つた崇拜と追懷との相違であるから、それ以上のことは云ふに及ぶまい。更らに下つて、牧師が日本人種は同一民族の發達でない、馬來人、アイヌ人、支那、韃靼諸族をも同化して來た事實を云ひ、これから更らに大帝國を發展維持するには、世界主義的思想に據つて『狹い意味の民族根性を脫し、人類根性を發揮せねばなるまい』と考へる、その所謂人類根性の奥には、神とか、正義とか、博愛とか、平等とかいふ、手段でなければ、空形式の傳習思想にからまれて居るものがあるに對して、博士にはいつも平等博愛正義神靈等の空想を打破して、人類は全く無形式の優勝劣敗、弱者は強者の權利内に吸收されてしまうといふ考へがあつて、渠は之を國家存立の問題にも應用したのだ　だから、博士の無飾的議論は、その根底に於て牧師の僞善的論法よりも遙かに痛切である。

先づ僞善的手段若しくは論法を離れて考へて見給まへ。個人々々の關係に於て、弱者の存在は必要と思はれない。その不必要な弱者を助けようとか、救濟しようとかするものも不必要なことである。然し世間は兎角その不必要なことにもつともらしい理由を附して、之を行ひたがるのは傳習思想に拘束されて居るからである。社會主義、世界主義、正義、博愛、慈悲、犧牲等の馬鹿らしい觀念はすべてこれから起つて居る。この諸觀念の有害無害はさて置き、根底に於て土臺淺薄なものではないか？宇宙はたゞ強者の足跡を印するところだ、強者の存在が乃ち宇宙であるのだ。人類の存在も強者の權利を維持して行くところにあるのだ。觀じ來たれば　強者がおのれを發展したところに文明も出來、國家も出來たのだ。之を一言にして云へば、極端な利己主義、個人主義、否、唯我主義である。加藤博士の説も、冷たい唯物的偏見を去つて、その科學的智識を壓迫して、結晶またはは蒸溜されたら、やがてこの境地に達すべきものである。

かういふ思想がどうしてわが國體と衝突しないかといふに、わが皇室とわが國民との組

織して居る國體は、極端な個人主義と極端な國家主義の甘く融合和解したものであるからだ。相對的個人主義は、自己の權利を主張すると同時に、他人のそれを認めさすのであつて、人類平等などいふ虛僞想はそこから出て居るのであるが、絕對個人主義は自己の實力（乃ち、權利）以外に何等の假定をも設けないのである。之が最大權化たる豐太閤の如きでさへ、わが皇室と少しも衝突しなかつた。日露戰爭に例を取つて見ても、わが同胞が國家の爲めに戰死したと云はれる、その眞相は個人個人の本能性の然らしめたものとしか思へない有樣であつた。之を、俗說に從ひ、大和魂とか武士道とかいふ名に當て塡めなければならないものとすれば、その大和魂または武士道なる物は、たゞ個人の本能並にその無飾活動を云ふに過ぎないのである。

それを、わざ〳〵、儒教を初め、佛教、耶蘇教等の教訓的若しくは宗教的形式に塡め込み、天眞爛熳の國家的即個人的活動を解釋限定するから、申し譯つきの愛國心が出來、その申し譯が分裂すればする程、その愛國心の熱度も減却して行くのだ。なぜかといふに、申し譯なるものは傳習家一派（宗教信徒はすべて然り）の架空虛僞な理想または信仰に附隨して

居るので、ありもしない力に向つて、自己のエネルギイを割愛する。つまり、專心になれないからである。ところが、わが國體は個人が乃ち國家、國家は乃ち絕對個人で、その間に殆ど相對個人の存立を許さない。上一人、即ち、最強者でなければ、殆ど何物でもないのである。わが國民はこの哲理を各々自己の本能に體現して身づからも亦絕對個人であると思つて居られるから、そんな特別な國家組織が出來て世界に唯一の國體を殘して居るのだ。絕對個人とは、直ちに宗教家の思ふ樣に神とか、佛とかいふものを想像したのではない。實は弱者を壓服または吸收した强者、乃ち、生存競爭の渦中に生き殘る、僕の『半獸主義』で云つた『悲痛の靈』である。僕は決してなまぬるい折衷家の所謂國家個人主義を唱へるものではない。然しこゝに至ると、國家は乃ち人生と同一物であるのだ。これが乃ち新自然主義の國體論である。

一民族または一區域內の競爭中にわが國家が出來た如く、わが國家はまた世界の競爭場裏にこの主義を以つて發展して居る。以上は心理的科學上の事實だ。自己が自己で苦鬪する程現實な事實はない。加藤博士は之を同一民族主義に解し、海老名牧師はまた不同民族

の同化主義と云つた。いづれにしても、僕の立ち塲に來なければ、わが國体の眞相には觸れないのだ。然し、牧師の所論の樣に、耶蘇教（または他の宗教）の所謂人道、博愛、犧牲等の僞善思想を持つて來るものは、國家即人生とは衝突するに定まつて居る。博士は、さすが科學を重んじ、わが國自然主義の初歩を教へただけあつて、間接にかも知れないが、この點を看破して居る。然し惜しいことには、その證明が單純貧弱で、少しも活きて居ない。これは、自然の外形に呑まれてしまう究理學者の常として、止むを得ないのであらうが、折角、多少の熱度を帶びた議論が、それが爲めに見すぼらしいものとなつてしまつた。

博士は多年自說の研究を積んで居る人であるにも似合はず、その材料が單純で貧弱である。いつも進化論を狹い範圍で押し通し、國家も『一大有機体』であるから、神經中樞問題からして政權と教權とは兩立出來ないと論ずる如き、現今の宗教反對には決して直接の効果はなからう。その上、餘り世間と交涉が少いせいでもあらう、宗教的害毒の例證が如何にも時勢後れの氣味がある。耶蘇教徒は國祭日に國旗を出さないとか、和英學校とせず英和學校といふとか、教育勅語を捧讀しないとか、かういふことはすべて古いことで、如才なき

渠等は遠くの昔から改めて居る。また、救世軍の大將ブースが來た時、『日本を基督に捧ぐ』といふ旗を持出したものがあつたのは、速成傳道師にはよくある　土百姓か土方の兒の無學なる所爲であらうし。天皇よりも天父をさきに呼ぶのも、あはれな迷信者には當り前のことだ。そんなことよりも、もツとしツかり攻撃すべきは、蘆花氏のコスモポリタン的妄想、海老名氏の有神的個人主義の迷信であつたのに。

更らにをかしいのは、マリヤが耶蘇を孕んだのに、その許嫁ヨセフに覺えがなかつたのを事實とすれば、他に密夫のあつたのは當前だが、博士が之を書いたのを、海老名牧師が之を責めて、『科學的研究は爪の垢ほどもない』と云つてある。牧師の僞善的論法がそんなことにも見えると同時、博士は、私通の子であらうが、若しそれが博士の進化論に叶つて居たなら、そんな事實をかれこれいふに及ばないのを忘れて居る。別項にも云つた通り、博士は自然の外形に呑まれてしまつて、表面の事理以外に及ぶ頭腦を持つて居ない。利己主義を唱へながら、それは單に死んだ道理であつて、この主義の本体たる自己を忘却して居るのだ。

渠は現代の趨勢たる人間本位、自己中心の苦悶を冷笑したことがある。そんな人から利己心の研究が出たのであるから、またその變性としての利他心も出來た。更らに變性すれば今度は自他無利心――乃ち死――であらう。こゝに至ると、渠の說く國家も全く人生と關係がなくなるだらう。それが渠の唯物論または唯理論の運命である。さりとて、僕はその反對なる抽象的な唯心說をも取らない。物心は自己の苦悶的存在に於て一元である。新自然主義の立脚地はこれだ。

加藤博士は世の迷信と空理想とを打破した點に於て有効であつたが、現代の新自然主義は既に渠を待たないのみならず、その唯物的傾向は、唯心說または宗教的信仰と等しく、僕等の進路に有害である。（明治四十年十一月七日作、讀賣新聞）

文界私議

（四）

◉現代の文界から足を洗ひかけて居る人々の談話は別として、まだ多少の關係があり、また現に活動して居る　重なもの等が、昨年中に發表した談話または議論の自然主義に關するものは、すべて之を主張しないまでも、之を退けたのは見えなかつた。古い意見を有する浩々、素堂諸氏のでさへ、之を採用して、たゞ解釋の仕方が全然違つて居るに過ぎなかつた。ところが、昨年末になつて、自然主義に公然反對しないまでも、何となく嫌みツ足らしい反語を漏らした二大家がある。一は夏目漱石氏で、他は博士坪内逍遙氏である。

◉漱石氏のは『鷄頭』の序文（朝日掲載）で、そのうちには、氏の用語例に依つて、低徊趣味といふ突飛な名目を掲げ來たり、不眞面目ながら人を茶化したところに味はひがある書き振りを是認した。これは虚子を推薦した言葉と見るよりも、渠自身の辯護と見做す方が適當であらう。昔の戯作者風を喚起しようとするのであつて、渠は實際たゞ學問ある戯作者に外ならない。低徊趣味の反對として擧げた自然主義の眞面目な行き方にも、滑稽はあり

諷刺はあるが、渠の如く不得要領な、してまた要領を得て見れば皮相淺薄な、ものではない。要するに、渠の所謂徂徠趣味を標傍して起る文藝家があつたら、渠と等しく、第二流、第三流、またはもつと下流の小説、脚本等を書くのであらう。

◉次ぎに、逍遙氏のは『今の小説を讀む普通の人のために』（趣味一月號掲載）で、大阪公會堂に於て喝采を博した演説筆記である。氏は一大文學者であつた、また現今でもそれであるかも知れないが、然しその云ふところを見ると、如何に通俗談とは云ひながら、常識的推測から來る架空臆測の合點が餘りあり過ぎて、文學に對する同情または奮起心が殆ど見えない。自然主義的小説が歡迎されるに至つた由來を説明するところなどは、至極甘い樣であるが、渠自身の皮肉が挿まれて居て、累の引例なども必らずしも當つて居るとは云へない。富士登山の譬へも決して當つては居ない。『登ると理想が破れるから、登らぬことに』して歸つて來た連中が、『富士の眞相は醜惡であるかのやうに云ひふらす』とあるのは、決して自然主義派の態度を眞面目に解釋したものではない。

◉且、『かくいふ私しは近頃の小説を餘り讀んで居ない』と云ひながら、殆ど斷定的にその

小説中の『人間は八三化七』であるとか、『標本其人よりも遙かに以下の人物である』とか云ひ爲すのもをかしいが、これは例の常識から來る明敏な速斷としても、『豆鐵砲がピストルに代つただけ』とあるが如きに至つては、まだ文學界に生命ある人の言とも思へない程冷淡な云ひ條である。現代の文學界が『書生氣質』時代、更らに下つて、舊早稻田文學時代の娯樂主義的文學界よりも遙かに進んで居るのを承認または理解する人なら、そんな冷語的説明はすまい。

◉渠が自然主義的傾向の小説から、如何にしてその弊害を避くべきかを説明する所など、全く文學に門外漢の行き方である。人は文學者たる坪内博士から現代の新文學談を聽かうとするのだらうから、正直な世人の誤解は、渠が自然主義派の第一弊を擧げた言ひ方を借れば、『その筆付き（否、云ひ振り）の如何にも眞實らしいところから生ずる』のである。藝術的、心理的、社會的批評眼を有する『善い批評家』を必要とするのも、最近藝術の傾向から見れば、既に餘り頼母しい説ではない上、活人生を描寫する小説を讀む準備として、『一番善いのは……活人生に觸れることである』とあるは、もう小説などは讀むに及ばないと

いふのと同前だ。然らざれば、新傾向の小説家は若輩に過ぎないから、まだ人生に觸れる作がないといふ反語だ。もつとも、如何に人生に觸れたと思つても、新傾向の小説は書けない頭腦もあるのだ。それならそれと明示した方が、普通人には分り易かつたのだらうに。

◉更らにまた小説などを『教訓の道具とも、材料とも』ならしめるつもりで、それに對する社會の『倫理教育の主義方針を立つることが急務である』とあるに至つては、世人をしてます〳〵文學から遠ざからしめる所以である。世人が小説から遠ざかつても、渠の所謂『規模の雄大な藝術』（西洋のオペラは勿論、渠自身の振事劇をも含む）に來ればいゝと云ふのだらうが、外形の規模が如何に雄大でも、内容の貧弱な音樂をあたまの鈍い現代樂家に附けさしたとて、渠の所謂『忘我用』、『海水浴式』のおもちやや位にはならうが、決して現代の精神生命を傳へることは出來なからう。

◉渠、坪内博士はその身づから辯護する通り、決して『道學者風の態度のみを取つ』た人ではなからうが、舊著『小説神髄』に據つて、勸善懲惡主義を破つて、自然主義の先驅なる寫實

の風を開きながら、その常識癖からして直ちに文學娯樂説を擴め、舊早稲田文學時代までの後輩をすべて之に靡かせたものだ。その後輩は、今、嶋村抱月氏を初め、殆ど皆この程度を以て滿足して居ない樣だが、博士自身はまだもとの通りであるらしく、且、その近作諸種によると、更らに淺薄な教訓的傾向を有して來たらしく思はれる。さういふ文學も、弦齋氏さへ持てたことのある世の中だから、それ以上の役目が決して出來ないといふわけではないが、それが爲めに新發展の道途を反語、、、、、を以つて、、、妨げるのは、僕等の取らないところである。

◉早稲田文學新年號に出た、抱月氏の『文藝上の自然主義』は、氏が近來の好研究で、兎に角、よく調べてある。氏がさきに標榜した『新自然主義』――實は新主義でないことは、僕がさきに指摘した――の純消極的態度が、別に積極的なのを認め得て、古いものになつたのもうなづかれるが。表象主義、神秘主義などが全く別物ではなく、同じ主義の轉化であることも論じたのは、僕等の考へに接近して來たのである。別に自己の斷案は下だしてないが、南山氏の『哲學上の自然主義』（同誌）と通じて、新理想主義に聯絡さゝうとするのは、然し

矢張り、かの早稲田風の常識癖から來る臆斷または折衷論に過ぎない。かのプラグマチズムが現代の新文藝と似通ふ點があるにしても、その新理想に馳驅しようとする傾きは、僕等の主張する新自然主義とは反對であるのだ。

◉自我を離れて架空の實在または空靈（因に云ふ、渠等は之を實靈視す）に走らうとするものは、これ乃ち理想派だが、渠等は他に內容を待たない自我その物の擴張發展を說く資格を持たない。僕等が渠等の所謂靈と肉とを二つながら冷笑排斥して來たのは、いづれも高尙なる無內容であるからだ。靈肉一体不二の內容は、たゞ自我一刹那の旨動的自覺、乃ち、悲痛に於て、高下大小の差別を絕して、最も厚くまた濃やかに感得されるのだ。純粹自我は理想の如き邪魔物を容れる餘地を許さない。この大事な生命に抽象的な理想をつぎ込むのは、アブサントに水をさす樣な者だ。僕等は、現實の一刹那に、最も厚濃な生命の醉ひを薰習すべしと宣言する。僕が本年最初の文界私議に於て、再び以上の說を繰り返す所以は、昨年末並に新年の雜誌又は新聞に於て、結論であるかの樣な不得要領な自然主義論を二三見受けたからで、現代の樣に薄弱な思想界がそれを實際の結論と見爲す恐れがあるからである。

◉帝國文學の一月號には、惡魔メフイストを以つてデカダン派を攻擊して居るが、餘り考へがなさ過ぎる。ゲーテ時代の暗黑面代表者は、一方にまた光明的方面を假定した上の假定物であつて、僕等の新自然主義に於ける如く、向上向下の假道を絕した大渾沌の實道を代表さす資格を以つて居ないのだ。デカダンを以つて克服せらるべきものと見做すのが既に同誌記者の淺見だ。この語は、ゲーテ時代までを拘束したあらゆる傳習俗型を打破して、熱烈不撓の大努力が人間に現はれる狀態を示めしたもので、かのイブセンなどは、同記者の云つた樣な、デカダンを克服してから立派な意力を現はしたのではなく、その意力と心熱とを充分自由に發揮したのが、初めてデカダン狀態となつて現はれたのである。記者は、若し薄弱な雷同者連を論じて居るのでなければ、殆ど議論の顚末を誤つて居るのだ。序に云ふが、同論文中に『嘗て藤村子の作に多感の分子があるのを批難した人々があつた』とあるは、僕にも當つて居るのだらうが、僕は單にセンチメンタル（純情的）なのを惡いと云つたことはないが、現代の如く心熱を重んずる時代となつては、單純な純情詩派は、もう、古典派の一部として、時代後れと見爲すべきものだと論じたのだ。

●同じ雜誌に、また、『詩歌と音樂との交涉』といふ問題が鳥渡述べてあるが、作詩に深い經驗のないものは、兎角、詩に音樂的作曲の附くべきものだと誤解し易い。詩の音律は音樂家の云ふ音律より獨立して居るものだ。詩には、詩としての思想と用語との統一に於て、一種微妙な律があつて、之れには大ワグネルと雖も決して一點一指の加ふべからざるところがあるのだ。マラルメなどが詩を音樂的に取り扱つたと云はれるのは、よくこの詩律に注意したのを指すのだ。これは詩が、音樂の附屬物であつたものから、段々進歩して來た所以だ。エーツが一種の朗詠法を案出したとて、それは渠一個の物好きに過ぎない。尙、この問題に就ては、僕の近頃公けにした『新体詩の作法』に於て、詳しく論じてあるからこゝにはこれだけのことを云つて置く。

●白星氏の劇『黄金の鍵』（新思潮新年號）は、一昨年に於ける泡鳴氏の『燄の舌』、昨年に於ける同氏の『斧の福松』並に青果氏の『第一人者』に次いで、イブセン張りの新劇である。かういふ風な作劇は、たとへ舞臺に迎へられないでも、他日の發展を期して之を發表する必要があらう。然し白星氏のを讀んで見ると、宮船長の方は、あれだけの人物だとすれば、大

して申し分はなからうと思ふが、肝心な妙子が作者の手にをへて居ない。戀を追窮する熱心で、狂人の如く現はれて來たのは面白いが、船長の死に行く胸にそれがないと分ると、『もうこれまで』といふ作中の某音を聽かしたにしろ、女の心が直ぐ、初めから正氣であつたかの如く、もとの夫に歸るのは、あり來たりの 敎訓劇の樣に 淺薄で、餘りあつけない。もつと充分につッ込んで行くべきものだらう。（四十一年一月二十日作、讀賣新聞）

文界私議（五）

◉温泉場へ來て、氣持ちのいゝ湯を出た合ひ間に、高濱虚子氏の『鶏頭』を讀んで見た。なか〳〵氣の利いた觀察を輕妙な筆で書き現はしてあるので、知らず識らず入湯の時間を一回過してしまつた。仕組みを変へた紀行文である、小説の材料を供する土地風俗人情記である。然しかういふ風に寫生文の變化した物を、新時代の考へを以つて小説と呼べるか、どうか、第一、之が疑はしいばかりでなく、次ぎに又文藝中の一科として、之を價値あるものゝ一に數へられるか、どうかゞ疑問である。

◉前回にも烏渡云つた通り、漱石氏は之を『明かな責任は持たない積り』（同氏の言）の分類法に由り、『觸れない小説』、『餘裕ある小説』、『娯樂の爲め』の小説と見做し、別に之と並行さして、『觸れた小説』、『餘裕なき小説』、『死活問題が出てくる』小説を擧げたが、この兩者は並行する物ではない、全く段違ひである。氏の暗に努めて辯護した、前者に於ける『低回趣味』と生死を無視する禪的人生觀とは、一時代前の人々に催眠術を施す様なもので、

わざ〳〵活人生の眼を塞がして、不眞面目な空理空想の假眠に安んじさすに過ぎない。素養のない普通人は却つて之を珍らしがり、高尚がり、嬉しがるだらうが、之を根據——乃ち、戯作者根性——にして、責任者の位にある自然主義の新發展作に對抗させようとするのは、殆と僭越の極、奴僕の分際を以つて主人の地位を窺ふ様な考へであらう。

◉然し、漱石氏にして若し奴僕の存在を主張する意なら、教訓小説、料理小説、廣告小説なども讀まれる社會だから、娯樂を目的とする小説も存在出來ないことはない。虚子氏の作もそれであらう。漱石氏の所謂『面白い』、『我々が氣の付かない所や言ひ得ない様な所』があつて、『風流懺法』の子坊主や舞ひ子、『斑鳩物語』のお道や梭の音などは、讀了後も確かにその印象は殘るが、それがたゞ僕等に關係のない別世界のことであるかの様な印象が殘るばかりで、新時代の唯一文藝に必要な深刻もない、沈痛もない、熱烈もない。これ劣等文學たる所以である。多少ロマンチクな點が空想を喜ぶ手合ひに歡迎されるのであつて、泉鏡花氏または故子規氏の行き方と同樣、くすんだ人物に派手な女、寂しい場所に意外な事件、坊主用語に町言葉、綠の色に赤い色など、お定りの對照物を持つて來る技巧と、

どうでも左右の出來る寫生と、たまに作者の氣を利かした暗示とが、僅かに作の生命を持續してゐるばかりだ。この情けない狀態を多少脫してゐるのは『大內旅館』だが、それも漱石氏が云ふ樣に『甘く』低徊趣味の程度を脫し得た作ではない。すべて淺薄不眞面目、拵らへた寫生——これで禪味がどうだのと云ひ出すのは、世人が禪なるものの無價値を知らないのに乘じて、現實界に殆ど無關係の山寺から、ほこりたたきと同樣の拂子を振つて虛假威しをやつてゐるのだ。

◉以上は、漱石氏の序文に對する前回の駁論を詳說したのだが、こゝにまたをかしい賞讃者を發見した。それは國民新聞の『東京だより』に於ける德富蘇峯氏である。氏は文章を以つて政治上の用具と心得てゐる人だから、もとより文藝に對する正當な見解を持つてゐないのは事實だ。然し、世人はそんなことを知らないから、これまで文筆（はじめは平民論者、後は御用記者——どちらも文藝に直接の關係はないが）を以つて立つて來た一人物として、その言論をそのまゝ信じてしまう恐れがないとも限らない。然しこゝに注意したいのは、氏が『鷄頭』を評する言が、その內容問題ではなく、たゞ外形の上にあることだ。

漢學的思想家の舊習に從ひ、たゞ文章上の趣向と鍛鍊とにあることだ。虛子氏にはそれが適當で、それ以上の觀察をする必要がなからう。然るに、その筆端は自然主義派の小說——內容を以つて論ずべきもの——に及び、矢張り、外形的觀察または雷同觀を附會し、『俗惡なる、野鄙なる、而して人をして恰も野店の白首を聯想せしむる過濃、過巧、冗言、冗句』といふことを發言してゐる。

◉蘇峯氏は實際に自然主義の作を讀んでゐるのだらうか？讀んだのなら、古い文章說に妨げられて分らないのだし、讀まないのなら、たゞ世人の囈語に誤られてゐるのだ。自然主義的作物は、外國のにしろ、わが國現代のにしろ——末派はどの派でも、常に論外だ——決してあながち野卑でもないし、『野店の白首を聯想せしむる』恐れもない。氏はこの事實を知らないで臆測してゐるのだ。文學のことなど少しは間違つても、經世、治國、平天下の上に大した關係はないと思つたら間違ひだ。『平天下』の考へは、國外を知らなかつた內辨慶の遺物であるが、現代新傾向の文藝的作物は、わが國をして世界に根據を有せしむる根本的活動の發現と見爲すべきものだ。その作物は、現今、『過濃』どころか、無趣味だ

と攻撃せられ、『過巧』どころか技術の不足を注意されてゐる。氏の觀察は全く顚倒してゐるのだ。

◉且、『俗惡』とは、御用金を取つて、而も取らない風に澄ました議論をしなければならない樣なのを云ふのだし。『冗言』とは、百五拾頁と云へば分るところを、氏が曾つて試みた通り、『二百頁にその四分の一を缺ける』と云ふが如きに當るのだ。若し自然主義派のおもな新作に野卑と思はれるところがあつたら、それは作その物ではなく、材料——たとへば、卑劣な御用記者の行動——などに必要上附屬してゐる感じであらう。また、冗句と見える點があつたら、內容その物の必然的說明であらう。かの寫生文的小說の如く、如何に『文章は概して簡淨』であつても、書いてあることが全體に無內容であり、然らずとも、また表面的であり淺薄であるのとは、決して比べ物にならないのである。

◉かういふ寫生文派は、頭腦がないのに、筆さきまたは技巧を以て何物かをまとめようとする惡傾向の發現で、わが國の未熟な洋書界に於て一時盛んであつた寫生派——現今のおもな書家連は、すべてその範圍を固守するより外に行き場がない樣なハメになつてるらし

い——とその狀態を同じくしてゐて、いづれも初步の寫實主義的程度を越え得ないから、自我以外に自然といふ存在物を假定して、それを摸倣するのを藝術の本領と心得てゐる。この派に多少毛の生へたものでも、まだ自然主義が分らないので、自然と理想とを對立せしめ、『自然に聯關した理想的の感念を表はさんとしたものが藝術である』と樣に云つてる。かういふ餘り新らしくもない見解から、『偏狹なる自然派』と攻擊されるものは、その論者その人が毛のない時に屬してゐた寫實派であつて、決して自然主義派には當て嵌つてゐない。『方寸』といふ雜誌の一論文がその程度である。

◉曾て萬朝報の募集書に、『自然派の流行』といふポンチが出で、自然崇拜といふ旗を押し立ててゐるのがあつたが、あの投書家も方寸記者と同程度の考へを持つてゐたのだらう。新自然主義派は渠等の所謂自然をも、又理想をも排斥するのだ。その代り、渠等の夢想する『技巧と理想との圓滿極美』よりも實質的な、有價値な狀態を、靈肉不二の自我その物に發揮するのである。少くとも、現代の藝術はその方向に進んでゐるのである。そこに至つて、初めて最も深刻な、最も沈痛な、最も熱烈な自然が活躍するのである。蘇峰氏は勿論、

漱石氏も恐らく、かういふ文藝の出現を正當に承認または期待する頭腦はなからうと思ふ。如何？

◉某雜誌に、僕が僕自身を引き合ひに出すのを『自己の廣告』と云つてある。然し、同記者の如き匿名を用ゐず、泡鳴が泡鳴自身のことを引照する程確實なことはなからう。殊に僕の議論に就ては、現今の文界狀態に於て、僕自身の論著または詩篇を引照しなければ、他に引照するものがない場合があるのである。且、同記者は、僕が少しも人身攻撃に渡らないのを見て、如才がないと云つてある。不見識も甚しいではないか？僕はこの文界私議に於て文界の公事を私議こそすれ、六號活字を學んで人身上の攻撃をやる必要は感じないのである。（四十一年一月三十一日、熱海に於て作、讀賣新聞）

文界私議（六）

◉現代の日本に於て、詩人と云はれ、小説家と云はれて、而もその天才的資格を保つて行けるものはある。然し、あはれな哲學界に於ては、哲學研究者こそあれ、哲學者と稱し得られるものは殆どなからう。かの三宅老博士が、保守的ながらも、一種獨得の説を發表してゐる外には、その創才、その實際的素養に於て、失禮ながら僕の著はした『半獸主義』までも行ける學者があらうとも思はれないではないか？今日は、もう肩書きと留學さへ出來ればいゝ時代ではない。外人の著——カントやショーペンハウエルにしろ——を紹介すればいゝ時代ではない。平凡な空理を百年も千年も斷定されてゐるかの樣にふり廻はす時代ではない。して、それ以外のことをやつた哲學研究者はどこにあるのだ？

◉渠等が賴みの綱としてゐるのは、論理である。して、その最も確實だとする歸納的論法でさへ、ベーコン以前の思想界に行はれた演繹法に、一個引例を加へて普通確實らしく見せた僞法に過ぎないことは、既にその道の思索家等が分つて來た位ではないか？そんな論

理に迷はされてゐるのは、丁度、文界に於ける舊式技巧派と同前だ。渠等の祖とし、師とする歐米の大哲人等が建設した大系統ですら、夏の雲峯の如く崩れ去つたのを見ても、理づめの建設物は、信仰個條または無內容の技巧と同樣、全く取るに足らない物であるのが分らう。まして、その末派——わが國の哲學研究者はすべて皆然り——に至つては、その僞法に僞法を重ね、空理に空理を加へて、遠く活人生とかけ離れ、無內容の抽象觀念に滿足して、身づから高遠な理想あり經綸ありと思つてゐる。現代の進歩した詩や小說——舊派のは知らず——に、そんなあはれな理想や經綸がないのは、寧ろ名譽であるのだ。たとへば、田中喜一氏が（明星に）金子筑水氏が（中央公論に）出した議論の如き、この點からして全然返り見るに及ばないのだ。更らに又生命とすべき何の自覺もなく、何の獨得もない空論者連が、道學根性を以て、わが文界の、兎に角それ〴〵特色を發揮して來た實世間的內容派の作物に口嘴をさし挿むのも、全く僭越と云つていゝのだ。

◉丁酉倫理會並に同一味の仲間が道學者連に過ぎないことは、その歷史の初めから指摘されてゐることだ。この一事並に前項の理由に據り、自然主義の根本問題などに就ては、却

てあたまから渠等と論爭する必要はない、且僕が旅行やら轉地療養やらで時期は失したが、近頃倫理講演集（一月號）を見ると、小事に於て、渠等に多少の注意を與へたいことがある。その代表として今塚原政次郎氏を取る。氏は自然主義を以つて風敎頽敗の一原因に數へではあるを——ありとすれば、それが却つて自然主義派の小說に材料を供するので、且、たが、この主義は決して頽敗の原因ではない、風敎の頽敗が——どの時代にも、或程度まこの種の作は頽敗その物を描くのではなく、そのこゝに至つた內部的過程を目當てにしてゐるのだ。肉情挑發などいふ程度は經過して、人性の根本問題に突入する態度は公明正大なものだ。之を見て變な心を起すのは、裸体畫を見慣れないものが、聖母のそれに接しても、害があると同樣、論外である。それと同時に、また、現今の社會はまだ氏等の樣な道德論者、乃ち、卑怯な側面觀察者輩の臆斷する程頽敗してゐないが、生存競爭と神經衰弱との度がもツと激甚になつて來ると、風敎も亦もツと敗れて來るだらう。卓上の救濟策も、社會主義も、警視廳も、これは如何ともすることが出來ないのだ。煮え切らない虛僞の拘束案は何の役にも立たなからう。その時に至つても、自然主義ばかりは、平氣で、最も眞

實に、また最も健全に（眞の健全はそれであらう）内部的描寫をつゞけ、理づめのではなく、生きた眞理の道を辿るのである。

◉かういふ主義は危險だと云はれるかも知れないが、氏の言に據つて、眞理が『惡影響を社會に及ぼす』から、『斯學專門家の間にのみ發表するに止められんこと』を望むのは、曾て本欄に於てXYZ氏も烏渡注意したことがあるが、眞理を手段視する閑人のことであつて、果して間違ひのないものなら——たとへば、新自然主義の行き方の樣なものなら——一時の惡影響は他日の善影響とならう。塚原氏の言の如きは、裸體畫が腰布御免になつた世の中に、再び眞理に腰布事件を起さうとする愚論である。講演集記者は、ロンドン並にニューヨークの雜誌ブツクマンの愚論を紹介し、暗に自派の應援を得た如く思つてゐるらしいが、あれは愚論を重ねたに過ぎない。ガリレオの地動說がその當時の敎會の便宜を妨げた樣に、新自然主義——寫實程度に止まるものと混ずる勿れ——も或は社會在來の便宜と慣習との邪魔になるかも知れないが、それは頑迷不靈、少しも新時代の新空氣に觸れない俗習家、形式家連中の邪魔になる計りであるのを忘れてはならないのだ。

◉次に、宮田修氏の（同集同月號）で、氏は現代文藝思想の所緣三ヶ條を擧げ、そのうちの『際物師的文士の醉興』を採らなかつたのは諒とすべきだが、『元より天才の唱へ出したものではない』とは、氏等の社會のあはれな狀態を以つて、直ちに、天才的分子を含んでゐる現代文界を揣摩したのだ。よしんば、氏の言の如く、ただ『時代精神の發露』で、『現代文明に對する革命的思想』と見たところが、それが爲め果してわが國家が古聖賢の多かつた希臘の如く滅亡する運命を持つてゐるなら、ソークラテースもなく、プラトーンもなく、アリストテレースもない現今の哲學界にうごめいてゐるもの等が、如何に憤慨して、てんてこ舞をするとも、決して及びのつかう筈はない。日本語をあやつるものは、誰れしも日本の滅亡を乞ひ願ふ樣なことはないから、まア、安心して文界の天才分子にまかして置く方がいい。

◉氏はまた有る物を『有りのまま』に描寫するの不可能を心配したのは尤もだが、これは古い寫實主義を以て僕等の新主義と取り違へてゐるのだ。『ありのまま』とは、種々複雜な意味があつても、文界の人々がその概念を簡單に發表する哲學的用語を知らないところか

ら、假りに使用してゐる語であつて、決して純客觀、最消極的描寫——乃ち、氏の所謂『寫眞師的』または『奴隷的の不自由な命なきもの』——を意味してゐるのではない。之と同時に、また、寫實派に毛の生へた位のもので、氏等の如く實際的素養の淺薄なのが、前回にも云つた通り、寫實的自然に生命を與へるつもりで、必らず抽象觀念——理想とか、俗習的主觀とかいふもの——を背景にする、ヲルヅヲルス一流の自然を意味するのでもない。

◉ヲルヅヲルスは英國に於ける自然主義の端を開いたと云はれるが、前項に云つた點はどうしても自然主義以前または當初の時代を脫することが出來ない。國木田獨歩氏は（早文二月號に於て）知つてか知らないでか、頻りにさういふ自然を賞揚したが、そんな自己以外または自己同伴の存在を假定した自然を、如何に『大』とか、『神秘』とか、『美妙』とか、『悠久』とか、『不思議』とか形容しても、空の空なることは變じない。『ヲルヅヲルスは……不可思議なる大自然と人生とを別々にしては考へなかつた』のは、多少自然主義に接してゐたが、この兩者を理想といふ抽象物に於て調和さしてゐたのだから、殆ど取るに足りないのだ。多少舊式な獨歩氏自身の考へでも、その作に徵しては、そんなものではないらしい。

在來の純情的傾向を脫して來た、田山花袋氏の近作に至つては、なほ更らそんなものではない。

◉宮田、金子氏一派並に早稻田文學（二月號）に於ける藤井健次郎氏の樣な人々は、寫實派の生命なき自然にあらざれば、理想派の抽象的描寫より外に知らないのだ。してその後派を根據として專ら前派に當つてゐるので、また殆ど新自然主義の內部には觸れてゐない。花袋、獨歩、その他の諸氏が『ありのまま』といふ語を常用するのは、前々項にも云つた通り、適當な哲學的用語を發見し得ないからであつて、その意は俗習的主觀を飽くまで排斥して破壞的主觀を自然と觀ずることである。云ひ換へれば、かの道學者達の考への樣な、對立さした自然と理想とを假定しないで、僕の所謂自己、乃ち、刹那の盲動力を直接に描寫觀想することである。今の新派と云はれるもの全體が必ずしもさうではないかも知れないが、渠等が分つて來れば來る程、その方向は僕の云ふ通りに進んで來るのである。

◉理想派は現實以外に理想境なるものを想像し、そこへすべて現實中の肝心な內容を運び去るから、渠等の見る現實は中果（なかみ）のない汁の樣な物だ。そんな現實を寫すのなら、寫眞屋の

如く、また舊式寫實派の如く、それ身づからでは立てない、乃ち、理想とか娯樂とか實用とかいふ後ろ楯を持つて來なければならない 第二流、第三流、または第四流の物であらう。然し、內容派の現實には、非常な熱度を以つて、理想と苦悶とが燃燒してゐる。人はただ之を解釋の相違だけと思ふか知れないが、之が爲めに、藤井氏が得々として『先づ美その物の理論の上から彼れらを屈服せしむるの用意がなければならぬ』と云つた、その舊式美學を僕等は根底からくつ返す必要がある、否、既にくつ返してゐるのだ。道學者連は、渠等自身のおぼえた美學の舊形式を楯とし、その所謂美醜の判斷を以つて自然主義派に當り、眞を描けば又之に腰布をまとはせよと云ふ。然し後派の目指すところは、善惡でないのは勿論、また美醜でもない。乃ち內容的眞理、知情意合一して燃燒する現實、更らに云ひ換へれば、われなる物の悲痛——二葉亭氏は簡單に之を實感と云つた——である。新自然主義者は心理的科學者である。この派を範疇に入れる美學はまだ出來てゐないのだ。

◉自覺の聲である、自覺しても自己以外に何物をも賴まない聲である。つまり、自己が自己を求むる聲である。僕は初めから之を無解決の文藝と主張した。早稻田文學記者片上天絃

氏は、その二月號に於て之を敷衍し、『人生の歸決を失へるものが、最後の解決を求めて未だ得ざる不滿の情』といふを以て說明したが、それでは、まだ、その『いまだ』の言の後に理想派——誰れかと云へば、矢張り金子、藤井、田中、塚原、宮田氏等の徒——を呼び起す餘地を與へてある。理想の內容を現實から引き離して考へようとするものは、どうしても、第一流の新文藝を作成することが出來ようとは思へない。或は一時の偸安的解決は附かうが、それと同時に心熱、深刻、强烈等の最上特色は失はれるだらう。偸安的解決よりは永遠の懷疑と苦悶とに寧ろ人生の眞相と生命とがある。新自然主義派の作物は、平凡な材料を取り扱かうことがあらうが、いつも大懷疑と大悲痛とを光背としてゐる。藤井氏の樣に、呑氣に、舊思想に從ひ、『藝術は一時人間を忘我の境に導くのみでない……慥かにこれは救はれる』など云つてはゐない。また、塚原氏の心配してゐる樣に道學者を破するに、『文藝は專ら美を理想として』云々などは、樗牛時代の常套語は繰り返さない。而もこれが新時代に生れて來た眞の藝術であるを如何にせんやだ。これは決して講演集(二月號)記者の所謂『文士の放言』ではない。且、同記者は、『ロマンチクの文化階級をも通らない、この日本の

文藝界にナチユラリズムを囃し立てるのは、本に竹をつぐやうではないか』と疑つてるが、それも迂濶な言であつて、僕等は長い徳川時代から今日に至るまで、ロマンチシズムには飽いて來たのだ。

●材料に關して、また、道學者連並に之に類する徒は、外形的速斷を爲し、單に醜または肉慾ばかりを描くものとして、僕等を攻撃してゐる。ただ一種の反動として、こと更らにその方に走るものもあらうが、それは決して僕等の道でない。前回に駁撃して置いた蘇峯氏の様な、新聞記者流の淺薄な觀察なら、まだしも一笑に附して置けようが、一般人を越えて思索すべき學者の見解としては、餘りに無能無識と云はなければならない。現代文明の一面は虚禮虚僞を以て塞がつてゐる。然し、見るものが見れば、裏の裏まで見え透いてゐる。人間は獸性を有しながら、恰も有しないかの様に裝ふ教育ほど不健全な物はない。わが國が露國に勝つたのも、歸するところ、獸性の力、乃ち、最後の實力が強かつたからである。それを、道學者の大事がる文明とか、理想とか、道徳とかいふ裝飾的空理で行つて見給へ、わが國は遠くの昔、却つて滅亡してゐるのだ。獸性發揮は必ずしも肉情挑發ではない。トルストイの如き道學者ですら、さすがにその親玉になれるだけあつて、その作つた小説には、人間を引き下して、獸性どころか、殆ど科學的元素にまでも碎いてしまつたと云はれるのは、最も深い意味のあることだ。文科大學のロイト博士の如き平凡な耶蘇教師までが自然主義派評（毎日電報）をしてゐるが、渠はわが日本の世界に於ける新奮勵と新立脚地とを知らないのは勿論、英語小説以外に如何なる小説が行はれてゐるかをも知らないのだ。

●文明とは、宮田氏等の考へた様に獸性を遠ざかることではない、却つて獸性を練り、鍛へ、熱せしめ、強からしめることである。耶蘇教に引ツかかつた歐米の文明はさうでないかも知れないが、二十世紀の日本文明はさう行かなければならないのだ。之を初めて主張したのは、教育家でもない、宗教家でもない、經世家でもない、哲學者でもない。將來に於て認められるべきこの名譽は、實に、わが文界の一角に立つ僕等、新自然主義派の上にあるのだ。僕の所謂『自己の盲動力』とは、獸性の上に、靈肉合一の苦悶と懐疑と生命とを吸收したエネルギイを云ふのであつて、未練者が若しなほ理想に眷戀するなら、その俗習的主

觀を破つて、この中に之を探るがよからう。泡鳴氏はこの主義を以て相馬御風氏の所謂『僞らざる自己の詩』（早文二月號）を發表してゐるし、小說界に於ては、また、おなじく花袋、獨歩、正宗白鳥、眞山青果等の諸氏があつて、長谷川天溪氏（太陽二月號）の所謂『人生に於ける敗北者』、『寂しき生活』、『內面描寫』等、この主義に相當した題目と描法とを選んでゐる。これをしも肉情挑發と云ひ、不健全と云つて排斥するのは、俗習俗型の夢に眠つて、新生活、新文明、新時代の曉を知らずに寢過す所以であらう。

◉方寸記者石井柏亭氏の僕に對する批評（答辯ではなかつた）は、おもに畫界の人々が文界の人々に對する不滿の聲であつて、あながち僕ばかりが責任を受けてゐないし、また、僕の今回の議論でおのづから分つてることもあるし、また、これが餘り長過ぎた上、次回には少し彫金界のことを云ひたいのであるから、ただほんの簡單に根本的答へをするのを許して貰はう。氏は『藝術に尙ぶべきは第一に感興である』と云つたが、その感興なるものが、氏の言によつても分る通り、『人は種々である。』そのうち、古典派、寫實派、娛樂派等に屬する性質のものが『廣い』（換言せば、一般の）近代人には通いて來るともあら

うが、そんなに半ば舊時代のものまでも乃ち、第二流以下の作風までも）引き入れて、最も現代的な代表思想——それが、ホメーロス時代にホメーロスが殘つた樣に、後世に對する唯一土產だ——を論ずるに及ぶまい。たとへ、末派までも引き連れて行かうとしても、後世の品評家等が承知しまいではないか？僕が決して偏狹なのではない。僕等が文藝に對する最上標準は、最も深く現代生活に觸れるところにあるのだ。現今の詩や小說にまだ充分なところまでは見えてないのは僕も認めてはゐるが、『近代人の所作が私を强く動かす』といふ氏が、『鷄頭』と『蒲團』との間に區別を置くことが出來ないのはをかしい。今一つは、靜物畫や肖像畫のことだが、たとへば、新時代の導きをしたベクリンなどの樣な大家のを見ると、自分に關係がある樣に思ふところもあるが、不幸にして、僕はまだ、わが國洋畫家の作のうちに、花袋氏や白鳥氏の小說に對比される程のものを發見したことがない。

◉松原至文氏はわが詩界を責めて、『聲調の過重と沒却』を擧げ、僕のを沒却の方に數へたが、『或程度までは沒却せねば』新感味は傳へられないと認めた氏が、まだ半ば舊式の技巧見に囚へられてゐるのであるまいか？僕の詩に於ける發想法は、もつとも三四年前とその

以後とは考へも違つてるだらうが、全く他人の跡を追はない、僕獨得のをやつて來たのだ。それを、形式を喜ぶ古典派的な明星を初め、之に雷同するもの等は技巧の拙なのだと云つた。それにしても、決して僕自身の内容と聲調とは他人の追從を許さなかつた。これは聲調の沒却ではない、僕の技巧が僕の獨得な行き方を持つてゐたので、他人の俗習的豫期以外に出てゐたのである。（四十一年二月十七日作、讀賣新聞）

彫金界の過去及現在

或外國人の專門家が、わが國で、金に彫刻した大黑神の立像を得て、あちらへ持つて歸つても、非常に珍重してゐたさうだ。それは片足を擧げて立つてる像であつたが、一方の足が少し短くつて、解剖學の原理には叶つてゐなかつた。然し、それが却つて面白いのだと云つて珍重したなどは、渠が餘り窮屈な科學的流儀の流行するに對する反動であつて、かの畫家詩人ロセチがわざと首筋の細過ぎる、手の長過ぎる女を畫いたと同樣、ロマンチクに走つた惡癖だが、その惡癖が指摘せられながらも、ロセチの筆には嶄新敏感な長所があつたと同樣、その足あげ大黑にも何かの時代的特色があつたに相違ない。在來の日本畫、日本彫刻等はすべてさういふ風に見て行くべきものであらう。單に解剖學的でないといふ消極的理由ばかりでは、之を鑑賞するものが如何に外人であるにしても、專門家の見識と受け取れる筈のものではなからう。

彫金の專門的特色は墾の使ひ方にあるのだ。『日本諸美術』の著者エドワードヂロン氏が

云つた樣に、『日本鑑定家等の第一に注意を引くのは、技術家の手中なるチズルの行動にあるのだ』、乃ち、また、『筋肉の働きが直接に技術的意識の必要に應ずる』ところにあるのだ。之に關して、明治拾年頃までの創作とそれ以後のとを、外國の日本通ははツきり區別してゐて、最近物は、如何に大きな物が行つても、殆ど相手にして呉れない。さきには、鏨を以てぶツ込むのが主眼で、さうすると表面はざらついて見にくい樣だが、力があり、趣きがあつて、錆びを生じて來ると、無類の妙味が出る。それが、近來の如く、手を省いて單に削つてしまう樣では、如何にもてか〳〵して奇麗は奇麗であつても、勢ひもなければ、奇拔もなく、且、この方では、外人がバイトルを以て機械的にやる結果にとても及びやうがないのだ。

鏨（△△△△）の種類も多くあつて、シブタガネは細かい摸樣を彫る時に、カタギリは線の片がはをそぎ落して行く時に、ナメクリは深くぶツ込む時に　ナラシタガネは裏おもてから打ち固める時に、ケタガネは唐草摸樣を彫り現はす時に使ふのだが、近來はただ簡單な種類を以つて打つたり、削つたりするらしい。特別な個處に特別な　タガネを　用ゐる樣な忠實な風

は、殆ど全く跡を絶つてしまつたらしい。それに、以前は町彫りと云へば煙草入れの金具を、煙管彫りと云へば煙管ばかりを、かんざし彫りと云へばかんざしばかりを、飾り彫りと云へば神社佛閣の金物を、腰元（こしもと）と云へば刀の目貫きを專門であつて。たとへば、煙草入れは菊川、目貫きは後藤などと定つてゐたが、そんな分業では成り立つて行かなくなつた。もつとも、昔から道具科といふものがあつて、町彫りもやり、腰元もやるといふ樣に、どんな金工にも一通りの心得を持つてゐたが、他のものが十年の修業で出來るのを、これは二十年の苦心を要するのであるから、その人に乏しかつた。故荒川安五郎氏の如きも、この科であつたが、中途にして腰元專門に轉じてしまつたのだ。

後藤一流は、幕府の祿を受け、腰元として十五代四百年間もつづいた家だが、形式を墨守して、くすみ過ぎてゐたから、段々衰へて行つた。その中頃の衰運に乘じて、元祿、享保年間、かの一輪牡丹の彫刻を以つて有名な橫谷宗珉が、町彫りからのぼつて、目貫きにおても頭角を現はした。之に對して興つた土屋安親は、奈良家に屬してゐたが、その刀法は瓢逸なものであつた。黃門時代には、同流の赤城軒といふものが水戶にかゝへられ、そ

の一流は烈公時代にも及び、それから故海野盛壽、故荒川安五郎、故大川貞幹、海野勝珉、海野美盛諸氏の技術が出て來たのだ。勝珉並に故加納夏雄、伊藤勝美等の諸氏も、明治十年頃までは、日本彫金術の獨得たるぶッ込みに熱心であつたから、その時代の作はまだ外人にも歡迎されるさうだが、その後の物は殆ど返り見られない。といふのは、手が省けるからと云つて、外人の長じてゐる削り彫りを摸倣し、而もいまだ至らないところがあるからである。

人の摸倣をしても、それが別種の趣味を傳へてゐれば、立派なものだらう。たとへば、歐米を風靡したヌーボー式の圖案の如き、佛國の專門家連がわが國の宗珉、安親、祐乘等の根つけ、つば、目貫き等の彫刻摸樣を研究して、その上に意匠を凝らした物だが、充分な特色が出てゐるので、わが國人も亦之を學ぶわけになる。ところが、國人が鏨を以つてする削り彫りは、只手が省けて樂だといふ理由があるに過ぎない。ぶッ込みでなければ身づから滿足しない、かの中野泰次郎氏——日光廟の天蓋を引き受けた人、皇太子殿下御帶刀の目貫き彫りを命ぜられた人——を除いては、現今、伊藤氏でも、海野（勝珉）氏でも、皆不

熱心なもので、たゞさへ勢ひのなくなる削りを弟子等にやらせ、自分等は僅かに獅子の目とか、握つた手の指間とかいふ、力の這入る個處だけに鏨をぶッ込むで置くのだ。外人などの讃否はさて置き、わが國藝術の一種として、どうも賴母しくない狀態ではないか？それに金工の一種で、置き書、いろ書といふ、金地またに銀地に摸樣を切り込んだり、貼り入れたりするのがあつて、盛壽（もりとし）の總色書などゝ來ては骨の折れたものだが、今ではそれだけの苦心をするのが無駄だといふ樣に、たゞ金むくや銀むくに手輕く彫つてしまうのだ。

もつとも、彫金術は工藝美術的性質を有してゐるから、詩歌や繪書に比べて、ずッと多い程度に於て、需要供給の理に支配せられ易く、且成るべく勞力を少くして、まがひ物を以つて滿足し易い傾きはあるが、金錢づくを離れて、もッと藝術家肌の人物が彫金界に出て來ないものであらうか？廢刀令發布後、貞幹等が水戶から東京に出て來て、蛯屋に三兩の催促を受けながらも、平氣で仕事をやつてゐた樣なことや。安五郎が赤銅に大きな鯛を刻み、外人から意外にも百兩を貰つて、初めて家を持つた樣なことは、餘り利巧な現代には藥にしたくもなからう。その道には隨分考へのあるらしい三橋勝重氏の如きが、叔父に七

寶家の達人があるゆかりで、兩技を應用する必要がある勳章師になつてしまつたのは惜むべしだ。六十歳の中野翁一人ぐらゐでは、心細い次第ではないか？美術學校には、彫金科と鍛金科とあつて、前者を平田宗幸氏が、引き受けてゐるさうだ。美盛氏は兩科に渡つて研究を進めてゐるらしい。蓋はぶッ込み、削り彫り兩樣の役に立つ物だから、彫金科と云つても、削り彫りを教へるばかりのものではないが、現今ではそればかりに傾いてゐる樣だし。鍛金科になると、また、最も面倒で、而もそれを鑑賞する力を以つてるものが少いぶッ込みを應用する場合が多いのであるから、之に這入るものは殆ど皆無らしい。

容かして流し込むのは鑄造家の務めだ、勝手に切つて組み合はせるのは錺り屋の仕事だ。鍛金の妙味は、專門家等の所謂『出す減し』の鍛練にある。たとへば、鐵、赤銅、または金銀の一枚板を豫定の厚みにして置き、裏からうち延ばしてふくらますを『出す』と云ひ、表からたゝき込んで形を整へるを『減す』といふ。蓋と鐵槌とを以つて出來あがらすのである。出來上つたのを一見したところで、その殊に六ケしい大圓彫りの如きは、樂に出來る鑄物

——これは、その物は美術でなく、美術と云へるのは却つてその摸型にある——と區別がない樣だから、惜しいとには、之に骨折る人も少く、また之を鑑賞するものも乏しい。段々すたつて行くのも止むを得ないわけだ。然し、簡易でまた機械的なバイトル彫金に飽いてる外人などは、寧ろさういふ方に特色ある邦人の奮起を歡迎しようとしてゐるのである。現今の國狀を察すると、わが國では之を奬勵して行く道がないらしい。

トルコから歸つて來た人の話に、同國古代の軍人をぶッ込んだ銅物があつたのを見たさうだが、今はその術が絶えてゐる。鍛金の一種であつたらしい。英國博物館に行くと、鐵の丸彫り大鷲の置き物があつて、その館一等の呼び物になつてゐるが、それが鑄物ではなく、實にわが國の鍛金彫刻であるのだ。どうしてそんな立派な物を拾はれたかと云ふに、はじめは稻荷堀の越前侯邸にあつたのを、維新國引けの際、邪魔にでもなるからと云つて古道具屋に賣り拂つたのが、横濱に出て、直ぐ安値に外人の手に這入つてしまつたらしい。明珍一派の作に相違ないといふことだ。わが國の現狀では、もう、そんなに結構な物が出ようさうに思はれない。わが彫金界がトルコのそれと同一運命に落ち入らうとするのは、餘

り情けないことではないか？

以上は、たゞ、現今各種の彫金家等――多くは無學――が、職人根性を以つて不熱心をやり、且、自分等の職を奪はれるかと恐れて、一二の氣に入つた弟子以外には、心よく後進發達の道を開らかず、見すゝわが國獨得の一藝術がすたれて行くを忘れてゐるのを警醒するのだ。かの野村勝守氏が一人前の腕を持ちながら、飯焚きとなつて夏雄の家に入り込み、數年にして、その技を奪つて別に一家を立てた如きは、惡くは云ふものゝ、先輩が固陋因循な時代には止むを得ない逸話であつたらう。香川勝廣氏は、その人に學んだ上これを秘して、再び夏雄の門に這入つたからとて、他の人々から惡く云はれてゐるのだ。

更らに鏨彫刻の刻意から云つても、現今は、例の削り彫りばかりに傾いてゐると同時に、勢ひの拔けた寫生を專らとしてゐる。さきに引いた宗珉は、探幽、一蝶などの下畫を使つて寫生を努め、新たに繪風毛彫りを創意し、また片切り彫りの祖となつたが、鏨の跡には充分な精神が籠つてゐる。安親も亦その向ふを張つて、瓢逸な寫生の意を加へたが、これは多少後藤傳來の古法に拘泥したところがあるだけ、尙更らぶッ込みを怠つてはゐない。

この點に於て、この同時代の好敵手は、或程度まで、一致するところがあつた。古型必らずしも好いといふのではないのは、僕のいつもやる形式打破の論でも分つてゐようが、然し、古人はすべて熱心に鏨のぶッ込みをやつたので、それが甘く彫金的寫生に這入ると力が出來て、その物が生きて來る。今人は一般にこの意を失つてゐる、少くとも、この意を追行するだけの用意と忍耐とがない。

更らに又、かういふ種類の藝術の根本に於て、僕は一種の疑問がある。前回、柏亭氏に對する答へにも云つたが、破壞的主觀を以つて、現代生活に最も深く喰ひ入る作物でなければ、僕は最上の物とは思はない。この新自然主義の立脚地から見ると、僕の『新体詩の作法』にも云つてある通り、劇として最も高尙であつた從來の解決悲劇が滑稽染みて來て、自然主義的表象悲劇の前には、たゞ新諷刺劇として、一段下つた價値を有するに過ぎないと同樣、繪畫や彫刻的性質を帶ぶる藝術は、在來の詩歌や小說の位までを絕頂として、僕等の所謂暗示と自然主義的表象との上に立つ新詩歌や新小說と同等には登れないのではあるまいか？彫金などに比べると繪畫の方がまだ少しは自由から知れないが、それにしても

寫生と精神との渾融——讃めて云つても、只間接的な古典派の最上標準——が止まりで、若しそれ以上に出ようとすれば、ミレーの『夕の祈』の如く、遠く寺院の影を見せて薄暮祈禱の鐘を聽かすといふ幼稚な宗教的敎訓となり、然らざれば、また、ヰールッやベクリンの如く、空想を生命とする理想畫にならう。靜物畫や風景畫に至つては、紀行文も同樣ではあるまいか？音樂と雖も亦その傾向があつて、畫に於けるベクリンと同樣のロマンチクのうちに於て、僅かに活人生の面影を表現し得たばかりだ。その形式的性質上、どうしても、現代生活の苦悶に對する直接性——忘我を許さない藝術生命——が足りないから、新派の詩や小說の行き方程には心熱的に、深刻に、また强烈に現はれないのだ。之をしも柏亭氏の所謂『文意的』とすれば、之に對する畫意的または樂意的思想は慥かに一段下つたものであらう。

この疑問は、詩人、小說作者以外の藝術家、並に從來の美學者連には不滿足でもあらうし、また氣の毒でもある。然し、僕等が主張する新自然主義を體現する將來の嶄新美學が出來たら、必らず其新範疇のもとに之を規定するのではあるまいかと思ふ。(因みに云ふ、

之に反對するものがあるなら、皮相な見や舊式美學思想によらず、少くとも、僕の屢々する議論の根底を知つてからやつて貰ひたい。)ショーペンハウエルの如く音樂を最上藝術と見爲す時代がもう過ぎてしまつたことは、僕の『半獸主義』に於ても論じたところだ。今や詩と小說が最上位を占むる時代が來たのではなからうか？然し、その形式上忘我的要素を脫し得ない、換言せば、娛樂主義の傾向ある音樂、繪畫、彫刻等を、澁石氏の小說や逍遙氏の新曲と同樣、僕は兎に角第二流以下の藝術として見もし、論じもし、奬勵もしたいのだ。殊に彫金とか鎚金とかいふ、工藝的性質を帶ぶるものに至つては、その極新らしい意味から云つても、蜘蛛なり、蜻蛉なり、鷲なり、獅子なりの寫生が甘く行つて、それに力が這入つてゐれば、先づ結搆と見なければならない。それが片及彫りにしろ、浮き彫りにしろ、丸彫りにしろ、どうしても、たゞ或觀念より外現はすことが出來ないから、其根底の考へはクラシクを免れないのだ。それでも、なほ現今の彫金家等の不熱心は、この單純な意をも忘れて、わが國の特色を刻することに怠つてゐる。情けないではないか？

近頃の萬朝報は、彫金界に對する一個の福音を傳へた。わが國の駐佛外交官某伯爵が、

金無垢文福茶釜の目貫きを留め針に仕立てて持つてゐたところ、その精妙な彫技を巴里の一豪商が見留めたので、佛國金工に命じて之を摸造させようと努めたが、一年半も探して誰れもその難事に當らうと應じて來るものはなかつた。それが巴里美術家間の一問題となつたと同時に、今や同伯は數十本の摸造依頼を受けて、わが國に歸つてゐるとのこと。外人には摸造さへ六ケしい筈で、その作者は後藤家の元祖、東山時代に空前の妙技を振ひ、鏨痕凹凸の勁著なるを以つて、漢土傳來の幼稚な風を破り、わが國特有の彫金技法をうち出した法印、祐乘その人である。現今、銀座に出來た美術工藝會社に托し、懸賞競技法を以つて、この名作の摸造を青年彫金家にやらすさうだ。その競技法なるやり方のよしあしは兎に角、佛國金工には全く出來ないことが、わが國では、たゞ鏨工の熱心と不熱心との問題に過ぎないのを注意して置きたいのだ。

目前の計を立てて、たゞ便利な方に雷同してゐるばかりでは、藝術家たる意氣込みはどこにあるのだ？これは第一、現今彫金家一般の覺悟が面白くないに由るのだが、また一方では、社會に鑑賞力が乏しく、且、天才的分子の出現を奬勵する人々がないからである。めツたに作らない中野翁の作風が、國人には向かないで、却つて外人の喜ぶところとなるのも、決して意味のないことではなからう。（四十一年二月廿日作、讀賣新聞）

文界私議（七）

◉大學出の論客、生田長江氏の長文『自然主義論』（趣味三月號）は、まことに有り難いものだ。渠が煮え切らない美學者からしツかりした自然主義に改宗するの辭であつて、鳩山和夫氏が空手で政友會に轉籍したのと違つて、なか〳〵仰々しいお土産が附いてゐる。たゞそのお土産が、僕等の云つて來たことを再び並べ立てゝ、呉れたに過ぎないのは、少し飽き足らない様な氣がする。例のお得意な形式學を振りまはさないで、『美學上に謂ふところの自然主義は、吾人が是から論じやうとする中心題目ではない』と避けたなどは、まだしも餘程しほらしい遠慮ではあらうが、少し注意して置きたいことがある。

◉渠は、ブランデスの二元論的説明に據つて、人間の性情を人的、獸的の二面に解釋してゐるが、そんなことで僕等の主義は成立してゐないのだ。獸性の强烈に發展したのが靈で、靈性の緊縮したのが肉である。肉靈不二の意見は、メレジコウスキも僕等と同じであるらしい。若し長江氏の様に二異物が別存するものといふ見解で眞の自然主義的作物に臨むなら、如何に同主義者のつもりでも强烈なる獸性描寫（肉情挑發を云ふのではない）を見るに當り、警視廳的または檢事的臆斷を下だすことがないとも限らないのである。渠はまた頻りに他主義の藝術に對する寛容といふことを苦にしてゐるが、僕等は現代の心熱的努力を目當てにするのであるから、前時代の遺風を追ふものを、十九世紀または十八世紀の人々と伍せしむることは許さうが、この二十世紀では第二流以下に見るべきものと斷定するのだ。（『ほとゝぎす』に於ける青木氏も、僕がいつも云ふ心熱といふことに注意して貰ひたい、詳しい答へは次回にする。）これは必らずしも僕等が長江氏よりも偏狹な趣味を有する所以ではない。長江氏はミルトンの『失樂園』を『はじめの四五頁でうんざりした』と白狀したが、僕は少くとも拾數回讀み返した經驗があつても、而もなほ、今日では、あんな古典派の作物を取らないのである。

◉それから、また、寫實主義並に表象主義に對する自然主義の區別で、渠は餘り『文藝史上』のことを重んじてゐるが、現今の僕等には『差別を置かない』様なことはない。いつかも云つた通り、寫實主義は自然の外形を見てゐたのだが、僕等は自然を内觀してゐるのだ。こ

の傾向は單に思索上ばかりでなく、作物の上にもさうだ。近い話が、僕が來月の太陽で發表する小說『日の出前』を見てもわからう。表象主義（獨逸語のフォルステルングは表現と譯すべきもので、氏のいふ樣な混同の恐れはない）の說明に至つては、最も滑稽なことがある、氏の『文學入門』にも書いてあるが、表象派が非音樂的として遠ざけたパルナシャン派の主領ルコントドリイルを同派に數へてあることだ。それは外國の事情に迂いところから來た誤謬として一笑に附してもよからうが、坪內博士の『浦島』――かのドリイルの云ひ切つてしまう缺點を最も多く有してゐる物――を表象派の作中に入れたのを見ると、長江氏は情緒藝術とか、官能交錯とか講釋はしながらも、表象主義の實際を知らないこと、恰も海老名牧師の自然主義論（趣味同月號）に於けると同樣ではなからうか？

◉世の評家は、また、表象詩に於ける『音樂的』といふ意を誤解してゐるので、僕は近頃某會席上の演說に於て之を指摘して置いた。その演說はいづれ本欄に於て發表し、前回の彫金界を論じた文中の新藝術論を補ふつもりであるから、今回は表象詩に關する議論は避けて置くが、『文學を音樂的にしやうとする努力』は、長江氏の云ふ樣な、自然主義に對する

『一種の反動』では決してない。自然主義の轉化たる表象主義が眞の自然主義の根底に遠さかつたのは、却つて非音樂的な抽象觀念を取り入れ出したに基づいてゐるのだ。まだ自然主義の初步をも本統には踏まないうちに、直ちに表象派の大缺點なる觀念描寫に飛び込んだ有明氏の詩が論者の所謂『勝利』（？）を得たとは、たゞ官能交錯的技巧に於て注意を引いただけて、いまだ『自然主義の普及を意味する』ものとは、廣義にしろ、云ふことは出來ない。

◉そんな『韻文はそれ自體近代藝術全般の思潮より見て、左程重きを置かれてはゐない』だらうが、僕の主張する自然主義的表象詩論――自然主義が單純幼稚な表象主義に進步すると云ふものをぼつ〳〵見受けるが、それはわが國に於て發展する新自然主義を解しないのだ――を實現してこそ、詩も初めて新自然主義の範圍內に這入つて重きを爲すのだ。舊式技巧に拘泥してゐる詩界一般の代表者は他にあるだらうが、最近藝術としての詩を代表するものは、泡鳴自身の近作にあるのだ。序に云ふ、御風氏は早稻田文學に於て『今のわが新体詩人諸子は、眞に自ら滿足して詩を作つてゐるか』といふ疑問を發し、頻りに詩の句調と用語とを氣にしてゐるが、他の人々の答へは知らず、僕一個に取りては、句調は白鳥

氏の小説に於ける筆致と同樣自己の流れ出た物で、外形的には殆どそれがあつてなきが如くである。その一例を擧げると、氏等の使はなかつた八七調は氣の張つた時の感想に適するので、僕がさういふ氣であつた時は盛んに使用出來たが、この頃の僕にはそれが出來ない。また、用語に於ても、僕は僕自身の感想に相當なのを自由に使用して來て、隨分平常語に近づけたが、これまでの詩界は幼稚であつたから、それを『詩的でない』とか、『大膽』だとか、『ヂキヤブラリに乏しい』とか評してゐた。句調問題でも、用語問題でも、僕が無言で實行して來たことが、漸く自然主義の勃興と共に世間に分つて來たのではないか？氏が踏襲する抱月氏の口語說の如きは、殆ど門外漢的空論で、若し空論でないとするも、たゞ民謠風または端唄風の物を以つて詩全體を見ようとするのである。嚴肅な詩には、僕の行き方さへ自由過ぎると見られ、まだ一般は分らない現代だ。『である』『でした』式が嚴肅に使用される時がありとすれば、まだ〳〵後のことである。摸倣的に詩を作つて來た人々は、さういふ議論も刺戟にならうが、苟も內容派の素養あるものはそんな上ッ面な破壞に何の影響をも被るまいと思ふ。第一に努むべきは、詩に於ける情想上の形式——たとへば、

長江氏がこれまでの態度など——の打破であらう。

◉長江氏はまた『今日の自然主義を產むために必要なる準備として、ロマンチシズムが前立つてゐたとは思はれぬ』と云つたが、その無識は前々回に於て丁酉倫理會の一人に對する駁論にも云つて置いたところだ。わが國人は、德川時代からして、厭といふほどロマンチク文學に迷はされてゐた。近くは、鏡花氏の小說界を濶步した時代があるではないか？僕一個に取りても、『悲戀悲歌』時代はロマンチクな絶頂から直ちに實世間の苦痛に觸れてゐたのである。木下尙江氏の小說や、綱島梁川氏の宗敎論に至ては、有明氏の詩に於けると同樣、もつともらしいだけに最も弊害ある觀念的情熱主義であつたのだ。坪內博士の新曲も、內容と情熱とに乏しい一種のロマンチク物である。かういふ傾向が一轉脫化して來た新氣運を論者は見そこねてゐるのだ。自然主義派中の有識者は、決して『外國文學の輸入摸倣』に浮かれてゐるのではない。

◉最後に、論者は、自家が早く自然主義を唱へなかつた所以を辯解して、却つて『自然主義その物に累を及ぼさんことをこれ恐れたのである』と云ひ、僕等『龍土會一味の人達』より

も『前からして已に自然主義者であつた』と附言してある。然し、花袋氏が自然主義、否、寧ろ、寫實主義の轉機を表示したのは、論者が大學に於いてまだ美學の講義を聽かなかつた時であらうし、又、最近に新自然主義の先驅となつた僕の『半獸主義』の演說は、論者の例證とした『風葉論』の出たのよりも早かつたし、且、渠の論の雜誌藝苑に出た時、僕の說は既に一冊の書となつて印刷にまはつてゐた。それに又、『風葉論』を讀んで見給へ、コマンチク派の 鏡花氏、初步的 寫實派の 天外氏を 意味のない物を書く』とし、風葉氏が『屢々描き出すところの人間の獸性的行爲には、常に何等かの意味がある』とまでは云つてあつたが、その結論に至つては、今回のも同樣だが、態度として、大膽な自然主義者の素養も意氣込みもあらはれてはゐなかつた。弊害などは何にでもある、また如何に理由を述べてやつても、反對若しくは輕視されたものが不公平呼ばはりをするのは普通のことだ。之を恐れる樣では、主義的宣言は無用である。殊にまた論者の近著『文學入門』に於て、殆ど無意義な古典詩人等を以つて、詩界の最上標準としてあるのを見ると、僕等の新自然主義は勿論、さらに逆登つての情熱主義をも殆ど解し得

なかつたのである。

◉然し、長江氏は『正直に告白』して、『吾人の觀察は當らなかつた……自然主義者の運動は意外にも着々として成功を收め……少くとも文壇の中心勢力となつてゐることは爭はれぬ』ことを認め得たから、これからは、自然主義派の最も遠ざくべき理想派的美學根性を脫却して、自家の人生觀などはいまだしとしても、先づ、新時代の詩や小說を論じて見るがよからう。それが出來なければ、今回の改宗もたゞの空論とならう。

◉次回は海老名氏の『基督の自然主義』を評し、また青木氏の『批評家の態度』に答へよう。

（四十一年三月八日作、讀賣新聞）

『基督の自然主義』を評す

さて趣味三月號に出た『基督の自然主義』だが、これは常に世と迎合するをこれ事とする牧師、海老名彈正氏の談である。何でも自然主義で、ヨハネが蝗を喰つたのもさうだ、エピクロスの快樂説もさうだ、老子、莊子、蘇東坡もさうだ。然し自然主義者はそんな雜駁な頭腦を持つてゐない。無邪氣なエピクロスは僕等の初步を開いた者と云へるかも知れないが、ストア學派に至つては、人間を拘束して、僕等の最も排斥する抽象觀念に生きようとしたのだ。それに、キリストが斷食をせず、安息日に病人を癒したといふ樣なことは、當時の形式派を打破しただけの例證にはならうが、自然の內觀に於ては、矢ッ張り舊式な行き方で、架空の神（この議論の根據は『半獸主義』以來の著書まは論文に於て發表してあるから、無責任でないのを斷つて置く）とか、肉を離れた靈性とかを持ち出してゐる。木下尚江氏の『自然主義と神』（太陽三月號）も同じ行き方だ。之を『向上』と云へば、實質のない空廓に向上して行くので、積極的と見せかけた消極的建設の

最も甚だしいものだ。『どこが淺薄だらう』ッて、これ程淺薄なことはない。

たとへば、婚姻問題に於ても、キリストは『離緣を不自然』と見たが、論者も『本當の夫婦の情が精神に湧いてゐる時は』といふ條件を附けてあるではないか？そして夫婦の情はいつも熱くなつてゐるわけに行かないのは深い事實だ。それを恰も無條件であるかの樣に見爲すのは、教會では僞りを眞らしく云つてゐればいゝのだから、それで濟むだらうが、決して『人情の根底を見透してゐる』所以ではないのだ。

海老名氏の論據は、老子の所謂『赤兒の心、』キリストの所謂『稚な兒の如く』になることだらうが、イノセンスを以つては——詩經序の『思無邪』または抱月氏の所謂『純消極的態度』を以つては——僕等、新自然主義者の自覺的態度に比べられないのである。佛教界における海老名氏とも云ふべき加藤咄堂氏の『自然主義と禪』（新公論二月號）を以つて、長谷川天溪氏は僕等の一應援を得た樣に思つてるらしいが、その『人境俱不奪の境』は『假象』に過ぎないのであるから、まだ充分な自覺を與へないのだ。僕等は自覺した自然その物を實感的に觀ずるのであつて、キリストやヲルヅヲルスの樣な、空想に生命を送り込んでしま

つた跡の自然に歸れと叫ぶのではない。頭腦が空虛になるか、苦悶に堪へ切れないかすると、兎角、人はキリストの所謂『稚な兒』を思ひ出すが、それは自覺を失ふからのことだ。

論者は、また、『ロマンチシズムの行はれたのは、かのルーソーに負ふ處が甚だ多い』と云つたのは歷史上の事實だが、必要もないところでロマンチシズムが出たのは之を自然主義と混同してゐるのだらう。丁度いゝ說明がオスカーワイルドから引ける。半ば新藝術に這入つてゐたワイルドはキリストを最も開けた意味に於て解釋した者だか、かう云つてゐる、『吾人は、キリストに於て、かの人格と完全との密接な一致を認識することが出來る、してこの一致が人生に於けるクラシカル運動とロマンチク運動との間の實際の區別だ。』キリストの外形的破壞は自然主義運動の一部に合してゐるが、其當時に於ける思想上の形式を破り得なかつたから、まだ眞の自然主義派と同視することは出來ない。よく云つて、ヲルヅヲルス一流のロマンチク者である。

キリストは同時代の譬喩であつて、表象ではない。換言せば、理想家であつて、自然主義者ではない。形骸を殘して、內觀を逸した人だ。自然主義は外界または理想界をも打破し

て、自己の內觀その物に熱烈な表象の全價値を與へるのである。この主義に從ふものは、自己の行へない樣な空理または空想を假定して、之を自己（他人には勿論）に強いないが、キリストは之を強いて、而も自分では行つてゐない。一例を擧げると、かの離緣否定問題もさうだか、『おのれの如く隣りを愛せよ』、『人若し右の頰を打たば、左の頰をも向けよ』、——僞善者トルストイの常套語——の樣な敎訓だ。萬能の神力を假定しない以上は、——して、論者も今更らキリストを神とは云へまい——到底人間の行へることではない。（僕の加藤博士論參照。）

理想家はすべて僞善者である。して、この僞善が一般人に僞善と見えないのは、思想上には、同時代の形式を守つてゐるからである。思想力の薄弱で、獨創的素養の淺いものは、兎角、理想を說き易い。耶蘇も亦その一人であつたのだ。渠が名譽とせられる絕對的迫害を受けたのも、外部的形式の打破に多少の情熱がこもつてゐただけで、決して深い意味はなかつた。その證據には、渠の死は、國內に於ける舊宗派の職業がたきと、羅馬帝國派遣俗吏の人望維持的手段とに起因してゐて、少しも深い思想上に關する追及を受けた跡が見え

ない。キリストの人格は、乃ち、ワイルドの所謂ロマンチクな情熱に、同時代の平凡觀念を組み立てたこと——これは頗るクラシクだ——にあるばかりだ。

論者が『甚だしく形式に陷つた』といふ孔子は、決して耶蘇の樣な行へない形式は作らなかつた。之を『靈的自然の發動せる一大人格』とは、『大言壯語のやうだ』どころではない、全くさうだ。『靈的』といへば、何でも立派に聽えると思つたら間違ふ。耶蘇は大僞善者である。それがボーロとなり、アウガスチンとなり、ルーテルとなり、エスレーとなり、トルストイとなつて、近頃、わが國の高尙がり、文明がるものを非常に禍ひしてゐるのだ。君子に却つて手段が多いことは、僕の『旅中雜記』(趣味三月號)にも云つて置いたが、その手段に樂天的を構へる渠等も、僕等にならつて苦痛や、悲哀を說く時があらう。然しそれは抱月氏の所謂『現實修飾の悲哀』(早稻田文學三月號)で、思索力の上から云つても、暴露的悲哀とは、その深刻の程度に於て、殆ど比べ物にはならない。

自然主義者は修飾、僞善、理想、空觀念を排し、破壞的主觀を以つて、內觀、悲痛、獸性、無決、現實の上に、宗教家輩の容喙を許さない別人格を建設してゐるのである。(明治四十一年三月十日作、讀賣新聞)

文界私議（八）

◉ほと〳〵ぎす三月號に於ける、青木健作氏の『批評家の資格』（泡鳴氏に與ふ）を讀むと、その後ろ楯には虚子氏並に漱石氏がゐるらしい。僕はそのつもりで答へるのだ。先づ、論者の根本的誤謬から指摘しようが、知情意を別々に働く力と思ふのは、最近心理學の許さないところで、僕等の自然主義に於てはこの假定された三別力が區別なく活動するところに眞の人格の統一を認め、その統一の生命を僕は新造語を以つて心熱と稱する。現代人の自覺と神經とは之が爲めにます〳〵デカダン的鋭敏になるのであつて、苟くもこの事實を知つたなら、論者の如く現代文明の傾向を智的一方で、從つて神經過鈍だといふのは、誣言たるを免れないのである。

◉次ぎに、論者が自然主義的文藝に對する二種の傾向を擧げたうち、第二種、乃ち、『智の活動が比較的鈍く、その代り情意は非常にレフアインせられてゐる』のは、センチメンタル派を云ふのであつて、この派はテニスンまたは藤村時代を限りとして、既にその價値は定

つてしまつたので、今更ら之を喋々する必要がない。また、第一種として、『一方に於て智識慾は……強烈で、他方に於て……情意の活動も旺盛』な一派とは、論者の舊式心理學的論法での『人格の統一を失はない人の一群』だらうが、かういふ派がありとすれば、區別的心力の總合を夢見てゐるのであつて、いまだ心熱的人格にその創作を統一することが出來ない。若し果して智識慾の強烈、情意活動の旺盛が、僕等の主張する現代文明の根本精神までつツ込んでゐるものなら、敢えて異存はないが、論者はこの程度まで進んでゐないものを、常識、否、舊式な考へを以つて、こと更らに之を新自然主義よりも結構なものにしようとして、之が例證として虚子氏の小説を擧げたが、さきに論じた通り、事實は決して『現實生活に深き興味を感じ乍ら、然もその興味の中には名狀すべからざる悲哀を藏する』底の價値を虚子氏の作に許さないのだ。

◉論者が數へた二種の傾向は、つまり、第二流、第三流の文藝を標準としたのである。一流として殘るべきは、矢張、現代文明の精神——論者の所謂智的一方ではない、又神經過鈍とは正反對だ——を體現する心熱的文藝であつて、之を主張追行するのが僕等の自然主

義である。論者こそ却て新時代の精神を解しないのが分らう。程度の低い劣等文藝を以つて最上文藝と同一視するほど、論者の所謂『公平』を保つ必要はない。若しそんな必要があるなら、そんじよそこらの煮え切らない折衷論者等の哀を乞ひ給へ。僕等は、批評家としてそんな事情を打破して、渠等に不公平と云はれるのを寧ろ公平と思ふのである。虚子氏の『一夕話』（太陽三月號）にも、『今の批評家にとつて面白くないと思ふ事は、とかく直きに物に等級を付けて評價する事で』とあるが、等級を付ける理由のある物に等級をつけるのは世人の迷妄を開く批評家の任務である。

●藝術を僞りと云ふのは、『藝術の爲めの藝術、』乃ち、第二流以下の物を見てゐるのだ。新自然主義の極致たる刹那的藝術は、實感を内部から捕捉しようとするのだ。その刹那をはずして、實感の捕捉出來ないのは、人生のことと皆然りだ。人生を僞りと見ない限りは、この種の藝術も亦さうだ。素堂氏は二葉亭氏の懐疑的談話の眞意を取り違へてゐるのだらう。

◉後藤宙外氏の『靜苦動苦』（新小説三月號）は作者が大いに意氣込んで書いた物ださうだ

し、また實際に、これまでの大家であつただけの落付きも見えるのは、氏としては衰へてゐないことを證してゐる。然し、ゑルレインやイブセンの様に、鋭敏な神經が全部に通つて、その一言一句、一行一動に全部的意味が生動してゐる（少くとも、ゐようとする）作を讀んだものには、まだまだ充分な滿足は與へて呉れない。之を花袋氏の『布團』に比べると、前者にも僕等の希望する内部的描寫をしようとする努力が多少見えて來たと同時に、後者にも例のセンチメンタル分子の如き避くべきものがないではないが、前者の態度が舊來の觀念的解決の程度——この作者に限らず、すべて敏感性の不足から來る限界——に安んずるに反して、後者のは敏鋭な神經の微動によつて、肉靈不二の心理境を實現するまで、抽象的な解決を待たない刹那的文藝の傾向——たゞ傾向と云つて置く——がある。花袋氏の作は之を充分に追行してないとしても、この傾向を宙外氏の所謂『自力門』とすれば、その反對な『他力門』、乃ち、忘我用の方便文藝とは慥かに並行的ではなく、非忘我文藝は一段上の種類に屬する努力であるといふのだ。無解決無救濟を本然だと主張する僕等の結論はそこにあるのである。

◉描寫の部分的觀察から云つても、宙外氏今回の作中、對話だの、事件の進行などが——自然主義派と云はれるもの〻間にも現今では多いことだが、——ゞルレインの詩に於ける如くしんみりと直接に讀者にぶつかつて來ない。どうも、取つてつけた樣なところが多くつて、拵へた物で滿足しようとする行き方は、實際、觀念的程度にとゞまる人々の一大缺點だ。作家として目ざす材料の方面から云つても、和姦の問題が、もつとも、憚るところがあるからでもあらうが、『かうなつては仕方がない』とか、『罪』とか云ふ悔悟のうちにほのめかしてあるのももどかしい上に、宇南山と睦子とが婚姻問題のはかどらない間の心持ちをたゞ『一種の狂態とも見えるほどとなつた』とばかりで濟まし、結婚後、睦子の交際熱がさめて行く樣子なども、たゞ簡單な說明文句ばかりで終るなどは、僕等から見ると、他所の冗漫は引きしめても、かういふところに最も力を盡すべきだのにと思はれる。如何？（四十一年三月十日作、讀賣新聞）

中島氏の『自然主義の理論的根據』

轉地やら、過勞やら、父の病氣やらで、暫く私議を爲すのを怠つてゐたが、先づ、樗牛時代から道學者で通つて來た中島德藏氏の『自然主義の理論的根據』（中央公論四月號）を調べて見よう。中島氏には何等の定見もないのである。若しありとすれば、フオルケルトや百科全書を引ッ張り出し、古い歐洲の自然主義に關する說を拾ひ、それに從來の傳習哲學や美學論を當て塡めたのに過ぎない。僕等は、そんなことは百も承知の上で、さらに日本特有の、狹く云へば、僕といふ一日本人獨創の主義を宣傳するのである。氏はまだそれに對する批評の用意がなかつたのである。短言せば、氏の頭腦は僕等のそれの如く改造されてゐないのである。

頭腦から改造して來なければならない人に對して、僕等の新說、新主義を說明しようとするのは六ケしいことだ。然し、氏は『自然主義者は哲學者、道德學者の子である、弟子である』と稱して、暗に、僕がさきに本欄に於て駁擊して置いた丁酉倫理會員攻擊の論旨に當

り、且また、直接に、僕の主張する刹那主義を破らうとしてゐるから、無言で看過するのも禮を失するわけだと思ふ。全体、學者といふものは、自分の所説を發表するに當つて、兎角自他の利害を考へ過ぎるから、その云ふところに虚僞不定の分子が多い。カントの如きもさうである。從つて、その主張に生命がない。そのうちで、最も見込みのあつたのはダルキンの進化論とニイチエの個人主義だ。

先づ進化論に就て云へば、近頃、外國にもそれの反對説が起つて來た樣だし、また僕等も刹那主義を以つて之に反對してゐるのだ。然し中島氏は之を確乎不動の説と見て、『次第に高く生活するを好むの天性』を以て自然主義の非を攻めてゐるが、僕等は文明と共に外形の生活狀態こそ變つて來たが、内部の生命から見れば、何等の加ふるところもなかつたのだ。たゞ強力なる生慾の發現が勝利を占めて來た形である。自然主義派はこの生慾なるものに對して覺醒したのであつて、同派にも強弱、深淺、巧拙等の差こそあれ、之を他派よりも強く、深く、巧みに描寫思考する點に於ては一致してゐる。乃ち、この描寫法または人生觀から云へば、中島氏の習俗見とは違つて、野蠻人も文明人も材料または思索の目

的物として何の差別もなくなるのである。

次ぎに、個人主義だが、神もなく、未來もなく、はた歷史も認めないのは僕等に近いとは云ひながら、ニイチエのはまだその行き方に緩みがあつた。矢ッ張り、前にも云つたことがある通り、自然といふものを外延的に見る缺點があつたからで、刹那的に締つてゐなかつた。僕等の刹那主義は、それとは違つて、純粹無垢の個人主義である。中島氏は舊哲學の輪廓的考察法により、感覺の個々的、一時的なのに對して、天地人生の全一的永存的なのを以つて來て、天地萬物が刹那的なりとせば、『刹那主義は提出者自ら之を破らずには置けぬ』と云つたが、天地萬物は感覺以外にあるだらうか？『ある』といふ説は勿論、『ない』といふ説も、尤も、これまでの哲學的論法では僕等に滿足出來ないが、感覺と云ひ、經驗といふものをすべて吸收してゐる生慾――而も熱烈な生慾――以外に、僕等は何等の存在物をも認めないのである。

而もその生慾が觀察者に感覺と見え、經驗と見え、天地と見え、人生と見えるに當り、眞の洞察力がなかつた從來の哲學者は、唯物論者にしろ、唯心論者にしろ、之を外存的な

實在（物または神）と解釋したのは、丁度、從來の藝術家が、最近ホイスマンズの表象主義を絶頂として、對象物を自己以外に求めた弱點と同樣であつた。如何に內容的、內觀的を標榜しても、結局、外存物に向はうとする傾向は、僕等が資え切らない行き方として退けるところである。中島氏（またはその他）の如く、前後左右の事情と利害とを返り見て、自己の無自覺に安んずる人なら知らず、僕等は生慾の刹那的發現、乃ち、個人の自覺より外に內容も外延も認めないのである。刹那の連續と見える記憶または經驗も、連續の念を絶した一刹那の個人に發現してこそ最も生命あるものと云へる。乃ち、刹那的個人主義である」

中島氏は刹那主義者に對し、昔の人が唯心論者に對したと同樣な、揶揄半分の反證（撲れたら怒るだらう、金を貸したら催促は忘れまいなど）を擧げたが、二元的生活は刹那主義の許さないのは無論のことだ。『それでは自己自身の經驗さへ說けぬ』とあるが、刹那主義で說けない樣な經驗（又は實證）を說かうとしたから、從來の哲學、若くは藝術が痛切でなく、虛僞に落ちたのだ。僕等は『自己同一』といふ信念を態々一刹那を越えて求める必要はない。そんな觀念を持たなければならない物と定めて懸つてゐる人々には分るまいが、新派の

藝術家が歐洲でも、クラウフォードの言に、『わが存在の實際悲劇は、專ら、外存的冒險と危險とが止む所に始まる』とあるのを承知してゐる通り、顧慮と折衷的觀念とが止んで、個人が一刹那の熱烈な生命に觸れてこそ、初めて僕等の立ち場を知ることが出來よう。

『一刹那の個人的生慾は現實、否　實在で、それの發現が自然である以上、その發現の以前または以後を考へるのは不實在、乃ち、空想を云爲するのであつて、ロマンチクな形式家ならいざ知らず、僕等の自然主義には全く論外である。從つて、僕等――少くとも僕――は他の自然主義者（たとへば、長谷川天溪氏の如き）がこの主義の歸着を虛無思想と見爲すのを否定するばかりでなく、刹那以外に運命の樣なものを想像する神秘說（田山花袋氏は多少それか）をも取らないのである。で、中嶋氏が攻擊した島村抱月氏の肉感最眞の辯とて、二元的折衷論者なる抱月氏には、氏相當の辨解があらうが、それを以つて中島氏が僕等の樣な根本から枝葉まで一元的な行き方と同一視しては困るのである。僕が主張して來た主義は恐らく外國またはわが國にもこれまで絶無であつたか知れない。若しありとすれば、曾て僕が早稻田文學の三號に渡つて論じた通り、古事記の神代卷にあらはれてゐた。

中島氏に批評の用意がないと云つたはそこである。

僕の云ふ自然主義にはいつも『新』といふ字を附して來たが、自然主義を標榜する人々の考へが餘り亂雜になつて來たから、僕は僕の主義を刹那主義で區別しようかとも思ふ程だ。之に對して中島氏が論じたから、丁度都合がいいので、鳥渡以上のことを辯じたのだが、氏はなほ鹿爪らしく古臭い智情意の區別を立てた、僕の所謂心熱的でない藝術論をしてゐるが、これはもう一々辯駁するに及ぶまい。さきに本欄に於て發表した丁酉倫理會員の攻擊、並に批評家の任務を論じた條を見て呉れ給へ。一体、僕等の新自然主義は人生觀であり、同時にまた藝術觀でもあり、人生と藝術とに何等の區別を置かない程切實であるべき筈だが、花袋氏を初め、天溪氏も抱月氏もただ區別された藝術の範圍で之を考へてゐるらしい。僕等は若しこの主義が普通の藝術と衝突したら、その藝術を棄てるばかりでなく、若しまた社會や國家と衝突したからとて、決して恐れないのである。

何だか云ひ足りない樣な氣がするが、父が危篤でゆツくりしてゐられないから、ここで一先づ擱筆する。（四十一年四月二十二日作、讀賣新聞）

刹那主義と生慾

◉本紙の『時代文藝』欄にあらはれた議論または感想錄に就て鳥渡僕の思つたことを書かして貰らはう。金子筑水氏の『無主義無理想』は、第一、主義と理想とを混同してゐる。これらは舊思想家の本音を吹いてゐるところであらう。主義も結構なもの、理想も結構なものといふ考へからして、同じ結構なものなら同じ範疇として數へられると思つてゐるのだらうが、僕等の考へから云へば、無主義なものは全く生命のないでくのぼう同樣だが、世の所謂理想なる物は無くても生きてゐられるのだ。その上、僕等は、僞善、虛構、空想等に暗まされない爲め理想を排斥して、之を持つべからざることを主張するのである。

◉筑水氏はこの無區別の缺點に加へて、『無主義無理想にも種々な流儀がある』と云ひ、第一種は『いまだ一身を託すべき大主義大理想に達せず』、然しその間を苦悶してゐるもの。第二種は『人生觀じ來ればたわいもないもの』だ、どうでもいゝといふもの。第三種は宇宙の大に比べて人間の智慧は小いからと絶望してしまうもの。この三種だと說明したが、第

一種は初めから理想を求めてゐるのだから、バンヤンの作の如く、既にその客觀念に半ば滿足してゐるか、或はやがて滿足すべき手合ひである。はじめからお坊ちやん的に樂天家でないだけが取り柄だ。筑水氏自身も、或は僕の買かぶりかも知れないが、この仲間であらう。して、この仲間を脫する時は、もう、道學者輩と同前で、生きてる亡者に過ぎない。

◉第二種は失意と不平とが習ひ性となり、浮世を茶化したり、頓才機智を以つて一時を胡麻化したりするものに多い。地位さへ與へたら、滿足してしまう手合ひである。若しそれが社會的關係から離れて、自己の人生觀から來てゐるものとすれば、その多くは第三種の人々の一別働隊である。第三種は、自己は小にして主義も理想もあつたものではないが、自己以外に宇宙や人生の實在を空想して、それには氏の所謂主義もあらう、理想もあらうといふ餘地を假定してゐるものだ。運命論者もそのうちだ。若しそれ、第三種の內、第二種から來た別働隊を虛無主義とすれば、自己の外に虛無なるものがあると獨斷して居るに過ぎない。以上三種を無理想派のうちに數へたのは筑水氏の間違であつて、ただ自覺がないので、まだ理想に達しないか、然らざれば暗に理想を立してゐるのだ。

◉眞の無理想派はそのいづれでもない。別に主義に自覺して、而も無理想を主張するものがある。分らない人は、多く、無理想を主張するのは無理想といふ一種の理想が出來たのだといふが、理想とはその性質上自己以外または以內に自己のまだ捉へない、または、發見しないものがあると思ふところから成り立つてゐるのだ。僕の刹那主義は之を否定するので、自己の覺醒を外にしては外來の實在または自然なる物のあるを認めないのだ。覺醒した自己は生きるといふより外にない。純粹なる生は主義に立して、而も無理想な苦悶——そこには、之を解決解脫せうとする弱い考へなどは全くない——にある。筑水氏の擧げた種類などは凡て半死半生の人生觀にさまよつてゐるものだ。

◉次ぎに、長谷川天溪氏の『藝術即自然主義』だが、氏の議論は平穩無事の行き方であつて、自然主義を歐洲に於て行はれて來たと同樣に解釋し、藝術の範圍內に於てばかり取扱ふつもりであるから、それ以外に出れば、宗教や哲學があつて、理想を立し、解決をうながすのを許してある。その結果として、宗教や哲學を積極的方面と見爲し、島村抱月氏と同樣、藝術を以つて『消極的、傍觀的、靜止的とも名付くべきもの』としてゐる。然し、さ

ういふ行き方の藝術——人生の一部、または人生と區別した物——が最近時代の眞に要求するものであらうか？田山花袋氏もこれに似た意見を『新潮』で發表したことがある。若し自分は別に自己として行動するが、藝術の範圍ではかうするといふ樣では、却つて藝術が自己のわざ〳〵拵らへた道具またはおもちやである。

◉兩氏の作物または議論によつて察すると、花袋氏の背後には運命といふ、天溪氏の目前には現實といふ外存物がある。藝術では之を無解決に取り扱ふが、自分としては別にまた宇宙觀や人生觀を許す。これでは二重人格を立するのである。渠等が傳習的な哲學や宗教を拒絶するのは、僕等も大いに主張してゐるが、人生觀と藝術とを別物に見てゐる行き方はまだクラシクだ。『或解決を與へて現實を寫したものは、』如何にも『藝術の範圍外に歩を出したもの』であらう。否、舊藝術には多くあつたことであらう。之と同時に、また、別に解決を許すものが、藝術に於て、わざと解決を與へないのも、半ば舊派の行き方である。歐洲の自然主義が倒れて行つたのは、さういふなまぬるい立ち塲に立つてゐたからである。

◉僕が新自然主義といふ刹那主義には、區別された藝術はない。たゞこの人生觀——無解

決、無理想の主義——を以つて藝術に實行すれば、そこに自己が藝術として生きて居るのである。ジエームスの『プラグマチズム』は僕も取り寄せて持つてゐるが、まだ讀む暇がないので充分なことは云へないとしても、桑木嚴翼氏の長い紹介などを見ると、或は天溪氏には『正に吾人の執るべき道』であるかも知れないが、理想を排して別に又理想と云ふに及ばない）を立つるに過ぎないから、その現實は僕等のとは同一に見ること出來ない。飽くまで無解決の現實、飽くまで苦悶的な刹那ではない。天溪氏は『自然主義に對する根本的誤解はこれと實際問題との同一視である』と云つたが、それは歐洲に行はれた舊自然主義に對してであつて、わが國に發展しようとする藝術上の自然主義——苟も新時代の要求を滿たすに足るものとして——は寧ろ實際問題乃ち、人生觀とは分離す可からざるもの、否、同一物でなければならないのである。この見解は現今一般の舊思想界と社會的行動の上に衝突するを恐れるものがあるかも知れないが、それは必然の結果であるから、止むを得ないのである。

◉次ぎに、樋口龍峽氏の『深き洞察、大なる煩悶』である。氏は現今自然主義然とはれる

人々の作物中に、『人生はおろか、事物の眞を見るに餘りに觀察力を缺いてゐる』實例を擧げたのはいゝが、實例的問題はこゝに除くとして、氏が『より大なる、より深き煩悶』として擧げた社會制度的、藩閥的、義理的、努力的煩悶などは、その形に於ては違つてゐるが、いづれもその根本は生慾から來てゐるのだ。生きたいといふもだえである。現今の自然主義派の小說の程度から云つても、決して男女兩性の性慾ばかりを目あてにしてはゐなからう。この點からして世の所謂自然派が僕の主張する傾向の一部に接觸してゐるのだ。氏も責任ある評論家の一人だから、普通一般の觀察者流または新聞記者流と同樣な、そんな立論ではあまりあツけないではないか？（四十一年四月二十六日作、二六新聞）

早稻田文學の詩論

早稻田文學に於ける相馬御風氏の詩論に就ては、僕もさきに本欄に於て烏渡當つて置いたことがある。氏はまたそれ並に帝國文學記者の駁論に對する答辨と共に、『今一步進めて見やう』といふ考察をつづけた。その進められた考察なるものが、第一、主觀と客觀とを明かに知と情とに區別する樣な古い行き方であるから、全體の議論にどうもその所謂革新の意氣込みと一致してゐないところがある樣に感じられた。

して、その要領とするところは、『刹那的に渾一せる自己活動が高潮に達する時、おのづからなる迸出流露をなし得るは事實である』から、『八格全體の刹那的燃燒』――『渾一せる自己生活の刹那の高揚――この妙境に於ける自然の流露の外に、近代的詩歌の充實した生命はない』といふに過ぎない。これでは僕がこれまで口を酸ツぱくして說いて來たことを繰り返してゐるのではないか？議論の態度が餘り人を馬鹿にしてゐる。一言ぐらゐ評家としての僕を引ツ張り出して置くべき筈ではないか？もつとも、その必要のない場合もあら

うが、御風氏は僕に答へたところに於て、『氏のいふ内容は詩歌その物の内容といふなら、それは吾人も云つて置いた筈である』と澄まして、それに一歩を進めた今回の内容的議論の個處に於ても歸結或は發足點が僕以外に出てゐない。して、僕がこの種の議論は、新聞雜誌等でしたのを除くとしても、昨年既に帝國文學會大會の席上で演說した(帝國文學揭載)のがあるし、また昨年末出版の『新體詩の作法』にも論じてある。僕は何だか自分の飼ひ犬に手をかまれた樣な氣がした。これは氏に對しては少し失禮な云ひ分かも知れないが、僕は氏自身が僕と同一の內容論を採る自由を妨げようとするのではない、ただその態度を遺憾とするのである。

次ぎに、內容問題を離れて氏の所謂『內から湧き出でて自から外に形を爲したもの』(僕の所謂內容流出的詩歌)の形を論ずる點に於て、たゞポーの『詩の原理』(The Poetic Principle)を楯として、『近代的詩歌の一大特色はたしかに詩形の短縮と云ふ點にある』(これも、僕の『新體詩の作法』に於て說明した通り、敍情詩の要求)といふのが要領だから、それに前同の『詩歌の用語は須らく口語』、『詩調が自由』、『行と聯(乃ち節)との數が無制限』の三條件

を加へて見ても、既に內容詩の範圍に這入つてゐる僕等から云へば、詩形の革新といふ程の重大な條件を捉へてゐないのだ。

そのうち、多少重大なのは口語的用語であるとしても、それには人がよく引例に出すダンテが果して當時の口語そのまゝを以つて『神喜曲』を歌つたか、どうだか、イタリヤ語とその歷史とを知らないもの等のまた聽き意見では分らないが。英詩は確かに俗謠的詩歌以外に於て口語的には行つてゐない上に、わが國語に於ては、ただ簡結を要する點から云つても、『である』式の働詞は、『なりけり』の古法と同じく、用ゐ難いのである。之を避ける手加減を許すとすれば、もう、その自然の影響は僕のやつて來た行き方に對した違ひがない。それで、『空論』と云つたので、何も『囚はれる』も『囚はれない』もないことだ。また、行と節との關係などは、これまでの詩でも制限といふ程の制限でもなかつたから、左程に喋々するだけのことはなし、敍情詩の要求も、廣い意味で云へば、現今、大抵の詩人はそれに向いてゐるのだから、殘る問題はたゞ詩調だけだ。

詩調の自由——氏も亦『刹那的燃燒』を說いてゐるが、これは新自然主義(刹那主義)に於

ける自我の生活狀態、寧ろ生命ある人生觀であつて、それが小說には散文調を帶び、詩歌には詩律となつてあらはれて來るのだから、生田長江氏一派の考へてゐる樣な、自然主義で行けない詩歌はこゝには論外として、刹那といふものは强大な自我には强大に擴張されてあらはれる。この時に當つて、それに相當な一定の詩律を以つて之を發表するのは、敢て僞りとは云へない。また刹那を斷續的に發表することも出來る。こゝにはまたふわり〳〵と變つて行く混律を使ふのが本統であらう。いづれも內容詩の行き方である。御風氏の所謂自由調は、ホイトマン流の散文詩（之が說明を知るには、マークエチリデルの『英詩の科學的研究序論』を讀んでみ給へ）を指すのでなければ、即ちこの混律を云ふのだらう。それこそ、氏はたゞ外形の一部を見て內容詩の全體を知らないのである。

『詩歌に形式はあるが、形式の制約はない』と云つたのに僕等は別に反對しないが、今一つの缺點はその所謂形式に對してたゞ概括的な（寧ろ空論的な）四個の條件を持ち出しただけで、氏の意氣込みに相當するだけの成算を示めしてゐない。氏は、帝國文學記者に對して『評家よりは寧ろ作家として、疑問をそこに挾んだ』と云つてゐるが、他の多くの詩作家と

等しく、氏は五の句、七の句以外に出た詩律に經驗はないらしい。だから、氏の疑問はたゞ七五調と五七調との單調に飽いた心持ちを以つて、すべての詩形を判じてゐる程度——僕はそれを十數年前に踏んだ——にあるのではなからうかと疑はれる。

僕は氏の詩歌に於ける覺醒を諒とすると同時に、氏にして早く、僕が七の句、五の句を破つた十音詩體を初めとして、八七調、八六調、七六調、並に『航海二篇』にも用ゐた『四、三、四、五』調などを生かしてゐる、乃ち、內容流出律として自由に使ひ得る經驗に到達する時期のあるのを望むのである。僕が『新體詩の作法』に於てあらゆる音脚と句調との研究を發表したのは、決して形式に拘泥した意味でない、而も、その反對に、形式に拘泥してゐる多くの詩人（初學者は尙更ら）をして、かれらがくうたいに考へて居る音律なる物は緻密な內容に據つて成り立つてゐる物である事を、科學的研究法に由つて知らしめたのだ。氏の接觸してゐる問題などは既にすべてあの書中に研究してあるから、反對說があるなら、ただ一時の意氣込みの材料にせず、眞面目な、用意ある駁論を聽きたいのだ。（三二九頁參照）

雜言

◉長谷川天溪氏の『藝術即自然主義』(二六)に對する僕の異論は同じく二六新聞に出る筈だが、文章世界(四月號)に出てゐる『自然主義と本能主義との別』にも似た樣なことがある。自然主義の藝術に於ては、制慾主義者に對しても、之を材料としてはそのいづれにも價値を認めないといふ消極的態度だけを主張するのなら、島村抱月氏の『明鏡』の譬へや、文章世界の同號に載つた小杉天外氏の『官能の純粹』說と同樣、かの衒學者流に古いと云はれ、かの頑迷の大學教師ケーベルに時代後れ(趣味四月號)と云はれる、歐洲の舊自然主義と同一の行き方に過ぎないのである。

◉僕等が新自然主義と稱するのはそんなものではない。戸川秋骨氏も中央公論(四月號)で云つた通り、有解決の哲學や宗教の道具になるのは『文藝としては……未だ醇乎たるものにあらず』であるのは、僕も天溪氏と共に不讃成はないが、秋骨天溪兩氏はまた全然無解決の哲學または宗教のあるのを知つたなら、單に區別された藝術の本陣に立て籠らないで、さ

らに人生觀即藝術の境に進み得られるだらう。乃ち、僕の刹那主義である。この主義は、その性質上、全然、刻々破壞的であると同時に、藝術に於ても無解決で通せる主義である。決して無解決と解決するのではなくて、刹那の苦悶は到底解決を與へられない性質のものだからである。後藤宙外氏の『自然主義比較論』(新小說四月號)に於ては、僕を『排理想欲求悲痛派』として悲痛を目的にしてゐると云つたが、これは目的ではない、狀態である、直接生命である。

◉天外氏の說の文章世界に出たのは、『作家たる予の經驗』であるが、舊作家は漢文者流と同じく、兎角、筆を執る時と執らない時とを區別する。『田山君は主觀の嚴肅といふことを唱へるさうだが、それは觀察に就いてだけの事か、もしくは筆を執る際に就いてもいふ事か』と、かういふことを問ふ人に限つて、一方に沒我を、また一方にインスピレーションを持ち出して來る。兩方とも自己を不自然なところへ持つて行くに過ぎない。わざ〳〵沒我にするから、棚からぼた餅的な靈感が欲しくなるのであつて、刹那主義に於て自我の自然を保つてゐれば、そんな物は二つながら無用である。きざである。ヱルレインの詩を初め

て讀んだ時、セントボヴは手紙を書いて、『君は身づからインスピレーションと云ふ際物を以つて滿足しない』と讃賞した。して、この詩人は世の所謂能才ではなく、天才であつた。觀察の時には『覺醒』し、執筆中には『醉ふ』といふ樣なことは、普通人から見ると、何だかえらい樣な經驗かも知れないが、自我の使ひ分けが出來る間は、まだ〳〵實質に於ける第一流の文藝を構成する資格に達してゐないのだ。（四十一年四月二十八日作、讀賣新聞）

肉靈合致の事實

早稻田文學五月號に出た、島村抱月氏の『自然主義の價値』は、同誌一月號のと相待つて、氏としては眞面目な研究である。然し詮ずるところ、既に僕が本欄で屢々評した氏の態度に、僕等の評言を暗に否定または承認する申し譯を塗り付けたに過ぎない。『部分々々の辯解よりも、先づ自家の根本觀を述べて、更に世の批評を得たい』とあるから、僕も前言を繰り返す樣なところもあるだらうが、ここに多少の言を費しながら、僕の意見を述べる。

議論は文藝の外形論と內容論と結論見た樣な物とから成り立つてゐる。その外形論に於て、舊作家と新作家との相違を實例に據つて說明するところは敢へて異論はないが、客觀を知的、主觀を情意的と定めてかかるのは、根據のないこと、云はなければならない。氏身づからも之を『假定』と稱してゐるが、僕は之を必ずしも一概に舊式とは云はない、然し苟もかの熱想（パショネートソート）――これには知情意の分離を許さず――を主張する時

代文藝を論ずるに當つて、之を無視した行き方を追行しようとするには、一言の理由を附して置かなければなるまい。氏にこの用意がない爲め、『主觀の情意が反應作用を呈する狀態』の四段境地に對する眞面目くさつた說明も、ただ天溪氏の所謂『論理的遊戲』に落ちてしまつた。自然主義が、『排する所の主觀は抒情的と情緒的との二つである』と云つても、知にも隱蔽がある、誇張がある、決してはツきりと客觀的には行かないことがある。さういふ說明は來らうとする新藝術に對する所以でなからうと思ふ。

內容論に於ても、『世上往々審美上の醜と道德上の醜とを混じ』てゐるのを指摘したのは、通俗的に必要なことだが、わざ〳〵美といふ觀念を拵へて、而もそれが快樂と實際的意義とから成立するなどいふ必要があらうか？美が藝術で、藝術が美だといふ說明なら、人とは人間だ、人間とは人だといふに等しく、說明にはならない。僕等は藝術なる物をさう區別する必要がないのだ。わが國に勸善懲惡主義が破れてからの歷史を考へると、娛樂主義が盛んであつた後に、之と同じ樣に幼稚な『藝術の爲めの藝術』主義または耽美主義が流行し、區別された藝術が高尙がられた。抱月氏はこの兩主義を折衷し、而もなほその上に別な物

をも慫慂らうとしてゐるらしい。どうも旗幟が鮮明でない。別な物とは自然主義のことだが、田山花袋氏一流は專ら之に向はうとして、なほいまだ耽美主義の傾向を脫し切れない樣なところがある。然し、娛樂主義まで頗張らうとしないのみならず、抱月氏の樣な謹直、換言せば、求解決的逡巡はやらない。

且、抱月氏は自然主義に於ける氏の所謂美の材料を物質的現實と見爲して、精神的理想の反對と見てゐる。花袋氏の作並に天溪氏の論にもこの態度がある。（白鳥氏の態度は多少違つてゐる。）然し、僕等が理想を排して現實に向ふのは、精神を殘した物的を取るのではない。現實その物に肉靈合致の自然を見るからである。そこに解決が附くではないかといふ人々（たとへば、本欄前號に於ける天溪氏の如き）がありとすれば、その人々の如く無意識的または有意識的に現實を物的視するのは、一層狹い解決と見なければならなくなる。若しまた物的視は假りの行き方で、斷定でないと云ふなら、僕等の一層確實な（乃ち、現實的な）肉靈合致の自然に來給へと勸める。肉靈合致は斷定ではない、理想ではない、刹那的自我の感ずる事實である。この事實は之を認めない舊思想の社會または文明に對して

『既成物の破壊』であるが、また抽象思念に對しては全然懷疑的であるが、事實を指摘するのであるから、涅槃主義でも虚無主義でも無論ない。

こは之を體現する人の藝術になるとどうかと云ふに、この刹那的自我存立の事實——無理想苦悶の人生——が、藝術中に取り扱はれる世の所謂有理想の主義者的、僞善的主人公または副主人公にも背景または生命となつて出て來るだらう。それがヲルヅヲルスの詩の後ろに神があり、メタリンクやホイスマンズの作後に運命や觀念的表象があるのとは違ひ、抽象的でなく、具體的である。否、そこに人生自然の事實(それ以外に或物を許さない)を現ずるのである。一步進めて云へば、抽象的解決を絶した人生全體が直現するのである。天溪氏が僕に對して『藝術に現はれたる人生、即ち現實の人生』云々と云つたが、それはただ代數の式見た樣な物で、その內容には僕と違つた思想をも盛れば盛れるものだから、それだけでは何とも挨拶が出來ない。

氏の『無解決と解決』(太陽五月號)を見ても分る通り、氏の所謂虚無主義とはただ虚心平氣といふくらゐのことで、現實に對する消極的態度をいふに過ぎないから、その現實を抱

月氏と同樣に物的視しないまでも、別に積極的方面の解決を許すだけの餘地を存じてゐる。餘地ある現實の現はれる藝術は、從つて充實の度を疑はなければならない。肉靈合致の現實には空虚を存じないのである。人生または藝術に於て、形式的な現實が目あてではない。それが充實してゐるか、ゐないかゞ問題である。僕の態度が實際に若し氏の所謂『一種嶄新なる解決文學を主張するもの』なら、甘んじてこの嘲弄的稱讃を受けてもいいが、さうでないことはこれまで度々云つて來たことで分るだらうと思ふ。解決を抽象するのではない、充實を主張するのだ。この行き方が分つたら、後藤宙外氏——決して自然主義反對者でなからう、雷同視されるを恐れて研究的態度を取つてゐるのだ——が僞善も人生の一部であるのにといふ樣な外觀的、斷片的疑問はなくなるだらう。人生の充實的眞相に達してゐれば、宗教も哲學も入らないのである。

そこで抱月氏に歸つてだが、耽美主義、藝術至上主義、『藝術の爲めの藝術』主義の餘韻が、唯物的現實觀に交つて出てゐるのは、花袋天溪兩氏にも多少あることをさきに指摘して置いたが、抱月氏は之を一條件に入れて、而も娛樂主義をも棄てないで、自然主義を論

じてゐる。氏はその實、自然主義または新自然主義者の主張者ではないらしい。その態度がよく云へば批評的、惡く云へば傍觀的で、藝術――自然主義のは勿論――を區別して人のおもちやと見ないまでも、何物かに導く橋渡しと思つてゐる。否、『文藝の末尾としての宗教情趣』を以つて、自然主義は一時的手段（とは云はない）で、宗教と入れ更はるまでの物と說いた、それこそ僕等の卑しむ有解決的傾向であつて、而もまた藝術を人生から最も遠く區別する所以である。天溪氏はそこまでゆるんではゐなからうが、氏も多少その傾向があるのだ。現實を物的または半面的に見てゐるから、別にまた靈的（理想的でなくとも）を欲しくなるのは普通人の相對性だ。天溪氏が根底からさういふつもりではないといふなら、僕が氏に對する區別的藝術云々の批難は打消していゝ。解決を避けようとするばかりに拘泥して、わざ〳〵氏の所謂人生觀法などにとゞまるよりも、更らにつッ込んで無解決の人生觀その物に立つ方がどれだけ熱烈性を增すか知れない。舊自然主義は中腰になつてゐたが、僕等の新自然主義は充分腰を据ゑて無解決を叫べといふのだ。

抱月氏も『文藝の內容となるべき思想は、それが充實して熱（あるひは熱？）してゐなくてはならぬ』と云ふではないか？全體手段的または區別的藝術なる物を假定して如何に美學的條件を加へたところが、それに熱熱するほど一念を投じられなからうではないか？投じられると云ふなら、前回で評して小杉天外氏の自我の使ひ分けと同樣、催眠術的なインスピレーションでも呼び出さなければなるまい。その方面から云へば、外形論に於ける知情意の區別的說明も成る程と思ひ當らないとはないが、最新藝術にはそんな魔法師らしい行き方は取らない。刹那主義を體現する藝術は人生の一部または手段ではない、肉靈合致的人生の全部または內容である。筆を執つて特に用意（乃ち、インスピレーション）を呼ぶ樣なことを必要とするものには、まだゆるんだところがあるから、達しられないのだ。最新藝術の要求する熟熱、重烈なところは全部的、內容的になつてこそ初めて現はれるのである。それには內觀すべきであるが、現今の自然主義反對者は勿論、贊成主張者にしも、見渡すところ、宇宙外抱月兩氏を初め、まだ內觀力に缺けてゐる。人間は小なるものだのに、どうして大宇宙を全部的に現はせるかといふ樣な疑問が直きに人々の固いあたまに浮んで來る。必要なのは深刻な內觀力だ。それには先づ肉靈合致の刹那主義であると答へる外はない。

北澤寒泉氏の『文藝と思潮』（太陽五月號）に於て、僕のこの主義を以つて兩極端の『矛盾』があると云つてるが、氏の指摘したのを見ると、氏自身が踏襲した判斷によつて僕の苦悶とか、盲動とかいふものを解釋し、盲動してゐるものなら苦悶のある筈はないなど云ふに過ぎない。第一、肉靈合致の自我に於て、『理想から自然を抽象』する樣なこと（また之の反對）は行はれよう筈がない上に、無解決で盲動してゐる人生ほど苦絶悶絶はない事實はこれまでの說明を見ても推察ぐらゐは出來ようと思ふ。『今少し深刻に人生を內察されたら』の言は一先づその發言者に返上して置く。

序でだからこゝで訂正するが、前回にホイトマンの『散文法』とあるは『散文詩』の誤植である。早稻田文學五月號に出た御風氏の『痩犬』を讀むと、氏の仰々しい詩論は果してたゞこの散文詩を要求したに過ぎない。散文詩なら、あの行き方で不贊成はないのみか、小山內薰氏の『夢見草』以來、僕もやつて見ようと思つてゐた形だ。御風氏のは、口語も雨情氏の如くクラシクならず、林外氏の如く調に拘泥せず、而も『あゝ厭』といふ印象は確かに利いてゐる。然し、內容問題は必ずしもこの形ばかりに一致すべきものでないことを忘れ

てはならない。散文詩と口語詩とは混同すべからずだ。散文詩は、ホイトマンを讀んでも分る通り、その內容律が有形的にあらはれないから、口語を以つて最も自由に流出さす餘地を存じてゐるのである。有形律に口語を當て塡める場合とは違ふ。『門外漢的空論』とは有形律的口語詩說を云ふのだ。（御風氏はこの區別を知らないで、この後僕が盛んに口語的散文詩を作るのを見て、僕が平氣で持論を取り消したかの樣に思つてるのは間違ひだ。

本紙『文字禪』のうちに、バ行はマ行の濁音なることを證明してあるが、間違つてゐる。Hのハ行の濁音といふ從來の國語學者の說も違ふが、Pのパ行（半濁音にあらず純淸音だ）を發する時、聲帶の振動する（乃ち濁る）のである。（明治四十一年三月三日作、讀賣新聞）

肉靈合致——自我獨存

（長谷川天溪氏に答ふ）

前回の本欄に於て、長谷川天溪氏は僕の前々回に提供した『肉靈合致』に對する疑問を發表した。氏は、氏自身の考へを雜ぜて僕を解釋し過ぎたので、疑問になりさうもないことが疑問になつてゐる。僕の前回の議論で殆ど自明の事實たることが、賢明な氏に分らないのはまだ餘程僕の方に說明の不足があるのであらう。然し、また、言論は創作と同樣その人のムード（行き方、態度）乃ち情調が生命であるから、たゞ人によく分つて、讀否が定まるばかりが能でないのは豫め考へて貰ひたい。二三日來、萬朝報に出てゐる黑岩淚香氏の『自然主義を評す』の如く、僕等が承知で出て來た古巢をいじくつてゐる樣な單純不靈でも困るではないか？僕が玉突きに行つて當ると、僕としては正當に取つた玉も、人はまぐれ當りといふ時がある。その度毎に自己の意志發表は、なか〳〵六ケしいものだと思ふのである。

天溪氏の『第一、君の頭には種々の考へがごちやごちやになつてゐるやうだ』と云つたのは事實で、僕はそれだから議論をして少し捌いて見たいと思つてゐるのだ。議論がさきでないから、空理的解決、乃ち、論理を追ふ必要には迫まられてゐない。出來ることなら、僕の考への實質そのまゝを一度にさらけ出してしまひたいのだ。議論は人生の事業である、否、人生その物である。議論を以つて藝術を辯護するのではなく、藝術に代つて議論をしてゐるのだ。こゝでは、議論は乃ち人生である。藝術も亦藝術家には人生であつて、間接的描寫などの問題ではなく、直接の實行でなければならない。藝術上の無解決は藝術家の無解決であり、藝術家の無理想は人生の無理想であらねばならない。片足を無解決、無理想にして藝術に分け、片足をまた有理想、有解決にして人生に置くのでは、やツぱし、その人は人生から區別された藝術主張者の一人である。天溪氏もそれで、氏の所謂『人生即藝術』の式は『人生の複寫即ち藝術』に改めなければなるまい。

僕は藝術（特に詩と小說）が人生の複寫でなく、實行するのであることを主張するのだ。僕は人生から區別された複寫的藝術を取らないばかりでなく、別にまた所謂藝術的人生なるものがあると信じない。この兩者のいづれかに屬さなければならないものなら、淚香氏

が小說を源始の意味に於けるフイクション、乃ち、つくりごとに解してゐるのと同樣、おもちやのくだらん物であるから、二葉亭氏のだと云ひ傳へられる考へに從つて、寧ろ藝術を去つて、軍人となり、政治家となり、豐太閤やナポレオンの樣な無解決的人生を無解決に生活した方がいゝ。僕は之と同じ行動が藝術家として藝術にも出來るといふのだ。描寫問題などは末の末である。先づ實際問題に對して無解決態度がなければ、その人の藝術に對する無解決態度は密接な物ではない、拵らへた物、つけ燒き刃だ。この考へは、實際問題を避けて、單に創作の描寫と材料との問題を固守しようとする天溪氏と、根底に於て違つてゐるのだ。

肉靈合致の問題に於ても、氏の揭げた三個の疑問はすべて僕の意を得てゐない。且、この三疑問は一つにして答へることが出來よう。靈肉と云ひ、心身と云ひ、精神物質と云ひ、之が合致（調和または兩面にあらず）に關する考へは、僕がメレジコウスキを讀む前に、既に『半獸主義』に於て說いたことだし、また、その後渠を見てから、渠の意見に對する僕の紹介と不服とは『メレジコウスキのトルストイ論を讀む』（早稻田文學、明治三十九年九月號）に於て述べた。そのうちに、『メレジコウスキの所謂人間神から、耶蘇敎傳來の形式を取り去つて、解脫を求めず、救濟を呼ばず、轉々苦悶に堪ゆる人間、乃ち悲痛の靈でなければならない』と云つたのは、乃ち、それだ。僕の意義は、露國の調和論者のとは違つて、肉靈は一物の兩方面とも、二物の合一とも說かず、肉は靈、靈は肉、たゞ一事實の動搖であることを說くのだ。これは內觀によつて得られる事實であつて、理想ではない。そこへ達しなければならないのではなく、僕等——特に早くから宗敎を破棄し得た日本人——は既にそこに住してゐる狀態だ。

多くの人々はこの狀態にあつて、之を悟らないので、僕等は新しい自覺を促すのだ。全體、肉と靈とを一物の二別面または二物と定めてかゝるから、人間をそのいづれかに向はせ、または兩物の量的調和を夢想し出し、そこに形式が出來て理想などが必要になつて來るのだが、肉靈合致不二の狀態——之に『種々の內容が加はる』のではない、既に充實した內容だ——を自覺すれば、世の常識家、習俗家流の理想または舊思想はおのづから破壞され、人生の眞狀態が暴露される。暴露的現實は、天溪氏の考へる樣な『誰人も認めてゐる』、

『心身兩面の葛藤』ではなく、一歩も二歩も進んだ心身（靈肉）不二の充實体、乃ち、自我を如何とも處分し難い——無解決な——孤獨と寂寞との實感實想である。氏は僕の所謂『苦悶はどこから生じ來るのか』と不思議がつたが、宇宙も人生もたゞ自我獨存であるといふ寂寞感ほど深い苦悶、悲痛はなからうではないか？これは僕の空理ではない、實感だ。

僕は肉靈合致の自我を說くが、メレジコウスキの樣な人間神を說かない。渠は自我以外に肉靈調和の偶像を設けて、そこに化脫と救濟とを得ようとしてゐる。然し、その救濟を叫ばない程意志の强烈なニイチエでさへ、曾ても駁した通り、自我の外に非我を認めて、そこに一時の敵愾的安心を得ようとした。然し、僕の肉靈合致の歸結は絶對的に自我獨存の狀態である。メレジコウスキの人間神を組織するには、トルストイの肉的冷刻とドストイエフスキの靈的熱刻との好材料があつたが、僕の自我說を證明する先例はわが國近代の文學にはない。だから、表象主義論（早稻田文學、四十年四、五、六月號）に於ても、日本最古の思想と生活との刹那的を引照したのであつた。天溪氏等の考へる樣に『自我を忘れる』時があるなら、それは宇宙も人生もなくなる時である。僕は隨分多くの關係者を失つた經

驗がある上に、近頃また父が亡くなつたが、それを看護し、湯灌し、火葬するにのぞみ、この事實を更らに深く感じた。死んだものにはその宇宙と萬物も亦なくなつたのだ。わが國の神代史は最もよく之を現はしてゐた。死者が殘した宇宙と種子とがある樣に思ふのは傳說と記憶との迷はしである。父の輪と子の輪とが（從つてその他の輪も）その一部分づゝ重なり合つてゐたのではない。亡父の世とその子の世とは全く關係がないのだ。父子が同一の世を共有または分有してゐたのではなく、父は子にない、子は父にない世を見てゐたのだ。從つて、父の世は父の世で人生の全体であると同時に、子の世は子の世で人生の半面または一部ではない。人生自然の實相たる自我はいつも一つである。

この理を推して考へて見給へ。父子、その他の自我が別々に相交涉するものと見て、之を描寫するのを人生の全体とするのは、まだ表面に拘泥してゐるので、却つてたゞ淺薄な一面を握り得るに過ぎないことになる。否、その實は拂らへ物だ。さういふ藝術を僕は區別された藝術といふのだ。人生の實相に痛切な、刻烈な暗示と表象と（このことは以前から別に論ずる約束だが、まだ時を得ないのだ）を缺いてゐる。天溪氏が、『君の自我の外に、な

ほ幾多異りたる自我もある』と云ふ間は、この痛刻に達し得られないのだ。藝術の本志は、歸するところ、自己描寫である。たゞ刹那に起滅する無解決な自己であることを忘れてはならない。それより外に存在の自然はないからである。俗に客觀視される物、乃ち、非我と思はれる物の眞僞、善惡、美醜等はそのまゝで自我を組織する部分的材料に過ぎないのだ。この刹那主義から來る態度が天溪氏の所謂『極端なる實感主義』であらうが、なからうが、(實際、僕はその實感主義だが、)之を以つて他を批評する資格がないことはない。

『永劫に眞理であるといふ證明が立たぬ』とあるが、苟も人間界に於て何物が永劫の眞理と證明されてゐるのだ?そんな結構な物があるなら、古來誰れも一生懸命に研究する必要がなかつたらう。到底それが得られないから、僕等は懷疑、破壞、苦悶、自己自食を生命とするより外仕方がないのである。早い話が、本欄に於て柳田小山內兩氏が紹介した天死の新派文藝家、オスカーワイルドの獄中感想錄『ドプロフアンデス』のうちに、『藝術家には發想が唯一の法式で、之が爲めに渠は全く人生を體得することが出來る』とある。この語は、永劫の眞理證明を待つ樣な迂遠なことを爲ないでも、僕等に直ぐ强く響いて來るの

だ。

僕は徒らに『異を立つる』ものではないことを天溪氏に斷つて置く。新自然主義の傾向中に舊思想やゾラ程度の內觀缺乏分子が這入つてゐるのを見て、もツと深く行けばよからうと思ふからして、現實なる物の內容に立ち入つて、僕自身の考へを述べるのだ。その間に異を指さし、同を摘むを見て、僕が八方にお上手を云ふと臆測した自然主義雜評者踏靑氏の如きは、要するに斗筲の徒に過ぎない。いつまでも說明を與へない『現實』とか、『ありのまゝ』とかを繰り返してゐても仕樣がないではないか?天溪氏と僕とは發足點に於て同一なところもあらう、然し進むに從つて不足な點があるから、僕としての異見を述べたのだ。氏の所謂『衝動的』議論は氏に『迷惑』かも知れないが、今回ので僕の考へは分つて呉れるだらうと思ふ。(四十一年五月十七日作、讀賣新聞)

自殺論

世の學者ほど無責任、不注意、否、迂濶なものはない。渠等はただ死んだ歴史と理屈とをいじくつてそれで滿足してゐるのだ。先づ融通の利かない定木を拵へて持つてゐて、何かと世間で問題が出來ると、その内容も知らないで、あたまから自分の定木を當てゝ、實際ありもしない説明をつける。それで世を教へるとか、導くとかいふのだが、實は世を僞り、誤り、誤解さすばかりだ。

その好例は澤山あるが、いつか朝日新聞であつたかに出てゐた、文學博士井上哲次郎氏の演説筆記なるものゝうちに、自然主義の評論または創作はまだ讀まないが、要するに肉慾主義だからいけないと云ふ様なことがあつた。讀まないのに肉慾主義と判斷を下すのもをかしい上に、自然主義は實際肉慾主義と同一視すべきものでない。空影を捕へて空理を談ずるとはそれの謂ひで、氏が古典を重んずるのは別問題としても、現代に對しての知識は殆ど皆無で、蘇峰氏や涙香氏の淺薄な新聞記者的議論を追ふてゐるに過ぎない。その態度

に於て迂濶である。その談理に於て浮薄である。そんなことで世人を指導することは出來ない、寧ろ世人の方向を誤らすばかりである。

同じ博士の遠藤隆吉氏の『自殺に就て』といふ話（本紙の五月二十六、七日掲載）もそれで—井上博士の様に何でも屋と違ひ、特に社會學を專門にした遠藤博士が、社會の一現象なる自殺に就ての觀察ではないか？それがたゞうわッつらの議論であつて、實際に觀察しない前から定つてゐる平凡な結論を以つて終つたのは、學者の迂遠と浮薄とを責めるのに加へて、實際の研究力と熱心の度とを疑はなければならなくなる。渠等は外形的材料と斷定とを用意し過ぎて、頭腦の内部が空虚になつてゐるのだ。

遠藤氏は現今自殺の原因を大略三個に分類し、第一に『自然主義の流行』を數へた。そこで、『現時の自然主義は即ち野合主義である』とは、どんなことを關聯さしてゐるのか、判然しないが、いづれ例の浮薄な速斷的な態度を以つて、肉慾主義の實行と見なしてゐるのだらう。それでは却つて自殺の原因にはならない。男女が相抱擁する情味をおぼえるなら、死にたくなくなる方が人情である。死にたいのは、兩性問題に於て、意を得ない事情があ

るのに因るのだ。この事情は眞の自然主義には一部の材料であるが、決してこの主義がこの事情を引き起したのではない。若し青年男女の墮落を見てゐることなら、僕が曾て某雜誌で云つた通り、それは何も今更ら甚しくなつたのではなく、これまでは地方の村祭りなどで密會してゐた男女で、東京へ遊學するものが多くなつた爲め、鎭守の森かげか下宿屋の二階に變はつただけだ。全國一般から云ふと、大した增減はないのを、近頃、新聞の三面記事で特に學生に對する摘發が激しくなつたに過ぎない。

次ぎに、氏は『女子教育の變調』を擧げた。然し、それも空想に過ぎない。如何にも女子にして、女子の力に餘る哲學思想を『持ち出して』失敗するものがないではないが、それは千萬人中の一二人しかない。そんな些細な原因を數へるなら、自殺者は皆別々な原因を持つ廣ゐるのだ。次ぎに、また、氏は『新舊思想の衝突』だが、これは、意味が廣いだけに、說明も何も入らないほど分つてゐると同時に、決して現代に於ける特別な項目とはならない。氏はおもに家庭の問題に持つて行つたが、家庭に於ける新舊分子の衝突は、父の子に對する、また姑の嫁に對する保守思想と進步思想との悶着としても、あり來たりのことだ。

かう考へて來ると、氏の議論はどこに現代に對する痛切な說明があるのだ？現今博士諸氏の多くは、宗教家の言說と同樣、ただ愚夫愚婦の手前を胡魔化してゐればいいのだ。

次ぎに、遠藤博士は亦自殺の豫防法を說いてゐる。自殺を豫防する必要があるか、どうか、それからが問題であるのに、そんなことは平氣の平左で——加藤博士が認識論などに頓着なく進化論を信じてゐると好一對——直ちに、自殺を豫防する方法として、二個の條件を擧げた。第一、『家庭の快樂を增進せしめる』ことだが、人間を家庭の快樂に滿足せしめるのは、却つて自殺者を生せしめる理由となるのだ。舶來の耶蘇教宣教師や、お孃さんお坊ちやん的新婚者の樣な無氣力者ならば知らぬこと、日本人の氣力は決して家庭で滿足するものでない。

孝子は馬鹿者に、貞婦は無愛嬌者に、嬶大將は意氣地なしに多い。苟くも自殺が出來るくらゐのものをそんなつまらない牢獄に押入れようとするのは、自殺を豫防するよりも早めるのである。だから、もつと快樂を增進せしめて僞善的な西洋流になれと云ふのだといふかも知れないが、家庭の快樂などいふものは、燒き芋のほか〳〵してゐる間のことで、直

きに冷め易いものだ。いくら金錢本位で目的は子孫にある人々でも、多少意氣込みあるものはそんなことに滿足しない。まして頭腦の一層深い人々に於てをやだ。

次ぎに、『意思の鍛錬』である。それは大體に於て僕も異存はない様だが、然し、その人の考へ方によつては、強い意思を亂用した爲めに死ぬのもある。世間に頸くゝりが多いから、自分は一つ足釣りをして死んでやらうと、それを實行した禪僧がある如きは、わが東洋の特色であつて、決して西洋にはないことだ。ショーペンハウエルが『自殺するもの必ずしも意思の薄弱者ではない』と云ひ得たのは、深く東洋趣味を味つてゐた哲學者であるからだ。

遠藤氏の所謂『死ぬるまで苦闘する筈であるに、却つて自殺すると云ふ事は……寧ろ命が惜しくつて生存中の艱苦に堪へ得ざる……卑劣漢』はあるとしても、意思の強いのも亦必らずしも自殺を豫防するとは限らない。以上、自殺の原因にしろ、救濟法にしろ、その個條書きに一つとして要領を得たものがない。世の博士と云れるもの、意見はすべて殆どこんな物であるを記憶して貰ひたい。

且、更らに進んで氏の所謂『自殺豫防の唯一方法』を見給へ。自殺前に於ける心理狀態に『直ちに看取することが出來るから、宜しくその周圍にあるものは渠等の煩悶中に手を盡して……悲劇の事前に於て是を止めることが出來る』とは、心理學を應用したつもりか知れないが、一言以て之を評すれば、何のことはない、身投げしようとするものを發見したなら、橋元まで追つかけて行つてその袖を押へよといふに過ぎない。それで鹿爪らしい豫防法が聽いてあきれる。滑稽の極である。

遠藤氏には、まだ自殺に對する智識と觀察とが澤山不足してゐる。學者だから、何でもしやべればしやべられると思つたら、間違つてゐる。現にその云ふところが、僕の指摘した通り、殆んど當つてゐないのだ。氏の幼稚な學問を借りて之を應用すると、自殺にも賢なる自殺と愚なる自殺とがある。して、井上博士や遠藤博士の樣に、形式を辿り、空理を說く者は現代に於て既に愚なる方の自殺者であるを忘れてはならない。

實際より來たる自殺は決してさう輕んずべき物ではない、また豫防すべきものでもない。

意志が強くて死に、意志が弱くて死に、生が惜しくて死に、惜しくなくて死ぬ。いづれも現世を見限つたものだから、現世に用はない。用のないものはどしどし死んでくれる方がいい。サイベリヤの野では、今でも用のないものは、それが親であつても子であつても、よつてたかつて殺してしまう。それが自分から死んでくれるのだから、これほど都合のいいことはない。之を豫防したり、救濟したりしようとするのは、最も不自然なことだ。自殺の近因は衣食の不足、希望の消失、社會制度の不自由等であらうが、これらは皆いつの世にもあることで、またあつてこそ現世の存立が自覺されるのだ。現世の存立上必然に出てくる自殺者を豫防しようとするのは、社會主義者流の夢想でなければ、學者の空論に過ぎない。

自殺その物はつまらないことにしても、必然的に自殺者を出だすことが多い人種は、それだけ切實に現實に觸れてゐるのである。西洋の様な空想的調和を喜ぶ社會に、僞善の生活を潔しとしてゐないことを證明してゐるのだ。火事が江戸の花である通り、自殺はわが國の一裝飾と見てもいい。外國の或婦人宣教師がわが國を去る時、その訣別の辭に、日本の様に

自殺者の多い國では、傳道の見込みがないとわが同胞は自殺を避けるほど僞善的でないことを云つてやつた。この點に於て、わが國には眞の自然主義が或程度迄、西洋よりもよく行はれてゐたと云へる。

統計家吳文聰氏の談によれば、千八百八十七年から千九百一年までの五年間に於て、人口一百萬に對する自殺者の割合は、丁抹が二五三を以つて世界中で最も多く、日本が一八四を以つて、佛蘭西並に瑞西と伯仲の間にある。瑞西は風景が好いので、わが國の他地方者が華嚴で死ぬと同じ理由で、他國人のわざ〳〵死にに行くのもあらうから、當てにならないとしても、佛蘭西のはわが國と國狀が似た處があるだけにもつともだらう。兎に角、わが國は世界の統計上でも自殺國である。

それには、吳氏の指摘した通り、『邦人中に自殺氣質の多いこと、それ程自殺を嫌惡しないこと、及び死を輕んずること等』が表面では外國と違つてゐるおもな原因であらうが、何にせよ、自殺するものが多いのは現實に觸れるものが多いのである。わが國人は下らん時にも現實問題を持つてくる。例へば、日露戰爭當時の如きは、出征が出來ないと云つて

死んだものが多くあつたなど、わが國人の安閑としてゐられない熱烈性をよく發揮してゐる。この熱烈性が僕等の自然主義の文藝並に人生觀に最も必要なのだ。

性慾、生存慾、從つてその努力がすべて熱烈であるなら、自殺その物も熱烈な自殺である。然し、わが新自然主義の傾向は、どうしても、厭天的だが、また樂世的である。乃ち、厭天的樂世主義であるから、自殺者よりも一層深刻な熱度を以つて、一層深刻な苦悶に堪へるのだ。現代はいよ〳〵この苦悶が痛切になつて來ただけ、敎育に於ても、家庭に於ても、事業を爲す上に於ても、この立脚地に自覺することがます〳〵必要になつて來た。してこの自覺を保ち得ないほど意思の薄弱なものが已むを得ず架空の宗敎に逃げ込むのだ。宗敎的に化脫を叫び、救濟を呼ぶものはすべて自殺者である。意思の鍛鍊と鞏固とはわが自然主義の新人生觀に達してこそ初めて實際の意味を現ずることが出來る。

遠藤氏の如く別に虛無恬惰を說く人は、歸するところ、化脫と自殺とを說く人である。それが自殺の豫防を講ずるなどは、そも〳〵違つてゐる。自殺の根本的原因は外でもない、僕等の新自然主義を正當に解し得ない所から來るのである。（明治四十一年五月二十八日作、二六新聞）

文界私議

（九）

◉天溪氏が僕の言を『迷惑』だと云つたのは、今度は僕から云ひ返さなければならなくなつた。同氏の意見は僕のとは違つてゐる。それを『つまり同一』だと見爲されるのは、僕に取つて閉口である。

◉第一、氏は僕の議論の肝心な點、『藝術が人生の復寫でなく、實行するのであること』を何の意味か分らないと云つてるではないか？この點が分らないのだ。僕が『實際問題に對して無解決態度』と云つたのは、花袋氏や抱月氏が考へてゐる樣な、藝術をやる範圍に於てばかり無解決であると云ふ意ではない。實際問題に當る時でも、解決なくして自我の行動——乃ち、盲動だ——をやるだけの覺悟が必要だと云ふのだ。

◉氏等は皆之が出來ないと云つてゐる。僕は出來るといふのだ。刹那的人生觀の極致はそこにあるを忘れてはならない。無解決は自我の存立狀態、乃ち、人生である。生命ある政治家、軍人、實業家が、中途に小康を得て安心してしまはないで、之を體現するのは、藝

術家が之を飽くまで體現する努力と一樣で、同じく實行である。それを、氏等は先づ實行するといふ考へがなくつて、傍觀的に描寫しようとする。そこにギャップが出來、區別が出來て、氏等の所謂藝術には餘裕分子、遊戲分子が這入つて來るから、眞劍の人生が現はれず、たゞその摸倣または間接表現となるのだ。從來の文藝はすべてさうであつた。二葉亭氏が文藝家を以つて滿足出來ないのは、文藝なる物はすべてさういふ間接的な物だと思つてゐるからだらう。僕は間接文藝を——あつても、第二流以下の物として——排斥し、直接眞劍の新文藝を主張するのである。

◉軍人の人生、政治家の人生、藝術家の人生等があると思ふのは、間接的觀法であつて、すべて之を獨存自我の內容と觀ずるものには、軍人としては軍人の人生、藝術家としては藝術家の人生より外はないのだ。軍人または藝術家が他の一方の人生を別にある樣に思ふのは、自己の內容をこと更らに分割または見違へて、それを假定的な非我としてゐるのだ。そんなことで『ありのまゝ』または『現實』の眞相は分るものでない。天溪氏は、花袋氏等と同樣、入りもしない謙遜の態度を以つて、事物に對してゐるが、その所謂『客觀』は一種の僞善的構成物たるに過ぎないだらう。

◉僕は飽くまでも自然主義を主觀的につッ込んで行くところに、わが國の、やがて世界の、新文藝となるべき物が出來るのだと信じてゐる。藝術家が、天溪氏等の所謂『人生の觀察者』たる地位より進んで、卒先して僕の所謂『實行者』たるべき時代が到着したのである。オスカーワイルドも云つた通り、人生は適當なエクスプレション、發想を求めて進んで來たのだ。して、藝術はまた實行的發想を得ようとして發達して來た。世界に於けるこの兩者の傾向を初めてわが國に於て總合實現するものは、刹那的人生觀の自我主義である。自我獨存、非我の存在否定は解決ではない、實際の狀態である。正當な意味に於ける『ありのまゝ』の事實である。だから、自我その物は自明の理で、その範圍は反問されるまでもないことだ。

◉主觀の無解決態度が强固であらば、天溪氏の所謂『客觀に對する無解決的態度』などは、殆ど論ずるに及ばない。却つて幼稚でなければ、また無意識的に僞善の立脚地を保持しようとしてゐるのだ。考へて見給へ、若し假りに非我なる客觀を實存物としてからが、それが實際に內部的觀察をやれるだらうか？やれると思ふのは、天溪氏等の行き方で虛構だ。

併し、實際にやれるのは、その實、自我苦悶の一端に現はれて來た物ばかりだ。乃ち、自我の範圍内に這つてゐるのだ。そこで、『自己の生存上の苦悶以外に藝術はないことになる』と、天溪氏が不思議がるのは、不思議がるのが間違ひである。觸るゝもの皆自我の内容であるからだ。それ以外に、『客觀』とか、『大自然』とか、『不可思議なる運命』とかを想像するのは、ロマンチク派でなければ、思想上の習俗家流である。

◎そこで、鳥渡附言したいのは、二六新聞の時代文藝欄(六月七日、八日)に出た蒲原有明氏の『詩人の覺悟』である。大体に於ては、僕等の排斥する表象專門の詩風辯解であるが、自然主義的素養のない表象專門詩人は、歐洲でも、文字の運用上には新機軸を出し得たが、思想上には殆どすべて舊套を脱してゐなかつたのである。有形に對して無形、外界に對して内界、肉に對して靈を設け、之がコレスポンデンス(Correspondence)、符合を發見する位に止まつてゐる。歸するところ、有明氏自身も他所で公言した通り、理想主義でなければ行けない仕事だ。僕等はそんな古い、平凡な、定りきつた形式思想を打破する爲め、新自然主義の自我主義を主張するのだ。

◎氏は暗に僕等の自我主義に當つてゐる。然し、その實、文字上の綾があるだけで、その綾を取り除けば、シエリングの符合哲學、スキデンボルグの内外交涉說と同樣、何物も云つてゐないのと同じである。自我主義はそんな空虛な物ではない。新藝術の起るのはいゝが、『自我の攻究が不足である。發足點を確かにせよ』と云ふのは、僕等に對する忠告としては、どこまでも確實を望むのが僕等の本意であるから、決して反對をするに及ばないが。それを以つて氏自身の立ち場を辨ずるものとすれば、氏の理想的またはこと更らに謙遜的な發足點よりも僕等の自我主義の方が確實で、また痛切であることを斷つて置く必要がある。

◎且、『近代の文學は人間中心の思想を脱し來つたところに深い味ひがある』と云ふのも、僕等に對する警語であらうが、それは事實に相違してゐる。歐洲だけで考へて見ても、佛蘭西表象派の殿將ホイスマンズは別としても、エルレインでも、ボードレイルでも、決して人間中心主義を脱してゐない。殊に現代文藝を導き出したボードレイルの人工主義などは、後の佛蘭西デカダン派や英國耽美派と同樣、自我主義一方の極に達してこそ生れたのだ。この事は、先日、六時會でやつた僕の演說『詩人オスカーワイルド』(來月の太陽揭載)でも

云つて置いた。露國のメレジコウスキなども、近代の露國文藝を總合して、人間中心の人間教を稱道してゐるではないか？わが國の新文藝に於ても、深淺の區別はあれ、向ふとこゝろはすべて人間中心の一流であつて、之に反するものは舊式と云つて排斥されてゐるではないか？してその舊式的な點がホイスマンズやメレジコウスキにもまだ拔けないだけだ。

◉登張竹風氏の議論はどうしても形式を脫しられないらしい。一時代前の新派、乃ち、ロマンチク派の一將でもあり、またニイチエを紹介した人でもあつたに似合はず、云ふとこゝろに獨得がない。『我觀錄』（新小說六月號）に於ても、『觀らるゝ者あり、之を自然と云ふ。觀る者あり、之を人といふ』などは、僕等の自我主義から云へば、何でもないことだ。『美は畢竟情の力のみ』とか、『今日の現實は昨の理想』とか、『昔の文藝は穢土を變じて天國たらしむ。今の文藝は天國をも穢土たらしめずんば已ざるなり』とか、之を新しい人生觀、新らしい美學を確立するものから見れば、夢に舊家の箱庭の懸け樋の水が聽える樣な氣がする。昔は僕等もそんな考へであつたが、今は實際に覺醒して、夢や形ばかりで足りなくなつた。

◉『穢土を變じて天國たらしむる』は容易だが、『天國をも穢土たらしむる』のは容易でない。ボードレイルはこの容易でない方面を開拓するに努めてから、段々文藝と美學とが變つて來たのだ。デカダンは、結果ばかりを見れば、『滑稽の極、痴態の極、醜態の極』であることもあらうが、その實際は新文藝、新美學の努力と意氣込みとを稱した語であるから、氏の樣に一概に輕視すべきものではない。結果から云へば、如何なる強者、悟者、君子でもやつぱし病弱死滅に歸するのだ。たゞ渠等は疊の上で死ぬ工面をめぐらすに反して、デカダン派はすべて戰場で死傷する覺悟で眞劍に文藝上の勝負をするのだ。氏等の推薦するものよりも一層強者的、自然的、男性的、日本的であるのだ。

◉また、『罵るものは煙の如く泡の如く消え行く』と云つてるが、竹風樗牛諸氏のロマンチクな罵倒と呼號とが消え行かないで、今日の新思潮に多少の貢獻があつた如く、僕等の新自然主義派のも亦、後時代の貢獻たるに於ては、氏等のよりも更らに多大であらうと信ずるのである。（四十一年六月九日作、讀賣新聞）

新審美學の建設

（田中喜一氏に與ふ）

田中喜一氏は、現今の哲學研究者流のうちにても、望みを屬すべき一人だと僕は思つてゐた、また、今後もなほ思ふべきものかも知れない。哲學雜誌に於けるプラグマチズムの批判（桑木博士の解說に對する）の如きは、同氏が帝國大學に關係がないだけ思ひ切つてやつて貰ひたかつたが、惜しいことには、發想法が下手——それだけ頭腦がにぶいのだらう——のため、議論が脇道へそれ易くつて、だら〳〵と要領を得ないうちに中絶してしまつた。

今回、氏の『藝術の眞』（中央公論六月號）を讀んで見ると、從來の哲學的形式を破つて、多少新らしい行き方を努めてゐることが見えるのは面白い。然しその議論の目あてたる『眞』の說明の矢は、舊式な自然主義、乃ち、ゾラ一流の理論に追從するものには當つてゐるかも知れないが、僕等の新自然主義には全く當つてゐない。『科學の眞と藝術の眞との相違を知らざる』ものがありとせば、それは歐洲の舊自然主義者または同主義踏襲者間にあるのであつて、曾ても僕が云つた通り、說明なき『ありのまま』に行き止つてゐる物質的文藝論者等は、此相違すら分らないと云はれても、之を辯明する資格がないのである。之と同時に、田中氏の科學と藝術、眞と美との解釋も亦いまだ不徹底な物であることを注意して置きたいのだ。

『眞を發揮すると美を完成するとは、同一作用の二側面』であつて、『比較的に眞の發揮を目的とするが如く見える』のを科學とし、『比較的に美の完成を目的とするが如く見える』のを藝術とする。して、兩者とも歸するところ『人生の統一と發展とを圖る』ものなることを、假りに、間違ひがないと見たところで、同一作用の程度問題を以つてこと更らに眞と美とを區別する必要がないではないか？必要もないことを呶々するのが哲學であるのなら、いくら系統を追ふて來たものにしろ、やツぱし必要のない空言空理だ。輪廓的研究をいくら進めても、內觀を直把する僕等に對して『無學』とか、『淺薄』とか云ふ資格はない。

氏の新らしい哲學的立脚地から云つても、僕等の考へと同樣、智と情との區別的滿足を以て眞と美との說明は出來ない事實を承認してゐるではないか？之を押し通せば、僕の所謂

無差別燃燒の心熱的見地に達しられる。ここに達しさへすれば、もう、氏身づからが舊套者流の『いまだ曾て言はざりしところ』と誇る解釋はただあり振れた折衷論となつてしまう。『クラシズム或はローマンチシズムの如きも、それが起りし當時の社會狀態及び個人の活動に照し見る時は、慥かに眞を發揮するといふをその目的の一とはなせしなり』とは、再び跡もどりをするに過ぎないのだ。僕は舊文學（古代または現代の）にも眞があつたとか、美があつたとかいふ下らん問題を否認するのではない。刻下の新文藝は折衷論的な眞とか、美とかを條件にしてゐない。僕等は肯動的な實感を藝術にも要求するのだ。

如何に氏の認識論から持つて來て、眞と美とが人生を統一若しくば發展さす物であるとも論じても、輪廓論はどこまでも輪廓論で、內部的事實——これが僕等の生命——に接觸してゐない。その統一と云ひ、發展と云ふことは、實際あり得べからざる理想家の夢想だ。新自然主義の人生觀から云へは、人生は自我のエクスプレション、發想である。發想のうちに發現する自我は刹那的な物であるから、統一が出來たと思ふ時は既に自我は拔けてゐる。發展が出來たと思ふ時は、もう、自我の形骸だ。田中氏等はこの拔け出した自我の形骸を

論じてゐるのだ。輪廓にとどまる哲學は性質上すべてさうした物であるし、クラシク文學、ロマンチク藝術、物質的現實觀から出來た區別的自然主義などもさうである。氏の藝術論はこれらの文藝を論じたものであつて、僕等の見地まで達してゐない。

折衷的統一の出來ない、折衷的發展の見込みがない實際の人生は、いくら理想家があつて絕叫しても、無理想である。無目的である。理想とか、目的とか、解決とか云ふことは、或物に對して他の或物を豫想するから出て來るので、全然他物の存在を許さない獨存自我は、徹頭徹尾、無解決である。それが生活し、活動するのであるから、肯動的である。僕等の所謂新文藝はかういふ直接眞劍の人生を體現するのであるから、折衷的、手段的な眞とか、美とかいふ物を眼中に置かないのだ。若しこれらに代はる物を指定する必要があるなら、僕は無解決、無理想、苦悶、悲痛等の實感を擧げて答へよう。田中氏も從來の『膚淺にして狹隘なる美學』を弊履の如く棄てる勇氣があるなら、棄てた中の物を再び拾つてカラ意張りをする樣なことはしないで、來つて、僕等の見地を全ふする、嶄新にして、新時代の文藝を說明しまた助長するに足る、實感主義の美學を創設したらどうだ？

僕等に對して嶄新らしいことを云ふのはよし給へ。哲學研究者よりも文藝家の方が、双方を大觀して、進歩してゐるのだ。その代り、氏が若し僕等の新自然主義の自我的人生觀に達したなら、その勢を以つて、氏の情實的關係のない大學派のいつも變らない踏襲見に當るのが望ましい。氏にして若し勇氣と根氣とがあらば、たとへ發想は下手でも、それが最も適任だと僕は思ふ。然し、それも僕の見地に來なければ、今の氏では大學派と五十歩百歩の差に過ぎなからう。（明治四十一年六月十五日作、讀賣新聞）

文界私議

（十）

◉僕の評論は、これまで、先進者に對しても遠慮はしなかつたが、また後進者に對してもかばひ立てはしないつもりだ。公人としての批評を公衆の前に報告するのであることを豫め斷つて置く。

◉さて、僕の作詩の經驗から云ふと、意に滿たない（少くともその作詩の瞬間に於て不滿足な）のが出來ると、破り棄てたり、燒き棄てたりしてしまう。それが熟練して來ると、棄てる樣な物は初めから作らなくなつてしまう。ところが相馬御風氏の集には、僕なら棄てゝしまう作が多い、殆ど皆然りと云つてもいゝ位だ。この問題を解釋して見よう。

◉この集には深刻な動脈が貫いてゐない。動脈が貫くにも二樣あつて、ブラウニングの如く、振動しないで、鐵の棒の樣に露骨に固く張つてゐるのがあるし、またゼルレインの如く、銀線の樣にやはらかにまた微妙に振動してゐるのがある。前者でないのは女性的になり、後者でないのは神經痴鈍の傾向を來たす。御風氏は概して女性的で、而も渠の神經は鋭

敏と云はれる範圍に這入つてゐない。一言にして云へば、行き方が總じてまだ幼稚だ。

◉先づ外形の上から云つても、調は五の句、七の句を在來の俗曲的、乃ち、もとの文庫派的に使用してゐるばかりで、これ以上の努力または心的な親しみが見えてゐない。つまり、獨得がない。たとへば『翁』の一節——

行きかよふ　人の　すべては、
その　前を　すぐる　と　しては、
うなだれて　あゆむに　似たり。
日は　くれぬ、　翁は　去らず。
月かげに　なほも　佇む。

『は』どめの句が無意義に二行もつゞいてゐるのも考へがなさ過ぎるのに、獨得な力があつても少いので、死んだ句を壁に張りつけたのを讀む氣がする。だから、それが『運命か、はた死の影か、……秋の日のまぼろしか』と附け加へても、少しも動いて來ない。

◉この詩中の翁と運命とがひたりとそぐはない様に、氏の新らしい材料と舊い思想とが至るところに相爭つてゐる。一例を擧げると、『鐵路』の一節——

何事も　重き　惱みに
地は　いたく　汗ばむ　けはひ、
無限より　無限に　つゞく
鐵路　のみ　白く　光れり。

の如き、新らしい歌ひ方であるかと思へば、『無限』といふ舊人の喜ぶ語を以つて來た爲め、こわれてしまつた。鐵道の長さに對して無限といふ考へをいだくのは、誇張でなければ虛僞だ。若しまたさうしたつもりでないなら、そんな語を使はないで、新しい酒は新しい袋に盛るべした。

◉『溜息』とか、『トンネル』とかいふのも、思ひ付きはいゝが、やツぱしがたツぴししてゐる。この種のうちでは、『雜居』が面白い。『柿の實』は小山内薫氏の『秋の歌』を思ひ出すが、前者はまだ後者の様にその作者に親しんでゐない。『焚火』、『都にて』等は、全く作るに及ぶまい。若し意味があるとしても、幼稚な物だ。この種には、『雲の峯』、『寒空』、『闇路』、

『堂の窓』、『花あやめ』等、詩を好き初めたものなら、誰れにでも作れる様な物だ。そのうち、『歌聲』などはいゝ方だ。『古橋の賦』などは長いだけで何でもない。

◉どうも薄ッぺらな『藝術の爲めの藝術』主義、惡く云へば、文字玩弄癖が全集にみなぎつてゐる様だ。この缺點を隱蔽するには、ラフアエル前派の様に、『二つの鐘』、『天上哀歌』等のロマンチクな材料を以つてするに如くはなしだが、それも御風氏が情緒の小いのと、用語が優し過ぎてその範圍の狹いのとで、大きな空想を捕捉することが出來てゐない。且、氏とても、僕等の自然主義の行き方を守るつもりだらうが、それには、今も云つた通り、必要な太い、强い、または銳敏な動脈が貫いてゐない。では、もう、氏は、この集だけでは、詩人としての生命がないか、どうか？ないとはないが、幼稚といふとの中に發見しなければならないのだ。然し湖處子時代の幼稚まで落す意ではない。

◉御風氏の詩は、新派のうちで、薰氏の詩と優しい哀れといふ點に於て頗る似たところがある。然し、薰氏のを讀んで幼稚と感じられないのは、銳敏な才氣と皮肉な感想とをその人として體現してあるからである。御風氏の優しい悲哀は、却つてその短歌に於て割合に獨

得的に出てゐることはあつたが、長詩に於ては、それが類型的である、摸倣的である。之は調の上からも見える。また内容の上からも見える。然し若し氏の生命ともいふべきものを短言すると、狹く、ちいさく、優しく、哀れな胸のうちに、一種のとどろきを感受しようとしてゐる事だ。氏にして若し今後も作詩を續けるつもりなら、今幼稚と云はれるのは決して侮辱される所以ではない。湖處子のは全く見込がなかつたが、氏のは發達する見込がある。

◉薰氏の樣に才氣で行かず、たゞ所動的、女性的で行く感想は、御風氏の充分發展すべき長所であるらしい。

いづこより　來て
いづこへ　か
さては　たゞ
車の　ひゞき
あやしくも
胸にぞ　ひゞく。（『車の響』の一節）

調と云ひ、用語と云ひ、まだ〳〵注意を與ふべき物だが、その『ひゞく』ところが氏の國である。

足跡は　ながく　つゞけど
この　ふたり　いつかは　遇はむ。

一すぢの　砂の　足跡
それとても　やがて消ぬべし。（『足跡』の抜粋）

この『足跡』が氏の踏み行くべき道である。

◉新進作家に對して苦言を呈するのは、決して之を押へるつもりではない、一層奮發してもらひたいので、忌憚のないところを云つたのであることを諒として貰ひたい。それに、意氣込みの新らしい氏のことであるから、泣菫氏や有明氏の無自覺的に採用した七五七、五七五の如きぬえ句調（その駁撃は僕の『新體詩の作法』にある）は摸倣する必要がなからう。それに些細なことではあるが、五七調に何々してぞで一行を終り、之を次行の終りで結ぶなどは

最も弱い語法であるのに、それが時々考へもなく見えるのは注意したらよからう。また、句點を打つてある詩と、打たない詩と、亂雜に打つたり打たなかつたりしてある詩とがある。これも必らず正確に打つべきものだ。敏感な詩になると、句點が一ヶ所間違つても眞の意を傳へかねることを注意して置く。

◉ついでだから、平木白星氏の散文詩『たんつくたらつく』（帝國文學六月號）だが、あれを見ると、白星氏は殆ど詩の頭腦がない樣だ、少くとも、新時代に觸れる感想を持つて居ない。鳥渡氣が利いた語を用ゐてはゐるが、『七十六の襞をたたんだ喜見城のやうに、眞南に、聳え立つた怪しい雲』ぐらゐを以つて、――ただ喜見城の古事を知つてゐるといふ御披露ならそれまでだが、そんなことを以つて――現代的詩材の重要な對照として滿足してゐる樣な行き方では、到底、氏の所謂『現代思想を現代の口語を以て吟咏する事』とは、殆ど關係がなからう。材料も現代的と思つて取つたのであらうが、『世界滅亡の活動寫眞』とか、『電柱に宗教演説の題を書いた赤紙』の『救靈』とか、誇張である以外に何の意義も感想も添つてゐない。

◉僕は、先々月文章世界に送つた談話（前月も今月も出なかつたが、來月は出よう）に於て、氏と兒玉花外氏とはホイトマンの散文詩を味つたら、發明するところが殊に多からうと云つて置いたが、白星氏今回のを見て、同氏には失望したのだ。それから見ると、御風氏の『痩せ犬』の方が、メタリンクの様な定り切つた行き方ではあるが、まだ纏つてゐる。僕も散文詩を作つたが、今月の趣味に出る筈であつたのが、七月に出るだらうし、また早稻田文學にも送つてあるから、それもやがて出るだらう。わが國の散文詩はこれから熟して行くのである。

雜言

◉前回の本欄に出た島村抱月氏の陰險な（或はそれが穩當なのかも知れない）『駁論』に於て、僕とは名指さないで、僕に當つたところがある『美の內容が較近にどんな變遷をしてゐるかをも究めないで、』唯美主義だ、娛樂主義だと責めるといふことが一つ。然し、如何に美の解釋が違つて來て、僕が氏の論と同時に出した私議でも云つた通りの無理想、苦悶、悲

痛が美となつたにしろ、氏の様な行き方では、痛切なところへ達しないと僕は斷言するのだ。次ぎに、『紙の上の人生、たとへば小說を、實生活と思へとは詭辯』といふことだ。これを見ると、氏はます〳〵藝術を以つて紙または布の上にゐがいたおもちや視することを確めたも同前である。無關心說に煩はされる區別的藝術觀の最も膚淺な物だ。僕等は藝術の成り立つ所以を以つて人生の成り立つ所以と區別せず、執着の人生は乃ち執着の藝術である。美學者等が『觀照』などいふ末事を重要視するから、僕等は從來の美學を（氏が進んでゐると思ふのをも）打破する必要があるのだ。よしんば、そんな末事に多大の智識を持つてゐたところが、結局、何の役に立つ？近頃萬朝報に出た善即美の論も、田中喜一氏の眞と美との解釋同樣、折衷的觀念論にとどまつてゐる。他日、實感主義の美學が組織されたら、必らず僕等の主張してゐることが根底にならうが、抱月氏の云ふ樣なことは無用でないまでも餘り大事なことではなからう。氏に『イグノランス』を以つて擬せられる人々こそ却つて氏を新智識の活用に乏しい人と實證する素養を持つてゐることを忘れ給ふな。（四十一年六月廿一日作、讀賣新聞）

新聞記者並に法律家に注意す

社會の具眼者たるべき地位を占めてゐる新聞記者や法律家が、社會の重大問題であるべき事實を輕々に附してゐることがあるのを、僕はいつも遺憾に思つてゐる。近頃起つた事件を例に取つて、少し渠等を警醒したいのである。

柏木團といふ所謂社會黨員の一團が、先日警察官と衝突して神田警察署に拘留され、嚴重な取調べを受けた時、拷問に拷問を重ねられ、靴蹴にされ、南京虫責めにされ、殊に弱者なる婦人等に強く當つて、悶絶悲鳴の聲は署外にも聽えた。これは實見者の證明でもあるし、また或新聞紙には掲載せられたところだ。他の新聞紙の記者は、之を知つて知らぬ風をしたり、また、却つて警察がはの言ひ分ばかりを採用し、同黨員の獄中で示めした弱點のみを公けにして、警官の非を蔽つてしまつた。

斷つて置くが、社會主義並に社會黨は、無權力の個人主義を土臺としてゐるのであるから、僕は決して贊成しないのだ。且、わが國に於ては、權力萬能の個人主義がうまく國家主

義と合致してゐることは、僕が先年加藤博士の說を評した時に云つて置いた位だ。ここでは、だから、主義の贊否を云ふのではない。人間虐待に對して社會の注意を促すのである。僕は某警察部の英語教師をしてゐたことがあるので、虐待の事實はたび〳〵見た。そのうちでも、無言で掬摸の横ツ面を投りつけると直ぐ恐れ入つてしまつたり、ずう〳〵しい泥棒の向ふ脛を靴さきで蹴ると忽ち白狀するなどは、見ても鳥渡氣持ちがいいが、それも直ぐ厭な氣に變つてしまう。まして、その言論行爲は贊成すべきものでないにしろ、一個の意見を有するものを——殺すなり、罰するなりはするとしても——遇する道を過つてゐるのではないか？

新聞記者等が之を何とも云はなかつたのは、一に當局者の威喝を恐れたと同時に、また一に、世間で評判の惡い社會黨を辯護する樣に思はれたら、新聞が賣れなくなることを心配したのだ。これでは、ただ目前の便利ばかりを見て、その實、他日、言論の主たる記者等の頭上に、必らずしも、落ちて來ないとは限らない壓迫を許容してゐることになる。如何に新聞が商賣の一種になつた世の中でも、これでは餘り腰の弱い、意氣地のない、不見

識な話ではないか？不見識でも、三面記事で弱い者いぢめを爲し、社説では當り障りのない俗論をつゞけてゐれば、先づ新聞の賣れ行きには都合がいゝと高をくゝッてゐるのなら、新聞なるものを買ひかぶつてゐる世人に對して、僕はたゞこんな狀態であることを報告して置くまでのことだ。

小說『都會』の發賣禁止事件に關しても、同じ樣なことがある。葵山氏の作は決して自然主義の代表作と見られる價値はないが、兎に角、同主義の作物として目ざされた。ところで、苟も眞の自然主義（たゞこの主義が文藝創始の一方法として取り扱はれてゐるのは知らず）はわが國現代の着實、眞摯、深刻な動脈を有する運動であつて、わが國人の思想と態度とを一洗すべき傾向を示してゐるのに、そんなところまでは考へ及ぶ頭腦がないままに、記者等はいたづらに同主義を以て肉慾主義とか、放蕩主義とか、墮落主義とかに擬し、得意さうに之に對するお門違ひの攻擊または冷笑を恣にし、當局者が社會主義に對すると同じ態度を以つて自然主義に對する誤解的執行を、謳歌しないまでも、平氣で看過してゐる。これは記者等に限らず、一般の法律家等もさうである。

小說を以つて有名になつた國木田獨步氏の死を報ずるに、麗々しくも『稀世の新体詩人獨步逝く』と掲載した新聞紙もあつた程だから、その職に不忠實、不熱心、その日その日でお茶を濁すのは新聞記者等の常として、法律家等が矢ッぱしさうである。社會黨に對する政府の處置が初めから定つてゐるので、法廷へ出たところで、たゞ形式上の辯護を許すに過ぎない樣に、葵山氏今回の控訴が駄目になつたのは、辯護の筋道が立たなかつたのではなくつて、政府の方針が定木的に初めから定つてゐたのだ。して、法律家は自然主義の何たるかをも知らず、片々たる『都會』の價値さへ判斷することが出來なかつた。これでは司法權の獨立などはあつたものではない。新聞記者に正道を踏む勇氣なく、法律家に——今更ら故兒島惟謙氏の湖南事件に對した決斷が思ひ出される——自己の權利を追行する力がないのも、歸するところ、各自の實力と學識とに乏しいからのことであらう。

僕等は國家の權力と威嚴とを認めると同時に、立憲國民である以上は、その時その時の政府には反對することが出來る。して、以上云つた通りの人間虐待、司法權蹂躙等の事實がありながら、普通人の耳目たるべき新聞記者や法律家が、無學または不見識から、之を看

過する樣では、僕等の樣に多少新運動、新思索に努力するものらの安全を保證するものがないわけだ。僕等は根本的思想上では常に無目的、盲動等を主張するが、其思想的生活が表面に現はれた社會または國家の人工的組織上からは、決して絶對の壓制、絶對の盲從に滿足するものではない。之が爲めに法律家並に新聞の政治記者が必要なのではないか？

然るに、渠等は殆ど自己の貴重な職分を自覺してゐない。政府の保守分子と一緒になつて、社會に現はれる重大にしてまた國運を發展さす運動（こゝでは、特に自然主義を云ふ）を冷笑し、虐待してゐる。割合ひに寬大な西園寺侯の時代に於てさへ然りだから、新內閣のもとでは、一層甚しい盲從と屈辱とを忍ぶかも知れない。よしんば、絶對の壓制政府が出來あがつたにしろ、それが充分自覺した個人主義の根底に立つてゐるなら、僕等と衝突する政策を恣にするとはない筈だが、現今の政治家等はたゞ表面の智識と策略とを弄するだけで、深い思索的實力を有してゐないことは、鳥渡した實例を擧げても分る。曾て青木某子爵が外務大臣であつた時、しなくてもいゝ交換問題として、米國や露國でも這入つてゐない、萬國著作權同盟に加入した。それが我國の現今にどれだけ不利益になつてゐるかは

諸君の既に知つてゐるとだ。して、今日の大臣又は其候補者連中に、こんな方面に於て、青木以上の頭腦を持つてゐるものがあらうとも思へないではないか？

貧弱な頭腦で固まつた政府が、社會主義または社會黨——こんなものが、わが國民の歷史並に性質上發達する見込みはないのだが——を騷ぎ立てるのはまだしもだが、片々たる『都會』事件を重大視して、累を將來の國運發展的な自然主義に及ぼさうとするのは、その手はじめの惡政策時代に於て、新聞記者並に法律家が、活眼を開らいて、しツかり僕等を擁護してくれなければならない筈だ。今の樣な狀態で行けば、政府の政策は、例へば、一たび目くら判を押して失敗した明き目くらが、證文とし云へば、何でもこわがると同樣、自然主義と聽けば、如何なる物でも禁止する工合になつてしまうかも知れまい。實に天下の物笑ひである。

僕等は國家、國民、國力の根底に、確乎たる建築物を實現するものであるが、思索と創作との外に何等の武器も用意もない。社會上、僕等の安全を擁護して貰ふには、活眼の新聞記者並に法律家の力を借らなければならない。現今の狀態では、殆ど渠等は信賴するに

足りないのだ。記者並に法律家よ、自覺せよ、奮起せよ。露國の政府はレヴリユーションを（革命）といふ語を排斥する結果、稅關吏が入國者の革鞄に『地球のレヴリユーション』（回轉）といふ書物があつたのを發見した時、この書物をも沒收したことがある。願くは、わが國の政府から、こんな馬鹿げた官吏を出さない樣に、充分監督と牽制とをしたいものではないか？（明治四十一年七月十九日作、讀賣新聞）

表象と暗示

（新自然主義の結論）

表象と暗示――この問題に就ては、讀者に再三僕の意見を發表する約束をして置いたが、詳しくすれば長くなるのと、時を得ないのとで、延引してゐたのだ。幸ひに、近頃、この問題に接觸または誘引する諸家の談論が出たので、それらを種に僕も意見を述べて見よう。

萬朝報に於ける素堂氏の『血笑記と象徴主義』（八月二十日）から初めるが、アンドレエフの血笑記が部分的表象ばかりで物足りないといふことは、その一創作に關する問題だから別とする。して、わが國現代の無素養者間に行はれる、『自然主義から表象主義へ』の呼び聲を一足飛びと注意し、また、『謎々何にと云つた表象主義や神秘主義では食ひ足りない』と論ずるなどは、既に僕等の叫んだところに一致してゐる樣だが、大客觀、大自觀の背景を充分に取つて、『その上で集中した或物で見せる、想はせる』といふ樣に解する氏の表象說に於て、その『或物』なる表象（乃ち、シムボル）は、僕等の主張するのとは違つて、矢ッ

ばし全く謎々的の『跡戻り』になる性質の物ではあるまいか？

『赤い笑といふ象徴がなくても、血笑記一篇の價値に關係はない』（その材料なる戰爭の恐怖、疲勞、狂氣、慘憺たる空氣さへ描き得てあれば）とあるは、頗る僕等の意を得てゐるが、表象專門家はさう考へないで必らず何か奥ゆかしい意味のありさうな技巧を用ゐるのだ。そこにはまだ描寫すべき又はもツと這入り込むべき餘地があるのに、その勞を避けて、筆さき又は念頭でむにやみにしてしまう。それが專門家の表象だ。美學上、またはカトリカ的詩人（マラルメやボードレイルも然り）には、全部的表象なる發想法はあつても、つまり、うそだ。今いふ様な性質のものであるから、勢ひ部分的になつてしまつて、それを氏の所謂『斷片的』でなく、全部的に行かうとすれば、ただの隱喩（乃ち、メタフォル）になつてしまう。カライルまでの人々は勿論、それ以後の表象派、殊にホイスマンズも、知らず識らずそこへ落ち込んだのだ。どうしても、跡戻りだ。乃ち、僕等の自然主義的、詳しく云へば、自然主義的表象派の新らしい努力に堪へられないといふ誹りは免れない。

そこで、蒲原有明氏の『管見錄』（二六新聞、八月十六、七、八日）を讀んで見給へ。こ

の表象が比較的にデカダン的な説明を得た。『耽溺の生涯には一切の印象があつて、而も一切を放擲した解脫の姿がある』、つまり、デカダンはそこから『新らしい世界を觀て、極めて幽微な象徴的調子を發見した』と。説明は曖昧だが、僕等の云はうとする表象の所緣は分るだらう。して、その表象が、僕等の意味に於ては、耽溺の全部的姿容でなくてはならない。僕が曾て無目的の『自食的表象』と名づけたのは、乃ち、これだ。普通の自然主義を踏んで更らに深く突き入つた僕等の新自然主義抱月氏のは實際に於て『新』の字は添へられまい）の生活や描寫には、それがおのづから浮んで來るのである。全體を、素堂氏の所謂『集中した或物』（技巧または抽象觀念）で見せるのではなく——さうするから、自然、その描寫法並に生活狀態が充分でなくなるのだが——僕等の實感を、刹那々々の變化中に、全部として表象體現するのだ。換言すれば、靈合致の自我その物であるのを發見することだ。執着と悲痛とはどこまでも底がない。

然るに、蒲原氏は、物心二元論若しくは結極の唯心論（どちらとも判然しない）の立ち場から、所謂『新らしい世界』を以つて空想的な解脫境と見爲してゐる。『美は夢であつて、眞

は空だ』といふ様なことは、ただ技巧的形容であるから、別に讃否の論を立てるまでもないが、『執着停滯するのみが嚴肅なる態度ではない』と云ひ、『吾人に感化力の備つてゐるのは、單に吾人に苦痛を與へんが爲めではなくて、寧ろ反對である』と云ふのを見ると、氏が表象專門派に屬するだけに、まだ僕等の所謂表象の意味（を最も新らしくまた最も適當と僕は思ふ）が分つてゐない様に思はれる。氏等の喜ぶ『物心照應の理』などは、宗教的不靈派の無識なままに拵らへた形式で、哲理に熟しないボードレイルが之を世界の詩壇に最も嶄新に應用したが、それさへ刹那の詩人エルレインに微塵にされた。して、後者とても、なほその思想に於ては、ボードレイルやマラルメやの物心差別の假境に滿足してゐた缺點が見えるのだ。マラルメやホイスマンズに下つては、全くただ技巧の徒である。渠等が架空の宗教的方面へ裏切りしたのは、底なき耽溺の實感を正當に攝取する哲理的素養が殆ど全くなかつたからである。

素養のないものに限つて、如何に近代人の感想を持つた人でも、自然主義と云へば必らず自我の外に自然なる物が存在してゐる様に思ふ。帝國大學派も早稻田派もこの點に於

ては違ひはない。然し、『大自然』とか、『神』または『解脫』と同様に、排斥すべきことは、既に僕の論じたところだ。相馬御風氏の『自然と人』（二六新聞、八月廿日、廿一日）にも、『自然の姿は完成の姿である、確立の姿である』とか、『自然の前に自己の孤獨を感じ』とか云ふのは、自我を充分に知らない時の假想假感である。そんなことでは、ただ技巧を借りて、漸くそれ以上の實想實感がつかめることもあるだけだ。それが自我の前に自我を感ずる様になつてこそ、技巧や意匠を用ゐず、また神秘とか、南山氏の所謂、運命を脊にする『不可思議力』（早稻田文學八月號）とかいふ考へを借りず、神經衰弱者の鼻さきに記憶や思想の姿が散らつく様に、獨存者の眼前に徹底的孤獨の幻境が浮んで、肉と靈、夢と眞が合致する。その他に有明氏や素堂氏の所謂『或物』があるのではない。これが僕等の無技巧的表象だ、自然主義を追窮した暗示だ。耽溺は、ここに至つて、決して病的ではない、健全な人生だ。

素養と內觀力とに乏しいものは、この人生または生きた人生觀を、描寫の都合上から退却しようとする。さきにも宙外氏、天外氏、その他に注意したことだが、小杉天外氏の『作

家としての人生の觀方』（文章世界、八月號）には、相變らずそんなことを云つてゐる。『死といふ暗い影』をしよつてゐようが、ゐまいが、當面第一の問題（これが催眠術的な禪學を初め、政治、實業、教育の方面に於ても最も必要だ）に臨んでは、苟も第二、第三の疑問なる技巧や手段で胡麻化して置かない以上は、『人生だと覺醒してみたところで、それが何だ。……化粧をする、修飾をするといふことも亦人生の一要素だ』といふ樣な、煮え切らない、不眞面目な態度で、安閑としてはゐられまい。人生と自我とはかけ離れた物でない。『自分を觀察するが忙しくつて、そんな問題を考ふべき暇がない』とは、人生はおろか、自我をも分つてゐない狀態ではないか？技巧の上に如何に天下一品でも、そんな心持ちで、『その儘に見て、その儘に寫す』ことは、氏のこれまでの創作の樣な寫實、乃ち淺薄な表面描寫だから、決して『偉い』職業ではない。そんな態度では、眞面目になればなる程、ただ胡麻化しがくどくなるだけだらう。

裝飾と僞善、賢愚と老若、自他と上下などの世相はあるままに、それが耽溺的な表象の作用に依つて統一される。そこに自我の刹那的實感を攝取する。二葉亭氏を初め、實感は

捕へられないといふものがあるが、それは舊式文藝者流の樣に、形式を以つて捕へようとする考へがあるからだ。之を打破して、また官能の融通力を擴張し、而して後、刹那の集中力を得た作家なら、過ぎ去つた事件も刻下の生命に結びつけて實現することが出來る。塚原澁柿氏の『江戸時代の人物描寫』（文章世界八月號 に、『自然主義は、今日のことで無くては書けないといふ（泡鳴曰く、誰れがそんなことを云つたのか知らん）けれども、そんな狹義なことはない』とは尤もだが、『感じた儘を書けばいい』とは、かの意見發表法に哲理のない一般自然主義者等の一つ覺え、『ありのまま』と同樣、ただ雷同的口調でないかと思はれる。作家または獨存者が感ずるには、萬感を統一する主義、乃ち、生命を要するのだ、おのづからの無目的表象が必要だ。

僕の刹那主義を、一般の自然主義論から區別して、新自然主義と云ふのはそこだ。これは、まだ自然主義の運動が初まらない時、また僕の『半獸主義』を書く以前に、僕が自分の苦悶詩に於て歌つたのが初めだ。當時技巧ばかりに迷つてゐる徒が多かつたので、氣が付くものは少かつた。（然し、文章世界八月號に出た太田みづほ氏の『韻文界の時代創始者』

に於て、氏の所謂第三期に於ける僕の詩界に對する影響を一言しないのは、觀察に片寄つたところがあるではないか？）表象を技巧の目的または或物の暗示と見るのは間違ひだ。それに就ては、長谷川天溪氏の近刊論集『自然主義』を介して説明するが、その本論に出てゐる説に關しては、自我問題で相論駁した時、僕が再三論じたことがあるからここには別として、下編の『表象主義の文學』中に於て、表象なる物を蒲原氏などと等しく解してゐるらしい。クラシク學者ケーベル博士の説に從ひ、觀念の媒介に依つて意味を傳へるのが寓意で、物その物が説明を要せずして或意味を發揮するのが表象だとしてある。然し、無技巧を標榜する僕等の物その物になれば、詩樂の内容律と合して、それ以外に意味を求めようがなくなるのだ。

ダンテ、ゲーテ、カライルなどの舊式表象家連は、表象を手段視し、自己の或抽象觀念（それを無形物と云つて）を顯はすに外形物を持つてすることと考へた。つまり、宗教的、哲學的最終觀念またはその途中の觀念を物的または外的現象に依つて空想したのだ。たゞその兩方の間に説明的仲介物がないだけが、寓言と違つてゐる。この行き方で全部的表象

が出來たとすれば、前項にも云つた通り、隱喩に退却してしまう。表象以外に目的があるからである。スキデンボルグなどの流れを酌みて、ボードレイルが歌つた物心照應なども同じ行き方に過ぎない。この惡魔派の元祖の病的態度を比較的健全に追行したフランス表象派もさうだ。ただ舊人は之を非官能的に取扱つたのを、新人は充分官能的に利用した點が違ふ。この點は天溪氏も認めてゐるが、氏の云ふ通りな『直接に吾人の神經を動かして、感覺すべからざる世界に入らしめむとす』ることは、彼等に取りては、すべて憐むべし、宗教的または哲學的傳習思想に立ち戻ることだ。個人的哲理の深遠な根底を有するものが外國並にわが國の文藝界には少いから、大抵の人々は皆このみじめな假境に落ち込んでゐる。渠等は、高尚がれば高尚がるほど、そこへ朝するのは情けないではないか？

かういふ議論には、マラルメの主張した特別な且狹義な表象を忘れてはならない。渠はワグネルの所謂『詩歌の最も完全なものは音樂だ』を信じ、身づから音樂的詩歌を主張創作した。その表象も亦、思想上では新舊表象家の頑迷を脱しないが、音樂的に浮ぶそれに限つてゐる。音樂（ここではおもに器樂）ばかりは初めから全く暗示的な物と云はれた。先づ

之を正しい考へとして、器樂がその音律に依つて暗示する夢幻境（僕は之を『新體詩の作法』に於て律夢と略した）を、詩歌は言語の音律に依つて出來ることは事實だ。天溪氏が之を『不可能』としたのは、兩者の區別を傳習的に見たのである。この點は『作法』に於て、また『半獸主義』のショーペンハウエルの音樂論駁撃に於て、僕は詳しく論じてある。

音律は内容充實の流出でなければならない。して、それが樂上並に詩中の音節（シラブル）結合上に現はれる意味は、詩樂共に區別はない。（この場合、詩とは僕の主張する自然主義的表象詩だ。）樂家が樂律の一小節（バー）を取り扱ふのは、詩人が詩の一語を取り扱ふのと同じだけの意味がある。その代り、音樂でも充分進歩したものは、詩歌と等しく國民的特趣、乃ち、他國民に不可解な性質を帶びる。萬國共通の音樂などがありとすれば、シヨーペンハウエル等を主とする傳習學者が、エスペラント的に、單純淺薄な俗曲を標準にした物だ。音譜は樂の文字、文字は詩の音譜である。音樂が最初から暗示的ならば、詩歌も亦初めから暗示的でなければならない。マラルメ音樂詩の長所は乃ちそこにある。音樂の本性たるべき内容律を詩歌にも攝取し、その暗示力のうちに表象の浮動を見ようとしたのだ。

渠の失敗は不可能事を試みた爲めではない、詩を音樂的にすれば、更らに一歩を進めて置くべきことがあるのに、之を氣付かなかつた爲めだ。

ついでに云ふが、多くの人は詩の『音樂的』なる語を俗曲的句調のいいことに解し、わが國詩に於ては口すべりのいい七五調などを聯想した。天溪氏も、その論が初めて太陽に出た時は、さういふ考へであつたらしい。暗に、七五調以外に僕等の重烈澁滯的詩律——これが却つて内容の充實を失はない律であるのだ——を以つて、表象派の所謂音樂詩に適しないといふ附言があつたが、——して、僕は或席上の演説で之を駁したが、——今回の論集には、それが删除されてある。如何に句調がよかつたとしても、『泣菫氏の古典詩『鎌鼬』（新思潮掲載）の如く、辻を通る女がそれに切られたとて、直ちに不可思議を叫ぶ樣な詩は、無理に觀念を借りて、乃ち、説明的に、意味を出さうとして、而も内容は無意義である。云ひ切つてしまう弊があるとマラルメなどが攻撃したパルナシヤン派でも、そんなへまなことはしなかつた。島崎藤村氏の小説『春』にも、同じ樣な無理が多かつた。文章世界記者は氏の筆致が暗示的だと云つたが、暗示の意味を知らなかつたのだらう。例へば、『世のどん

底に落ちた様だ』といふ場所があつたが、前後の關係にそれだけの幻想を浮ばす努力または内容が見えないので、暗示力がない。ただ不足な説明に過ぎなかつた。

暗示の有無が所謂音樂的詩歌（曾て僕は心理的詩歌とも云つた）を區別する標準である。山本迷羊氏の『視覺本位の小說』（帝國文學八月號）に於て、『詩は耳で聽くものか、眼で視るものか』云々などいふ表面論がしてあるが、デカダン素養を有するものには、聽覺視覺の區別を平均して、直ちに心熱に伴ふ内容律が出るのだ。この律は心熱覺とも名くべき別感覺力に訴へるのだ。して、暗示を包む内容律は、韻文に於けるよりも、却つて散文詩に容易に（苦心少く）追窮することが出來る。更らにまた小說に容易だ。且、詩並に小說が内容律に依つて自然主義的表象を暗示することになれば、かのたださへ感情主義に傾き易く、然らずとも、ロマンチク主義を越えることが出來ない性質の音樂よりも、更らに一歩を進めた藝術である。音樂、繪畫以下の藝術が到底自然主義的表象を包み得ないことは、『彫金界の過去及び現在』などで、僕が既に論じたことだ。マラルメなどは思想の舊式的なのみならず、音樂を上に見て、それに文字を驅つたのだから、態度上、まだ缺點が多かつたのだ。かう論ずれば、文學は革新されたのだ、新文藝が起つたのだ。天溪氏が、『有形の物體』であつたのが、『無形の音調』になつたと云ふだけで、『詩歌の總ては表象的と言ふも不可なからむ』など結論するのは、いよ〳〵以つて傳習的と評さずばなるまい。

そこで何を暗示するといふ問題だ。有目的の利用文學——乃ち、最上の文學にあらず——ではその目的を暗示する。この場合、暗示は寓言的でないまでも、一種の譬喩または代表である。それをまだ開けなかつたゲーテやカライルは非官能的にまた説明的に觀念に結びつけたが、エルレインやマラルメなどの表象派に至つては、最も官能的に同じことを行つた。いづれにしても、渠等はその『新らしい世界』を肉と現在とを離れた架空の觀念界だと誤認してゐた。『夢』とか、『眞』とかいふのは決してそんな物ではない。イブセンの表象なる物に就ても、天溪氏は、外國並にわが國の多くの研究者等と同樣、或社會または人間の代表といふ樣に解してゐる。イブセン自身もそんなへまな物を表象（然らば甘く行つても部分的だ）と心得てゐたかも知れないのだ。これは、イブセン研究會に於ても、氏等と僕との間に議論のあつたことだ。暗示を譬喩または代表ぐらゐに思つてゐるから、ただの技巧に

過ぎなくなり、その技巧にむらのある個處から、僕等の律夢を破つてしまうことになる。

技巧には目的がある、然し僕等の無理想無解決の新自然主義には、目的がない。イブセンの如く解決すれば出來る目的を解決しないのではなく、解決を絶する刹那的自我の獨存境に達してゐるから、目的を與へられる必要がないのだ。内海月杖氏は『小説の作家と用語』（二六新聞、八月二十三日）に於て、無技巧の意を知らず、『想と形との關係について、はつきりした意識なきの致すところ』など云つてゐるが、中小學の教科書にはそんな單純不靈な修辭學も必要だらうが、既に文字その物を樂譜とも觀ずる新文藝に於ては、各言語に伴ふ外形的特有の『趣き』を判ずる前に、既に内容的特色が出てゐるのだ。趣味なる物は感情一天張りではない、僕の云ふ新審美學の一重大用語『心熱』の耽溺狀態から出るのを最も深しとする。氏は例を創作の表題に取つて云つたから、僕も僕自身の詩集『闇の盃盤』で云つて見る。之を讀んだ或人が僕に他日『光の盃盤』を作れと云つて來たが、それは、修辭上の對照以上に進めない考へで、僕の表題撰擇に於て、盃盤なる意味に、『闇の』といふ形容辭の外つけることの出來ない微妙な趣きがあるを知らなかつたのだ。現世の虚實、賢愚、老少、

上下、自他の差別を言語または行爲に統一する耽溺的律夢のうちに現ずる、刹那的自我が表象であつて、之を浮動することが暗示である。内觀力に乏しい作家や評家は、差別を物的視し、自我を無差別または絶對として心的視するので、物質または身肉から心靈に進むには順序と目的とがあると様に考へ易い。之は井上博士の所謂小我から大我に進むなどいふ假説を信じたり、又それと同様な舊思想に安んじたりしてゐるからだ。

獨存の自我は刹那的で、それ以外に靈も肉もないのだ。而も肉靈の無差別合致である。（『肉靈合致』參照。）表象も自我である、暗示も自我である。自我は兩者の目的ではなく、表象その物、暗示その物である。物その物には他の『或物』を待たない。これが現實の眞相または夢だ。人生はかういふエクスプレション、發想によつて成り立つてゐるのだ。佛蘭西表象派の所謂『詩歌は暗示だ』、『物その物だ』は、かういふ意味に進んで來なければならないのだ。小説（現代には、充分な例證はない）も亦かうなると、音樂を凌駕する新詩歌と並び立つことが出來よう。

『ありのまま』には如上の複雑悲痛な意味がある。それを知らないで、外形的にこの語に

雷同する歴史小説家や、寫實家や、表象專門家や、歐洲流の自然主義家が現代に跋扈するのは、實に滑稽の極だ。また之を解釋するものが、平凡主義だ、肉慾主義だ、物質的だ、無窮と沈默とを知らないのだなど云ふのも滑稽で堪らない。自我の無窮と沈默とは死である。死を欲するものはメタリンクか葬式坊主に行け。飽くまで生きたい僕等は自然主義的表象と暗示とに依つて刹那に活現苦悶する。人生その物の無言に勝る發言はただこの活現苦悶にあるばかりだ。（四十一年八月廿四日、甲州鹽山温泉にて作、讀賣新聞）

附言

（島村抱月氏に答ふ）

悲哀といふ物を、フローベルの考へた様に、思想と現實との衝突と見るべきであらうか？さういふ性質の悲哀もあるとした所で、思想と現實との衝突はどんな人々が感ずるのだ？現實なる物をこと更らに狹く解釋し、――その極は物質的に見て、――それ以外に或他の物を空想するから、一種の衝突があるかの様に考へるのではないか？これは空しい影に驚いて淺薄な人生觀または藝術觀に安んずる所以だ。ロマンチクな行き方だ。

之を脫却するには、僕等の積極的態度を以つて思想と現實との融合一致を體現するのが正道であるが、別に、實想と空想との區別を明にすることが出來ない爲め、ロマンチクな行き方と同じ立ち場にあつて、ただ熱だけがさめたといふだけの消極的態度を取つてゐるものがある。高尙らしく『冷めた自己』を主張する島村抱月氏のは乃ちそれだ。新らしく自然主義を主張するのではなく、寧ろロマンチク主義をクラシク主義に早く云へば、

引き戻さうとするに過ぎないのだ。その『藝術と實生活の界に横はる一線』（早稲田文學九月號）の如きは、僕等が屢々氏の所論を駁撃したのに向つて用意された美學論だが、別に新思想、新現實觀があつてそれから出て來た議論とも思へないから、その特色とも見るべきは、結局、一般美學者のお定り通り、クラシクに鎭定しようといふ點にある。相變らず飽くまで知力と情緒とを舊式に區別して論旨を進めてゐるなどは、再び駁撃するには及ぶまい。

氏は僕を以つて『實感と假感との說を誤解したもの』と見爲したが、氏自身は第一に自己なる物に對する僕の新解釋を 知らないではないか？『表現して藝術を成すときの自己は、普通の自己と何か違つた所がありはせぬか』と疑ひ、局部我と全我とを區別するなどは、哲學上では大我小我の愚論に向ひ、藝術上ではまだ藝術ばかりを尊重する幼稚な『藝術の爲めの藝術』癖が殘つてゐる證據だ。氏は、藝術家の努力と一般人の平凡生活——無努力狀態——とを對照して、前者はなか〳〵えらいと云ふのであつて、兩者の釣り合を得た論法ではない。藝術家をそれ以外の努力者（政治家、實業家その他）に對照して見給へ。實生活に對する感じ——人生の味——は兩方に於て違つたものではない。

藝術または藝術家は然し人生を客觀し、觀照することが出來るといふだらうが、それもその一物の性質または職分としての觀照だけなら、政治家が政治、實業家が實業をやると同意義で許されようが、特に生活または生活者としての觀照、客觀は、無駄でなければ空想である。僕が知情意の一致燃燒、乃ち、無餘裕、無解決、眞劍勝負の實感を許容する新審美學の要求は乃ちそこにあるのだ。肉も血もない、骸骨の樣な思想（乃ち、理想）は、あるとしても、僕等に必要はない。之と同時に、現實の意をもつと廣く思想の範圍に內觀して行かなければならない。して、その許さるべき範圍に於ける客觀と觀照とは藝術家の實生活である。その極致は實感の藝術であつて、決して假感のではない。渠としての生活以外、別に假感の餘裕があると思ふのは——昨日の本欄に於けるXYZ氏もさう思つてる——抱月、天溪一派の普通自然主義の『明鏡』（內觀すれば、なほ不透明な平面）に惑はされてゐるのだ。

抱月氏も初は文藝內容の充實熟熱を云つたが、『冷めた自己』で愈々本音が出た。

ことわつて置くが、思想としてクラシク、行き方としてはロマンチクな、若しくはそのいづれかに全く偏する樣な、哲學や美學や藝術觀は僕が初めから破壞して議論を立てゝ來

たのだ。近々それを『新自然主義』として出版するから、まとまつたところをよく見て貰ひたいのだ。田山花袋氏が『生』に試みたといふ『平面的描寫』（早稻田文學九月號）の談も、その創作に就いて考へれば、いゝところは氏が藝術家としての實生活と實感とに觸れてゐる點にある。さう見えないところの所謂平面描寫は單に技巧を弄してゐるのだ。新自然主義の見地から云ふと、さうより外云へないのだ。

世の理想家から見ると、思想と現實の一致は進歩もなく、苦悶もない狀態に見えるだらう。進歩とか、向上とかいふ考へが既に苦悶悲痛を脫しようとするから起るので、僕等はそんな空念に耽るのを避ける方だが、想と實との一致九回する白熱狀態は、乃ち、個人の自覺、自我の悲痛の極である。この意味に於ける悲哀苦痛は生命であるから、之を脫するのは死だ。フローベルの考へて脫しようとした悲哀などとは丸で深淺の度が違ふ。後藤宙外氏の『傍觀生活』（新小說九月號）に所謂『一種の苦痛』も淺い意味のであらう。たとへ『中流に出た』とても、なほ更ら深い苦痛はある。して、この苦痛に觸れてゐながら出來た藝術が、僕等の要求である。（四十一年九月二十一日作、讀賣新聞）

新自然主義 終

明治四十一年十月十七日印刷
明治四十一年十月二十日發行

不許複製

著者　岩野美衛　東京市本郷區天神町二丁目二十五番地
發行者　日高藤兵衛　東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷者　小西幸吉　東京市神田區三崎町三丁目一番地
印刷所　日本印刷株式會社（電話本局千八百四十番）

新自然主義奥付

定價金五拾五錢
郵稅金八錢

發行所　東京市本郷區天神町二丁目二十五番地　日高有倫堂

有倫堂出版書目

四十一年十月印刷
毎月増補訂正ス

東京 有倫堂

大賣捌所

東京	東京市神田區表神保町
川堂	東京市京橋區中橋廣小路
前誠堂	東京市日本橋區住吉町
至上屋	東京市神田區裏神保町
田社	東京市京橋區尾張町
警醒	大阪市備後町四丁目
吉岡寶文館	大阪市心齋橋南久太郎町
福音社	名古屋市
星野文星堂	名古屋市本町
川瀬代助	名古屋市本町
小澤百架堂	靜岡市上魚通
明治文源堂	靜岡市馬場町
寶文館	京都市三條川原町
奥田金昌堂	岡山市西大寺町
森博文堂	岡山市中町
積善館	廣島市鹽屋町
友田藤助社	廣島市東橫町
白日新店	周防國岩國町
仝支英堂	山口大市町
上山文竹堂	下の關市西南部町
菊崎次郎	筑後國久留米市
	熊本市新町

澤本駒吉	高知市種崎町
正心堂	横濱市辨天通
宮坂日新堂	信州上諏訪町
松榮堂	信州松本市
西澤喜太郎	信州長野市
覺張次平	越後國長岡
西村六平	越後國水原
學海支店	越後國新潟古町
宇都宮書店	高岡市守山町
川俣銀藏	金澤市片町
仝支店	水戸市泉町
煥乎堂	前橋市曲輪町
内田正榮堂	宇都宮市馬場町
藤崎書店	宇都宮市鐵砲町
鈴木榮三郎	仙台市大町
松藤喜平	仙台市大町
佐道太郎	陸中一の關
今泉支店	弘前市土手町
仝貴文堂	青森市米町
富社	北海道札幌南一條西三丁目
弘文	北海道國館末廣町

戸川秋骨著

時代私觀

本書收むる處の諸篇は刻下の社會、政治、文學、宗教及び教育に對する評論にして、やがて、また現代文明の批評なり、而してこれを說くに著者の奇警なる着想と嚴正なる態度とを以てす。苟も現代思潮の如何を知らんと欲するものは須く本書を一讀するの要あり。

定價金四拾錢
郵稅金六錢

戸張孤雁著

孤雁挿畫集

定價五十錢
郵稅八錢

挿畫革新の大浪起る日本現今の挿畫法は遠く十五六世紀時代のものに屬す新時代の挿畫を知らんと欲するの士は本書を繙け著者孤雁氏は海外にありて專門挿畫を研究したるの人以て內容の如何を卜するに足らん小說挿畫の他泰西大家の作品を載す印刷頗鮮明額面に適す

岩野泡鳴著

近刊

新自然主義

定價五拾五錢
郵稅六錢

人生の苦悶と活闘は二拾世紀の現代に於て益々強盛猛烈、この間から『新自然主義』が、而も外國でなく、わが國に生れた。乞ふ、この著に據り、新人生、新文藝、新審美學の端緒、個人の覺醒と國家の眞生命とを見給へ。

大町桂月、白河鯉洋、笹川臨風
小柳司氣太、樋口龍峽合編

近刊

むら雲

定價金壹圓
送料金拾錢

豪宕不羈の奇と才を以て縱橫の筆を揮ひ前後十有余年の間明治の論壇に濶歩せし田岡嶺雲先生今や病床にありて空しく疲弊を無して數奇不遇を嘆んず先生の知人故舊乃ち一大文集を編して先生に呈し其病を慰めんとす筆を取るもの六十余名皆當代一流の論客文士、政治家あり。學者あり、小說家あり、明治文壇の偉觀收めて集中にあり、苟も文學を口にするものは必ず此の集を携へざる可からず

松居松葉君著　挿畫十數葉入

近刊

外國之芝居

定價壹圓貳拾錢
郵稅拾貳錢

劇評家として將作劇家として當代に濶歩する松居松葉君曩に世界を一周して專ら演劇を研究するや歐米各國の俳優双手を開いて君を迎へ有らゆる便利を與へて其研究を助く、君が歐米演劇に對する智識の深くして且つ博き蓋怪むに足らざるなり、君歸來不幸にして病を獲、久しく此書き研究の結果を世に示す能はざりしも今や少快病床に紙を展べて茲に此一篇を成せり泰西の梨園に關する事實一として漏れたるは無く其觀察の稠密にして銳利なる往々にして歐米風俗の裏面に及ぶもの有り演劇界漸く多事ならんとす苟くも文藝に志ある人々は一讀を要す

田口掬汀著

小説 **二葉草**

定價八拾錢
送料金拾錢

今の小説は青臭くて鼻持のならぬものが多い、『二葉草』の著者は是が大嫌ひだ。

今の小説の材料は大抵男女の情事である、然らずんば肉慾派と稱する牛肉屋か豚屋見たいな冠詞の下に書かれる淫事だ、『二葉草』の著者は是が大々嫌ひである。

『二葉草』は愚作である、譯の分らぬ變な作だが流行の臭さ味のない點が聊か取柄だと我から自慢する、人の感心すると否とは作者の關するところでない。

小杉未醒譯　幷に畫八十餘枚挿入

近刊 繪本 **新譯西遊記**

定價八十五錢
郵稅八錢

當代の奇才未醒、千古の奇書西遊記を新譯す、物當に其處を得たり、アラビヤンナイトを好み、ロビンソン漂流記を好み、水滸傳を喜び三國誌を喜ぶものは、亦來つて此の新にされたる奇書に接せよ、八十有余の漫畫的挿畫飄逸簡素なる譯文と相俟つて諸君の苦楚より引離さん也、

伊藤銀月著

近刊 **偉人達人**

定價卅五錢
郵稅六錢

奇を愛する銀月先生が趣味を以て古今東西二百有余の偉人達人を選し其人物箇々の眞骨頭を躍如たらしむべき代表的一二の行動を描寫し添ふるに勁拔なる短評を以てす卷を開けば豪宕なるもの飄逸なるもの奇趣橫溢せるもの痛快淋漓たるもの偉人の面目咄々人に逼る眞に人界の大觀奇景也之を讀んで凡骨を練磨すべく有爲の氣象を養成するに足るべし

半井桃水著

新刊 小説 **濡衣**

定價六十錢
送料八錢

玲瓏たる姉の集子は清き心に月を宿し花を飾る妹錦子は卑き胸に穢れを包む、速に一本を購ひ此の姉妹對照の妙趣を味ひ給へ

江見水蔭著

近刊 小説 **女馬賊**

定價　壹圓
郵稅拾錢

文學的の冒險小説、詩化されたる事實談は是也。著者獨得の靈筆を揮ひて、文壇に此新方面を開發す。自然不自然を論ずるの遑なく、一讀せざる可らざるの快著たるを疑はず。

薄田泣菫君題詩　小島烏水君序文
蒲原有明君序詩　清水橘村君著

新刊 新體詩集 **筑波紫**

定價四拾錢
郵稅金六錢

作者橘村君はこれ常陸國、筑波山麓橘村の人、東西漂泊の生活を營む事茲に廿有余年、蘆荻のひゞき、山禽の聲あした夕の水の音、みなその懷に入りてまた一卷の詩集となる。凡そ近代的悲哀の情緒を味はんとするものは、請ふこれを森林の陰暗き所、草原の暮れ行かんとする所に繙け、青年が語らんとする所の情緒はみな收めてこのうちにあり

伊藤銀月編

机上圖書館　萬國第二編 **地理主點**

價參十五錢
郵稅六錢

地理書は讀み去つて最も多く頭腦に印象を殘すものを優とす本書材料の取捨按排繁簡の適度を得叙述亦簡勁適切讀者をして容易に明晰なる地理的觀念を得せしむ獨り國民机上の寶典たるのみならず又受驗用書として中學生諸君が頭腦の經濟を資益するや疑無し

齋藤無絃著

小説 **天國**

價六拾五錢
郵稅金八錢

貞潔の淑女有爲の士官主人公となり青春の情緒句やかに舞臺は海外に亘りて西洋處女の遂げ難き戀、妹と知らざりし伯爵世嗣の悲しき戀、擯けたる戀を抱いて死に行く淑女の悲慘、花を墓前に捧げて大息する士官の哀悼、結構複雜文章溫潤、時代人情時代心理の秘奥を闡き惻々として人の胸を動かす

伊藤銀月編

机上圖書館
第三編

科學新潮

價三十五錢
郵稅六錢

科學の進歩は元素を細分して最新の電子論を生み電氣の新利用は隆盛を極む或は動植物の改造人間の改造をも企圖し魂魄の形狀重量を衡り不思議の事の新研究を生み其他天文物理醫學心理學等何れも嶄新なる研究發見を胚胎せざるはなし本書は平明に是等の新潮を紹介し趣味實益兼收全からしむる意に机の珍籍也

半井桃水著

新刊 小說

蕨の下露

定價六拾錢
送料八錢

人間萬事金の世に金を見る芥の如き正廉潔白の人を寫して諸君の溜飲を下げんとする一讀の清涼劑なり

伊藤銀月編

机上圖書館
第一編

萬國歷史要領

價三十五錢
郵稅六錢

是れ机上圖書館の第一編として出でたるもの也、著者は特殊の觀察眼を有せる歷史家として社會に認めらるゝ人世界の歷史の要領を此一書の中にコンデンスして、一讀東四の進歩變遷を會得せしむべきもの也、簡明に適切なること未だ本書の如きものあるを見ざる也、試みに一本を購うて此言の當否を見よ。

新刊

安全なる結婚

定價拾八錢
郵稅金四錢

本書は東京朝日新聞に連載して、大歡迎を受けたる、當代二十大家の安全なる結婚に關する意見を蒐めたるもの現代の女學生及び父兄の愛讀を勸む

理學士（數學專攻）河野德助著

新刊 初等

代數學講義 上卷

定價金壹圓
郵稅拾貳錢

刊 初等

代數學講義 下卷

定價金壹圓
郵稅拾貳錢

本書は初等代數學を最も斬新なる方法により詳密に講述したるものにして立論の正確なると初學者の誤解しやすき所を指摘しこれに充分の注意を與ふることを勤めたると殊に數百種の練習問題を捕へてこれが解義を試み問題解法に臨みて如何なる所に着眼すべきかを一々警告し數學思想の涵養を謀りたるとは他に比類を見ざる所坊間屢〻所の書と同一視すべからず内容の豐富また紙數に徵して明かなり

小栗風葉小川默水合作

近刊 小說

女

價七十五錢
送料金十錢

女！彼の創世記の樂園に於けるイブ此のかに、有らゆる哲人と有らゆる詩人とが、解いて而かも盡ざる千古の謎なり、或は雪の如く清く花の如く麗はしと云ふもの、將た泥の如く濁りて毛虫の如く厭はしと云ふもの、何れか女の一面にあらざる、佛蒐元一紙、美醜相錯綜して、其所に女の眞相を捕捉するもの則ち此篇也

天野誠齋編

新刊 名流實話

身體健康法

定價廿五錢
郵稅金六錢

名流の實話今や稿を累ね以つて小册子を編むに至る、畢竟是れ世を利し人を益する事、斯くの如き署名なる實話も、時と共に多く散逸するの恨みあればなり。此書題して身體健康法と名づく、速に一本を購い名士の健全なる精神を汲んで、各自の身體健康を增進するの道を講じ給へ。

小松小兒科院長　小松貞介先生著

近刊 實用

小兒保育法

定價五十錢
郵稅金八錢

健康なる小兒も虛弱なる小兒も蓋し育て方に依る、本書は兒科專攻の國手として有名なる小松小兒科院長が夙に泰西の學理を涉獵し躬れて自家の實驗を重れ我國の家庭に最も適切なる育兒法を記述されしものにて說明悉く實地に渡り懇切なること手を取つて敎ゆるが如し苟も人の親となるもの快活なる健康兒の笑顏を樂まむには先づ此書によりて完全なる小兒保育法を心得られよ

安部磯雄著（上製四百八十頁）

新刊

應用市政論

定價壹圓廿錢
送料拾貳錢

本書の論ずる所は都市の發達、市の立法及び行政、市區改正、交通機關、道路掃除、水道、瓦斯、電氣、公園、市場、家屋、衞生、教育、娛樂、財政等の諸問題にして、音に歐米諸都市の現狀を詳說せるのみならず、著者特有の識者を以てこれを我國の都市に應用せんことを企圖せり。一面より見れば經世家の爲に社會問題、經濟問題、政治問題の解決を試みたる特種の參考書にして、他面より見れば國民の爲に新奇なる都市問題を紹介したる市民讀本なり

牟井挑水著

新刊 小說

子寶

價郵六拾錢
送料八錢

愛あり熱あり單へに情を以て寶とせる才子佳人を經とし血なく涙なく唯慾を以て寶とする紳商世子を緯とし、産み出したる一双の子寶、見來つて世を警しむべく、讀去つて人を訓ふべし

小川芋錢著

草汁漫畫

定價金六十錢
送料金 八錢

古人曰文章拙を以て進み拙を以て成ると芋錢子の畫は則太拙なり其謂ゆる妙想奇致なる者も則拙中の一味に過ず雅致の士冀くば一本を購ひて清賞を賜へ

田口掬汀氏著（清方畫插畫三枚）

小說

追恨

定價金壹圓
郵稅拾貳錢

之れ著者半歲の勞苦を積みて成れる雄篇也、情趣に富める青春の男女を中心として、現代社會の缺陷を描く。靈活暢達の筆、心奥の幽を發き人事の微を穿ちて、人と共に眼前に躍動す、著者が牢乎たる勢力を文壇に有する所以此書を讀みて知るを得べし裝釘の美を凝らせる四百二十頁の大作、分量に於て坊間罕くところの書二册を超ゆ。

伊藤銀月著

小說

出潮

定價六十錢
郵稅十錢

時代を描き、時代の人を描き、時代の生活を描き、時代の葛藤を描く、極めて眞摯に、極めて深刻に、且つ極めて妥當に、文章亦平淡の裡に秀潤を包み、著者の或一面を最も遺憾無く發揮せり、之を讀む者必らず其血を沸かして、胸に新潮の昂げ來るを覺ゆべく、而も讀み了つて頭に何物かの殘れるを認め、怡然として獨り滿足せん

伊藤銀月編

近刊

机上圖書館

一册卅錢郵稅四錢函入三圓五十錢十册完結漸次刊行

本書は漸次に刊行して都合十册に至りて完結すべきもの男女老少何人にも好參書眞師友たらんことを期す、完成の上は『机上圖書館』と表記したる雅致ある箱に收めて座右に備ふべく、苟くも書籍に趣味と實益とを求めんとする時之を開かば各人各別の需要を滿たすべき原料を此中より見出すこと容易に實に坐ながらにして圖書館に入ると同一の結果を得ん、豈空前の有用書にあらずや、

伊藤銀月著　小杉未醒畫（插繪十枚）

新刊 小說

新譯水滸傳

定價八十五錢
送料金拾錢

水滸傳は支那の叛骨養成書也其革命經也風雲轉た急にして革命の火氣大陸に鬱積する今日、本書は新に出でたる物の如く時化の人に歡迎せらる、朝鮮より延いて支那をも我と混一視するの抱負ある日本男兒は必ず之を讀むべしされど馬琴蘭山の舊譯は唯だ其皮相のみ銀月君が言文一致の斬新なる譯文成りて原著却つて顏色を失ふを見る未醒君の揷畫と相俟つて現代第一の奇書！

田口掬汀氏著（製本優美）

小說

獨木舟

定價金四十錢
郵稅金六錢

一枝の彩管を鑿となして脩本に比ぶべき社會を刻せる獨木舟は千樣萬態の痕跡を印して、文海の潮に浮ばんとす。理性の閃めき感情の影、交互錯綜して究むるところを知らず、一痕に一痕の味あり、一跡に一跡の趣あり、人情の活動に甚深無限の敎訓を聞かんとする者は必ず此書を讀まざる可からず、敢て江湖の清鑒を待つ。

獨逸哲學博士ドイセン原著　高橋五郎譯

近刊　古今東西　**哲學通解**

哲學は其範圍の濶大其問題の夥多其意義の深遠往々學者をして希望の叫聲を發せしむる適ま少數之を究むるや忽ち厭世悲觀に陷りて往々自殺に安心を求めんとす然れども之れ哲學の十分領會せられざるより生ずる弊なり茲に獨逸の哲學者ドイセン博士は哲學に於ては古今東西を窮め就中印度哲學の蘊奥を究め純正哲學美學及び倫理に三大別して詳密に哲學の大體を描寫し哲學の何物たるやは氏に至りて初めて萬人の領會する所となりぬ高橋先生該書を飜譯し數百萬の哲學志望者を滿足せしめんとす

定價七十錢
郵稅十錢

德田秋聲著（上製美本）

近刊　小說　**母の血**

此篇題して「母の血」と云ふ。抑も如何なる母の血をか享けたる。汚血か、毒血か、將た惡血か。著者の靈筆に描出されたる幾樣の人物と共に此の一大雄篇は成れり。秋聲子が一年有餘の苦心に成れる新作は是なり。

定價八十錢
郵稅金八錢

大町桂月著（製本美）

參刊　**代表日本人**

日本人を化せしは區々たる教義にあらずして事實也歷史也國體也祖先の發揮せる國民性也我が國には儒教佛教以外一種の武士道ありて今日の發展を致したる事今更言を待たざる所なるが武士道の眞相を知らむとせば理論のみにては不十分也之を人物事實に徵せざるべからず此書日本國民の特性を發揮せる人を擇びて其面目を描き日本國民の前路に光明を與へ教訓を與ふ一風變はれる日本國民の歷史也最れて道德經也。

文學博士　桑木嚴翼著（總クロース製本美）

性格と哲學

價壹圓廿錢
郵稅金十錢

本書は高妙なる哲學宗教の問題より卑近處世法並に女子問題を解釋し其他戲曲文藝等廣大なる範圍に亘り政齊愼密なる評釋を下せるものにして論理の井然たる文章の精采なる誠に學界の珍書たるを失はず好學の士は本書の教訓に依り必らず啓發する所多きを信ず。

網島梁川譯（製本美）

新刊　**ルナン耶蘇傳**

定價
一圓五十錢
郵稅十四錢

此書敎主生涯、其懷きし神の國の思想、天父の觀念を叙べ、奇跡を論ふ、他の宗教との關係を明にし、其國家觀社會主義觀また此間に隱見す、自由詩究の精神一貫して批評の銳刃觸れざる所なく、之が爲め一時歐米基督敎界を震動して顏色失はしめたりと雖、世界史上に於ける耶蘇の位置は寧ろ之によりて確められたりと言ふべきなり梁川先生は燗縵瑰麗。現代獨步の筆を以て此書を飜して世に問はる。世界の認めて耶蘇傳の白眉となすものと模範的美本とは之によりて吾邦文壇に供へられむとする也

岩野泡鳴著

新刊　**闇の盃盤**

定價卅八錢
郵稅金六錢

未だ表象主義に迷ひ、自然主義に瞑く者多し。此間に特立孤嘯して現代最近詩風を標榜する物は著者の作也『闇の盃盤闇を盛りて我は底なき闇に沈む』と、此一句を解せんとする者は、乞ふ、一本を手にせよ。

大町桂月序　有倫堂編纂

再版　**明治大家文集**

定價八十錢
郵稅金十錢

明治の昭代文運の勃興前古其比を見ず　一々諸大家の著作を讀み其風格を知るは容易のことにあらずこの書論文といはず美文といはず小說といはず苟も文章を以て一家をなし特色を有せる文豪を撰びまた文豪の特色を發揮せる名篇を選び明治の文章家の集つめて此の書にあり之れ明治文學の縮圖にして一讀の下に以て明治の諸大家の面影を伺ふべく文壇の一大偉觀たるを失はず文を學ぶ人にありては以て眞模範とするに足る有益にして且つ興味ある耳書なり。

小栗風葉著　鏑木清方畫（上製美本）

參版　小說　**十七八**

價壹圓十五錢
郵稅金十錢

櫻は三月菖蒲は五月女盛りは十七八げに少女は人生の花なり而して少女の可憐なる心事と態度とは唯だ多情多恨の才子よく之を描き多情多恨の才子よく之を愛讀す風葉先生の濃麗筆を味はばんと思はゞ大方の君子は請ふこの篇を讀まれよ。

綱島梁川著（菊版總クロース頁數約千頁）

四版

梁川文集

定價二圓廿五錢 郵稅拾五錢

梁川綱島先生高邁博大の識、縝密理到の言、恰も燭を把つて照すが如しされど先生は談理是れ能とする學者に非ず一面冷靜細緻の頭腦を備へたる倫理學者にして他面別に抑ふ可らざる詩人の熱情を宿して天地を戀ひ此戀を湛へて日夜に瞑想し日暮に修養止まざる哲人也解脫の人也理を談すれば簡淨にして靈活感興を遣れば深邃にして豐麗其想獨特、其文獨特、毅然一家を成して現代思想界の一角に拔く可らざる自家の領を占めて妄に他人の追從するを許さず是れ筆に非ずして人格なれば也弊堂幸に玉稿を請うて上梓するの榮を得たり敢て先生の高風を慕ふ所の諸君子に薦む。

海老名彈正先生著

三版

基督教本義

上製六十五錢 並製五十錢 郵稅金八錢

基督教の本義果して如何之れが明白なる解答を與ふるもの古來宗教史上に光明を放てる豫言者教師教祖の抱懷せる思想經驗に依らざるはなし本書は基督教界の明星海老名彈正先生卓拔の識見勇健の筆を以て上はモーゼより下はルーテル、シユライエルマツヘルに到る迄正確に偉人の悟得を明かにし斯教の本義を說明せられたるもの也幸に愛讀の榮を賜へ。

文科大學講師 夏目先生 上田先生 ロイド先生 校閱 チャールス、ラム著 文學士 小松武治譯

十版

標註 沙翁物語集

定價七拾錢 郵稅金拾錢

本書は沙翁戲曲中最も有名なる四大悲劇四大喜劇に加ふるにロメオ、ジユリエツト及冬物語等通じて十編の物語を拔萃し精緻なる飜譯を試み懇到なる註解を施し加ふるに數種の附錄を以てす。特に文科大學講師先生の校閱を仰ぎたる者にして苟も沙翁戲曲の何たるやを窺はんと欲するの士は須らく一本を購ふて座右に備ふべき也。

匿名隱士著

八版

破天人論

定價參拾錢 郵稅金四錢

天下を風靡したる天人論に對つて逐條討議的に堂々駁論を試み三一哲學の宇宙觀と人生觀とを鼓吹したる壯快の書也本書の出づるや全國各新聞雜誌の大好評を博し今や第八版を發行せり以て本書が如何に愛讀せらるゝかを知るべし。

大町桂月著

十四版

わが筆

定價金四十五錢 郵稅金六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に眞理あり教訓あり才氣あり嚮氣あり或は洒脫に或は沈痛に或は眞面目に或は諧謔に短くして寸鐵人を刺し長くして萬馬野を走る而かも貫くに一脈の氣と熱とを以てし行ろに靈活の才筆を以てす家庭學校會社及び文學等に關する卓見到る處に充ち才情掬すべき美文もその間に光彩を放つ天地間有數の活文字也

大町桂月先生選

八版

時代青年文集

定價金四十錢 郵稅金六錢

桂月先生最も青年を愛し指導教訓須臾も懈らす爰に滿天下青年諸子の傑作數十篇中より其尤なる者を拔き嚴正なる批評を加へて時代青年文集を編せらる收むる所叙事抒情あり論說書簡あり將た新體詩あり戚な綺爛花の如く情熱火の如し以て青年の煩悶を醫すべく元氣を鼓舞すべし附錄には當代諸大家の名篇を添へて錦上更に美花を飾る

大町桂月著

六版

家庭と學生

定價金參拾八錢 郵稅金六錢

著者申す、我れに三男一女あり其れを斯くは、しつけむ、我れも斯くは覺悟せむと心に期するのみにて能く實行せむと斷言し得べき身の上ならねど家庭教育の大切なることを今更のやうに感じて愚者の一得もやとの世の青年の男女の前に呈し合して世の父兄の前にも呈する也

大町桂月著

八版

我が文章

定價金四十八錢 郵稅金六錢

桂月先生の文章愈老熟して縱橫自在眞情流露し行く處に行き止る處に止まり些の街ふ所なく苦む所なく直ちに人を以て文を遣り洒落瓢逸に快闊にして男性的意氣を發揮し而かも言外に情熱溢る文此に至れば聖なり先生の文の如きは、當代の逸品なり

大町桂月先生　中內蝶二先生合著

六版 **少女と山水**

大町桂月先生序　角金潮聲著

定價卅五錢
郵稅金六錢

五版 **宇宙と人生**

景山英著

價貳拾五錢
郵稅金四錢

四版 **妾の半生涯**

川上眉山著○清方畵（上製美本）

定價
金三拾五錢
郵稅金六錢

三版 **觀音岩** 前編

川上眉山著（頁數三百卅頁上製頗ル美本）

定價八拾錢
郵稅金拾錢

再版 **觀音岩** 後編

定價八拾錢
郵稅金拾錢

凡烏山人著

再版 **馬鹿物語**

定價四拾錢
郵稅金六錢

田岡嶺雲著

新刊 **霹靂鞭**

價四拾五錢
郵稅金六錢

田口掬汀氏著

再版 悲劇 **熱血**

定價三拾錢
郵稅金六錢

小栗風葉著（美術的製本）

小說 **新粧**

價四拾五錢
郵稅金六錢

大町桂月　伊藤銀月刪修天籟篇

再版 **文士寶典**

定價五拾錢
郵稅金六錢

饗庭篁村著○清方畵（上製美本）

再版 小說 **竹影集**

定價
金六拾五錢
郵稅金拾錢

伊藤銀月著

再版 社會研究 **高原生活**

定價四拾錢
郵稅金六錢

文學士　久保天隨著

文壇獅子吼

定價
金四拾五錢
郵稅金六錢

泉鏡花著○清方畵（上製美本）

再版 小說 **無憂樹**

定價
金八拾五錢
郵稅金拾錢

文學士　久保天隨著

紀行文集 **山水寫生**

定價
金四拾五錢
郵稅金六錢

饗庭篁村著　○鏑木清方畵（上製美本）

三版 小說 **不問語**

定價
金七十五錢
郵稅金十錢

（附大詩人出現鹽原遊記）

齊木仙醉對佛國神學教授ボア博士

三位一體論

定價貳拾錢
郵稅金四錢

高橋五郎著

英語實驗百話

定價參拾錢
郵稅金六錢

姉崎博士序　萬朝報記者茅原華山著

改册五版 **向上の一路**

定價三十錢
郵稅金六錢

大町桂月先生撰

第貳 **時代青年文集**

定價四十錢
郵稅金六錢

海老名彈正先生著

人道

定價金拾錢
郵稅金二錢

チヨサイア、スツロング原著、石川三四郎譯

二十世紀の大覺醒

定價三拾錢
郵稅金四錢

文學士　久保天隨著

再版 美文韻文

夕紅葉

定價
金三拾五錢
郵稅金六錢

饗庭篁村著

再版 紀行文集

天下泰平

定價
金四拾五錢
郵稅金六錢

德田秋聲著

小說

花たば

定價
金四拾五錢
郵稅金六錢

半井桃水著　清方畫

再版 小說

慰問袋

定價
金七拾五錢
郵稅金拾錢

醫學士　佐藤得齋著

美的衛生

定價
金四　拾錢
郵稅金六錢

醫學士　佐々木多聞著

再版

新化粧

價金四拾錢
郵稅金六錢

本居豊顯撰

紫文摘英

定價廿五錢
郵稅金四錢

海老名彈正著

宗教々育觀

定價
金五拾五錢
郵稅金八錢

萬朝報記者　茅原華山編纂

青年と詩吟

價三拾五錢
郵稅金四錢

泉鏡花著○清方畫

參版 小說

誓之卷

定價
金七拾五錢
郵稅金拾錢

日高有倫堂編

基督教講壇集

定價七拾錢
郵稅金六錢

茅原華山編纂

我と人

定價貳拾錢
郵稅金六錢

泉鏡花著

小說

ななもと櫻

定價四拾錢
郵稅金六錢

鈴木秋子女史著

再版

軍國の婦人

定價廿八錢
郵稅金四錢

苦學社編輯

苦學の伴侶

定價三拾錢
郵稅金四錢

橫山筆助著

再版 成功したる催眠暗示術

應用自在

定價參拾錢
郵稅金四錢

山口先生序　シルレル原著　齊木仙醉譯

接神術

定價廿貳錢
郵稅金四錢

杉山先生書簡　黑澤辰三郎編

日本

名家手簡

定價參拾錢
郵稅金六錢

齊木仙醉先生譯

トルストイ教訓小說集

定價參拾錢
郵稅金四錢

加藤直士譯

トルストイの日露戰爭觀

定價參拾錢
郵稅金四錢

高橋五郎著

杜伯品藻

トルストイ伯の主義人物を評す

價參拾五錢
郵稅金六錢

蘆風秋元喜久雄譯

四版 **獨逸詩粹紛紅集**

定價卅五錢
郵稅四錢

文學士 小原無絃譯

原文對照 **バーンスの詩**

定價三拾錢
郵稅金四錢

文學士 小原無絃譯

原文對照 **シェレーの詩**

定價
金三拾五錢
郵稅金四錢

泡鳴著

新體詩集 **悲戀悲歌**

定價卅五錢
郵稅四錢

泡鳴著

新體詩集 **夕潮**

定價卅五錢
郵稅六錢

細越夏村著

新體詩集 **靈笛**

定價三拾錢
郵稅四錢

秋元蘆風譯

獨詩 **野葡萄**

定價卅五錢
郵稅金六錢

○原文對照○卷末に評註を附す

W/m381
20